

ソードアート・オンライン 暗黒剣の使い手

シャザ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

…これは、勇者の影の物語。

黒の剣士キリトの双子の弟であり、両手剣使いの少年の、戦いの記憶。

目次

第1話	影の物語、その始まり	1
第2話	チュートリアル	3
第3話	戦いの始まり	6
第4話	一閃	14
第5話	黒猫	22
第6話	聖夜の殺意	25
第7話	斬り開かれた運命	30
第8話	落ちてきた少女	35
第9話	ダークナイト	41
第10話	ハンティング	45
第11話	恋人ごっこ	52
第12話	リズベットの忙しい一日	62
第13話	狙撃手の原点へオリジン	67
第14話	ヒトゴロシ	70
第15話	再起のために	74
第16話	愛する人と共に	82
第十七話	Sの記憶	90
第十八話	虚ろな世界で生きる少女	96
第十九話	かいぎのじかん	105
第二十話	聖域の探索	112
第二十一話	供物の神殿	117
第二十二話	影ニ潜ムモノ	123
第二十三話	理不尽と女子会	129
第二十四話	追憶	135

第二十五話	王の剣ゾーディアス	142
第二十六話	予期せぬ出会い	151
第二十七話	リベンジマツチ	157
第二十八話	裏切り	165
第二十九話	V S 笑う棺桶・前	177
第三十話	V S 笑う棺桶・中	184
第三十一話	V S 笑う棺桶・後	191
第三十二話	死神	198
第三十三話	襲撃の女王蟲	212
第三十四話	最後の休息	218
第三十五話	水遊びのち決闘、その後釣り	223
第三十六話	アップデート最終テスト	230
第三十七話	V S ホロウ・キリヤ	237
第三十八話	《風林火山》	244
第三十九話	絶望への航海	252
第四十話	V S 傲慢の白鯨	257
第四十一話	捕鯨船の帰還	263
第四十二話	取引	271
第四十三話	DUEL!!	277

第1話 影の物語、その始まり

ソードアート・オンライン。

それがこのゲームの名前だ。次世代型ゲーム機《ナーヴギア》に最も望まれていたジャンルであろうMMORPGの一番槍であり、兄が少し前にベータテストに参加し僕に、興奮しながらその体験を話してくれたことは記憶に新しい。なにせ実際にゲーム内のアバターを自身の体のように自由に動かすことができるのだ。

僕も兄と同じ様にベータテストに送ってみたはいいが見事に落選したので必死になって正式版のパッケージを通販サイトでゲットしたときには兄と一緒に騒いでしまい、妹にうるさいとキレられた。しようがないじゃん、初期ロット一万本を一般家庭の中学生二人が手に入れる確率はかなり低いだろうし。

そんな経緯を得て手に入れたSAOだが、もう間もなく正式サービスが始まるのだ。今日は日曜日で学校も休みだし、昼食も兄弟でSAOのことを話しながら（というより僕が質問していた）すっかり食べたのでお腹が減ることはない。いろいろしているうちにサービス開始時間になったのでナーヴギアをかぶり、電源をつけ、異世界へいくための呪文をと念えた。

「リンク・スタート！」

アバターを軽く自分好みに弄り、ソードアート・オンラインにログインした僕は、そのリアリティにおどろいた。

「…すっげー。これ本当にゲーム内かよ！作った会社スゲーなあ　とそれよりキリトのやつどこにいるかなあ」

キリトというのは、兄がこのゲーム内で作ったアバターの名前だ。ほぼ本名のもじりではあるが僕も似たようなもんなので笑うことはできない。……………

「しまった、少し考えたら僕あいつの姿知らないや。どうすっかなー…？」

そう、あくまで僕が知っている兄は女の子に腕相撲で負けそうなく

らい華奢な少年で、このゲーム内での姿を知っているわけではないのだ。自分の姿まんまなら探せるが、多分面影はないだろう。とりあえずは町をぶらついた後で武器を購入、フィールドに出て戦ってみよう。そう考えた僕は、一步を踏み出した。

「プギーー！」と鳴きながら青いイノシシが突っ込んでくる。僕は少し余裕を持ってそのイノシシ《フレンジーボア》の突進を避け、シンプルな両手剣を横に回転しながら叩き込んだ。両手剣用ソードスキルの一つ、《サイクロン》をくらったイノシシは爆散し少量の経験値とドロップアイテムになった。

「なるほどなあ、これは楽しい。百聞は一見に如かずってほんとなんだなあ」

その楽しいを演出するためにきれいなライトエフェクトを出しながら威力の高い必殺技としてソードスキルをつくったと考えると開発社のアーガスに感心しかない。

…しかし、キリトには結局会えず仕舞いだった。まあ明日は学校もあるし、日課の妹との稽古もあるし、早めにログアウトしようかなとメニューを開く。なかった。

「……………あ？」

メニューを、思いついた操作でログアウトボタンを探す。が、見つからない。……………無茶苦茶嫌な予感がした。

鐘の音が聞こえる。いきなりはじめの町にワープし、周りにも多くのプレイヤーがいて、何が起きたのか全くわかっていない。そして赤いシステムアナウンスとともに顔のないローブが現れた。

赤いローブは混乱している僕らにこう言った。

「私の世界へようこそ」…と。

その言葉はありきたりであるはずなのに、僕は、《キリヤ》は何故か、嫌な予感がぬぐえなかった。

これは、僕の戦いの物語。

第2話 チュートリアル

恐らくはゲームマスターであろうそれは、自身のことを茅場晶彦と名乗った。それがかつて弱小企業だったアーガスをシンデレラの魔女のようにトップ企業に変身させた天才ゲームデザイナー兼量子物理学者であることに気が付いた者はかなりいるだろう。何故なら、このゲーム《ソードアート・オンライン》と《ナーヴギア》を生み出したのは茅場なのだから。

兄にとつて憧れのそいつは、とんでもないことを口走った。

『プレイヤー諸君は、既にメニューからログアウトボタンが無いことに気が付いていると思う。：しかしそれはソードアート・オンライン本来の仕様であり、決して不具合ではない』

『諸君らがログアウトするためには、この城の頂を極めなくてはならず：外部の人間がナーヴギアを停止もしくは外そうと試みた場合ナーヴギアから高出力マイクロウェーブが発生して諸君の脳を焼くのだ』

なにいつてんだこいつ。ようするにぶっ殺すと言っているわけだ。しかし前に兄がこんなことを言ってなかったか？

『ナーヴギアってヘルメット内の信号素子から弱い電磁波だして脳細胞に働きかけるわけだけど、実は原理的には電子レンジの仲間なんだから。』

はじめてそう聞いた時は爆笑したが、もはや笑い事ではない。しかもナーヴギアには無茶苦茶でかいバッテリーがついているはずだ。電源ケーブル引っこ抜いても動く。

茅場は具体的なデストラップの作動条件を告げると、それをハツタリだと思った家族や友人が外そうとした結果、二百十三人がレンチンされたと言った。：実感が薄い。頭の傷が痛む感じがする。

『諸君らの肉体の心配はない。既にあらゆるメディアがこの状況を報道し、諸君らの肉体を病院などで介護するはずだ。安心してゲーム攻

略に励んでほしい』

誰かがこう叫んだ。

「ふざけんな！こんな状況で？気に遊べってか！もうこんなゲームじゃないだろ！」

茅場は残酷なことを告げる。

『しかし、十分に留意してもらいたい。もはやこのゲームは諸君らにとってももう一つの現実、今後蘇生手段は機能せずHPが尽きた者は：ナーヴギアによって脳を破壊される』

『諸君らが解放される条件はただ一つ。この世界《アインクラッド》の百層に待つ最終ボスを打倒し、ゲームをクリアすること。その時の生存者全てをログアウトすることを約束しよう』

：は？ まって、まってくれ。明日は妹と、直葉と稽古の約束があるんだ。すっぱかせば彼女は悲しむだろう。いや、そもそも家にすら戻ってこれない？：体は家にあるのにな？

「そんな、そんなバカな話があるか…」

気分は最悪だ。混乱するプレイヤーたちを無視して、茅場は最後に、

『それでは最後に諸君らへのプレゼントを用意している。アイテムストレージ内を確認してくれたまえ。』

：ストレージを開きそれをオブジェクト化する。なんの変哲もない手鏡だ。本来の自分とは違う顔が写っている。そう思った瞬間白い光に体が包まれ、次に鏡を見た瞬間やつの意図を悟る。

：僕の顔が、そこにはあった。少し伸びた黒髪、双子の兄と同じく中性的な顔立ち。唯一兄と違うところは右のおでこ辺りの古傷だ。

母さん曰く僕が物心つく前についたそれは、なんとなく普段は前髪で隠している。

パニックでやつが話していることが頭に入っていない。目的がどうのこうの言って、やつのアバターはどろりと溶けるように消えた。

チュートリアルが終わった後のプレイヤーたちは、様々な反応を見せる。ここから出せと騒ぐ者、絶望で泣きながら座り込む者、状況が理解できていないのかずつとゲームができると喜んでいる（あるいは狂ったのかもしれないが）者。そんな酷い状況で、逆に落ち着きを取り戻した僕はキリトと合流するために移動しながら周りを見渡す。今なら彼の見分けがつかはずだ。

「あ、いた！ キーリートー！」

その声に気が付いたキリトは後悔しているようなかおで僕に振り返る。

「……よう、キリヤ。……ごめん、こんなことになるんだったら……」

「うん？ なんかつた？」 「……いや、何でもない。なあキリヤ、一緒に来てくれ。今なら次の町まで早く行けば経験値の奪い合いが始まる前にレベリングできるはずだ。」

「…僕は」

その提案に答えるために、口を開いた。

第3話 戦いの始まり

…あのチュートリアルから一ヶ月が経過した。未だに全てのプレイヤーははじめの階層から進むことができていない。それどころか既に、一万近いくいたはずのプレイヤーは八千人まで減った。

既に二千人もの人間が死亡したという事実は、プレイヤーたちの心に深く影を落としている。

キリトの誘いは、結局断ってしまった。もし誘いに乗ったとしても、お荷物になるかもしれないと一瞬でも思ってしまったからだ。

キリトには申し訳ないと感じたが、もし組むならば経験値ではなく僕自身がキリトとの二か月分の差を埋める何かが必要だと思った。ならば今は何をしているかという点、あるプレイヤーの下で手伝いをしている。

一か月前、僕は宿屋で偶然あつたその人の仕事に感銘を受け、弟子にしてくれと頼み込んだ。その仕事とは、情報屋。SAOにおいて情報は生存率に直結する。なにも知らない状態のビギナーとベータテスト経験者ではその差が命を落とす原因になりかねない。しかし、彼女は違った。彼女は玉石混交であろう情報を集め、検証し、正しい情報にして攻略ガイドにしていたのだ。

しかも、そのガイドも初版以外無料配布するというサービスぶり。ただ一つの情報以外ならば、彼女本人に依頼すれば（多少ぼったくられる可能性もあるが）手に入る。僕はそんな彼女、鼠のアルゴに情報屋の基礎やルール、あるいは犯してはならないタブーを彼女の時間が許すときに学び、彼女の仕事にもついていった。

手伝いというのは、彼女が発見した何度も受注可能なクエストを宿題のようにした配布前のガイドを手伝い、それをクリアすることだ。これをビギナーの自分がクリアすることで、ある種の保証が付く。ビギナーでもこの情報があれば安全に攻略できるという保証。ビギナーの不信感を少しでも減らすためである。

現在彼女は、ベータテスト時のデータを基に、フロアボスの攻略本を執筆している。どこからそんな情報を手に入れたのかはなんとなく

く察するが、まあそうだろうなどは思うも詮索するのはダメだ。言いたくないことなんて誰にでもある。

彼女が住み着いている宿屋へ行くと、ロビーに見たことのない男がいた。なんかトゲトゲしたあたまのそいつは、頭を見ていたこちらに気付くと、

「なんや、みせもんちやうぞー！」

とキレて来た。…とりあえずこっちが悪いなと思い、謝罪する。

「すみませんでした。」

「ふん、わかればええわ」

トゲ頭はふんつと鼻をならして宿から去っていった。…とりあえずアルゴの部屋に行こう。

彼女が借りた部屋に行くところちょうど外へ行く準備中だったようだ。地味なレザー装備ではあるが、頬についた三本ヒゲのようなペイントと金褐色の髪はなかなかかわいいと思う。

「キリヤ、今から出かけるゾ。ついて来るカ？」

「今さつきサボテンの擬人化みたいなやつとすれ違っただんですけど、あいつ関連ですか？」

「……そうだよ。これから仕事なんだが…メッセンジャーだ。あんまりためになるとは言えないシ、ついてくるならそいつのことは黙っておいてくれ」

…無茶苦茶嫌そうな顔をするアルゴだが、危険なことをするわけではなさそうだ。

「僕もついていきます。自分が知ってる人ですか？」

「うん、キー坊」

「…キリトか。なんか面倒ごとに巻き込まれたのかな」

「ここツールバーナで初のフロアボス攻略会議が開かれル、多分キー坊は参加するはずだ。会議が始まる前に話しくくカ」

ツールバーナの北門へ行くと、キリトとフードを被った人物（線の細さから女性だろうか）が町に入るのがみえた。彼らは一言二言会話をすると、フードの人はキリトとは別の方向に歩いて行った。

キリトはフードの人を見ながらなにか考えていたようだが、いつの

間にかアルゴはキリトの後ろに周りこみ話しかけていた。

「…不思議な女だよ。あんな無茶してるのに死なない。技のキレは一流のそれだガMMOに慣れているわけでもない。キー坊はあんな無茶なレベリングやろうとは思わないだろう?」

「しないよそんなこと。あの細剣フェンサー使いのことしってるのか?」

キリトの質問にアルゴはニヤリと笑うと五本の指を立て一言。「五百コル」

キリトは前に罰ゲームで青汁を飲んだ時と同じくらいの渋面をすると、話の内容をそらすように変えた。

「そんなことより、今日もいつもの代理交渉だろ?」

アルゴも渋面になり、キリトを路地へ移動させる。

「…二万九千八百コルまで引き上げるってサ」

「何度言われてもNOとしか言えないよ」

「…だよナア。ちゃんとオレっちもそう言ったのにナ。もうめんどくさくなったから諦めてくれないかな」

どうやら、なにかを買い取ろうとしているらしいが、余りキリトは乗り気ではないらしい。三万コルはかなりの大金だが、そこまで渡したくないんだろうか?

「あのさ、興味本位で聞くけど、なにを買い取りたいんだその人」

キリトはあつさり答える。

「俺の《アニールブレード+6》」

「……なんで? たしかにレア武器ではあるけどそれクエストの報酬リワードだから頑張れば誰でも手に入るのに…」

「そうなんだよ。そんな大金があるなら、貯金して三層四層あたりで武器更新するほうが早いと思うんだが…」

明らかに怪しいので、相手も無理を承知で交渉している。

「口止め料千コルか…。千コルかあ! こんなバカの名前を知るために千コルも払うのはなあ」

「相手側が上乗せしたらさらにドンツ! だゾキー坊」

「やめとく。これ以上は不毛だつて相手に伝えといてくれ、アルゴ」

「んじやまたナ、キー坊。次の仕事が本業ならいいんだが。キリヤ、行

くゾ」

「はい。んじゃ今度は会議で会おうなーキリト」

午後四時、ツールバーナにある噴水広場には、僕を含めて四十五人のプレイヤーがいた。急にハイレベルプレイヤーを集めた割にそれなりに来たと言つていいのではないかと思う。

この四十五人がどうなるかによって、今後の攻略がどうなるかが決まるだろう。

そこに現れたのは、騎士のような格好の青年だ。かなりのイケメンである。

「よつと、それじゃそろそろ始めようか！今日はオレの呼びかけに応じてくれてありがとう！オレはディアベル！職業は、気持ち的に騎士ナイトやつてまーす！」

：なかなか愉か、じやなかったユーモアのある男らしい。他の参加者も好印象を抱いたようだ。ちなみにSAOに職業システムはない。

「前置きはこのくらいにしといて、今日みんなに集まってもらった理由は一つ、今日オレたちのパーティーが、ボス部屋を発見した！

…ここまで一か月もかかってしまったけれど。オレたちはボスを倒して証明しなくちゃいけない、このデスゲームもいつかクリアできるんだって！そうだろ、みんな！」

喝采が巻き起こる。私の強そうな連中をここまで団結させられるあたり、リーダーの素質が彼にはあるようだ。が、その雰囲気を感じたのは、なんか聞いたことある関西弁だった。

「ちよお待ちってんか！」

そう、サボテン頭である。自分の視点から見ると大金を無駄遣いしようとしている残念な男だ。ディアベルは無視せず、普通に対応した。

「はい、どうしたんだい？…えーつと…？…？…？…？…？…？…？…？…？…？」

「わいはキバオウつてもんや。ちよつと言わなあかんことがあつてな、詫びいれんとあかん連中がおるんや！」

「詫びかい？一体誰から誰に？」

「今までに死んでった二千人に、独占していたベータテスターからや！」

それまで乱入者にぎわついていた四十人弱は全員黙り込んでしまった。キバオウの主張は続く。

「こん中にもおるはずや！こんクソゲーが始まった日、ビギナー見捨ててウマイ狩場やらボロいクエストに直行したクズが！貯め込んだ金とアイテムだして土下座せえ！それが誠意つてもんや」

……出てくるわけねえだろそんなこといっても！しかも、その言及には、大きな矛盾が存在する。指摘しなければ気が済まない！

怒った僕が立とうとした時、端っこに座っていた巨漢が

「発言、いいか？」

と言葉を発した。濃い肌色と堀の深い顔の彼は、日本人離れしている。

「オレの名前はエギルだ。キバオウさん、あなたの言いたいことは、ベータテスターが見捨てたからビギナーが多く死んだ、だから責任をとって謝罪しろ…ということだよな」

「そうや、合つとるで」

「もしあんたがその、自己中心的なベータテスターだったとして、だ。何か一つ独占できるとして、なににする？…オレなら情報そのものを独占する」

「は？なにを…」

「あんた、こいつは持つてるよな？《アルゴの攻略本》。無料配布していたはずだ」

あ、この人気付いてる。なら自分の出る幕はないな、座つとこ。「もろたで。それがどうしたんや」

「新しい町に来た時道具屋に置いてあつたよな？情報が早すぎると思わなかつたのか。」

…オレは、これに載っている情報を提供したのは、常に先を行っていたベータテスター以外ありえないと思う。…情報はあつたんだ。二千人が命を落としたのは、このSAOをほかのMMOと同じ様に計って、引き際を間違えたんだ」

ああ、完璧に論破した。割り切れるものではないけれど、これに応理解してくれたかな。

「キバオウさん、君の言いたいことはわかったよ。でも今は前を見るべきだ。ボス攻略に元ベータテスターの人たちg「デイ、ディアベルさん！」…どうしたんだい？」

話を切った男はディアベルに冊子を渡す。

「こ、これは…ボス編の攻略本!?君、これをどこで?」

「広場のNPC露店にいつの間にか入荷してました!」

「……。ボスの名前、使用ソードスキル、推定HP、被ダメージ、取り巻きの情報まで…。けど、数値的にヤバイ感じはない、か?」

「…ん?ちよお待てや!これ、データがベータテストん時とか書いてるで!?あの情報屋誰がベータテスターか知つとる、いやあの女がベータ上がりや!話を聞かんとなあ!」

!!? 会議の前、僕が貰った方の攻略本にはそんなの載っていない。アルゴの方を向くとどっかに隠れたようで姿がない。火種を撒くだけ撒いてトンスラはひでーぞあの女!

みんなアルゴを吊し上げる気満々になっている。これはまずいと思いを上げようとして、

「…今は、感謝以外に何をするというの?」

フードを付けた少女の、鈴のような声で熱狂が霧散した。キリトと一緒に行動していた人だ。

「……その子の言う通りだ!オレたちの敵はフロアボスだ、今はこの情報に感謝しなくちゃ。

このデータがあれば危険度が高い偵察戦を省ける。死人はゼロにするさ!もし情報に漏れがあったとしても…オレはみんなを護りきつてみせる!騎士の誇りに懸けてだ!」

こいつすごい。物語のヒーローか何かかよ。

そしてディアベルはレイドの構成をするためにパーティーを自由に組めと指示した。ただ、こんなとこに来るのはだいたいパーティー単位でつるんでいる連中が多い。

あぶれるやつはどこにでもいて、SAOは六人でパーティーが組め

るので、四十五をこれで割ると七組出来て三人余るのだ。……つまりどーいうことかといえは。

「…あぶれたね」

「……俺、ソロだし。だから悲しくねーし…」

「……………」

こ う な る 。

上から順に、僕、キリト、名前を知らない女の子である。気まずいよこの空気…。

「……とりあえず組まないか二人とも」

「…あなたが申請するなら」

「もちろんいいよ。ちよつとの間よろしく」

こうして僕らはパーティーになった。僕とキリト、アスナ（ボス戦後に教えてくれた）は、ちよつとどころかそれなりに長くパーティーを組むが、それは別の機会にするとして。

ディアベルはこのパーティーが三人しかいないことに気づき、

「申し訳ないけど、取り巻き専門のサポートをしてくれないか」

と僕らに提案してきた。…まあしようがないと僕とキリトは納得したがフェンサーの少女は納得できないようだった。

ボス戦は明後日の午後から。つまり明日は調整や休息に当てるべきだ。

少し彼女と話してみるとパーティー戦闘に関しては素人（つまり今までMMOすらやっていないかもしれない）だったので明日はパーティー戦闘のイロハをレクチャーすることになった。

次の日、なんかついてきたアルゴと一緒にキリト達と合流し、パーティー戦の胆である《スイッチ》や《ポットローテーション》の練習をした。

明らかに少女の様子がなんか変なのでアルゴに聞いた（千コル取られた）ら、キリトがアーちゃんにラッキースケベをやらかしたらしい。…すぐくそのドタバタ見たかったなあ！

「ところでアーちゃんとは誰のこと？…なんとなくわかったけど」

「あのフェンサーのことサ。オ、今アーちゃんが持つてる剣、あれ《ウ

インドフルレダ、いい武器だよ」

「そっかー。アーちゃんさんか、僕もそう呼ぼうかな」

そしてボス戦当日。迷宮区ボス部屋前に僕らはいた。ディアベルが演説した直後にキリトが質問する。

「…もし、ベータテストからボスの仕様変更があったら、アンタはちゃんと撤退の指示をすると、思っているんだな？」

「もちろんだ。でもシミュレーションは何度もやった、オレが生きる限り誰も死なせない！」

キバオウはキリトに嫌味を言う。

「ふん、こんなやつ相手にせんでええわディアベルはん。あんさんの指揮を知らんからそんなこと言えるんや。」

女と遊んでたやつらが偉そうに口出すんやないで！」

「大丈夫だ！望みうる最高のレイドが組めたんだ。もうこれくらいしか言うことがないな… 勝とうぜ、みんな！」

ボス部屋内部に突入した僕らを待ち構えていたのは、三体の護衛コボルドとその主君、

《イルフアング・ザ・コボルドロード》だ。

…なんてプレッシャーだ！殺意にびびったレイド部隊にディアベルは叫ぶ。

「メイノウエポンは骨斧、サブウエポンはタルワール湾刀！《センチネル番兵》が三体だ！

…全て情報通り、いけるぞ！オレに、続けええええ！！」

その声を聴いたプレイヤーは萎縮から解き放たれ、ボス戦が始まった。

後に、僕は悟る。この戦いがターニングポイントだったということ。全ての因縁の火種がここにあったと気づいたのは、SAOが終わってしばらくたってからのことだった。

第4話 一閃

コボルドロードが骨斧を振り下ろす。その攻撃を盾持ちのタンクが弾き、攻撃後の隙を付いたプレイヤーたちの反撃が、ボスのHPを削った。

かなり順調にボス戦は進んでいると言えるだろう。おまけパーティーで取り巻きコボルドをボコボコにしながら僕はそう思った。

昨日練習したスイッチを使つてのヘイト管理を上手く行い、キリトの連撃が、アーちゃんさんのクリティカル狙いの突きが、僕の剛撃がかみ合ったコンビネーションがコボルドたちを面白いように倒していく。

その様子をチラ見していたキバオウが、キリトを睨み付けながらこっぴどく切り出す。

「どんな気分や、ボスが自分の手が届かんとこで倒されるんは？」

「…何の話だキバオウ」

「いや？これやったらおまえの狙いは無理っちゆうことや」

「狙いい？いや、俺の目的はボスを倒すことだ、お前は違うのか？」

「開き直んなや、わいは知つとるで。おまえが、《ラストアタックボーン》を狙つとるのをなあ！」

キリトは信じられないような顔でキバオウを見た。…何故ならば、その情報をジギナーであるキバオウが、知りえないからだ。

「ベータテスターが教えないかぎりは！」

「…………。キバオウ、誰がそれを教えたんだ？おまえベータテスターが嫌いじゃなかったのか」

「えろう大金積んで《鼠》から情報を買ったつちゆうとつたで！ハイエナ割り出すためにな」

…？だ。アルゴという情報屋は、一見どんな情報も売る女と思つている人間は多いが、絶対に売らない情報が存在する。

ベータテストに関係する情報だ。恐らくそれが彼女の琴線なのだ。それを売ってしまえば自分が畜生以下の外道に堕ちてしまうと気付いているから。

ボスのひとときわ大きな咆哮で、思考が中断される。そういやボス戦だった。

コボルドロードは骨斧と申し訳程度の丸盾バックラーを投げ捨て、腰に付けたサブウェポンに手を伸ばす。

事前情報ではたしか、曲刀カテゴリの武器タルワール刀を使うらしいが：
：タルワールって、あんなに細かったっけ、あんなぎらついた武器だったか？

イスラム圏によくある、粗雑な鉄の武器のようには見えない。どつちかというと、鍛えられた鋼のような：鋼!?

あれの正体に気づいた時には、既に遅かった。やつは、もうスキルを放つ寸前だった。

キリトが後ろに下がれと叫ぶが、コボルドロードがスキルで跳んだ衝撃的な光景にみんなフリーズしている。

落下したコボルドロードから紅い衝撃波が発生して周りにいた奴らが吹っ飛ばされる。

見たこともないソードスキルだ。攻撃範囲が自分の周り全てというのは、

避けようがないじゃないか!! しかもこれ一時的行動不能タス付きじゃん、バランス考えろバーカ!

放っておけば間違いなく死人が出る、全力で走ってスタンした味方からタゲをとらなければ!

そして、ボスの刃から味方の男を護ったのはディアベルだった。

ディアベルはそのまま反撃のソードスキルをボスに撃とうとする：が、コボルドロードの再攻撃の方が速かった。

ディアベルがこちらを向き、少し口角を上げこう言った。

「あとは、頼むよ」

彼を守っていた盾もアーマーも、ボスのサブウェポンの日本刀の前には紙切れも同然で。

ディアベルは文字通り両断され、体がガラスのように散った。

それを見たプレイヤーの絶望の悲鳴がボス部屋を満たす。

コボルドロードは敵将を討ち取ったことを理解し、ニヤリと嗤った

ように見えた。

ただただまずい状況だ、未知のソードスキルによってリーダーが殺られることで士気は最悪、みんな逃げ腰だ。

撤退するにもこの混乱ではまともに指示が出せない…というか出すリーダーが死んだ。

…逃げるべきだと理性は叫んでいる。だが…それは、やりたいことではない。

ディアベルの仇を討ちたい。彼はベータテスターだったが、だからといってあんな無残にやられていい男ではなかった。

先日深夜のことだ。僕はアルゴと共に依頼の報告に来ていた。

依頼内容はベータテスターの死者数を調べること。依頼したのは、ディアベル。

ビギナーは、多数のベータ経験者が生き残っていると考えている。しかし、それは幻想だ。

アルゴが言うにはベータテスト末期のログイン状況などを考えると、正式サービスに移行したのは七百から八百人前後、死者は三百人。

…死亡率が高い理由は、正式サービス移行からの変更点。

このアイコンクラッドをよく知っているつもりでも、時々自身の知らない差異が現れた時、ベータテスターは自身の知識に殺されてしまう。

慎重に情報を過信せず、調べることを彼女の下で学んだ。でもこれは、割り切れるものじゃない。

ディアベルはこの報告にため息をつく。

会議であった時よりどこか影のあるその顔は、もしかしたらナイトの仮面を取った彼の素なのかもしれない。

「だが、ビギナーはその事情を知りようがない。もしボスの装備やステータスが変更されていたら。

もし対応が遅れ死人が出たら、もはやベータテスターとビギナーの協力は不可能になってしまう」

「…その時は非難の矛先をオレっちに向けてくれ。？と真実を織り交

ぜた情報操作で人々を転がす、

ベータ上がりの利己的でクズの情報屋アルゴ様の誕生サ」

「…っダメだそんなこと！僕は、アルゴにもっと教えてほしいんだ！それに、アルゴは攻略に必要な人だ、自分を大切にしてくれ！」

「オ、オウ!?…あ、ありがとうナ、キリヤ」

ディアベルはそれを見て、眩しいものを見たかのように目を細める。

「彼の言う通りだ。ベータテスターとビギナーの橋渡しを平然とできるのはアンタぐらいさ」

そういいながら依頼料を渡す彼は最後に、

「…ところで、今回の依頼のことだが、他に同じことを聞いたやつはいるか？」

と質問する。

「…一人いるヨ」

ディアベルはニヤリと笑うとすぐ真顔に戻って

「…：…：そうか。良かった、つまり、最悪オレが死んだとしてもオレの代役を任せられるのが、一人はいるんだな」

「…：リーダーなんてやりたがるやつじゃないぜ？」

「いや、多分その時に与えられる役は…スケープゴート生贖だ」

剣を強く握る。僕は、彼に頼まれたのだ。このボス戦だけではなく、この後にくらう戦いを頼まれたのだ。

人に言わせたら気のせいだといわれるかも知れないけれど、それだけできつと、今の僕は立ち向かうことができる！

キリトの一撃が、ボスの刀をはじき返す。

跳ね返したソードスキルも硬直時間が発生して隙ができるので、僕とアーちゃんさんが全力で追撃のソードスキルを放った。

細剣用ソードスキル《リニア》と両手剣用ソードスキル《プラスト》がコボルドロードのHPをほんの少し減らす。

混乱していたプレイヤーたちがこちらを見ているが、一つのパーティーを除いて戦意を喪失してしまっている。

このままでは先に僕らが潰れてしまうだろう。そうこうしているとキリトと僕が吹っ飛ばされ、アーちゃんさんが孤立してしまっただ。

ディアベルのようにソードスキルを撃ち込まれてしまうその寸前、巨漢の持つ両手斧がソードスキルを受け止める。たしかエギルさんだ。

「くそ、ダメージディーラーにこれ以上壁タンクなんてさせないぜ！今のうちに回復しろ！」

「すまん！そいつを絶対に包囲しちゃダメだ、無理にスキルで相殺せず、防衛に専念するんだ！」

「おう、任せろ！」

キバオウが仲間を連れて逃げようとしている。このままではボスを倒せないが彼らの闘志を再び燃え上がらせるには、どうすれば…？ 悩む僕をよそにキリトとコソコソ話していたアーちゃんさんは、突然フードを取った。…とんでもない美人だ。

「聞きなさい！！今から騎士ディアベルの、最期の指示を伝えます！『ボスを、倒せ』！」

少女の叫びに男たちはポカンとしている。その可憐さに、あるいは騎士の遺志に。

だが、次の瞬間諦めムードは霧散した。レイド隊は口々に叫ぶ。

「そうだ、ここで諦めて帰ったらディアベルさんは犬死にだ！」

「あんなかわいい女の子にばかり戦わせるなんて男じゃねえ！」

「コボルドクソ犬どもに目にも見せてやれえええ！！」

ボスのHPが面白いように減っていく。

キリトがスキルタイミングをよく知っているから回避は可能だ。

「っ！キバオウ、パーティーを下げるんだ、すぐに！！」

「!!? あかん！範囲攻撃が来る、みんなこっちくるんやー！」

このままではスキル発動してしまうと思っただが、キリトがぎりぎりのところで妨害に成功する。

コボルドロードがバランスを崩して転んだ。キリトが叫ぶ。

「今だ、全員、ぶん殴れええ！！」

範囲攻撃に入る前に削り切ろうと全方位からソードスキルを叩き込む。

「が、ほんの少しだけ残ってしまった！」

「アスナ!!合わせろー！」

「ええ、いくわよー！」

少女の《リニア》がボスの脇腹を抉り、キリトの《バーチカル》が相手を切り裂くも、一ドット残して耐えられた。

コボルドロードが嗤う。

：がキリトも獣のように獰猛に笑みを返し、ライトエフェクトがまだ消えていない剣で切り上げる!!

片手剣二連撃《バーチカル・アーク》を受け、コボルドロードは膝をつき爆散した。

コボルドロードは倒された。一ヶ月の間プレイヤーたちを一層に縛り付けていた怪物はもういない。

僕の目の前にリザルトが表示される。きつと他のみんなもそうだろう。

「勝ったんだな、僕ら。お疲れさん、キリト」

「おう、ギリギリセーフだったな！」

グータツチをしようとして、その視線に気付く。キバオウが、歯を食いしばりながら泣いていた。

「なんでや。：なんでディアベルはんを見殺しにしたんや!!」

：なんだって?キバオウは震える声で続ける。

「だって：そうやろ。おまえ、ボスのスキルを見たことあるから対処できたんや。なんで伝えんかった、何処で知ったんや！」

それに答えたのは、僕の知らないやつだった。

「オレ知ってるぜ！こいつはベエエエタテスターだ！知ってて当然なんだよオ！だから隠したんだろお？」

耳障りな声で喚くそいつからは、何か悪意を感じる気がする。

だが、エギルのパーティーメンバーの一人が反論した。

「それなら、攻略本に書いてた情報はベータ時代のものだ。彼がテスターなら攻略本との差異はないんじゃないか？」

それに反論したのは、ディアベルが護ったシミター使いの男。その目には憎悪の炎が揺らめいている。

「…?だったのさ。ベータテスターのあの女が?を売りつけやがったんだ。あの女…殺してやる!!」

…真綿で首を締められる感覚とは、こういう事をいうのか。知りたくなかったよ。

このままでは魔女狩りならぬベータテスター狩りが起きるだろう。それに真つ先に巻き込まれるのは、間違いなくアルゴだ。

ベータテスターとビギナーの確執なんか知ったことか!僕はそう言おうとして、キリトに肩を掴まれた。

「…キリト?なにを…?」

その目には決意の色が見える。経験上キリトがその目してる時はろくでもないことをやらかすので止めたかったが、もはや手遅れだ。

「ハハハ!俺をそこらのベータテスターと同じに扱うなよ、反吐が出るぜ!あんなシロート連中よりお前らのほうがまだマシだ!」

「な、なにイ!?!」

「あそこにいたのはMMOのモの字も知らない連中だった。そんな状況でまともに経験値稼げたと思うか!?!だが、俺は本物だ。誰もたどり着けなかった所まで到達した。」

そこで馬鹿みたいに刀持ちの敵と戦ったから、あんな攻撃もう見飽きてるんだよ!」

「…な、なんだよそれ。もう、ベータテスターとかそんな領域超えてるじゃないか!」

「チートや。そんなんもうベータテスターのチーターや!」

「ながくね?もうちよつと短くできねーか。……《ベーター》?」

誰かが言ったベーターなる造語に、キリトがニヤリと笑う。

「へえ?いいなそれ、オレは、《ベーター》だ!」

キリトは漆黒のコートを装備すると二層へ続く扉に歩いて行く。

「二層の転移門はオレが有効化しアクティベートといてやるよ!…ついてくるなら初見の雑魚に襲われてくたばる覚悟でもしとくんだな!!はっはっは!」
ひたすらかっこつけて悪役ぶっていたが、僕を勘違いしているなあ

のバカ。

その程度で見捨てるんならガキの頃お前が剣道辞めたときにもう見捨ててたはずだ。

隣を見ると、今回のMVPのアーちゃんさん、アスナと一緒に階段を登っていた。

「アーちゃんさん…いい啖呵でしたよ」

「ありがとう、ところでアーちゃんさんって、私のことかしら。アルゴさんも似たような呼び方だったし」

「いやあ、自己紹介してないけどかわいい呼び名ですよね！」

「たしかにね。お互い名前も知らないのに、あんなに一緒になって頑張ったって、変な気分」

「MMOはそういう一面もあります。でも全てじゃない。顔も名前も知らないやつと友達にだってなれる。オフ会であってリアルで知り合うことも不可能じゃない」

「…きつと今のSAOでも、そういうことなのかも。…私は《アスナ》、君は？」

「僕は《キリヤ》です。行きましょう、あいつきつと待ってますよ」

僕たちはキリトの待つ第二層に足を踏み入れた。

彼女との交流はSAO内にとどまらず、長い付き合いになることを、きつと僕らは考えもしなかっただろう。

第5話 黒猫

一層のフロアボスが倒れて早くも四ヶ月が経過した。現在の最前線は二十六層、なんとか生き延びている状態だ。

この一ヶ月は今までの攻略とは違うことが起こりすぎてかなり疲労が溜まった。

これまで仲良くしていたキリトとアスナがパートナーを解消するわ、キバオウが作ったギルドが壊滅するわ、聞いたことないギルドが攻略に出てくるわ。

その原因は二十五層にいたボスだ。こいつが馬鹿みたいに強かったのだ。

キバオウはいつも通り戦って、壁が一撃で殺されそのままレイドメンバーの半数以上が死んだ。

…死んだやつの中には、友達もいた。

その知らせを受けた翌日キリトはアスナと別れたのだ。なぜ別れたのかは聞けていない。

ちなみにアスナは《血盟騎士団》という今まで名前も知らないようなギルドに加入し、そのまま副リーダーになった。

血盟騎士団のリーダー《ヒースクリフ》は二十五層のボスの圧倒的攻撃力にひるむことなく仲間を護り切ってみせたのだ。

英雄、いや聖騎士という人たちは彼のような男だったのかもしれない。

現在僕はアルゴの下を離れて売れない情報屋兼攻略組として、昼は観光ガイドブックを作って安価で販売し、夜になると最前線で狩りをする毎日を送っている。

そんなことを繰り返していたある日のこと。なんとキリトを見つけたのだ。こっちに気付いてないのでそれなりの声量で呼ぶ。

〈SIDE：キリト〉

俺が《月夜の黒猫団》に入って数日が経過した頃、深夜の狩りに出ていると大声で自分の名前を呼ばれた。

「おーい、キーリトー!!!」

「キリヤ^{バカ}だった。こんな夜遅くに騒ぐなよ…。」

「うるせえ！元氣そうでなによりなのはわかったからもう少し声落とせ！」

「……ハイ」

「まったく、変わらないな、お前。聞いたぜ、観光ガイド作ってるって。…レベリング大丈夫か？」

別にドロップアウトしたいんなら止めないけど、レベリングサボってくたばるのだけはやめろよ」

「大丈夫、マジンは取ってるし、無茶はしてない。それより、ギルド入ったんだ？」

…やっぱ聞かれるよな。誤魔化すはずっと聞いてきそうなので正直に言おう。

「《月夜の黒猫団》って言うんだ。アスナもギルドに入って独り立ちしたし、ちようどいいかなと思って」

「……え、けんか別れじゃなかったのか!？」

「違うぞ!?!ちゃんとお互い納得してコンビ解消したって!」

「まー、冗談はこのくらいにして。あの人見知りのキリトがねえ…」

冗談かよ！あと人見知りは余計なお世話だ！

「べ、別にいいだろ。お前こそギルドに入らないのか、今旬の血盟騎士団^Kとか」

「……一応情報屋だよ？ギルドに入ったらそこの専属にさせられそうだしパース」

「そっか、まあギルドは自分の意思で決めたほうがいいと思うし、無理強いはいしない」

俺だつてギルドに入ったのはたまたま出会ったからだし。

その後ちよつとした世間話をした後キリヤと別れた俺は、仲間たちのことを考える。

《月夜の黒猫団》はいいギルドだと思う。が彼らは最前線で戦うにはレベルも装備も貧弱だ。

しかし、こうも思った。彼らなら攻略組を変えてくれるんじゃない

かと。

それが思い上がりだと気付いたときには、全てが終わってしまった後だった。

第6話 聖夜の殺意

〈SIDE：キリト〉

六月中旬のある日、俺はリーダーのケイタを除いたギルドメンバー四人と一緒に二十七層の迷宮区で狩りをしていた。

ケイタはギルドホーム購入のために売り手と交渉に行っていた。

最前線でなくなつて一ヶ月以上が経つものの、ギルドのみんなにとつて歯応えのある敵が出てくるので緊張感がある。

狩りも終わつて帰路につく途中で、仲間の一人ダツカーが宝箱トレジャーボックスを発見した。

俺は罠の可能性があるからやめておこうと反対したが、それに同意したのは俺と特に仲の良かったサチという女の子だけだった。

：結論から言おう。この宝箱には二重の罠が仕掛けられていた。

モンスターハウスを引き起こすアラームトラップと結晶無効化空間。脱出するために必要な転移結晶は発動しなかった。

この最悪のダブルトラップで俺以外は全員死んだ。：もちろん、サチも。

：彼女が最期に残そうとした言葉は、なんだったのか。

俺は、守れなかった。迷宮区から脱出し、主街区に近いフィールドで待つていたケイタに、なんて言うべきだろう。

「おかえりキリト。：他のみんなは、一緒じゃないのか?」

誤魔化すわけにはいかない。俺の油断がみんなを殺したんだから。

「……死んだ」

「……え?」

俺は全てを話した。みんながアラームトラップによつて俺以外全滅したこと。

俺はレベルが高かつたので生き残つたこと、自身があの悪名高い

《ビーター》であるということも。

ケイタの顔が怒りで染まった。

俺がそれを認識した瞬間、視界が地面に叩きつけられる。

：ケイタが俺を自身の両手棍スタッフでぶん殴つたと、すぐに気付いた。

「…死ぬ、死ぬ、死んでしまええええ!!!」

さらに一撃。

「お前みたいな薄汚いビーターが、僕らの仲間だってえ!？」

「お前の自己顕示欲で僕らに近づきやがって…死ぬクソ野郎おお!!!」

そのまま何度も、何度もソードスキルで俺の体に殺意のこもった一撃を叩き込まれる。

…これで死んだとしても当然のことを俺はしてしまったのだ、俺は自身のHPが全てなくなるのを待った。

…が、自分のHPバーは残酷な事実を俺に伝えてきた。

ケイタの攻撃力よりも、バトルヒーリングによるHP回復量のほうが多い。

俺は、自身と仲間との間の実力差がどうしようもなく離れていたというその事実^に絶望する。

「ごめん。…ごめんなさい。俺なんかが仲間のフリして、ごめんなさい…!」

その言葉はケイタの逆鱗に触れたのか、彼は獣のような叫び声をあげて俺の頭部を砕こうとした。

その瞬間ケイタと目が合った。その怒りを通り越して狂気に満ちた目が恐ろしくて。

俺は気付かないうちに剣を抜いていた。

次に気付いたときには、俺の剣はケイタの体を簡単に貫いていた。

呆然とする俺を嘲笑うようにケイタのHPがあつという間に消え去り、彼はこの世^{アインクラッド}界から永久退場する。

吐き気がした。俺が彼らを皆殺しにしまったという事実^に。

もしかしたら、今現在生き残ったプレイヤーの中で一番罪深いかもしれない。

胃の中のものを全て吐こうとするがSAOのアバターにそんな器用なこと^はできないらしく、なにも出てはこなかった。

…それからの数ヶ月を、俺は死体のように過ごした。

今まで馬鹿のように頑張っていた攻略にも出ず、時々死にたい時に迷宮区に潜りマージンもなくでもない戦いを繰り返す。

死ねなかった。死にたいのに、何故か生き残って自分の宿屋に戻ってきてしまう。

そんな毎日を繰り返していたある日、キリヤが俺にある情報をよこしてきた。

蘇生アイテムをドロップするクリスマス限定のボスの情報を。

〈SIDE：キリヤ〉

十二月のある日、目玉をぎよろりとさせたNPCのじじいが、僕にこんなことをほざいた。

「十二月の聖夜に現れるボス《背教者ニコラス》の大袋の中には、命が尽きたものの蘇生ができる神器さえも隠されている」…と。

怪しい。このNPC死ぬほど怪しい。

つまりこのじじいは蘇生アイテムがこのデスゲームにあるとほざいてやがるのだ。

普通のMMORPGならあつてもおかしくはないが、多分思わぬ落とし穴やらがあるんじゃないだろうか。それがガセネタ。

だが、僕はこの情報をもみ消さずにアルゴに百コルで売りつけた。その後、自殺しかねないキリトにも教えた。

例えばそれが偽りの希望だとわかっていても、言わない選択肢はなかった。キリトに生きてほしいと思っただから。

それから聖夜までの猶予期間^{モラトリアム}で、キリトはアリの巣で無茶なレベルングを始めた。

たしかに経験値を効率的に稼ぐことはできるが、間違ってもソロで挑むような場所ではない。

キリトには何度も休めと警告したが聞き流された。

：僕にだって死別した友達はある。

でもそれ言い訳にして死のうとしてないか？

僕らは兄弟だ。悩んでいるのなら相談してほしいし、お前は自分が思っているほどどうしようもなくはない。

お前を嫌っているやつばかりじゃないことを、忘れないでほしかった。

十二月二十四日、クリスマスイブの夜。僕は三十五層の森の中を歩いていった。

この森に生えたモミの木にボスが出てくるらしいが、既に先客がいるらしい。

かつて《Dドラゴンナイップリゲード K B》と名乗っていたが、なんかいつの間にか《聖竜連合》と改名した攻略ギルドだ。

現在のこいつらはオレンジに、犯罪者カラーになろうがこちらの邪魔をしてくるだろう。

つまり、《ハイディング隠蔽》で隠れながら進むべきだ。

幸い、アルゴに鍛えられたそれは聖竜連合ふしあなたちに気づかれなかった。

ただ、見つからないように進んだことで、少し時間が掛かってしまった。

モミの木のあるエリアに着いたとき、僕の目の前にあつたのは。

…怒りと悲しみと絶望がごちゃ混ぜになった叫び声をあげて泣きじやくるキリトの姿。

「…キリト…」

僕はキリトに近づこうとして、鋭い殺意に思わずバックステップした。…キリトが僕に斬りかかったのだ！

HPが少量削られ、キリトのカーソルが緑からオレンジに変わる。

「…っ！ なにすんだよキリト!?!」

「…もう、どうでもいい。蘇生アイテムはゴミだった。…はは、皆殺しにしてやる!! クラインも、聖竜連合の奴らも、アスナも!! まずはおまえからだ、キリヤあああ!!!」

…明らかに正気を失っている。このまま放置したら大変なことになる、とにかく戦わなければ!

〈SIDE:キリト〉

蘇生アイテムはゴミだった。

…サチが生き返ることはないを知った瞬間、俺の中のが壊れ

た。

少し先を見ると、俺と同じ顔の兄弟がいた。ああ、もうそんなこと
どうでもよかつた。

俺が生きてきた十五年は無駄だったと知った。自分の中にまとも
な心なんて存在していなかったのだ。

ただただ目の前のそれが煩わしく感じ、目の前から消し去ってしま
いたい。

こうして、僕の（俺の）命を掛けた兄弟喧嘩が始まった。

第七話 斬り開かれた運命

キリトの片手剣と僕の両手剣が激しいライトエフェクトを放ちながら交差する。

互いに全力で放ったソードスキルは相殺され、ノックバックで後退する。

こうしてキリトと向かい合うと、子どもの頃剣道をやっていた時を思い出す。

小さい頃から大人しいというかインドア派の兄と、それなりに活発で外でも中でもよく遊んでいた弟。

それでも何故か仲はよかった。僕が剣道を辞めたのは、兄と一緒に遊ぶ時間が稽古のせいで明らかに減ったからだ。

僕らの祖父は、控えめに言っていてスパルタで、僕は嫌いだった。いつも泣き言を言う兄を竹刀でぶっていた記憶がある。

辞めたいという僕らに祖父は激怒し、二対一でボコボコに負かされた。最終的に妹が泣きながら祖父を説得してたっけ。

…でも、ここに妹はいないから僕ぐらいしかキリトの絶望を止められないだろう。

キリトの《シャープネイル》を《ファイトブレイド》でガードしながらカウンターを決める。

今のHP量は、キリト六割、僕六割五分といったところか。

…拮抗しているが、キリトには高威力長射程の《ヴォーパルストライク》がある。隙をさらせば串刺しにされるだろう。

ただ、奥の手がないわけではない。

使えばまずどちらかは倒れてしまうが、確実に決着がつく。それでいいのかはともかく。

だいたい、キリトが狂って襲ってきたのが原因なので、正気に戻れば戦いは終わる…はず。

「キリト…すっかりしろー落ち着いて話を…」

「どうでもいいって、言ったはずだ!!頼むよ、俺を殺すか、殺されてく

れ!!」

その目は淀んでいた。僕はそれが、彼の救いにならないと理解した上で。

「……ああ、わかったよ。…今すぐ楽にしてやる」
ジョーカー
切り札を切った。

血盟騎士団の団長であるヒースクリフは最強の壁役^{タンク}だ。

しかし、彼が最強の守護者としてその名をほしのままにした理由は、良い盾を使っているとか、その技術が卓越しているだとかではない。

彼の持つ出現条件不明のエクストラスキルが他のタンク用スキルよりはるかに強いからだ。

そのスキルの名は《神聖剣》。

事実、ヒースクリフのHPが半分^{イエロー}以下になったことはなく、血盟騎士団の心の支えになっている。

出現条件が全く不明のそれは、いつからかこう呼ばれることになる。

《神聖剣》は聖騎士ヒースクリフにのみ許された《ユニークスキル》と。

僕がそれに気づいたのは、つい最近宿屋での休憩中にスキル欄を見ていた時だ。

見たことも聞いたこともない謎のスキルが出現していた。

興味本位で取得し、MOB相手に使ってみたらHPがガリガリ削れた。…MOBはおろか僕のHPも。

すぐ使用を中止してスキルの説明文を読む。

…たしかにHPが減少するとは書いてたがその減る量とスピードの速さがやばかったのだ。

速攻で封印したが、調子に乗らなければ強力なスキルではある。

ハイリスクハイリターン^{ハイリターン}のユニークスキル、《神聖剣》が最強の盾なら、僕のスキルは使用者すら傷つける最強の矛。

その名は《暗黒剣》。

僕のHPがスリップダメージで減り始めた。暗黒剣は発動した瞬間バフ効果と引き換えに対価を求めてくる。

ここまではまだ問題ないがソードスキルにもHPを求めてくるので気を付けないとHPが一気に危険域になる。

キリトは四連撃ソードスキル《ホリゾンタル・スクエア》を放つ。できる限りブーストを掛けられたそれを、片手で持った両手剣で防ぎ切った。

「…な、に…!？」

「お返した、返さなくていいよ」

黒いライトエフェクトを纏った両手剣で突進し、キリトを吹き飛ばす。暗黒剣専用ソードスキル《ヘイル・ストライク》だ。

キリトはHPを一割ほど残しモミの木にぶつかると、僕も二割程度しか残っていないかった。

…ここで、僕は少し躊躇してしまった。このままキリトを斬れば、HPは消し飛ぶだろう。

《ヘイル・ストライク》を喰らった時点で死んでいてもおかしくはない。

「キリ…」

—紅い光がこちらを透過した。

「……へ？」

重い衝撃が僕を襲う。…キリトの《ヴォーパルストライク》がクリティカルで僕に叩き込まれたのだ。

…キリトの目を見ると、自分が何をしているのかわかったのか呆然としている。

どうやら《ヴォーパルストライク》を撃った衝撃で正気に戻ってくれたようだった。

「き、キリヤ？俺、なにを…!？」

…ああ、こんな時に限って話したいことが多いなあ。

妹のこと、アスナさんのこと、僕が死んでも気にしないでほしいこととか、でも。

こんな一人で抱え込む優しいやつが、僕の兄弟かたわれで本当によかった。
「……じやあな、かずと。」

ニコツと笑った瞬間、自身のHPがゼロになり、僕のアバターは四散した。

今までの人生を回想する。これが、走馬灯というやつか。

…兄が僕にPCを自作してくれたときはうれしかったなあ。妹が剣道で負けた時話し相手になったっけ。

両親にもうちよつと親孝行しとけば良かったな。…じじいはどうでもいいか。

…そこまで思考して気付いた。脳をレンチンされているにはやけに余裕があるな？

体の感覚がある。冷たい、というかさむい。

目を開けると山賊ずらの男がこちらを心配そうに見ていた。

「……目覚め一発で見るとはキツイな……」

「ひ、ひでえ!!こちとら心配してんのに!」

上体を起こすと、山賊のような男の周りには数人、ギルドメンバーらしき人たちがいた。

話したことはないが、彼とはボス攻略で何度か会った。たしか名前
は…

「『風林火山』のクラインさんですよ。ボスはもう死にましたよ?」

「……知ってるよ。さつきキリトと会ったからな。それより大丈夫か?」

「ピンピンしてますねー。そういうえば、蘇生アイテムのことですが…」
クラインはため息をついた。

「キリトのやつは、そんなもんなかったとき。…そういうことにしとこうぜ。」

やっぱ優しいよあいつ。

「そういうことにしときましようか。…お腹すいたなあ。どっかにおごってくれる人いないかなー?」

クラインの方をチラ見する。クラインはニヤリと笑った。

「おう、良いぜ！特別に《風林火山》のクリスマスパーティーに招待してやる！」

「いやった！ありがとうおっさん！」

情報屋としての顔をやめて素の状態に戻ると、クラインは引きつった笑みで、

「いや、おっさんじゃねえ！おれ一応二十代！」

とつつこんだ。

クラインたちとのパーティーは物凄く楽しかった。

彼はログイン初日にキリトと一緒に遊んでいたらしい。

結局別れてしまったらしいが、彼は恨んでいないようだった。

彼らが疲れて寝てしまったあと、僕は四十九層の圏内で建物の屋根に上り、風を浴びていた。

キリトは寝ているだろうか、それとも寝れてないのか。

僕がこうして生きているのは、蘇生アイテムのおかげだろう。

彼はゴミだと言っていたが、時間制限でもあったのかもしれない。

ぼーっと五十層の大地を見ると、オレンジ色の光が見えた。

朝焼けにしては早いと思いい観察すると、割れた。

「……はあっ!?なんだあれ!？」

そこからなにかが落ちてきたのを見た瞬間、僕は走った。

ギリギリのところまで受け止めたものは、黒髪の女の子だった。

カーソルを見ると、プレイヤーを示す緑色。つまり、これはクエストやイベントではない。

「……なんなんだよ、マジでえ……」

これが、僕と狙撃手の少女シノンとの出会いだった。

第八話 落ちてきた少女

空から落ちてきた少女は気を失っているらしい。

どうすりゃいいんだよ…こんなの個人で解決できないって！

「…よし、アルゴに相談しよう！」

「…もう一回言ってくレ。聞き逃したかもしれない」

アルゴの顔が引きつっている。

僕も同じことをキリト辺りに言われたらおなじ反応をするだろう。

「…風を浴びていたら空が割れて女の子が落ちてきました。」

「ね、寝言は寝て言えヨ!? アイクラッドでそんなバグじみたことが

本当に起きたの力!？」

「そこに寝てる子が証拠です。…NPCが落ちてくるんなら、クエストとかが発生したんでしょうが…彼女、プレイヤーです」

宿屋のベッドで寝かせている女の子を見て、アルゴはため息をついた。

「クエストを失敗してこうなったんなら、かなりまずい状況だゾ…。今もクエストが存在しているってことだ。

それ以外が原因だとしても、第二、第三の被害者が出てくるかもしれない。」

情報屋二人があーでもないこーでもないと議論を交わしていると、
「う、ううん…」

と少女が起きそうな声を出した。

「…こうして議論するより、あの娘こに直接聞いた方が早そうだな…」

「…そうだな。」

〈SIDE:???)

…誰かが話し合いをしている。多分男女の二人だろうか。

目を開けると、そこは知らない天井だった。

体を起こすと少年と目が合った。その隣の女性が私に声をかけてくる。

「ヨっ…目が覚めて良かった。大丈夫かい？」

彼女はどことなく浮世離れた風貌だった。

茶色のフード付きマントに巻き毛の金髪、顔には動物のヒゲらしき化粧をしている。

まるでファンタジーに出てくる隠者のようだ。

「えっと、体の方は大丈夫。…それよりも、ここは…？」

それに答えたのは少年。

「ここは僕が借りている宿屋。四十九層だ。」

なるほど、たしかに周りは木でできた一室のようだ。

少年を観察してみると、中性的な顔立ちをしていた。

少し長めの髪を後ろにまとめ、黒色に所々シャープな赤いラインの入ったコートを着ている。

…なにより目を引いたのは背中に背負った大剣だった。

「あなたたち、これからコスプレ大会にでも出るの？すごい格好してるわね。」

二人は顔を見合わせた。彼らに困った顔で質問される。

「…ここがどこか分かるかい？」

「…えっと、ごめんなさい。分からないわ。」

「ここは《アインクラッド》。ソードアート・オンラインっていうゲームの中だ。」

「…聞き覚えはある気がするけど…」

「ここにくるまえ、何してたか覚えてるか？」

「……………!? わ、わからない…！思い出せないわ…」

自分の名前は辛うじて覚えているけれど、それ以外は全く思い出せなかった。

…つまり、私は記憶喪失になってしまったらしい。

「最後に、自分の名前は分かるかい？」

「…朝田詩乃。」

「…本名じゃなくってキャラクターネームの方だよ」

「あ、そっか。ここゲームの中なんだ。…メニューを開けば多分わかると思うんだけど…」

「そうだね。僕の右手の動きを真似してごらん」

そう言うと彼は右手の人差し指と中指をまっすぐ揃えて掲げ、真下

に振る。

私には見えないが、おそらく彼の目には自身のメニュー画面が見えているのだろう。

私も真似をすると、シヤランという音と一緒にウィンドウが出現した。

幸い、自身の名前はメニューの初期画面に書いてあった。

「えっと…S、I…《シノン》、かしら」

あー、これほぼ本名のもじりだ。なんか恥ずかしい気がする。

「いい名前だと思うよ。僕も似たような感じだし?」

名前で思い出した。そういえば彼らの名前を私はまだ知らない。

「…そういえば、あなたたちの名前、まだ聞いてないわ」

「あ、そうだね。僕はキリヤ、こっちはアルゴ。よろしく」

「オレっちたちは情報屋なんだヨ。あらゆる情報を収集シ、対価に応じて拡散シ、公利に適えば拡散シテ、場合によっては秘匿スル。」

あんたがヤバい情報を持っている可能性があったカラ、こうして質問してるってことサ」

やばい情報? 一体どういうことなんだろう。

「…空から、君が落ちてきたんだ。日が昇るちよつと前だったよ」

…からかわれているのかと一瞬思ったが、彼の表情は真剣そのものだった。

「…:…本当に…? 記憶を失う前の私、一体何をしていたのかしら?」

「困ったなー。謎だらけでなにが起きてるのかさっぱりだ!」

私も彼の立場なら、同じ様に頭を抱えるだろう。…なんだか申し訳なくなってきた。

「なんか、ごめんなさい。少しでも思い出せたらよかったんだけど…」

「なーに、大丈夫サ。あんたは運がいいヨ、最近はきな臭い匂いが強くなり始めテ、何かと物騒なんだ。」

「オレンジプレイヤーたちの様子がなんかおかしいからな。警戒しておいて損はないと思う」

キリヤは疲れたように笑った。

…彼らは、きつとこの世界だけではなく、同じプレイヤーとも時には対立したのだろう。

助けになりたかった。自分をどんな理由があつたとしても、助けてくれた二人の力になりたい。

「……。ねえ、アルゴさん、キリヤさん。私にも、できることをおしえて。」

少しだけ、彼らは考えて、大きく分けて三つの道を示した。

一つ目は、逃げることに。下層の町でクリアされるまで待つ。

二つ目は、造ること。クラフト系のスキルを取得しアイテムの製造、修復を行う。

三つ目は、戦うこと。攻略組に入り、アインクラッドを制覇するまで命を賭ける。

一つ目は論外、二つ目はきつと間に合わない。だから、私は。

「戦うわ。生きて帰るために、あなたたちを助けるために」

「本当に、それでいいんだな？」

「ええ、それに戦っていたら記憶が戻るかもしれないし」

と、そこでアルゴが質問してくる。

「それはいいんだが、レベルはいくつだ？それによっちゃ計画立てなきゃいけないゾ。」

さつきメニユーに書いていた数字を思い出す。

「さつき見たら、五十二ってなつてたけど……？」

「…わりと高いな。それなら戦い方を知ってレベリングをちゃんとするれば十分追いつけると思う。」

「キリヤ、お前が助けたんだ、もちろんこの子を任せてもいいよナー？」

「も、もちろん。というわけで、君に戦い方を教えてあげる。お礼は…余裕ができてからでいいよ」

私は、この日キリヤと一緒に戦うことを選んだ。…自分が何者かも知らないままで。

〈SIDE：キリヤ〉

十二月もあと数日で終わり、この世界で二度目の新年が始まること

に若干うんざりしながら、僕は自身の初めての弟子シノンとフィールドに出ていた。

シノンは先ほど購入した短剣と、数本の投擲用のナイフを腰に着け、こちらについてきている。

五分も歩くと亜人型MOBの《オーク・チョッパー》を見つけた。オークはこちらにはまだ気付いていない。

「さつき亜人系の特徴は教えたよね。こいつらは人間と同じ様にソードスキルを撃ってくる。」

オークは打撃以外ならダメージが通るから、射程に気を付けて」

「…わかった。で、早速攻撃してもいいのよね？」

「いいけど…ナイフのダメージは急所つくとかじゃなければかなり低いよっ。」

「急所に当てればいいだけよ。首辺りがいいかしら？」

「…危険なと思ったら助けるぞ」

シノンは投剣スキルの基本的なソードスキル、《シングルシユート》の構えを取ると、オークにソードスキルを放つ。

ナイフは見事にオークの首に直撃し、派手なエフェクトを放った。

敵のHPが四割も減少する。

シノンは不意打ちに慌てるオークに急接近し、短剣ソードスキルの《ファッド・エッジ》を放った。

オークは何の抵抗もできずに爆散した。

「…なんだ、わりと簡単に倒せたわね。私、意外と戦えるみたい」

「…すげえ。結構な距離があったのに、宣言通り当てちゃった…！」

とんでもないダイヤの原石を見つけてしまった。彼女は、きつと物凄く強くなる。

第二の閃光になり得る逸材に、興奮が止まらない。

こうして、僕はシノンの師匠として彼女に戦い方を教えた。

水を吸ったスポンジのように教えたことをグングン吸収する彼女を見て、とてもうれしかったんだ。

そして、大晦日。大事件が起きることを、まだこの時の僕は知らな

か
っ
た。
。

第九話 ダークナイト

十二月三十一日、大晦日のこの日、おぞましい大事件が起きた。

…夜のフィールドで忘年会をやっていた小規模ギルドが、同じプレイヤーに皆殺しにされたのだ。

「…あと少して二〇二四年か、この分だと来年もアインクラッドで年越しかなー」

「弱音吐かないの！来年こそつて思った方が精神的に楽でしょ？」

シノンと一緒に町で年越しそば（つばい謎の麺類）をすすつてしていると、アルゴが血相を変えてこちらに突っ込んできた。

「ききき、キリヤあー！！だ、大事件ダあー！！」

すするのを止めて水を差し出す。すぐに飲み干された。

「…どうしたんだアルゴ。ヒースクリフが裸踊りでもしたか？」

「オレンジギルドがPKやりやがったんだヨ！！」

「はあー！ツツ！」

少し残っていた年越しそば擬きを急いで完食し、アルゴから話を聞く。

殺人鬼たちは三十人近くで囲んで哀れな連中を滅多打ちにしたらしい。

本来ならば、この世界にいる人間はほぼただのゲーマーだろう。

しかし、SAO攻略初期から、時々だがゲームとは関係ない悪意を感じる事があった。

キリトとアスナ、ついでに僕を定期的に襲撃しやがったモルテ、誰かに強化詐欺のやり方を教わったネズハ、単独行動中のキリトを襲った謎の黒フードの男…他にもまだいやがるが割愛する。

きつとあれらはこの仕込みに過ぎなかったのだ。

…この襲撃殺人人によつて、今まで殺人は犯さなかったオレンジ連中のタガが外れる、外れてしまう。

きつと、模倣犯が山ほど湧いてくるだろう。

ゲーム攻略どころの話ではない、プレイヤーたちが疑心暗鬼に陥つて殺し合いすら起きかねない。

シノンがこちらを心配そうに見ている。

「……すごく怖い顔してる」

「……ごめん。ちょっと考えてたんだ。このままじゃオレンジギルドが殺人をやり始める。……アルゴ、少しだけシノンを任せていいか？」
アルゴはぎよつとした表情で僕を止める。

「……何する気だ、オマエ！オレンジギルドを殺しに行こうなんて考えてないよナ!？」

早まるナ、キリヤー!

「……殺さない。死んだほうがマシなくらいのひどい目に遭わせるだけだ。まー、十日くらいしたら戻ってくる。」

アルゴはもはや止まらないと気づき、口を閉ざす。シノンには心配されてしまった。

「……ちゃんと戻ってきなさい。死んだら許さないからね、忘れないで」
「わかった。約束するよ、僕はきみの所に必ず生きて帰ってくる。……行ってきます！」

十日後、大晦日に現れた殺人ギルドレッド《笑う棺桶ラフィン・コフィン》のように殺人をしようとした、三つのオレンジギルドが壊滅した。

黒鉄宮（第一層の地下に存在する牢獄のこと）に送られてきた彼らは酷く錯乱し、要領を得なかったらしい。

話をなんとか聞いた者は、その内容に驚愕した。

彼らを襲撃し、牢獄に叩き込んだのは、たった一人の剣士だったのだ。

ダークパープルのプレートアーマーを着込み、両手剣一本で彼らを制圧したそれは、

自らを《暗黒騎士》と名乗った。

たった一人で来るなんて馬鹿めと侮っていた彼らは、騎士の使った謎のスキルで半殺しにされたとのことだ。

その力にはや人間ではない、頼むから二度とここからださないでくれと、オレンジプレイヤー達は叫んだという。

〈SIDE：アスナ〉

「ねえアスナ、知ってる？ 《暗黒騎士》のこと！」

私の親しい友人で、KOBの長物部隊のサブリーダーを務める《ミト》が、そう切り出した。

「…えっと、新しいボスマンスターの話…？」

「違う違うー！この前さ、ラフコフって殺人ギルドが出てきたじゃん」

それは知っているけれど、面白そうなので彼女に続きを促す。

「それに影響されて、ちよっと人を殺してみようって思っていたオレンジギルドが、三つ壊滅したんだって」

「オレンジギルドを壊滅させたのが、その 《暗黒騎士》…？」

「そうだよ！…悪いことばかりじゃないね。」

たしかにすごい人には違いないんだけど、なぜミトはそんな話をするんだろう。

「攻略に関係ない話なら、私以外の人にしてあげたら？たしかにおもしろかったけど…」

「そいつがユニーク持ちだって噂が少しずつ広がってるの。」

「…団長と同じ？…それが本当なら、今すぐそんな無駄なことを辞めて攻略に力を注いでほしいわ！」

怒りを込めて叫んでしまう。案の定ミトに心配されてしまった。

「アスナ、少し落ち着いて。…気持ちはわかるけど、最近睡眠がちゃんと取れていないわ。」

前も言っただけけど、こういうのはメリハリが大切よ」

「…ごめん。今日は休むことにするね。団長のところ行ってくる…」

自分勝手に怒ってしまったわたしを、ミトは許してくれた。

「ん。今のところ順調に攻略できてるし、きつと許してくれるよ」

「ありがとう。…ふああ…明日は一緒に攻略しようね、ミト」

「うん、また明日」

その日、久しぶりに夢を見た。

夢の中の私はミト、いや深澄やキリト君、キリヤ君と一緒に現実世界で買い食いをしたりゲームを楽しんでいた。

夢を見てはじめて気付いた。SAO初期にキリト君達と旅をしていたのって楽しかったんだなって。

ギルドに入ってから旅なんてできないし、今は副リーダーだから取り巻きが常にいて窮屈だ。

最終的にけんか別れしてしまったけれど、大切な記憶なのは変わらない。

「…次に二人に会えたら、パーティーに誘ってみようかなあ…？」

でも今は少しだけ我慢しよう。たしかにミトの言う通り順調に進んでいるけど、五十層のボスはかなり強いと予想されている。

…今は、《閃光》のままがいい。

第十話 ハンティング

《暗黒騎士》とは、殺人ギルドや犯罪ギルドの暴挙に怒りを覚え、それに鉄槌を下すために現れた謎の騎士だ。

それは必ず一人で現れると、瞬く間に闇のようなライトエフェクトのソードスキルで罪人たちを制圧し、

黒鉄宮行きの回廊結晶で彼らを牢獄の中に叩き込むのだ。

その正体については暇を持て余した中層プレイヤーを中心に激しい議論が日夜繰り広げられている…らしい。

攻略組の誰かが正体を隠している説、茅場がふざけ半分で造ったオモチャ説、

はたまた死んだはずのディアベルが地獄から戻ってきて薄汚ねえ犯罪者どもに裁きを下してる説等々、多岐にわたる。

…：まあ僕なんだけどね、正体！

プレートアーマーは四十八層のフィールドボスのラストアタックボーナスだ。

頭をすっぽり隠せるヘルムも付いていたそれは、正体を隠すのにちょうどよかったのだ。

敵の戦意を殺ぐために力量差を思い知らせ、何かさせる前に絶望させる。…あれ、これ僕ボスキャラでは？と思わなくもないが。

《暗黒剣》はガンガン使った。ぶっ飛ばされても比較的によもな奴が情報を流せるように。

人間は恐れる生き物だ。情報を知らない人が一般も襲撃するんじゃないかという不安を撒かないようにした。

ぶっちやけると保身である。…正体ばれて村八分なんかいやだしね？

まあ、アルゴとシノンが気付いているとは思いますが。

しかし、こういう全身鎧もなかなかいい。今までは軽装戦士だったが、ガチガチに守るのもありだな。

少なく見積もっても六十層前半くらいまで使えそうな感じだ。

キリトは前に似合わないから鎧は着ないと言っていたが、それがま

たいいんじゃないかなと僕は思う。

久しぶりにシノンに授業をしようと宿屋に戻ると、なんか嬉しそうだった。

「お帰りなさい！…良かった、ちゃんと帰ってきた…！」

「僕のこと勝手に出てって迷子になるバカ犬と同列にみてる?！」

「ふつつ、なにそれ。…ちゃんと約束守ってくれるんだ、キリヤ」

ん?…あー、そういえば戻ってくるって言った。

「できない約束なんかしないよ。帰ってくると言ったんならちゃんと帰る。帰れない状況になっても、諦めないから。」

シノンはニツコリ微笑むと、

「これからも約束、守ってね」

と僕に告げる。…ひよつとして怖かったんだろうか。

「うん、わかった。じゃ、指切りしよーぜ」

「…うん。」

「ゆーびきりげーんまんウソついたら針千本のーます、ゆびきった！」

この数日後、五十層のフロアボスは攻略ギルドに討伐された。

二十五層のように馬鹿みたいに強かったが、まあ予想はできていた。

ヒースクリフすら守り切れず数人が犠牲になってしまったが、全員死力を尽くして戦い、犠牲者も予想よりは少ないのが救いか。

ちなみにラストアタックボーナスを取ったのはキリトで、ドロップしたクソヤバ魔剣《エリユシデータ》はキリトの代名詞として大活躍した。

…それはそれとして、僕も魔剣欲しい。

少し時間が流れ、二月も下旬に入ったころ、僕は変なのが騒いでいるのを目撃した。

何でも、オレンジギルドに仲間を殺され、仇を討ってくれる人を探しているらしい。

よし、オレンジ狩りゴミ掃除しよう。…来たのは僕だけじゃなく、キリトもだった。

確かにキリトの逆鱗に近い部分だろう。仲間を嬲り殺しにされたんなら、なおさら。

下手人どもの名前は《タイタンズハンド》、リーダーは偽装一般グリーンの女《ロザリア》。

中層ミドルプレイヤーを中心に襲い、奪い、犯して殺すクズどもだ。

弱い者虐め中心にやっているので良心なんぞかけらも残ってないだろう。

こつちも遠慮なく討伐できるというものだ。

「…とりあえず俺はロザリアの方を調べてみるよ。キリヤはギルドそのものを頼めるか？」

「いいよ。一日経ったら集合して、情報共有しよう」

そこで僕はいったんキリトとわかれ、《タイタンズハンド》についてしらべた。

どうやら中層ではそれなりに悪名轟く犯罪オレンジらしく、そこで暮らす人たちにとって恐ろしい連中のようだった。

だが、何度聞いてもリーダーの名前が出てこない。そこまで有名にも関わらず、だ。

考えられる理由はただ一つ。

おそらくロザリアはギリギリまで待つことで被害者にアイテムを貯め込ませて、肥えた所を部下たちに狩らせる策略家だ。

ロザリアが正体を明かすのは被害者たちが手遅れになった瞬間、情報もみ消されてしまう。

しかし、彼女は運が悪かった。被害者の一人がリーダーを知った状態で生き残ったのだ。

クソ運の報いは攻略組の凸という形で受けることになるだろう。

とりあえず情報交換しようとメッセージを送ったら、こんな一文が返ってきた

『ピーストテイマーの少女のタイムモンスター蘇生のためにアイテム取りに行ってくださいます』

…なんで??

〈SIDE：キリト〉

…大変なことになってしまった。ロザリアを探っていた俺は、やつを難なく見つけることができた。

しかし、その周りには次のターゲットと思われるパーティーがいたのだ。

帰る途中で小さなドラゴンを連れだした女の子とロザリアは口論をしていた。

女の子は怒ってパーティーを抜けてしまい、別行動になってしまった。

ここは《迷いの森》と呼ばれる特殊ギミックのダンジョンだ。

ここは数百のエリアに分かれていて、一つのエリアに一分留まると東西南北の隣接エリアへの連結がランダムに入れ替わってしまう。

対策アイテムはあるものの、そのアイテムは高価なのでパーティー内の一人が持っているのがセオリーだ。

…そして、彼女が持っていたなら離脱なんて許されるわけがない。ほんの少し目を離してしまった俺は時間制限でワープしてしまう。

ここでは転移結晶がまともに機能しないため、長時間このダンジョンに拘束されることもありえる。

しかも、ここには安全地帯がギミックの都合上存在しない。急いで見つけなければ大変なことになる！

俺は身体能力をフルに使い、全力で森を走り抜けた。

俺が彼女を発見した時辺りはすっかり暗くなっていて、その時には手遅れだった。

俺が発見した時には、彼女の友達はその彼女を庇って猿人エイプに殺された瞬間だった。

せめて彼女を助けようと《ホリゾンタル》でサルどもを殲滅するが、連中を根絶やしにしたところで起きたことが覆ることはない。

少女の嗚咽が響く。それは死なせてしまった使い魔への、別れを悲しむ言葉だった。

「…ごめん。もう少し早く来ていたら、君の友達も助けられたのに…」「いえ、あたしが…バカだったんです。友達を、ピナを殺したのは、あたしが意地を張ったから。あなたのせいじゃないんです！」

…その手にはドラゴンの一部が存在している。

そういえば、最近新たな蘇生アイテムが見つかったという情報をア
ルゴから買った。世にも珍しい、使い魔の蘇生を可能にするアイテ
ム。

彼女にアイテム名があるか尋ねると、泣き顔が大号泣にランクアツ
プしてしまいあたふたしてしまう。

彼女曰く《ピナの心》というそれは、蘇生アイテムを使用すること
で生き返らせることができるかと伝えると、少女の目に光が戻った。

「それなら、今すぐに取りに行ってきます！どこにあるか教えてください
さいー！」

「四十七層の《思い出の丘》ってダンジョンに生えている花らしいん
だ。

…ただ、蘇生には時間制限タイムリミットがあつて、三日を過ぎてしまうと効果が
ない」

「…っそんな!!それじゃ、間に合わない…。うう、うわああん!」

…再び泣き出してしまった少女に、どこか既視感を覚えた。こんな
ふうに泣きじやくる女の子を知っている気がする。

ああ、剣道の試合で負けてしまった時のスグだ。…なんか放ってお
くのも目覚めが悪くなりそうだ、助けになろう。

「…俺もついていくよ。それと、これも。五、六レベルくらいかさまし
できる」

俺はトレード欄を使い少女に強力な装備を押し付けた。この程度
なら装備しても装備過多にはならないとおもう。

少女は警戒し、どうしてそこまでしてくれるのかと聞かれる。…ご
まかさずに正直に話す。

「君を見てたら、妹を思い出したんだ。…うん、すごく似てるんだよ。」
彼女は笑ってくれた。うん、泣かれるよりかマシだ、多分…。

「えっと、ありがとうございます…その、代金は…」
「いやいや、いいよ。どうせ持っても換金するだけだし、ここに来た
理由もあるから」

「本当にありがとうございますっ！あの、あたし《シリカ》っていいま

す」

かなりいい子だ。うちのじゃじゃ馬たちにも見習ってほしいな、ダメかなあ…。

「俺はキリト。よろしくな」

その後森を脱出した俺たちは、主街区に戻ってきていた。

どうやらシリカはその可愛らしい容姿とそれなりのレベルで中層ではアイドルとして親しまれているらしかった。

彼女が定宿している宿屋に向かう途中、ターゲットのロザリアに遭遇した。

：堂々と犯罪者^{オレンジ}が我が物顔で圏内をうろついていると思うと怒りがこみ上げてくる。

俺たちの目的が蘇生アイテムだと知ったこいつは必ず襲撃をかけてくるはずだ。

狩りをしている相手を狩るには、獲物を偽装して罠を張ればいい。

甘いチーズケーキに顔をほころばせるシリカを横目に俺は物騒なことを考えていた。

蘇生アイテムは激レアだ。どこぞの収集家^{コレクター}に売れば二十万程度はするだろう。

借りた部屋に入ってキリヤからのメッセージを開けば、集合する場所と時間が書かれていた。

俺はこれまでのことを全てメッセージで説明すると、たった一言返ってきたのがこれ。

『バーカー！』

久しぶりにキレたね俺は！すぐメッセージでの殴り合いが始まった。

二十分ほどバカみたいなことを続けているとシリカが四十七層のことを聞きにきた。

ケンカを中断し、立体マップの《ミラーージュ・スフィア》を使って説明する。

：途中で盗み聞きされるというアクシデントはあったが、シリカに教えることはできた。

おそらくロザリアの仲間だろう、注意するに越したことはない。
疲れからか俺のベッドで寝てしまったシリカをどかすのも悪いの
で、俺は床で寝ることにした。

いい夢を見られるといいな、シリカ。

第十一話 恋人ごっこ

僕は泊まっていた宿屋で、四十七層に行く準備をしていた。さすがにMOBには苦戦しないと思うけれど今回の敵は犯罪ギルドだ。

確かに慣れた相手だが油断した時に限ってヤバいことをしてくる連中だ。

隙をさらせば麻痺毒ではめ殺しもありえる。

と、考えうる最悪を考慮しながらストレージとポーチを睨んでいる僕に、遊びに来ていたシノンが話しかけてきた。

「ねえ、仕事に行くの？」

「うん。四十七層に行くんだ」

「アルゴさんに聞いたわ、花が咲き乱れていてデートスポットなんですって」

「まあ、そうだな？…見に行きたいの？遊びに行きたいなら今度連れて行くよ」

「えっと…男一人で行くと怪しくないかしら。男女がいちやついているのにキリヤが一人にいるのよ？」

想像してみても、カップルだらけのところ男性が一人って、かなり浮いてる…」

た、たしかに!?!このままじゃ《タイタンズハンド》の連中に気づかれてしまうかもしれない…。

「だ、だから、恋人のフリをしましょう。なにをするかは知らないけれど、邪魔はしないから」

シノンは顔を赤らめ、悪魔の提案をした。

…ぶっちゃけ言おう、すごく悩む。シノンはかなりの美人だ。

僕だって男だし、偽装カップルだとしてもシノンとデートしてみたい…っ！

でも僕は情報屋、浮いてるとしても観光ガイド作成のための旅行だと思えば、おもえ、ば…。

「……………。やろう、シノン。でーとぷらんはまかせてほしい…デス…」

わらいたきやわらえ。

僕は情報屋のプライドと男の本能を天秤にかけた挙句、ギリギリで本能に傾けた馬鹿野郎だ。

将来はハニトラで破滅するかもしれない。

そんな僕の葛藤を知ってか知らずか、シノンには微笑んだ。

「そう、よかった。：明日のデート、楽しみにしてるから。」

「……ハイ、頑張ります」

そう答えると、彼女は自分の部屋に戻っていった。

水を少し飲む。少しだけ火照っていた体を冷ましてくれた。

……まあ、少し考えるべき時が来たのかもしれないな。

僕がシノンに、どんな感情を持っているのか。：友情か、庇護欲なのか、それとも：恋心なのか。

幸い、夜明けまでまだまだ時間がある。荷物をまとめたら考えてみるか…。

その日は眠れなかった。

〈SIDE：シノン〉

昨日の私はなに考えていたんだろう…？

いくら彼に恩があるとしても仕事プランにデートを組み込ませるのはいくらなんでも酷い。

四十七層は通称《フラワーガーデン》と呼ばれ、花々が咲き誇る美しい階層だと、アルゴさんは言っていた。

最近その話を聞いた私は、近いうちに行ってみようかなと思っていった。

でもキリヤが四十七層に行くと言った時、もやっとした。

そのもやっとした正体がわからないままに、偽装カップルデートを提案してしまったのだ。

：いったいどうしてしまったんだろう。未だに記憶すら戻らないのにこれでいいかなとおもう自分がいる。

確かに彼は優しいし、とても強い。

褒められると胸がドキドキしてうれしいし、たまに怒られる時もあるんだ。優しさが垣間見えてかわいいと思うってしまう。

情報屋の顔をしている時は相手を手玉にとってニヤリと笑う余裕があるのに、それ以外だとのほほんと緩く生きてるのだ。

でも、たまに彼は私を置いて何処かに行ってしまう。その次の日には、いつも犯罪ギルドオレンジが壊滅したというニュースが流れてくる。

キリヤは間違いなく悪人たちを倒して疲労しているはずなのに、

「いやー、平和になってよかったー」

と、何処か他人事でそのニュースを聞いているんだ。

本当につらいとき、それを隠してしまう彼を見ると、自分は無力なんだと気づかされてしまう。

…それは、たまらなく嫌だ。まだ私はお荷物だと容赦なく突きつけられている。

彼の力になりたい。記憶喪失の私にとって、今はそれが唯一の芯なんだ。

四十七層の主街区フロアリアは、話に聞いた通り一面に花が咲き誇っていた。

イチヤイチヤしているカップルが多い、流石デートスポット…。

…しかし、キリヤは私ではなく街をきよろきよろ見ている。

なんか無視されるのは面白くないので、

「えいっー」

腕を絡めてからかってみる。

「うわっ!?どどど、どうしたの!?!」

百点満点のリアクション、すっごくかわいい。

「……恋人、でしょ?それを無視して街を見るのは違うと思うわ」
指摘すると、彼はばつが悪そうに笑う。

「そっか。…たしかに失礼だ。こんな可愛い彼女がいるのによそ見はいけないなー」

彼はぎゅつと手を握ってくれた。なんだかあったかい。

「よろしい。さ、お仕事しましょうか。なにを探せばいいの?」

「僕と同じ顔の黒ずくめの奴。もしくは…赤毛の槍使いの女」

…赤毛の槍使いはまあ、いいとして。

「……こつてドツペルゲンガーでもいるの?」

苦笑した彼はそれを否定した。

「…双子の兄なんだ。名前はキリト、僕より強いし、優しいやつだ。」
誇らしげに兄弟を自慢する彼は、本当にうれしそうだ。

「そこまで言うんなら会ってみたいわね。で、槍使いのほうは…？」
「見つけても絶対に接触はしないで。犯罪^{オレシ}だけど一般^{グリ}に偽装している悪党だ」

…なるほど、分かってきた。つまり正義の味方としてしよつ引くために四十七層にやってきたんだ。

「キリトを見つけたらこっそりについていくんだ。…女の子を連れていくけど、その子には気づかれないようにする。」

何もなく帰ってこれたらそれでいいけど、何かあった時は…荒事かな。」

「…あ、いた！おんなじ顔の男、行きましょう！」

「おう、そうだな！」

〈SIDE：キリト〉

俺はシリカと一緒に四十七層のダンジョン《思い出の丘》を攻略していた。

何度かグロい植物型のMOBを相手取り、シリカに経験値を積みさせていると、

「あの、妹さんってどんな子なんですか？」

と聞かれた。

「俺、三人きょうだいの一番上で、弟と妹がいるんだ。…でも、妹や両親とは血が繋がってない。」

ホントはいとこなんだけれど、妹は知らないはずだ。事情があつて一緒に育ったけど、弟にまかせつきりだった。

あいつら、本当に仲が良くつて。それをいいことにアウトドア派の妹とインドア派の俺で距離を取ってた。

それで、まだ小学生の頃祖父に無理矢理剣道させられて、俺はいつも竹刀で叩かれてた。

それを見てた弟がキレてじいさんに楽しくないから二人とも剣道辞めてやるって言つてな。

怒ったじいさんと二対一の変則的な試合をすることになって…」

「ど、どうなったんですか!？」

シリカは話に引き込まれている。

「…普通にボコられたんだけど、弟が竹刀をじいさんにぶん投げてさ、じいさんは当然防いだ。」

で、弟はその隙をついてじいさんに右ストレートを叩き込んだ。…普通に耐えられたし、じいさんはマジギレだよ。

この畜生が!…とか言ってたんだぜ仮にも孫に。後にも先にも現実で死ぬかと思っただのはこの時だけだなあ…。

で、妹が必死になって、わたしがお兄ちゃんたちの分まで頑張るか止めてって説得してくれたんだ。

…あいつはすごく頑張って全国までいった。…俺は、言い方が悪いけど遊び惚けていたのに。

…すごく、恨んでるんだろうな。弟は構ってたけど、自分はシカトしてたし。」

シリカは少し考え込んで、俺に反対した。

「…妹さん、きつと剣道がすごく好きだと思っんです。じゃなかったら全国になんかいけません。」

恨んでないと思います!もしゲームから出れたら、しっかり話し合ってみましょうよ。」

「…ああ、ありがとうシリカ。…普通のきょうだいに、なれるかな…?」

「きつと! やってみなくちゃ始まりませんから!」

…彼女の明るさには、助けられてばかりだな。

幸い、丘の頂上には苦勞せずついで蘇生アイテム《ブネウマの花》は手に入った。

帰り道はモンスターに出くわさなかったが、これで終わるはずもなく。

「…そこに隠れてるやつ、ばれてんだよでこい!!」

現れたのはやはりロザリア。罠に掛かったっ!

「え、どうしてここにロザリアさんが??」

「ふふ、こんにはシリカちゃん♪《プネウマの花》無事にゲットできてよかったわねエ。」

「…じゃ、それ渡そうか?」

「…え? な、なんで…!?!」

シリカは困惑するが俺はやつの正体をばらす。

「させるかよ。犯罪ギルド《^{オレンジ}タイタンズハンド》のリーダーロザリア!」

シリカは驚いた眼でこちらを見る。彼女のカーソルが^{オレンジ}犯罪で無いからだ。

「やつのグリーンは偽装だ。大方盗み聞きしてたのも偽装していたオレンジだ」

「きやはははっ! そこまでわかってんなら話は早いわねエ!

肥えさせて狩るのがアタシら《^{オレンジ}タイタンズハンド》! まさか《プネウマの花》のゲットチャンスが来るなんて、ツイてるわっ!!」

「いや、弟が言うにはクソ運だぜ」

「…ハア?」

《シルバーフラグズ》。あんた等が襲って誇りも生も奪い取った連中だ。覚えてるか」

「…ああ、あの貧乏人ども? 大して儲からなかったから忘れてたわ」

…クズめ。死人すら冒瀆するのか…!

「…生き残ったリーダーは最前線で仇を討ってくれるやつを探してた。」

なんて言ったと思う? …『回廊結晶で黒鉄宮に送ってくれ』だぞ?! 殺してくれなんて一言も言わなかった!!

あんた、そいつの気持ちに欠片でもわかるか、ええ!」

ロザリアは鼻でわらった。

「わかるわけねえじゃん。ここで人殺してもガチで死んだかなんてわかんないし?」

あつちで罪になるわけでもない。この世界から出られるとかあ、夢みてんのアンタ? だったら好きに生きるわよオ」

…チュートリアルちゃんを受けてこれなら逆に感心するよ。

「で、死にぞこないの言うこと真に受けるバカでしょ？たしかに誘いには乗ったけどさア、マジで二人でどうにかできると思ってたんのオ？」

そう言うのとロザリアの後ろからガラの悪い連中が湧いてきた。その数、十。犯罪^{オレンジ}だ。

「き、キリトさん…」

シリカは怯えている。ニコツと笑って元気づけた。

「…大丈夫だシリカ。兄ちゃんたちに任せろっ！」

笑ったまま犯罪^{オレンジ}たちに近づく。

「さあ、これから五分、俺は攻撃も回避もしない！好きなだけ殴っていいぜー！

俺を殺せる自信があるなら、その後無茶苦茶恐ろしい目にあう覚悟があるなら斬りかかってこい！」

「…は？」

犯罪^{オレンジ}たちは困惑している。

「ぶ、ブラフだ！やっちゃまえあんたたち!!」

ロザリアが命令すると、ごろつきたちはカウントダウン中の俺に攻撃し始めた。

カウントダウンをしながらHPをみると、バトルヒーリングが発動し、減った分を全回復している。

「い、いやあああ!!止めて、その人を殺さないで!!」

シリカの悲鳴が聞こえるが、無視して続ける。

「六十。一分経過したぞー？もつと腰入れてこいよ！」

いたぶっていた連中の攻撃が早くなるが、結果は同じ。

「百二十。二分経ったぞ？なんだその程度か！」

三分も殴っていた彼らは、ようやく異常に気付く。

「百八十！なんだ。もう終わりでいいのか?？」

犯罪^{オレンジ}の一人が叫ぶ。

「なんだこいつ!?全然しなねえ!!？」

「ち、チートでも使ってるのかいあんた!？」

「残念ながら仕掛けはあるんだよなあ。…二百四十！お前らのダメー

ジは四〇〇つてところだ。

俺のレベルは七十八、HPは一万を超えてるし、バトルヒーリングは八〇〇。あんた等じゃ倍いても殺せない。

…三百!!ボーナスタイム終わり!さて、覚悟はいいいな?」

どこからか飛んできたナイフが、呆然としていたオレンジ五人に突き刺さる!

「がっ!?」「アギ!?」「つて!」「びゃ!!?」「なんじゃ!ナイフが飛んで…グワーツ!?!」

飛んできた方向を見ると、不意打ちで武器を落とした犯罪たちを黒髪の子が睨んでいた。

…あれ、てつきり投げたのはキリヤかと思っただが、あの娘誰だ?

武器を落としたやつらを《体術》スキルでぶん殴る。面白いように吹っ飛んだ連中に、ロザリアが発狂した。

「ぎ、キーーーーっ!!情けないクズどもめ!」

そして後ろからキリヤの声。

「オツスキリト、順調そうだね。…僕の分残ってる?」

「……もう全員折れた気がするけど……」

俺の名前に、一人の犯罪が反応した。

「……キリト、黒づくめの盾なし片手剣…?!?や、やばいよロザリア

さん!こいつ、攻略組の《黒の剣士》だあー!?!」

ロザリアは金切り声を上げる。

「そ、そんな馬鹿な!なんでそんなのがこんなところに湧いてくるんだい!?!」

その疑問に答えたのは、キリヤ。

「《シルバーフラグス》の仇を討つ。ただ、それだけだ。今日、《タイタンズハンド》はここで終わるんだよ。」

平坦な声だが、怒りが奥底でくすぶっているのは、だれの目から見ても明らかだった。

「ち、チクショー!て、てん……」

女の子が《シングルシュート》でロザリアの転移結晶を叩き落とす。

俺は、一瞬のスキを突きやつを犯罪のいる方へ投げ飛ばした。

「勝負有り、だ。全員回廊結晶で牢獄送りにしてやる。抵抗するんなら…」

「僕の麻痺毒ナイフがあんた等を貫くぞ。ちなみにレベル5の猛毒だから十分はかたいぜ！」

回廊結晶を起動して中に誘導すると、ロザリア以外は諦めたのか素直に黒鉄宮に飛んで行った。

「…おい、あんたが最後だ。」

「ああ、わかっているよ。…とでもいうと思ったかア！」

ロザリアは懐に隠した短剣でシリカを貫き、人質に取った。…こいつ！

シリカのHPバーに麻痺毒のアイコンが付与されている。

やつの見せかけの一般は、化けの皮が？^{グリーン}がれるように犯罪^{オレンジ}へ変わった。

「くそ、シリカ!!…卑怯者め、まだあがくのか!？」

「きやはははっ！甘ちゃんどもめ、大人をなめんじやないよ！さあ、こいつを殺させたくないなら大人しく…ブベラツ!!？」

キラヤの右手がシリカを奪い、そのまま左のストレートパンチがロザリアの顔を変形させながらコリドー内に吹っ飛ばした。

回廊結晶の効果時間が終了し、静寂が戻る。…なんとかなったようだ、良かった…。

「…立てるか、シリカ?」

「ちよつと、腰が抜けて。少しだけ待つてください…。」

キラヤはすつきりした表情で左手をぐっぱーしている。たしかに最後のあれは上手く食い込んだよな…。

「そういえばキリトさん。あの人たちって、もしかして弟さんと妹さんですか?」

シリカの質問に頭をひねりながら答える。

「んーと、弟だけど、妹じゃないよ。妹はもつと素朴な顔してるし。…おいキラヤ、誰だよその子。」

「僕がクリスマススの時に保護した娘^こ。とりあえず自己紹介しようか。」
「えつと、シノンです。話はキラヤから少しだけ聞いてるわ。すぐく、

強いんだって」

「買い被りだ。キリヤめ俺をだいぶ盛って話したな？次会った時覚えてろこいつ…！」

「…そりやどうも。この子はシリカ。ビーストタイマーなんだ、な？」
「あ、ハイ。シリカです。えーつと、シノンさんって投剣スキルが高いんですね！」

「あんなに武器を正確に落とさせるってすごいですっ！」
「ありがとう。良かったらコツを教えるわよ？」

女子同士なんか仲良くなってる。シリカってすごいなあ、俺なんかよりよっぽどコミュ力ある。

「それじゃ、街に戻って蘇生アイテムを使おう。その後は…」

「…お別れ、ですね。キリトさんたちは攻略組だから、最前線に戻っちゃうんだ…。寂しいな。」

「また会いに行くよ。友達、だからな。困った時はメッセージを飛ばしてくれ。」

「…はいっ！」

こうして、《タイタンズハンド》討伐は終了した。

ピナの蘇生を見届けて、最前線で依頼者にやつらが壊滅したことを伝えると、彼は号泣しながら感謝してくれた。

…できれば、彼の心が癒されることを願うしかない。

あれ、そういえばシノンってキリヤの何なんだろう。…まあ、今度聞けばいいか。

俺たちはいつでも会えるんだから。

第十二話 リズベットの忙しい一日

「…相談したいことがあるんだ。頼むよ、僕を助けるとおもって！」
六月も終わりに近いある日、僕は知り合いの少女に相談を持ち掛けていた。

「…あのさあ、なんでミトわたしに？もっと仲のいい人いるでしょあんた…」

彼女の名前は《ミト》。血盟騎士団サブリーダーを務めるアスナの親友であり、彼女自身も身の丈程の大鎌を振るうパワーファイターだ。

その実力と美貌により、アスナと同程度、もしくはそれより少し少ないファンがいる人気者である。

「だって当てにならないし」

「み、身も蓋もないっ!!アルゴとか《キリト》ブラッキーとかいるじゃん!」

「アルゴにしたら一万コル程度で売れるネタでしかないし、キリトがまともに答えるわけじゃないじゃん、

絶対はぐらかすよ十万賭けていい」

「そんな相談持ってこないでほしい…。仲良くないならなに言ってもいいなんて思うな!」

「普通の女の子ですぐに都合着くのなんてミトくらいじゃ…。」

「トップキルド血盟騎士団なんですが??普通のハードル高くない!」

…。こいつからかうの楽しいな、打てば打つほど返ってくる。

「まー戯れるのはこのくらいにして、だ。例えばの話でしょう。」

…君が異性からプレゼントをもらうとして、なにがもらえたらうれしー?」

ミトは三十秒ほど悩んだ。

「…し、新作ゲーム、とか?」

ダメだこりゃ!

異性からのプレゼントの選出がサンタに頼む子どものクリスマスプレゼントと同レベルじゃないか!!

「クソオー!これじゃ第一プランでいく羽目になるじゃないかあ!」

「人が真剣に考えた結果がこれか!!今度飯おごれこの馬鹿!…第二プランってなに?」

「プレゼントの候補はあったんだけど…はい。」

メモ代わりにしたメッセージをミトに見せる。

「なにに?…第一候補指輪、第二候補花束、第三候補レアなネックレス…。」

おもいんだよバーカ!」

メッセージが地面に叩きつけられ割れてしまった。

「そんなに!」

「重いよ、具体的にはホール、いやウェディングケーキソロチャレンジくらい重いよ!!」

あんたこれ普通の友達にいきなり婚姻届渡されるくらい衝撃的過ぎるって!」

「そりやひでー!…。経験があたりで?」

「あるわけないじゃない!!」

話が全く進まねえ!相性が良すぎるのもめんどくさいな!

「好きな女の子に渡すには重いのか、指輪って」

「…やっぱり。指輪そいうのと花束のって、お互い好きになってから渡した方がいいよ。」

そういうものか。難しいなあ…。

「先に作つとくのは?」

「…好きにすれば?もう、あんたの相談には、絶対乗らないわ…。」

「…今度漫才でもやってみる?」

「ヤダよ、一人でやってろ」

〈SIDE:リズベット〉

ここは、あたしが店を構える四十八層主街区《リンダース》。

そして、あたしの拠点にして鍛冶屋の《リズベット武具店》は、今日も?盛っていた。

キリトとの楽しい冒険から早一日。あいつが今も戦ってると思うと、あたしも負けるかと元気が出てくる。

…うん、心がすつごく軽い、今ならどんな無茶な注文だろうができ

る気がする！わっはっはっ！(フラグ)

「こんにちわー。マスターミスがいるって聞いたんですが、留守ですか？」

「いらっしやー…キリト？」

いや違う！似ているが別人だ。

「ああすいません！こ、ここに来るのは初めてですよ？

良い武器揃ってますよ？」

「いや、作ってほしいものがあって」

「オーダーメイドですね？とりあえず武器種は…」

そこでお客さんは首を横に振った。

「作ってほしいのは指輪なんです」

そのニュアンスで完全に理解した。…よりによって失恋した翌日にくるか。

しかもそいつは好きな人と同じ顔してるときた。いじめか？

「…それより武器、見てみます？」

「…話をそらすなよ。ま、こいつよりやばいのあったら教えて」

背中両手剣を指差し、基準としてそれを渡された瞬間悪寒が走る。

銘は《ウロヴオロス》、恐らく意味は輪廻転生の蛇という感じだろうか。

製作者の名前がない、ということとはドロップ品(ボスクラス)だ。

蛇が模られた剣は、∞^{むげん}の形にカーブした刀身をぎらつかせている。

しかし、悪寒の理由は造形ではなく剣の能力そのものだ。

「強化試行回数ゼロ、使用者の自傷ダメージが多くなればなるほど攻撃力が上昇する魔剣…!？」

なんて危険物使ってるのよあんた！しかも、これかなり使い込んでるわね!？」

その耐久値は半分になっていた。つまり昨日今日入手したものではないことは明白だ。

「うん、強くなるためならこのくらいししないと、追いつけないから。」

そう言って笑う彼の目には、強い決意が見える。

…ああ、そっかあ。こいつも、誰かに追いつきたいのか。でも、彼は気付いていない。それは守りたい人を無茶苦茶心配させてしまうんだ。

憧れという奴はやっかいで、自分では駄目だとわかっていたとしても、目指さずにはいられなくなる。

アスナなんかは、現実へ帰るために非情な手すら使いかけたこの前苦笑交じりで話してくれた。

「あんたさ。自分のこと心配してくれる人、一人くらいはいるでしょ？」

…指輪、作ってあげる。でも、お代だけじゃだめ。

…指輪あげる娘のこと、幸せにするって約束しなさい」

「ど、努力します。」

「幸せになるってことはさ、一人じゃきつとだめだとおもうんだ、あたし。どんなおつきな器ですごく見えても友達とか家族とか、好きな人が近くにいないと、空っぽになっちゃう」

「……空っぽ？」

「うん、スポーツ選手が速く走るために減量するのとおんなじで、一人でやってもダメってこと。」

…なんか言ってて恥ずかしくなってきた。

「で、約束するの、しないの？」

もちろん彼は約束した。…それにしてもとんでもない魔剣だった。

「あいつ、絶対攻略組だよね…あんなヤバい効果初めて見たわ…。」

あたしもあれくらい強力なの頑張らなくちゃ」

時計を見るともう十時を過ぎている。

さすがに店じまいして寝ようかと入口を閉店クローズドにしようとする、呼び鈴がなった。

…しようがないなあ、もう一仕事するか！

やってきたのは珍しいことに黒髪の女の子。武装から見るに短剣使いかな？

「ごめんなさい、こんな夜遅くに来てしまって…また明日来るわ。」

「いらっしやい！大丈夫ですよ、もうちよつと店開けときます！」

「ご注文どうぞ！武器だろうが指輪だろうがドーンとこいです」

「……作ってほしい武器があるんです」

「大丈夫、アタシはマスターミス、任せてください！武器種と素材の指定は？」

「…素材は持ち込みで、武器の種類は、…みです。」

武器種が聞こえなかったのも、もう一度確認する。

「…すみませんもう一回武器種言ってもらえます？」

「…弓です。」

「……。え?？」

六月二十六日、アタシはとんでもないモノを初めて作ったプレイヤーになった。

今まで存在していなかった、射撃武器の弓。突然あらわれたそれはこの世界をどう変えてしまうのだろうか。

…アタシはまだ、それを知らない。

第十三話 狙撃手の原点へオリジン

〈SIDE：シノン〉

六月のある日、私は血盟騎士団のアスナと一緒に食事をしていた。もちろん理由はある。武器の強化や更新のことを相談したいからだ。

彼女は変わった。勿論、いい意味で。

わたしがこの世界に来たばかりの頃は鋭い眼光で睥睨されたものだが、今のアスナは、ぼわんとした笑みもたまにするようになったのだ。

キリヤはこうなったアスナを見て、

「ギルド入る前のアスナはだいたいあんなだったぞ？」

と言っていたが、真相は定かではない。

「で、シノのん。武器のことについて聞きたいんだよね。」

やっぱりキリヤ君の力になりたいから？」

「…そんなとこ。短剣これも六十層に来てから与えられるダメージも心もとなくなってきたし…いい鍛冶屋を紹介してほしいな」

「任せてシノのん！ 友達がやっているところなんだけど、前に《ランベントこライト》を作ってくれたんだ。」

名前はリズベット、四十八層の主街区に店をかまえてるんだよ」

「それ、ユニーク武器なんですよ？ すごいじゃない！…あとシノのんはやめて、ゆるキャラっぽいじゃない」

「えー？ かわいいじゃシノのん、だめかな？」

「…もうちよつと仲良くなったらね」

めんどくさくなったので私は話を逸らすことにした。

「と、ところでアスナ、キリトとはどうなの？ 何か進展あった？」

「ふふんっ♪…この前一緒に狩りデートしたよ！」

「まって、ルビがおかしくない？ それ一般的には狩りって言わない？」

「……………ハイ。」

「ハイじゃないが。…どうせキリト鈍感あいつなんだから、素直にデートしようって言えばいいのに…」

「そーいうシノのんはどうなの？キリヤ君と上手くいってる？だいた
い一緒にいるじゃない！」

「で、デートはちよくちよく。仕事とか攻略が休みの日は一緒に遊び
に行くし、結構考えてくれるのよ」

「う、うらやましい…。脈あるじゃん絶対！もうちよつと押したらい
けるって」

「アスナはもう少し頑張りましょうって感じ…。ゲームに絡めたらダ
メなタイプよ、あのまっくろくろすけ。

一生進まないと思うわ。」

「…あれ、いつの間にか私の相談になってる…。？…まあいつか。私、が
んばるよシノのん。」

この後私とアスナは別れて、私は狩りに出かけた。

…実は、アスナにも言っていない話がある。私はそれをストレージ
から出し、ため息をつく。

それは、木材が丸く曲線を描いており、その両端には弦がついてい
る。

それは、弓だ。このアインクラッドにおいて、茅場晶彦デザイナが意図的に
排除したはずの、遠距離武器。

これを入手したのは六月の初めのこと。

私はキリヤと一緒にタワー型ダンジョンへ潜っていた。

そこで遭遇したのは、弓を持ったスケルトンだった。

威力こそ低いがうざったいほどの連射と、後衛にあるまじき防御力
をもった強敵だった。

…が、そのしつこさにキレたキリヤが塔の上層から敵を叩き出し、
重力でスケルトンは粉々になった。

この弓はドロップ品だが、やけにダメージ値が低く使い物にならな
い。

そしてこれを手にいれたあともしくはその直前、スキルに《射撃》が
現れたようなのだ。

…どう考えても弓用のスキルで、キリヤに相談したが
「混乱のもとになりかねないから今は隠したほうがいい」

と言われてしまった。

しかし、だからといって。

私は、この力を諦めることはできないんだ。

足手まといだった私が、彼の力になれるのなら、チートと蔑まされようとかまわない。

この弓を強化、もしくは新たな弓を求めて、私はアスナが教えた鍛冶屋にやってきた。

よく考えてみるとむちやぶりをしているのに、店主の少女リズベツトは笑顔で強力な弓を作ってくれた。

本当にありがたい、また来よう。

この弓の名前は《オルフェウス》。妻を取り戻すために冥府に侵入した男と同じ名を持ったこの弓は、どこことなく豎琴のようだ。

：私は彼を冥府に連れて行かせないように、《オルフェウス》に慣れるために練習を行うようにした。

戦え、取りこぼさないように。：戦え、自分が何者であったとしてもそれを貫けるように。

第十四話 ヒトゴロシ

《暗黒騎士》が現れ犯罪ギルドオレンジを討伐したとしても、彼らの殺人が止まることはなかった。

：なぜならば、最初にギルド単位で殺しを行った最凶の犯罪ギルドオレンジ、笑う棺桶ラフィン・コフィンが、未だ健在だからだ。

やつらは犯罪の中で最も質が悪い殺人鬼ドであり、殺人を行う連中にとつてクールなカリスマだ。

こいつらを殲滅しなければ被害者は増え続ける。

しかし《笑う棺桶ラフィン・コフィン》は八ヶ月の間隠れ家を隠蔽し続け、その間殺人を続けた。

：状況が動いたのは八月某日。やつらの中から離反者が現れ、アジトがリークされたのだ。

低層の小さなダンジョンに潜んでいる彼らを襲撃するために攻略組で集結し、会議を開いた。

「おそらく、今まで見つからなかった原因は、あの《ラフコフ》がこんな低層で陣取ってるわけない…という先入観でしょう。

仮に見つけたとしても、低レベルプレイヤーはやつらにとって格好の獲物エッサであり、逃がす理由がありません」

：と、アスナは苦虫を噛み潰したように言う。：昔から辛酸をなめさせられた相手だ、やつとのことで剣を突きつけることができたこのチャンス逃すつもりはないだろう。

：僕だって同じだ。いつもいつもなめ腐った態度でやらかしやがった報いを受けてもらおうぞ。

今回、シノンも討伐に参加するが、いつも通りサポートに徹してもらうことを予め伝えた。

彼女は不満そうだったが、本当は参加すらしてほしくない…。

「…アスナさん、ラフコフのメンバーが抵抗して自身の命が脅かされると判断したら、殺害も考えていいんだよな…？」

僕の言葉に周りがざわつくが、アスナは頷いた。

「……ええ。基本的には捕獲がいいけれど、その場合には自分の命を

優先して」

やつらのアジトを取り囲み、討伐隊のリーダーを務める聖竜連合幹部のシュミットが降伏勧告をするが、反応はない。

「ちやんと準備も覚悟もした、はずなのに。…僕は嫌な予感が止められなかった。」

例えるならRPGで必要なフラグを踏まずにボス戦に挑むような、不安感がある。

何かがおかしいのに、それを指摘できないもどかしさがもやもやする。

「だからだろうか。思考に集中してしまった僕は敵の不意打ちに反応しきれなかった。」

「……っ!!?」

呆然とする僕に、キリトが叫んだ。

「キリヤ、敵襲だ！攻撃されている!!」

「あーもう、何やってんだ僕は!!先ずはこいつらをなんとかしなければ!!」

「…そうして始まったラフコフとの戦いは惨状と呼ぶにふさわしいものだった。」

まず、殺人をためらってしまったこちらに、死者が数人出た。

やつらは殺しにためらいがないし、HPが赤になろうが笑いながら捨て身で襲ってくる。

狂乱で討伐隊も反撃し、殺人鬼たちも数人が死んだ。

そこからは地獄だった。敵も味方もほぼ分からず、誰が誰かもわからないままに殺し合う。

「…あたまが、いたい。ぼく、は、なにを…してるんだろう。がらすがわれる。わらいごえがする。」

うるさい、うるさい、うるさい!!!

にやにやとわらうそいつをけんでまっふたつにする。われたそいつをむしして、ぼくはまわりをみわたす。

しのんが、おそわれていた。

けんをすててしのんのもとにいかうとすると、じやまをしてくるや

つがいた。

「ひゃひゃひゃひゃひゃ!!武器を落としたぞ、ころ…」
そいつをなぐりころす。みどりだったばーがなくなってわれた。
しのんに剣をフリかぶツタそいつのクビスジニようしやナク噛み
つく。

「がツ!?!は、離れろくそが!!」

急しよヲ狙ったためか慌てルそいつのくびを、「や、やめー」
かみ砕いた。

…ひどい味がする。ここまで頭痛がひどくなった記憶は、ちよつと
思い浮かばないくらいだ。

…こんなじごくにいて、しようきでいられない。…じぶんがこわれ
ていくのをかんじる。

…シノンは大丈夫か…?…僕はもうだっぺいい、彼女が無事なら。
彼女を視界に捉えると、震えていた。

「シノ…」

「ツ……、こないで!!こないでよ!!…いや、いやああ!!」

それは、キヨゼツノコエダツタ。

カナシクテリカイデキナクテ、ぼく、はオレハ…

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ

へラフィン・コフィン討伐における報告書

《ラフィン・コフィン》が潜んでいたアジトへの強襲は、大量の被害
を出したものの成功しました。

幹部プレイヤーである《赤目のザザ》と《ジョニー・ブラック》は
捕縛に成功、その他の八人も黒鉄宮に送還されました。

：討伐隊の死者は十一名、《ラフィン・コフィン》は二十三名が死亡しました。：行方不明者は一名。

《生命の碑》の彼の名前は未だ健在なので、間違いなく生きてはいるはずですが、現在搜索届をばらまいて行方を捜しています。

最後に、《ラフィン・コフィン》のボスであるP.O.H^{プー}は、捕縛することも殺害もできずに取り逃がしてしまいました。

：おそらく初めからアジトにはいなかったものと思われま

報告者 アスナ

第十五話 再起のために

〈SIDE：シノン〉

夢を、見ていた。

そこでの私は普通の女の子で、キリヤとデートをして、結婚して、子どもができて、幸せそうだった。

：そんなみらい、あるわけないのに。

あの惨劇から生き残ってしまった後に見る夢がちよつと意外だったので、困惑している。

こんな日こそ、あの日の夢を見るだろうと思っていたから。

私は、人を殺したことがある。このゲームの中：ではなく、現実で。

：四年前、まだ小学五年生だった私は、基本的にインドア派で母親との平穩を望む子供だった。

祖父母宅に身をよせ、父の死で心が壊れた母を外の世界から守りたかっただけの、普通の子供。

九月になってすぐの土曜日、母と私は郵便局に出かけた。

母が窓口で話している間本を読んで時間をつぶしていた私は、新しく入った客の男と目が合った。

その男の目が酷く虚ろだったのを覚えている。

：男は強盗だった。あいつは男性局員をハンドガンで射殺し、金を出せとがなり立てた。

女性局員たちは急いで金を出そうとするが、もたついてしまい強盗をイラつかせる。

強盗は、母を狙った。私は、ただ、母を守らなくちゃと思って、男の手首を噛み銃を奪った。

その銃は男の汗でじつとり湿り、体温のせいで生き物のようだったのを覚えている。

銃を奪い返そうとした強盗を撃つ。

腹に喰らってよろめきながらこちらに向かってくる男をもう一度撃った。

それでもなお向かってくる男を《壊す》ために弾丸を放つ。頭をぶ

ち抜かれた男はそのまま倒れた。

…母は、殺した私に恐怖と脅えの目をむけていた。

呆然とした私は、目をそらそうとして手元を見てしまう。

…男のどす黒い血で、私の手はひどく、汚れていた。

「あ、ああああ、ああああああ!!!」

それからというもの、私は銃を見るたびにあの事件を思い出してひどいショック症状に襲われた。

周りの人間は人殺しと私を見るたびに罵り、ドラマや映画は銃への恐怖で見れなくなった。

PTSDと診断された私は反吐が出るほどにカウンセリングを受けたものの、効果はなく。

匙を投げたカウンセラーの一人が、ある日こういったのだ。

「《メデイキュボイド》というVRマシンを知っているか」…と。

…なんでも、あのSAOデスゲームのせいで販売中止となった《ナーヴギア》の、医療目的に造られたものらしい。

最近《アミュスファイア》なる家庭用かつ安全重視の新型が発売され、《メデイキュボイド》はそのVR世界にアクセス可能とかなんとか。

どうしてそんな話をするのかとカウンセラー失格の彼に聞くと、

「今現在仮想現実SAOのせいで避けられ、臨床試験をやろうとしても参加モトルしたい患者モットがいない。

試験の期間は二週間、数倍の電子パルスが人間にどんな影響を与えるかわからないからだ。

…もしかしたら君のPTSDを軽減できる…かもしれないじゃないか」

と、妄言なのか心からの提案なのかわからないことをぬかす。

…しかし、私は藁にも縋る気持ちだった。

たった二週間ならと、私はその臨床試験に参加した。…参加、してしまっ

書類を色々書かされた私は、《メデイキュボイド》を使い医療用のVRワールドにログイン…したはず。

…なぜ、SAOなんかに来てしまったのかは、全くわからなかった。

記憶が戻った原因は、まず間違いなくラフコフ殲滅戦だ。

あそこにいた殺人鬼たちの目は強盗の男と全く同じで、血と暴力に酔っていた。

萎縮しうまく戦えない私を見た殺人鬼の一人に殺されかけた時、獣のような存在が殺人鬼の首をかみ砕く。

：キリヤ、だった。その目は、強盗のそれがかわいく見えるほどの殺気と狂気に満ちていて、恐怖以外の感情が沸くことはなかった。

私は防衛本能に従い彼を拒絶してしまった。

：が、同時に気づいてしまったのだ、その目にはまだ理性の光が残っていたことに。

キリヤは獣のような声を上げ、アジトの外へ逃走した。

彼は未だに行方不明だとアルゴさんは言っていた。

こんなことなら思い出さない方がマシだったという気持ちと、ここに来たのは必然だったという諦めの気持ちが混在している。

：私はラフコフのアジトで死ぬべきだったのだ。人殺しの手なんて、誰も取りたくないだろう。

「シーちゃん、いるかい？…オイラだよ、アルゴダ。中、入ってモいかい？」

「あ、アルゴさん!?!…ど、どうぞ。」

私の部屋に入ってきたアルゴさんは、私の顔を見て心配そうな声を掛ける。

「…涙でびしょ濡れじゃないか。…あのバカ一回マジでぶっ飛ばさなきゃダメだな…」

「…いえ、違う、違うんです。私、記憶が、戻って…」

「…その顔からすると、あまりいい記憶じゃなさそうだな…聞かない方がいいかい？」

：私は、少しだけ悩み、彼女に全て説明した。

昔、人を銃で撃ち殺したこと、そのせいで人殺しと罵られたこと、そして…。

「《メデイキュボイド》、ネ。…デスゲームSAOでそっち方面は下火だと思ってたが、普通に生き残ってんの力…」

「…ええ、二週間のテスターとしてログインするつもりだったのに。まさか、八ヶ月だなんて、ね…」

おそらくこんな事故が起こってしまった時点で、《メデイキュボイド》は開発中止になってしまっただろう。

…それで救えたであろう命も、私は間接的に奪ってしまった。

「…今までお世話になりました。二度と会うこともないと思いますが…」

「…死ぬ気力、シーちゃん。」

「はい。…記憶が戻った時点で、近いうちに死のうと考えていたんです。」

全部話して、心残りはなくなりました。」

「……う。ダ。」

アルゴさんは怒った顔でそういったのだ。

「…う、ウソなんて…！」

「なあ、キリヤの話を全くしてないじゃないか!!記憶が戻ったのハ、この際隅に置いといてあいつと何があつた!?

あの戦いで何を見タ、答えてくれ!!」

言葉にできなかつた。…今でも、あれは何かの間違いなんじゃないかと思っっている自分がある。

私の知っているキリヤと、あの獣に似た存在がだぶらない。もしかしたら、あんなところに行かなければあはならなかつたのかもしれない…。

…彼を追い込んだのは、私だ。

「私が、キリヤをあんなことに…?」

「……あのサ。なんとなく察しタ。…そんな顔スナ、あいつは後悔なんかしてないヨ。」

…シーちゃん、助けられたんだロ?」

「ひどいことを言いました。…恨んでると思います。」

「………。キリヤのこと、好きか?」

…もちろん、好き。でも、私は。

「…好きになる、資格なんてないから。」

「ほぼ答えじゃないカ。いいんだヨ、幸せになつてモ。

たしかに、人の命を奪う感覚なんてオイラは知らんシ、憶測で語るの
は情報屋として失格ダ。

でも、知つてゐることはあるヨ。シーちゃんは真面目で優しい女の子
ダ。…デ、キリヤが好き。」

「…やさ、しい…え、ホントに言つてゐるの？」

アルゴさんはにやつはつはと笑つた。

「真面目に言つとるワイ！心残り、ちゃんとあるじゃないカ！

サー、キリヤに会いに行こう。後悔も恋心も全部ブツパダ！

なーに、あのバカにはちようどいって！」

そう言うとアルゴさんは私の手を引く。

「え、ちよ、まつて!？」

ああ、もう！分かつた、私だつてキリヤに伝えたい！

その後何が起きたとしても、後悔だけはしないために！

〈SIDE：キリヤ〉

あの戦いから、一週間が過ぎた。…意識が戻つたのが六日前、狂つ
ていた僕が一日なにをしていたのかは、正直言つて知りたくない。

気が付いた時には森の中にいた。愛用していた両手剣はないし、今
の『オレ』がまともな保証はどこにもない。

これで何もなく戻ることはできない。

…どうやら、今の自分の心は、二つある。…というか、落としたガ
ラス玉みたいに二つに割れた、というのが多分正しい。

本能に忠実で暴力的な『オレ』と、今までとほぼ同じ性格の僕だ。…
まあ、今は僕の方が表に出ているため分析出来ている。

ただ、『オレ』が出てきたらどうなるのかちよつとわかんない。発狂
して動くもの全て殲滅しかねないのが怖い。

しかも、数日前から、誰かに尾行されている気がする。

…話しかけずついてきてるから、おそらくは犯罪^{オレンジ}プレイヤーか？

…手加減できる自信がない。暗黒剣のバフ付きなら素手でも殺害
できることを知ってしまったからだ。

…強化倍率がやばいとは思っていたが、数分ならフロアボスと真つ向勝負できてしまいかねない。

…いや。もうめんどくせえ、声をかけてみよう。指をさして警告を放つ。

「…おい。そこに隠れてるやつ、出てこい！」

出てこないならこっちは敵だと思って対処させてもらう!!」

《ハイディング隠蔽》が解除され、現れたカーソルは…グリーン一般だった。

「はーいーこんにちは、四日も尾けてたけどまったく反応してくれないから、気付いてないと思ってたよ〜」

現れたのは、紫色の装いをした女性プレイヤーだ。セクシーな服装とスタイルのいい肉体だが、子どものように純粹無垢な笑顔で可愛らしいという印象が強い。

高レベルの《ハイディング隠蔽》を使用していることから僕とそうレベルも違うはずだ。

…しかし、僕は彼女を一度も見た覚えがない。訝しげに名前を聞く。

「…誰だ、きみは？」

「…アタシ？アタシは、《ストレア》！よろしくね、キリヤ！」

「…おい！なんで僕の名前を知ってるんだ!?名乗ってないぞこっちは！」

ストレアはキョトンとこっちの目を見て、ストレージから一枚の紙を取り出した。

「なんか町で搜索願い出されてるよ？えつとねー、長めの黒髪で、額に傷があって、女の子みたいなカワイイ顔の男の子！」

紙をひったくり中身を確認する。KOBの名義で出されたそのの名前は、たしかに僕だった。

「…確かに、僕だな。でもかわいい顔は男にとって褒め言葉にならないぞ！中性的とは書いてたけど、かわいいはストレアさんの感想だろ!!」

「え〜？ぎゅってしたいくらいカワイイのに。」

そーいいながら彼女は僕を抱きしめてきた。…僕の顔が彼女の胸

に当たるように。

ストレアの体は、あつたかくていいにおいがした。たまらず彼女を引き?がす。

「つて、なにすんだ!ビックリした…。」

ストレアはニコツと笑うと僕に

「えへへ、元気出た?」

と質問する。…たしかに、少しだけ元気づけられた…気もする。…我ながら単純なやつだ。

「……………の、ノーコメント」

「うん、ちよつとでも元気になってよかった!とつてもつらそうな顔してた時より、そつちのほうがアタシは好き!」

「ああ、そういえば尾行されてたんだつたか。情報提供しにKOBの本部へいくんだろ?」

そう言うと、彼女は不思議そうな顔をする。

「え??いかないよ?アタシ、キリヤと話してみたかつたんだ。…悲しそう、だつたから。」

「はあ!?!あはは。へ、変なやつだな、ストレアさんつて!」

「えー!?!ひつどーい!」

ストレアとひとしきり笑いあうと、彼女は優しい笑みを浮かべる。「ねえ、キリヤの話を聞かせてよ。どんな人と会つて、どんな場所に行つて、どんな敵と戦つたのか」

…断る理由はなかつた。《暗黒剣》やシノンの《射撃》は隠して、今までの戦いの日々を語る。

フロアボスとの戦い、アルゴに教えてもらったこと…そして、シノンとの出会いを話そうとして、息が詰まつた。

「ど、どうしたの?」

「い、いや。大丈夫、続けるよ」

ストレアにシノンの話をする。…胸がズキズキ痛むような感じは、きつと心の傷がうずいているんだと思つた。

寂しくて、辛くて、悲しくて。…でもそれ以上に愛おしい。

シノンとデートをして、一緒にご飯を食べて、他愛ない話をするこ

と、なんでもないそれが一番尊いものだ。僕は思い知った。
気づけば、僕は泣きながら笑っていた。情緒がぐちゃぐちゃである。

「…シノンさんのこと、大好きなんだね。」

「…ああ。でも、この気持ちは、しまつとく。拒絶されたし、な…」
「ダメだよ、キリヤ。ちゃんと伝えなくちゃ、ダメ。」

その拒絶した時って、極限状態だったんじゃない？そんなの誰だつて怖いよ。

今まで触れ合ったシノンさんのこと、信じてほしいな」

今の僕は『オレ』という爆弾を抱えた状態だ。いつ着火するかわからないそれを無視できない。

でも。それでも、誰かを好きになっていいんだ。

「シノンに、会いたい。…好きだつて伝えたい。」

「よしきたーおねーさんに任せて！人探し得意だよアタシ!!」

張り切る彼女に救われるような気持ちだった。いじいじするのも
疲れた、ちよつとシノンに会いに行こう！

第十六話 愛する人と共に

〈SIDE：シノン〉

勢いで宿から出た私たちだったが、キリヤの居場所が分かっているわけではない。

「さてと、どっから探すかネー？シーちゃん、心当たりハ？」

「…ない、わけじゃないです。四十九層とか怪しいと思います」

アルゴさんは少し考え、ポンツと手を叩いた。

「……アア！シーちゃんと初めて会った場所カ！」

確かに、フロントランナー 攻略組から隠れるにはちょうどいいかもナ！」

…それもあるけれど、何故か彼ならそこで待っていてくれるんじゃないか、と思つてしまったのだ。

四十九層にやってきた私たちは、早速主街区内を探してみることにした。

そこそこの広さがあるため探すのは苦労しそうだが、先ずは行つてみたい場所がある。

…私は、空から落ちるといふ形でこの世界に迷い込み、キリヤに助けられた。

目が覚めた場所は、《赤羽亭》という宿の二階の三号室。…小さい数字になるほど豪華だが割高になるつて言つてたつて。

その部屋に泊まりたいと宿のNPCに話すと、既に埋まっていますと言われるが、予想通りだ。宿泊者の名前を聞く。

…そこにいる人の名前はキリヤだった。アルゴさんは、笑顔で「積もる話もあるんだロ？…オイラはここで待ってるヨ」

と言つて、私を誘導する。

「はい、行つてきますー！」

二階の三号室の前で深呼吸をする。…この世界ではあまり意味はなさそうだが、不思議と心は落ち着いていた。

ノックをして、部屋主の反応を待つ。

「……いいよ、入つてきても。」

その声が聞こえた時には、私はドアを開けて、中にいる少年と目が

合っていた。

「こんにちは、キリヤ」

「うん。…こんにちは、シノン。…色々話したいことがあるんだけど、いい?」

「…ええ、もちろん。私もね、言いたいことがあるから」

「…もう少し、時間が経ってから来るかなって思ってたけど。よくわかったな?」

「ほとんどカンだったけど。でも、待ってるんならここかなとは。」

私の言葉に、キリヤは目を丸くする。そしてちよつとだけ笑った。

「…んじや、今の僕はどう見える?シノンにはどんな風に見える?」

不思議な質問だ。なにか、変わっている?

「えつと。いつも通りのキリヤに見えるけど。…気配が少し薄い…かも?」

「あー、実はね。そのお、人格が増えました。」

…んんん?なんかすごいこと言われた気がする。

「ちよつと頑張つて切り替えてみるけど、すぐもどすけど、いつでも逃げられるようにしといて」

「き、危険物かなにか?無理しないでいいから!」

「だって自分でもどういう状況かわかんねえもん!こんな状態で日常生活送つたらいつか暴発しそうだし…」

「そもそもの原因を聞いてないわ。…やっぱりあの時…?」

「シノン、ごめん。もっと速く助けてたら、怖い思いさせずに済んだのに…」

…それはきつと違う。あの時の私は、ラフコフとの戦いで記憶が戻りかけていた。

あそこで思い出したのは当然だと思う。…多分あの事件が一番自身に結びついてしまった記憶だからだ。

私は、彼に自身の記憶について話す。どんな反応をされてもいいように覚悟を決めて。

〈SIDE:キリヤ〉

「私ね、記憶が戻った。」

シノンには、悲しそうにそういった。つまり、思い出したくない記憶があつたんだと悟る。

「…うん。聞いてもいいの?」

「いいわ。……人を、殺したことがあるの。もちろん、現実で。」

子どもの頃、銀行強盗にあつてね、強盗から奪った銃で強盗を射殺した。

周りの人間はみんな人殺しって私を見るたびに罵った。…PTSDになった子どもに誰も寄り添ってくれなかった。

カウンセラーは的外れな事ばかり言うし、トラウマのせいでメディアで銃を見るたびに吐いた。

……去年の十二月、PTSDの改善のために《メデイキュボイド》っていう医療用VRマシンの臨床試験に参加したの。

二週間のテストのはずだったんだけど、何故かSAOの中にダブってしまった:そこから記憶喪失になって、あなたに会った。」

:SAOに入る前に、その情報込みでいきなり会っていたら敬遠しかねないほどに、重い。

彼女に必要なだったのは人殺しという色眼鏡で見ない誰かだったのだろう。:しかし、そんな人間はいなかった。

これ、僕じゃダメかもしれない。人を殺すのはよくない:と思っているが大切な人を守るためなら、今の僕はたぶんためらいなく人を殺せる。

そんなろくでなしに説得できるとは思えなかった。

「シノンは、後悔してる?」

「…してない。強盗はお母さんを銃で撃とうとしてた。あの日に戻つたとしても、私はきつと銃で強盗を撃つわ。」

「……シノンは、優しいな。:『オレ』には、きつと無理だ」

「……キリヤ?」

…今一瞬出てきた?え、バーサーカー的存在かと思つてたらまさか非戦闘時はまともに話せるくらいの理性なのか『オレ』。

「…今出てたのもう一つの人格だった!!え、もつとやばいやつだと思つてたのに!」

シノンは苦笑いしている。

「自分への評価低くないかしら…。あと、また優しいって言われた。ちよつと前にアルゴさんにも言われたのよ。人殺しって言われるのも覚悟してたのに。」

「だってそりゃ、ねえ。辛くても自殺しないで、抱えようとしてるし。そもそもその動機が母親を守るためだぞ？非難してた連中で本当に全部状況分かって言ってるやついないんじゃないか？

聞くだけ無駄だよそれ。間違った情報ばら撒くとかないね！」

「怒るとこそこなんだ…？」

「一応情報屋やぞ。誤情報なんて撒いたらアルゴにめられるから！」

…それにさ、殺した本人にしかわからないよ。

殺しを仕事にしてるやつにとつてそれは日常だし、銃社会じゃない日本で育った一般人にとつては非日常だ。

同じ動機でも、内心が違うなんてザラだと思う。」

「…共感は、できない…？」

それはきつと本当に重要なことではないと、僕は思う。…まあできた方が理解はしやすいが。

「……………寄り添うことはできるよ。本当に孤独な人はいない…まあ繋がりや自分を絶つのもたまにいますけど。

…子どもがずぶ濡れで雨に打たれているとき、その子に傘をさしてあげる物好きだっています。

僕は、そんな物好きになりたい。…へん、かな…？」

シノンが少しだけ笑った。

「…変わり者ではあるかな。初めて会った時助けてくれたのは、そのせい？」

「いや？君と会ってからだ。骨子はあったはずだけど、それが形になつたのは、最近だよ」

「どうして助けてくれたの？」

「初めて会った時は興味と責任感、だったよ。記憶喪失の人間見捨てるほど合理的だったら今頃僕は死んでるね！」

…ラフコフの時は、君が大切な人だったから。…君が僕の心の中で

大きな存在になったから」

「そ、それって…」

シノン、顔を赤くする。それがたまらなく可愛くて。

「僕は、シノンが好き。シノン、迷惑だったら…」

シノンが遮るようにぎゅつと抱き着いてきた。彼女の熱が伝わってくる。

「好き。…私も大好き。…私、キリヤと一緒に生きたい。

普通の女の子じゃないけど、あなたと幸せになりたい…！」

その願いは誰もが持つ、当たり前前の夢だ。起きたことは覆ることはないが、未来なら良くすることはできると、僕は信じたい。

「もう、怖い思いはさせない。どんなことをしても、シノンを現実世界に帰してみせる。」

あと、これあげる。」

リズベツト作の指輪をシノンに渡すと、彼女はわたわたする。

「え、ええ!?これ、って…！」

「…………結婚しよう、シノン。」

「…うん！」

僕らの影が重なり、長い時間を過ごした。

八月二十三日の夜…僕とシノンは、夫婦になった。

深夜、疲れて寝た僕は、変な夢を見ることになった。

気がつくとき、僕はなんか細部がぼやけている実家のリビングで、椅子に座ってゆっくりしていた。

「…って、実家の夢…ぼやけてるのは…しょうがないか」

なんせもう一年以上帰っていない。郷愁を感じていると、二階から物音がした。

…誰かいる。普通の夢なら兄や妹が出てくるだろうが、悪夢だったら二階で一層のコボルド王がディアベル辺りを食ってるんじゃないかな。ろうかと不安になった。

昔は突拍子もない変な夢をよく見たが、最近見てないな。

一番怖かったのはじじいが死んだ夜に見た、刀持った鬼との鬼ごっこだ。あれ絶対じじいの怨霊だって！

二階のドアをガチャガチャするが、鍵がかかっているような感覚がする。

「和人の部屋、違う。…直葉の部屋、ここも違うか…。…。僕の部屋、か？」

…自分の部屋から気配がする。鍵はかかっている、入っても大丈夫か…？

「――入ってこいよ」

僕の声だ。つまり、ここにいるのは…!!

ドアをあけ、そいつと対峙する。僕と同じ顔の人間だが、こいつは双子の兄ではない。

「よう、『僕』。ちよつと話をしようぜ」

そう言つて、『オレ』は笑つた。

「あのさあ、なに話せばいいんだよ！お前マジで何なんだ!!」

「お前なんだよ『僕』。お前は心が壊れた、ここまではわかる？」

「ラフコフ殲滅の時だろ？」

「違うぞ、新年から犯罪ギルドオレンジなんぞ狩りに行ったからだバーーカッ!!

あれ結構心にダメージきてたぞ！『僕』がにぶちんなだけで、決壊すんのが遅いくらいだ!!」

…まじ？え、わりと追い詰められてんじゃん。

「…続けるぞ。殺されかけていたシノンを助けた時点で、心はいつ崩壊してもおかしくなかった。

…：…追い打ちの拒絶がトドメだったんだ。壊れた心をなんとか取り繕つてたのが、あれでおかしくなった。

まー、あつちもあつちで大変なことになってたらしいが。一日、記憶がないだろ？」

僕は頷く。こいつには、多分その記憶がある。

「とりあえず、攻略組に見つかりたくないから《アルゲード》に転移した。

んで、すぐに下への迷宮区に潜つたんだ。自分の心を修復しながらだ。

一番安定したのが心を二つに分けてしまうことだった。それ以外？…察してくれ。

『僕』の方は休眠状態だったから代わりにオレが動いてた。…問題は起きなかった。」

…無茶苦茶疲れた顔してる。

「うーん、とりあえず苦労したのはわかった。で、望みはなんだ。」

【オレは、誰かと一緒に生きたい。自分だけの世界は寂しい。ここは、だーれも来ないからな！たまにでいいから切り替えてくれ】

「あー、うん、まあー、考えとく。」

部屋のぼやけが強くなった。夜明けが近いんだろう。

【じゃ、またな。】

「またな、『オレ』。」

目が覚めると、僕はシノンと目が合った。…どうやら寝顔を観察していたらしい彼女は笑顔であいさつした。

「おはよ、キリヤ。いい寝顔だったわ。さーて、今日はどうしようかしら。」

「とりあえずKOBの本部で搜索届取り消して、キリトたちに結婚報告でもしよう。…その後はゆっくりしようよ」

「そうね、いいんじゃない？…アスナとかビックリするよね。」

朝食を食べてから、KOB本部で搜索届を取り消してもらって、キリトたちに結婚したことを告げると、こんな反応が帰ってきた。

「え、結婚ってあれだろ？ストレージ共有するアレ。…ストレージといえば、キリヤ。両手剣アジトに忘れてたから回収しといたぜ。ほら、返すよ。」

「シノのん結婚おめでとー！お祝いに今度ご飯ご馳走するよ！

……………。私も頑張ろう…!!」

「え、ええええ!?キリヤ、結婚したの!?…な、なんか納得しづらい…。…けどおめでとー、二人とも。」

上からキリト、アスナ、ミトである。…あと武器を回収しといてくれてありがとうキリト。

「…あれ、三人がつるんでるとこなんて初めて見たぞ。どういう集ま

り?」

「俺は荷物持ち。どっちかというオマケだ。」

「え、なんとなく一緒に町をぶらついてるんだと思ってた。だいたいの、買い物した荷物つてストレージに入れとくものじゃない?」

「確かに二人とも私の知り合いで、接点ないもんね。」

こうして友達や大切な人と一緒にいるということが、僕にとってどれほどの救いだったんだろう。

この日々を守るためならば、僕も、『オレ』も命をかけて戦える。…一緒に、現実世界に帰るんだ。

十七話 Sの記憶

〈SIDE：ストレア〉

アタシはストレア。いま、アタシはキリヤと一緒に四十九層にある宿屋へ向かっていた。

彼にとつての思い出の場所らしいそこは、赤い風見鶏がカラカラと風に吹かれている。

「ここが、シノンと会った場所？」

「ああ、まー落ちてきたとこを助けたから正確に言うとは違うけど…」

「思い出があるんだねえ。…アタシは無茶してたのか記憶がほとんどないけど」

そう言うとなんだか困った顔をされてしまった。

「……………なんで記憶喪失の人間とこんなに会うんだ？」

僕の幸運腐^{ラック}つてんのか？それとも誰かがなんか企んでんのか…？」

「うーん。でもね、記憶がある時もキリヤを探してた気がする。…なんとなくだけどね」

本当にキリヤと出会うちよつと前だ、はつきりした記憶があるのは。

それよりも昔のことはまったく思い出せない。…でも、分かっていることもある。

彼の悲しみを癒したいという、どこからか湧いてきたこの気持ちは？ではなさそう。

でもアタシがぎゅつてするより好きな人とイチヤイチヤするほうがキリヤには良さそうだ。

「そーいうわけで、ごゆっくりどうぞー♪ アタシはどっかで暇つぶしするから、なんか問題起きたらメッセで呼んでねー！」

「わかった、ストレアさん。…ありがとう！」

キリヤが宿に入るのを見届け、アタシはごはんを食べに行つた。

サンドイッチに舌鼓を打って、宿屋に戻ると二人の女の子が入っていくのが見えたので、隠蔽^{ハイドینگ}で隠れながら観察する。

黒髪の女の子はすぐに二階へ行ってしまうが、フードの女の子はそ

の場に留まった。

(…? こつち見てる…?! いやいや、そんなまつさかー…)

「オイ、隠れているのは分かっている。とつとと出てこい!」

「……………つて、なんでえ!? まだ七割以上隠蔽率残ってたのに!!」

アタシがそう叫ぶと、女の子はニシシと笑った。

「オレっちの看破リベールを甘く見てたようだが、その程度じゃ《情報屋》を出し抜くことはできないぜ?…で、アンタ誰ダ?」

「うう、悔しいー! アタシはストレア、あなたはだーれ?」

「…アルゴダ。アンタなんでここで隠蔽ハイディングなんてしてタ。PKだと思われても仕方がないダロ!」

「…人間観察が趣味なんだ、って言っても信じないよね?」

アタシ、キリヤの友達なんだ。悩んでたから相談にのつてたの。」

アルゴを説得しようとする、彼女は笑顔で

「…いや、大丈夫だよ。アンタ犯罪プレイヤーっぽい目してねーモン。

だから、ストレア。ちよつと話をしようぜ。…夜も長いことだし、ナ?」

と言った。

…彼女と夜通し話した結果? ひどい目にあつたよ、情報屋つてこわいね。

〈SIDE:キリヤ〉

シノンと夫婦になって数日後、僕は最前線の迷宮区をさまよつていた。

一週間森に潜伏して、シノンとイチヤイチャして迷宮区にしばらく行つてなかつたので、勘を取り戻すためだ。

目の前にMOBが湧いてくると、僕は『オレ』に切り替えた。

『オレ』は愛剣を構え、敵の攻撃を《アバランシュ》で無理矢理失敗させた。

「よっしゃあ死ねえ!!」

一時的行動不能スして隙を晒した相手に《サイクロン》をぶち込むと、敵は真つ二つになった。

…予想通りあんまり苦戦はしないな。さつきから、問題なく戦えている。

今回『オレ』はどの程度戦えるのかを知るための迷宮区攻略ダンジョンアタックだったが、こうあっさり攻略できて…それはそれで困る。

「…これじゃ、どのくらいであの時みたい暴走しかねないのかわかんないな…。」

いや、よく考えたら病み上がりみたいなものだし、無茶しない方がいいのかな…。」

よし、今回はこのくらいで帰ろう。僕だって過信したら思わぬ罠トラップに引つかかるかもしれない。

帰り道、ストレアと遭遇した。彼女はどう見ても疲れていた。

「…大丈夫か？昔見た睡眠不足の母さんみてえな顔してるけど…」

「エ、アタシがお母さんみたいって？もう、キリヤったら。寂しいなら甘えてもいいよ〜？」

「だれもそんなことは言っていないんだが??ちよつと頭バグってないか？」

睡眠時間ってけっこう大切だぞ、夜更かしてパフォーマンズ下がるぞー！」

睡眠不足でたまに頓珍漢な事をする母と兄を見ている僕が言うんだから多分間違っていないと思う。

「あー、うん。…わりと限界かも。アタシも帰ろっかな。」

「…一体なにしてたんだ?…まさか、僕と別れた後一睡もしてないのか?!?」

ストレアはため息をつく。

「あの後ね、アルゴって娘こに情報すっぱ抜かれて…。容赦ないよねあの人の人。」

スキル構成全部知られたよ…。」

「あー…。ドンマイ！アルゴはそういうことやるよ、当然のようにやる。」

ぶつちやけ客とか情報提供するとき以外は逃げた方がいいよ。五分話したら百コル分取られるから。」

「…夜通し話したから五十万は軽いかなあ…。でもね。アルゴはアタシのこと知らなかったよ。」

アタシって、多分攻略組ぐらいの実力はあるのに、《ストレア》なんて名前は聞いたことないって。

「…アタシって何なんだろう？今までなにをして、どこにいたんだろうって考えてたら、眠れなくなってる。」

こんな能天気の擬人化みたいな人間でも悩むんだなあと一瞬思ったが、そうではないと気付く。

きつと、この世界に閉じ込められたプレイヤーのほとんどが大なり小なり悩んでいるんだ。…あの無法者の犯罪者たちですら。

自分のなりたいたいものと現実とのギャップ、命懸けの戦いで擦り切れていく精神、もしかしたら他人への愛憎なんかで、苦悩しているんだ。

…だからこそ、相談してほしいと思うのは、きつと間違ってる。共感できずとも、一緒に悩むことで救われる人もきつといるはずだから。

「んじゃあ、明日一緒にご飯行こうぜ、シノンとか誘ってさ。」

シノンもちよつと前まで記憶がなかったから相談してみるといいんじゃないか？」

「え、ご飯おごってくれるの!? やったー!」

「だから、今日はゆつくり寝なさい。寝不足で夢うつつにご飯食べるなんてもつたないぞ?」

「……………わかった。ふああ、それじゃあまたね、キリヤ」

「……………うん。また明日ね、ストレア」

そそくさと《赤羽亭》に帰る。…なんとなく恥ずかしいな、呼び捨てに変えるのって。

でも、悪くない気分だ。

八月二十六日、僕はシノンとストレアを連れてお気に入りのレストランへ向かった。

「ほんつとうにありがとうストレアさん！キリヤのこと慰めてくれたって聞いて、一度お礼を言いたかったのよ。」

何か変なこと言われなかった？たまたま天然ボケですごいこと言う

から…」

「変なことは言われてないよ？キリヤの思い出を聞いて、大切なことを思い出させただけだし。」

思い出しながら話すと、心の整理がしやすいから。」

シノンとストレアはわりと仲良くなったようだ。

「し、シノンさん？天然ボケはひどくないっすか。僕のボケは計算されたボケだよ!？」

「その発言自体が天然ボケなのよね…。あなたは難しい事で悩むよりストレートに考えた方がいいんじゃないかしら」

「…。ひ、否定したいけどなんか納得しそうになった！え、考えるより行動したほうがいい!？」

「いやいやそうじゃなくて、計算してやるボケは向いてないと思う。自然体でいた方がいいわ。」

そんなぐだぐだ話しているうちに、レストラン《大熊の巣》につく。ここはハチミツを使ったパンケーキが一番美味しいので、是非食べてほしいな。

「というわけで、ここがレストラン《大熊の巣》だ。鮭っぽい魚のグリルとかハチミツをふんだんに使ったパンケーキがおすすめ。」

中に入ると人の三倍でかい熊の？製が客を出迎える。

NPC店主によると昔死闘の末討伐したとか言われるそれは、初見の客を帰らせるには充分過ぎる…。

「……………なにこれ。」

「《大熊の巣》の店主がぶちのめした化け物熊。店主が詳しい説明してくれるぞ」

「…………熊肉のメニューとかあったり？ちよつと興味でてきた!」

僕は魚を使ったサンドイッチ、シノンはアユみたいな感じの塩焼き、ストレアは熊肉のステーキを頼んだ。

ストレアに、それかなりのポリウムだから気を付けてと忠告するも笑ってこれにすると言ったのもう止めまい…。

「あのねー、シノンはどうやって記憶を取り戻したの?」

いきなりストレアはぶっこむ。…まーそのためにおこったのもあ

るけど。

「……………これ言っているやつ?というかもしかしてストレアさん、記憶が…」

「ないよ。だから、何か記憶を取り戻すためのヒントが欲しいんだ。…もちろん言いたくないんじゃないけど」

シノンは少し悩んだが、やがて笑みを浮かべた。

「……………いいわよ。私の記憶が戻ったのは、トラウマが刺激されて恐怖の感情に襲われたから。」

ラフィン・コフィンとの戦いは、かなり似通っていた狂気で満ちていたわ。

…だから、自分にとって比率の大きな記憶に関わるモノを探せばいいんじゃないかな」

「……………なるほど、比率の大きい記憶かあ…。ねえ、キリヤ。依頼つてどのくらいお金がかかるの?」

「じよ、情報屋の仕事か、それ? ……。たぶん、僕はお金を取れないかな。」

友達が困っているのを見過ごすことができないバカらしいから。」

ストレアはポカンとした後、不安そうに言う。

「…いいの?わりと無茶言っているとと思うけど。」

「いいんだよ、納得できたんだから。…一緒に探そう、ストレア」

「…私も手伝っていいかしら。なんか見捨てたらかなり後悔しそうでしね。」

「……………うう、ああああん!!あ、ありがとう、二人とも…!」

ストレアは泣いた。そりゃあワンワン泣いた。でも、泣き止まない彼女を止めるなんてできない。

今の彼女は、とても人間らしかったから。

僕とシノンは彼女の記憶を探すために、ストレアとパーティーを組んで度々色んな所へ行った。

しかし、彼女の記憶が戻ったのは、全てが終わる間際になることを、まだこの時の僕は知らない。

第十八話 虚ろな世界で生きる少女

九月の初め、僕はシノンと一緒に最前線を攻略していた。ストレアの記憶探しも大事だけど、攻略もしとかないとな。

シノンの投げナイフが敵の弱点に刺さり、混乱している所を『オレ』がソードスキルで追撃して息の根を止めた。

シノンとは何ヶ月も一緒にいたからか、かなりコンビネーションも洗練されている。

：もしかしたら、今のインクラッドで五本の指に入る程度には名コンビかもしれないな！

「それじゃ、そろそろ帰ろうぜシノン。『オレ』腹減ったー」

「ハイハイ、わかったわよ。今日のご飯、楽しみにしてね？」

最初は『オレ』におっかなびっくり接していたシノンだったけど、今では普通に接してくれている。

彼女に怖くないのかと聞いてみたら、

「：前は少し怖かったけど、今はそうでもない。

だってあれもキリヤだってわかったし。というかワンちゃんみたいに甘えてくるからあれも有り：：かも」

とのこと。：うん、なんとなくわかってたけどさ、『オレ』甘えん坊扱いなあ：。

迷宮区を歩いていると、何か違和感があった。：なんとなくだが、こういう勘をないがしろにすると大体ひどい目に遭う。

「：シノン。なにか変じゃないか：？嫌な予感がするんだ、早く出よう：ー！」

「え：：何も感じないけど。でも、なにか起きそうなら準備しといたほうがいいと思う。

ポーチに回復結晶入れておいたら？：最悪分断されることも考えなくちゃ」

準備をしたその瞬間だった。『オレ』の身体はいきなり森の中に転移していたのだ。

〈SIDE：??〉

くホロウエリア・セルベンデイスの樹海にてく

走る、走る、走る。なんでわたしがこんな目に遭わなくちゃいけないの。

安全圏なんて存在しない、高レベルMOBの巣くう地獄、モンスターにばかり関心を向けてこちらを助けもしない奇妙なプレイヤーたち。

ここは全部、狂ってる…!

嗚呼、でも。もしかしたら、わたしも狂っているのかもしれない。なにせこの世界に来て初めにやったことが自分殺しだ。…正気でいられているのかすら、今はわからない。

目の前に、リポップした敵らしき影が見える。わたしは自身の得物である短剣《ソード・ブレイカー》を構えた。

「っ!!どけえええ!!」

それは人間と同じ姿をしていたが、それでもなお躊躇しない。

どちらにせよ排除して最短距離を突っ切らなければアレに追いつかれてしまうからだ。

相手の両手剣とわたしの《ソード・ブレイカー》が火花をおこす。三度ほどの剣戟を交わし、鏝迫り合いになると、そいつは困惑した顔でこちらを見ている。

今までの連中とは違い、その目には生きようと足掻く、強い意志を感じた。

「…あんた、だれ?」

「…『オレ』なんかした!!いきなり斬りかかってきやがって!!」

その質問に対して答えようとするが、恐ろしい唸り声と、振り下ろされた大鎌に遮られる。

ああ、追いつかれちゃった…!

そいつは、言語化するなら骨でできたムカデの怪物だ。

名前は《ホロウ・デッドニング・リーパー》というそれは、先ほどからわたしを追って来ている。

「うっわ、きもちわるう!!なんじゃありや、ムカデか!」

「…なんとか撒いたのに…!戦うしかないか…!」

「おい、きみはなんでこんなキモイのに追われてるんだ!!」

「……あんたたちみたいなららず者に話すことなんてない」

「んん？いや『オレ』はならず者じゃ…… バックしろ！」

そう言うとは彼は大鎌を両手剣ではじき返す。…助けて、くれた？

呆然とするわたしに向かつて彼は叫ぶ。

「きみ、それなりに戦えるな!?!ちよつとこいつ片付けるぞ、死にたくないなら『オレ』と協力してほしい!!」

『GYAAAAA!!』

デッドニング・リーパーは怒りの咆哮を上げるが、彼は気にしてない。

「…どうして、わたしをかばったの？後ろから斬りかかるかもよ。」

「今やったらたぶんこいつにやられるだけだぞ！それに、そういうこと言うやつが有言実行したとこなんか見たことないしな!!」

…変なやつだ。…けれど、悪い奴でもなさそうだ。

「……分かった。今は、こいつを止めるのに協力してあげる」

デッドニング・リーパーは、二人がかりでギリギリ戦いに持っていきけるほどの強敵だった。

彼の剣が大鎌の振り下ろしをガッチリガードし、ヘイトから外れたわたしがサイドから攻撃する。

突進系ソードスキルの《ラピッド・バイト》が敵に命中し、HPバーを少量削る。

…どうやら、あまり硬い敵ではないようだ。

だけど、彼が壁役^{タンク}をしてくれたからこそわたしも安心して攻撃できる。

デッドニング・リーパーが爆散したのは、戦闘開始から三十分後、とどめは彼が放った《アバランシュ》だった。

静かになった森の中で、彼は質問する。

「……で、だ。戦うのか？『オレ』としては共闘した人と戦うのは嫌だ。」

「あんた、あいつらの仲間じゃないの？」

「心当たりはないな。……どこなんだ？今までいたところのちかくじゃないだろ」

「……わたしのカーソルの色、わかってるよね？」

「…犯罪オレンジだな。理由は…聞かない方がいいよな」

…一応、彼は命の恩人ではあるので忠告する。

「いいわ、教えてあげる。…人殺レッドしよ。…つまり、殺人レッドってわけ。

それじゃあ、さようなら。」

逃げるように去ろうとすると、彼はわたしを引き留める。

「待て待て待て！質問に答えろ、ここどこお!？」

「…わたしも、よくは知らない。ちよつと前に迷い込んでから、ずっとこの森の中をさまよってたから。」

圏内は、探したけどわたしには見つけられなかった」

『ホロウ・エリアアクセス制限が解除されました。これより、テストプレイヤーは適性テストの準備を行ってください。』

「……ん?」

これまで聞いたことがない音声がかえた。…適性テスト?

「…って、なんかあんた手が光ってるわよ!?!なにそれ!!」

彼の手に奇妙な紋章のようなものが輝いている。

「…なんだこれ。いつの間に…?」

どうやら本人すら知らなかったらしい。しかし、この模様に見覚えがある。

「…わたし、この辺りでその紋章がきざまれた場所を見た。」

「きみ、良かったら『オレ』をそこに連れて行ってくれないか。」

「…べつにいいけど、殺人レッドの言うことを信用するの?」

彼はニヤリと笑う。

「だつてきみ、《笑ラフィン・コフィンう棺桶》とかと違って、目が濁ってないもん。」

…一緒に死闘を潜り抜けたんだ、僕は信用するよ。…キリヤだ。」

「…フィリア。…あんたつてすごいお人好しか、馬鹿ね。…ついてきて。」

しばらく進むと、キリヤが質問してきた。

「フィリア、ここは一体なんなんだ?」

「ここは、《ホロウ・エリア》と呼ばれているらしいわ。…あんた、ここに来た時のことは?」

「…迷宮区を探索中に、回廊結晶のコリドーに似た光に包まれてここに飛ばされてきたかんじ」

「わたしとほとんど同じだけど、その手に浮かんでるやつは、こっちはない。」

「ここでそんな模様があるプレイヤーは見てないわ。」

「…フィリア以外にも迷子になったやつがいるのか？」

「…何度か出くわしたけれど、こっちに全く反応しないか、生返事しかない。」

モンスターと遭遇したら活弁になるけれど、戦闘が終了したらボケツと突っ立ってるだけ。

「…拳句の果てにはモンスターにやられたやつが明日には普通に歩いてたことだってある。」

キリヤは頭を抱える。

「…NPCと大して変わらないじゃないか、助けは期待しない方がいいな。」

「…さつきシステムアナウンスが言ってた、適性テストとやら。何が来ると思う？」

「…わからない。もしかしたら、あなたの紋章が関係してるのかも。」

「…あんだ、ここに来る前になんか変なことしたんじゃない…？」

『規定の時間に達しました。これより、適性テストを開始します』

システムアナウンスが終了すると、森がざわつき始めた。

「…来たな。……《見極めの試練》、南西の出口を目指して進み、

行く手を遮る《マッスルブルホーン》を倒して出口に向かえってさ。

「…いこう、フィリア！」

「そうね、どっちみちここを抜けないと目的地にはたどり着けないわ。」

殺気立つ森の中にはオーク系のモンスターが多かったが、キリヤは一撃で粉砕していった。

途中で待ち構えていた《マッスルブルホーン》はトールラス系特有のスキル《ナビング》も使ってきたが、

デッドニング・リーパーに比べ貧弱だったため、ほぼ被害なしで倒

された。

『クリアを確認しました。承認フェイズを終了します』

「……………ん？これで終わり？あっけなくクリアできたけど、なんかクリア報酬とかないのか…？」

「たぶんね。…………結局何のテストをやらされてたのかしら…？」

彼は少し考えると、幾つかの仮説を立てる。

一つは、アインクラッドの没アイテムや没敵が配置されたバックヤード的なエリアではないかという説。

もう一つは、アナウンスが言うように実験を行うために造られたエリアだという説だ。

「なんか、くやしいわね。来て数時間のあんたがホイホイ謎を解くなんて…。」

これじゃトレジャーハンターの名がすたるわ…。」

「トレジャーハンター？あー、昔ナイトを自称してたやつがいたっけなー」

自称ナイトはともかく、わたしも確かに自称ではある。

「まあ、そんな感じ。モンスターと戦ったりクエストクリアするより、ダンジョンでお宝を探すのが好きなんだ。

だいたいは役に立つものが見つかるし、趣味と実益が一致してるから。」

「基本的にはソロなんだろう？ちゃんと探索スキルとか伸ばしてるよな？」

「自分の命を守れる程度には。…そろそろつくわ、たしかあのあたりで見た」

指をさした方向には、彼の手に着いたそれと同じ紋様のオブジェクトが存在している。

「…本当に同じだ。なんとなく転移門に似てる気がするな。」

「触ったら何処かにワープするんじゃないかな。…たぶん、あそこ」

上空に浮かぶ球体を見る。なんとなくだが、この転移門のようなものは、

空に浮かぶそれへアクセスできるんじゃないかと思っている。

「よし、行こうフィリア」「…わかった」

オブジェクトに触った瞬間、わたしたちは青い空間に転移していた。

周りにはよくわからないウィンドウが無数に浮いている。

「ビンゴ！わたしの予想大当たり！」

「…ここが球体の中？敵はいなさそうだけど…まさか、圈内か!？」

「ええ!?じゃ、じゃあ犯罪オレシジのわたしにガーディアンが襲って…ここない?！」

ふうつと息を吐く。どうやら普通の圈内とはルールが違うみたいだ。

「じゃあ、襲撃のことは二重の意味で考えなくても良さそうだ。とりあえず調べてみようぜ。」

わたしたちが調べた結果、ここは《管理区》と呼ばれていること、各地にあのオブジェクト、《転移石》が存在しキリヤが触れることで有効化して管理区へ転移できること、

そして、こことアインクラッドは自由に行き来できることがわかった。

「それじゃ、ここでお別れだね。…結構楽しかったよ」

「おう、またなーフィリア！次も一緒に冒険しようぜ！」

「……………え、また来るの…?！」

「とーぜん！《ホロウ・エリア》は謎だらけだ、ほんの少し滞在するだけで未知の敵がわんさか湧いてくるし、

迷宮区塔らしきものが見当たらないのも興味があるな！それに、ワクワクする!!」

彼の目は新しい玩具を見つけた子どものようにキラキラしていた。「ふふつ…わかるよ、その気持ち。もしここに来るんだったらメッセージを飛ばして。」

ここを集合場所にしようよ。一度開通したら通るのは誰でもできるみたいだから。」

「おー、便利。じゃあ、行くときは連絡するよ、またね！」

そういうと、キリヤはアインクラッドへ戻っていった。

「……またね、か。」

わたしは転移結晶をポーチから取り出し、かつてのホームがあった階層へ転移しようとするが、相変わらずうんともすんともいわなかった。

「……………わたしは、なんなんだろう…?」

…その問いに答えてくれる人は、誰もいなかった。

〈SIDE：キリヤ〉　〈四十九層・赤羽亭三号室〉

宿屋に帰ってきた僕は、思いつきり泣いているシノンと、笑みを浮かべているがキレそうな顔のアルゴと、かわいそうなものを見る目を向けるキリトに迎えられた。

……………しまった!!連絡を取るのをすっかり忘れてたあ!!!

このままではアルゴに僕の情報がすべて抜かれるどころか《赤羽亭》から追い出されて野宿もあり得る…。

これはまずい、今僕がすべきことは三つ。

一つ目はシノンをどうにかして泣き止ませ、あわよくば笑顔にすることだ。

これが達成されれば二つ目の難易度は下がるはず…だといいなあ…。

二つ目はアルゴの怒りを収めることだ。

これが一番難易度が高い。彼女は僕の師だ、口論になれば間違いなく敗北する。死ぬ気で説得をしなければならぬ。

三つめはキリトを味方につけることだ。

《ホロウ・エリア》の話をするれば間違いなく成功するので、多分一番簡単だ。

「ひぐつ…きりや、生きててよかった…。」

ぼろぼろと子どものように泣くシノン。

「……………さあ、言ってみろヨ、キリヤ。言い訳しだいじゃ、生き残れるかもだぜ?」

ボス戦とほぼ同じくらいのプレッシャーを放つアルゴ。

「いやー、大変だなキリヤ。俺だっただけまず土下座するよ、本気で。ア

ルゴがここまでキレたの初めて見たぜ」

クツソのんきな事をぬかすキリト。：対岸の火事だと思つて油断してゐるな？すぐ引きずり込んでやるから覚悟しろ。

：さあ、腕の見せ所だ。

惚れた女の子を笑わせて、格上の師に勝ち、馬鹿野郎キリトをこっちの味方にする。

僕は、孤独な戦いを始めたのだ。：絶対に勝つ！！

第十九話 かいぎのじかん

まず、最初にシノンを落ち着かせなければならぬ。

彼女を後回しにすればアルゴの怒りのボルテージはその分上がるからだ。

それに、シノンを心配させて泣かせたことで、浮かれていた自分の頭は冷えた。

《ホロウ・エリア》は確かに好奇心をくすぐるが、そのまま戻ってこないなんてなった場合、

必ず戻ってくるという約束を守れないことに気づいたのだ。

「シノン、僕がきみを連れて行かないときは前まで結構あつたと思うんだけど、

今回はどうしたの？」

「…いきなり転移して目の前から消えたことはないでしょ…。」

しかも転移結晶を使ったわけでもないのに。

それに、まったく連絡もつかないのに、安心なんてできない！」

…たしかにそんな非常識なことはしたことがないなあ…。

「連絡がつかないって、ダンジョンに飛んでたらメッセージって届かないはずだよな？」

なんかダンジョンで使えるのあつたかな？」

その疑問にシノンは予想していないアイテム名を口にする。

「……《天使の指輪》。」

あれも効果がなかった。」

……あー、そういう彼女が来たばかりのころ、アレを取りに行ったな。

《天使の指輪》とは、《天使の試練》というクエストの報酬だ。

クソガキみたいな性格の女天使のワガママじみた依頼をクリアすることですぐに入るが、

プレイヤー同士が協力するのとわりとあっけなく攻略できるため、連携の練習には持って来いなのだ。

(ただし、足をわざと引っ張るやつがいたり、そもそもソロ攻略だとク

リアができなくなる程度の難易度設定がされている)

そのクリア報酬である《リング・オブ・エンジェルズウィスパ天使の指輪》だが、

『交換し合った者同士に永遠の絆を与える』というなんか恥ずかしい説明文と、特殊効果でわりと人気の高いアイテムだ。

…その効果とは、『月に一度、声を送り合える』というもの。

その時の僕は、シノンが万が一の場合助けが必要な時に使うようにと、子供携帯代わりに取りに行ったのだ。

攻略組の僕は、ダンジョンや迷宮区にいてメッセージが届かない場合があるから。

シノンをぎゅつと抱きしめる。…抵抗はないようだ。

「……ごめんな。変なところに迷い込んで、浮かれポンチになってたみたいだ。

きみを悲しませないようにって思ってたのに、おーばかやろうだなあ、僕は。」

彼女も、僕を抱きしめ返してちよつと涙声でつぶやく。

「……ばーか、キリヤのばーか。…もう、待っているだけは嫌、一緒にいたい。」

…お願い、そばにいさせて。」

そんな風にいじける彼女が愛おしくて、キスをする。

「んっ、…。もう、二人つきりじゃないのに…。」

その言葉でゆだっていたのが少し落ち着き、思わずキリト達の方角を向く。

アルゴはさつきのいちやつきで毒気が抜かれたのか怒りが少し収まったようで、ちよつと笑っていた。

一方のキリトは相手がいない寂しさからか死んだ目でこつちを見ていた。

こいつ、アスナさんとかに好意を持たれてるのにそんな反応するかと聞いていたが、

どうせ気づいてないんだろうなあ、鈍感だもんなあ…。

「けっ…。幸せそうじゃ何よりだなキリヤ…。万年ソロプレイヤーの俺に対するいやがらせか?」

うーん、わかりやすいくらいすねてる。

「アーちゃんに告るとかどうヨキー坊。ミラクルが起きるかもしれないぜ?」

「アスナ?……。ないねー!あいつ俺のこと嫌いだろ、だってさぼり癖のあるピーターだぞ、俺は」

自信満々にそう抜かすキリトに、三人分の呆れた視線が刺さる。

このバカにアスナさんの恋心が届く日は来るんだろうか。

「……デ?…いつたいどこに迷い込んだんだオマエ。」

ぶつちやけあの指輪月一の制限付きだからこそダンジョンだろうが迷宮区だろうがつながるゾ。」

…よし、今なら《ホロウ・エリア》のことを言ってもキレられないな、ヨシ!

「実は…」

僕は皆に、ホロウ・エリアで体験したことを全て話す。

デッドニング・リーパーとの戦い、フィリアという少女のこと、そして見極めの試練。

話を聞いた三人の反応は様々だった。

「……女の子、ね……?ふー……」

ちよつと複雑な表情でこちらを見るシノン。

…うわきはしてないよ、と必死に首を振る。

「別に浮気を疑ってるんじゃないよ、と必死に首を振る。どうしてそんな危険な場所に留まっているのか、気になっただけ。」

あと、そのフィリアって子、オレシ犯罪だけどヤバそうではないのね?」

「うん、本人は人殺しだって言ってたけど、ラフコフみたいな破滅主義者とかロザリアみたいな現実が見えない連中とは違ってまともに見えた。」

…もしあれが擬態ならガチでヤバイやつランキング一位に躍り出るぜ…」

「……暫定一位は?」

「ラフコフのリーダー《P O H》だな。」「……あー。」「」

「ま、ラフコフは壊滅したからどーでもいいな!

それよりも、《ホロウ・エリア》だよ！

いいなあ、ワクワクするな、未踏破エリアだろ!?

レアアイテムとかだーれも手を付けてないダンジョンがいっぱいあるんだろうな!!」

…うん、予想通りのはしやぎようだ。

キリトはデスクゲーム初期はベータテストの情報でぶっちぎったが、実は手探りでトライ&エラーもかなり好きなのだ。

そうじゃなかったら必死こいてパソコンの自作とかしないと思う。

自作したやつよりも高性能なのは今の時代にありふれてるのに、デスクゲームが始まるあの日まではアレをアップデートして使ってた。

「また行けるとは思うけど、パーティーメンバーはどうだろうな…。

…今度実験しようぜキリト。」

「おう、楽しみだ！もし俺が行けるんなら一緒に冒険しよう！」

「ヨシ、とりあえず《ホロウ・エリア》を調査するんだロ？」

不特定多数のプレイヤー…つまり攻略組フロントランナーたちが入れるかどうかの問題だナ。

入れたんならKOBと聖竜連合の小競り合いが起きそうだし、入れんなら争奪戦が起きるゾ、キリヤノ。」

うわ…、ヒースクリフとリンドに睨まれてるのが容易に想像できるじゃんか、嫌だなー。

「い、嫌なモチ期だ…。…制限があるんなら、そもそも隠しとく方がよくない？」

レアアイテムをゲットしたとして、要らないならエギルさんここに横流しすればいい感じにしてくれると思う。」

「エギルの店をリサイクルショップみたいに言うなよ…。

…まあ、それが一番無難かもな。まわりまわって攻略組に強力な装備が回ってくるのは歓迎すべきだと思う。」

キリトの意見に、アルゴは頷く。

「とりあえずは、明日の実験結果次第ってことだ。ヨシ解散！

明日に備えて寝よう！」

キリトとアルゴが帰った後、ベッドで足をブラブラさせていたシノ

ンが

「ねえ、聞いてもいい？」

と言ってきた。

「どうしたの？もう十二時過ぎたから寝よう、明日は早めに起きなきゃいけないし。」

「…お金がいるの？攻略組に《ホロウ・エリア》に来てほしくなさそうだったから。」

武器とか防具とか更新するのは当分はいいかなって言ってたじゃない。

レベリングもそれなりにしてるし、なにか欲しいものでもあるの？」

げ、バレた。シノンにはできるだけ内緒にしといて驚かせる予定だったのに。

「…………。むっちゃ高い買い物なんだ。あとちよつとで届きそうだから、

《ホロウ・エリア》で頑張れば目標額いけそうなんだよね。」

「……。わかった、これ以上は追及しない。さびしいけど、いつかちゃんと話してくれるんなら、いい。」

なんか心が痛い。隠し事してるのはバレてんに追及されないのって申し訳ない気分になる…。

僕は、シノンと過ごすためのマイホームが欲しいのだ。

《赤羽亭》もいいところではあるんだけど、如何せん二人が住むとなると狭い。

あと借家じゃなくて家があった方がもつとイチャイチャできるよようになるし。

…。たしかにそれもまた本音だ。でも、『オレ』と話す夢を見たことも原因だろう。

あの夢を見て思い知った、家の内装がうる覚えになっていることに。

…怖かった。僕はもしかしたら、現実にもはや未練がないかもしれないと思ってしまった。

帰る場所があれば、この恐怖も消えてくれるかもという何とも情けない理由があるのだ。

そんな馬鹿なことを考えながらベッドに横になっていると、シノンの寝顔が見える。

彼女の寝顔を見てみると、ネガティブな思考が収まっていく。：僕って単純なやつだなあ…。

でも、僕に帰る気があるうがなかりうが、彼女を現実に帰さなくちゃ。

この世界でシノンに会えたのは、運命か偶然かはわからないけれど：僕は会えてよかったと思っっている。

ずつと一緒にいたいなら、この世界から出なくちゃ。

〈SIDE：アルゴ〉

あの会議の翌日、朝早くから転移門に集まったオイラたちは、早速実験を開始した。

結果、普通のプレイヤーは《ホロウ・エリア 管理区》に飛べず、転移できるのはキリヤのみ。

しかし、一人だけキリヤとパーティーを組むことで《管理区》に行くことができた。

：おそらくキリヤのみが行ける原因は手のひらの紋様のようだ。多分これがないと《ホロウ・エリア》に侵入することは不可能。

「とりあえずなんも知らんのがあそこに迷い込んでくたばることはなくなつたかな…。

でも《ホロウ・エリア》のリソース独占できちやうよねー…。隠すしかなくなつたじゃん。」

キリヤはそう言いながらも少し嬉しそうだ。

「ネー、シーちゃん。キリヤのヤツなんか顔ニツコリしてネ？なんか知ってる？」

「ええ、なにか欲しいものがあるみたいだけど、聞くのは辞めました。どうせ買った後報告しに来ると思うし、その時まで待ちます」

ウーン、ちよつとキリヤ脅して聞き出すか？いやでもナー…。

「よし、今回はフィリアと一緒に冒険しようと思うけど、ついていき

い人いる？」

キリヤの誘いに乗ったのは、シーちゃんだつた。

「……………行きたい。ちよつとフィリアさんと話がしたいし。」

キリヤは

「きつと仲良くなれるんじゃないかな。…勘だけど！」

と言いながらシーちゃんの手を取ると手早くパーティーに誘い、

《ホロウ・エリア》へ転移しタ。

…シーちゃんの顔が赤く見えたのは、きつと見間違いではないだろう。

嗚呼、青春してるネー…。

第二十話 聖域の探索

《管理区》に転移した僕たちは、モグモグと朝食中のフィリアと目が合う。

驚いたフィリアは口の中を詰まらせ、慌てながら飲み水で流し込む。

「くくくつ!! …き、来てくれたんだ。」

「…食べてからで大丈夫だよ。丁度僕らもご飯にしてから探索しようと思ってたし。」

…お互い自己紹介しなきゃいけないから。」

「えつと、わたしはフィリア。…キリヤの仲間なんだよね、よろしく。」

「…よろしく、シノンよ。…キリヤ、無茶はしてない?」

「あ、それは大丈夫。わたしの見てる限りじゃそんな素振りはないかったし。」

…キリヤとは出会って長いのか?」

「ええ、記憶喪失の私を助けてくれて、そこからは九ヶ月くらい一緒。」

…優しくして強くなって、でも目を離れたらすぐ迷子になって、しっかりと見えないとダメなひと。」

それでも、寄り添ってくれてくれるって言ってくれた。命が危ないとき、自分が壊れかけているのに助けてくれた。

キリヤと一緒になら、私はちゃんと前を向いて進んで行ける気がするんだ。」

「……………」

フィリアは沈黙している。なんか困ったような、でも少しうらやましそうな顔でシノンを見ている。

小声でこちらに質問してきた。顔が林檎のように真っ赤だ。

「……、恋人同士だったりするの?」

誤魔化すとひどい目にあいそうだ、正直に言おう。

「……………実はそうなんだ。最近手料理をこ馳走になったんだけど、これがむっちゃ美味くて。」

友達と一緒に修業したとか言ってたなー。」

「へー。…幸せそうで何より。…いい、いいもん！わたしの恋人はダンジョン内のお宝ちゃんだし…！」

「…まあ、その、なんだ。そのうちいい人見つかるさ。」

でも僕の双子の兄はやめてくれ、競争率高すぎてガチ勢にやられる。」

「余計なお世話ですー!!…で、これからどうするの？」

《ホロウ・エリア》冒険する？」

「そうだな。フィリア、どこか気になる所はある？」

フィリアは少し考えていたが、すぐ僕らに顔を向けた。

「あのね、キリヤと別れた後あの樹海の中にある教会で、宝箱を守っているゴーレム型ボスを見つけたの。」

一人で戦うのは厳しい感じだから、手伝ってほしい。」

「…ゴ、ゴーレム型かあ…。あいつら硬いよな。特に突き主体の細剣や短剣には厳しい敵だ。」

とりあえずちよつかい出してみて、ダメそうなら撤退して対策を考えよう。」

…で、なんてとこ？」

「えーっと、《二人が邂逅した教会》っていうんだって。」

「…ふふっ、ロマンチックなエリア名ね。なんだか騎士とお姫様のお話が始まりそう。」

シノンってファンタジー好きなのかな。ちよつと気になったので質問してみよう。」

「まあ待つてるのはどっかの誰かが造った人形だけだな。…そういう騎士の話とか好き？」

「結構好き。…でもテレビだと銃が出た時酷いことになるから、本の方がいい。」

「…今度本屋探してみようか」

管理区から出た僕たちは、何事もなく《二人が邂逅した教会》に辿り着いた。

途中でシノンが弓を引っ張り出したが、フィリアは興味が湧かなかっただけらしい。

まあ、後で説明すればいいか。

内部で待っていたのは《テンプル・スケルトン》というガイコツの騎士たち。

「ヒーローっぽくないけど騎士はいたわね…。どっちかという悪役に殺されるタイプの脇役みたい。」

シノンのひでえ言葉にツツコミをする。

「身も蓋もない！で、どこにゴーレムいるんだろう…？一通り見たと思うんだけどな？」

「……ここだよ？」

フィリアが壁を指さす。そして僕らをよそに壁を触り始めた。

「ほら、ここをこうしてー、こーして、こう動かすと仕掛けが動いて隠し部屋にいけるの。」

「おお、壁が動いてる。……あいつか、ゴーレムって」

部屋の中央に鎮座していたのは、苔むした石でできた戦闘兵器、名は《サンクチュアリ》。

それが守る宝物は、製作者の思い出の品なのかもしれないが…。

「悪いが、ぶっ壊させてもらうぜ。行くぞ、二人とも！」

《サンクチュアリ》の一撃を《カタラクト》で弾く。

隙ができたゴーレムにシノンの矢が刺さるが、あんまり効いてない。

「…ええい、決定打にならないのってイライラするわ！」

「やっぱり頭部のコア狙わないと、わたしたちの攻撃通りにくいみたい…。」

「…どうしよう。」

一番ダメージを稼いでいるのはどうも僕らしいが、これは…。

二人にはデバフ中心にソードスキルを撃ってもらった方がよさそうかな。

「とにかく、ダメージよりデバフ中心にソードスキルをお願い！」

「わかった、任せて！」「頑張れキリヤー！サポートはするから！」

泥仕合と化した《サンクチュアリ》戦は、三十分以上もかかった。

ゴーレムが爆散した瞬間ガッツポーズで喜んでしまったのも無理

はないと思う。

精神的疲労がでかいが、達成感がすごい。でもここ圏外だし、油断は禁物。

「ん、んん〜よし、宝箱の中身を確認しよう！」

フィリアは大きく伸びをして、宝箱の方へ向かうとなにやらカチャカチャし始めた。

「なにしてるの？鍵かかった？」

シノンの疑問にフィリアは

「なんか罠がかかってたみたいだから解除しなきゃ。だいじょーぶだ
いじょーぶ、

このぐらいいなら疲れててもポカはしないよ」

と笑顔で言う。

「…まさかここに来る前はソロでダンジョンに行ってたのか？」

「ん？まあね。宝箱の中身って基本的に早い者勝ちでしょ？」

最前線よりちよつと下のサブダンジョンとかはいい感じに人もいなくていいものが入ってることが多いの。

そのおかげかレベルもそれなりに上がったし、トレジャーハンターとして大きく成長できたから。

「…よし、トラップ解除！」

「こ、こいつよくソロで生き残ってるな!?ソロで死ぬやつは三割くらいは宝箱の罠のせいで死んでるのに…」

…なるほど、たしかに才能はあるみたいだ。

「お宝ちゃん出ておいで〜♪えへへ、何が出るかなあ♪」

よだれたらしながらそういうフィリアは、どう見ても変人だった。でもなんかかわいいぞ、美人って得だな。

宝箱の中には、なにやら妙な形をしたネックレスが入っていた。

フィリアはじーっとしばらくそれを観察していたが、

「ん〜、これけっこうレアものかも。…いる？」

とこちらへネックレスを見せてきた。

「…いいの？僕がもらっても。もともときみが見つけたものだろう」

「いいの！手伝ってもらったお礼。…わたしが物を送るなんてめったにないんだから、

大事にしてね？」

彼女からもらったネックレス《虚光の燈る首飾り》は、性能面でもかなりいいものだった。

ただ、なんか独特な形で気になったのか、

「ちよっと調べてみる」

とフィリアが言ったので、今日はいったん帰ろう。

「じゃあ、またね、フィリア。」

「うん、なにかあったらメッセージを送ると思うから。」

「あー、疲れた。フィリアも今日は早めに休んだほうがいいわ。」

じゃ、また来るね」

その日はご飯を食べて早めにベッドに入った。

明日はシノンと本を探してみようかなと思いつながら、僕は意識を手放した。

第二十一話 供物の神殿

〈SIDE：フィリア〉

《二人が邂逅した教会》での冒険から数日後、わたしは樹海を抜けて開けた場所にいた。

そこには飛行型エネミーが我が物顔で飛び回っていて鬱陶しかつたけど、まあ苦戦はしなかった。

：問題は、次のエリアに続く橋を見つけたのに、なんか見たことある紋章に阻まれて通れないことだ。

少し調べてみると、この前手に入れたペンダントと同じ形の窪みを見つけた。

……。ちよつとキリヤに来てもらったほうがいいかな！

：別に、寂しくなったわけじゃない、：ないったらない！

「よし、ちよつとメッセージ飛ばそうか。『キリヤへ、ちよつとホロウ・エリアで気になるもの発見！

手伝ってくれると嬉しいな！』：つと、送信っ！：えへへ、楽しみだな」

彼との冒険は楽しい。できればずっと続けていたいと、思うくらいに。

（：でも、本当にこのままでいいのかな。わたしは犯罪、いや殺人だ。

彼は、ホロウ・エリアでの冒険が楽しいからここにきているだけ。

……。わたしには、彼と友達になる資格はない。）

……。でも、今は見ないフリをしよう。心の赴くまま冒険しよう、いつか終わる夢だとしても後悔はしたくないから。

《管理区》に戻ってきて三十分経ったころ、キリヤがこちらにやってきた。

連れているのは、茶色のフードを被った女性。：知らない人だ。

「よ、フィリア。調子はどう？」

「うん、大丈夫！そっちも元気そうだね、キリヤ。：その人は？」

女性はフードを取るとニヤリと笑って自己紹介をする。

「初めまして、ファイリア。オイラはアルゴ、名前くらいは知ってるんじゃないか?」

アルゴ?…まさか、《鼠のアルゴ》!?

なんと、彼女はこのアインクラッドの大手情報屋だったのだ!

最前線攻略の命綱そのものである《アルゴの攻略ガイド》や、

メディアに飢えたプレイヤーたちの需要を満たすための新聞

《ウィークリー・アルゴ》の著者である。

たしかに彼女の頬にはネズミのヒゲみたいなペイントがされている、…ホントに本人?

「…マ、疑うのもわかるサ。でもお互いさまだと思うぜ、ファイリア。

オイラはコイツの師匠で、友達ダ。アンタが信用できる人間なのかを知りたいんだヨ。」

「信用、ですか。…自分でもどうすればいいのかわかんないんだけど?」

「別に、オレっちも一緒にホロウ・エリアの探索に参加するだけだヨ。パーティーを組んでもらいたいんだ。…信用勝ち取れってことだな♪」

アルゴは笑った。…これ遠回しに怪しい動きしたらひどい目に合わせるってことじゃない…?

今のわたしは犯罪オレンジだから麻痺毒をくらわせたところでカーソルの色は変わらない。

圏外で五分も麻痺させたら間違いなく死ぬので、完全犯罪が成立する。

「こ、この人こっわ?! 本物のアルゴかどうかはこの際置いてすごいこわいよこの人!」

キリヤ、なんでこんな人と友達でいられてるの?」

「うーん?…ここまで警戒してるのは初めてだよ。」

犯罪オレンジプレイヤーの危険性をよく知っているとはいえ…。

いったいどうしたんだアルゴ…。」

「だって、なんか嫌な予感がするんだよナ。コイツとつるんでるとろくな目に遭わなさそうというカ、

犯罪^{オレンジ}だけどなんかそこと関係ないところでヤバいんじゃないか？

オイラだって、勘で相手を決めつけたくはないケド……」

どうやら本人もよくわかっていないらしく、首をかしげている。

…しようがないか。お互いに相手を知っていけば、この変な空気も和らぐ……といいなあ。

わたしたちは、件のエリアである《バステアゲートへ続く橋梁》へと行くと、

早速橋に続く道に案内する。

「……なるほど、たしかに僕の紋様と同じ形だ。でも触っても何の反応もないな。

ほかになんか怪しいのない？」

キリヤがこんこんと紋章を叩いているが、うんともすんともいわない。

「そこもそうなんだけど、ここの窪み、あのペンダントの形に似てない？」

指をさした方向を見たキリヤはストレージに入れていたペンダントをはめてみるが、何もおこらない。

「なーんも反応しないな。まだなにかフラグが足りないのか……？」

「ウーン、どこか探索し忘れたエリアでもあるんじゃないか？」

心当たりはないのか二人とモ。おねーさんここに初めて来たからわからんゾ」

…ある。

この世界に迷い込んで、犯罪^{オレンジ}になった後わけもわからずに入り込んでしまったダンジョンが、

あの樹海には存在する。

あの時はモンスターに囲まれかけてしまい、命からがら逃げ出した。

だけど、今は三人でパーティーを組んでいる、対抗はできるはずだ。「ダンジョン、あるよ。固有名もったのとか弓もったゴブリンがうじゃうじゃいる、

地獄みたいなダンジョン。」

「……弓イ？マジかヨ、ホロウ・エリアにそんなヤベーもんがあるのか!?」

「遠距離攻撃でハチの巣なんてごめんだゾ!」

「大丈夫、あいつら狙いはかなり雑だったし、近づいたらオロオロしだして隙だらけになるから。」

「前衛もいなかった。」

「前に行つたときは一人だったから逃げるしかなかったけれど、今なら攻略できるかも」

「雑に狙つてきて前衛いない弓兵とか何の価値があるんだ?」

「たしかに初めて見たら思考停止してやられるかもしれないけど……。」

「そりやそうだ、ネズミも出れないくらい囲まれたならともかく、使い手が未熟なゴブリンなので冷静になれば普通に倒せるだろう。それを彼らに伝えると、アルゴも納得したようだ。」

「……じゃ、行ってみよーぜ二人とモ。ほら、パーティー申請したゾ。パーティーにキリヤとアルゴの名前が追加される。」

「……うん、本物のアルゴだこの人！」

〈SIDE：キリヤ〉

「ファイリアの案内でやってきたダンジョンは、

樹海の広場（といつてもかなり茂つてはいる）の近くに存在していた。」

「……というか、ここたしか《デッドニング・リーパー》に襲われた近くじゃ……?」

「……ここだよ。エリア名は《供物の神殿》……探索してない場所はもうここだけのはず。」

「……キリヤはまあいいけど、アルゴってボス戦の経験は?」

「アルゴはちっちゃと指を振り、」

「マ、経験はあるぜ。こう見えて攻略組と大差なく戦えるくらいには、ナ?」

「スピード重視だが、そこはまあ逃げ足のためダカラ……。」

「と笑う。……いつたいつレベルリングしてるんだろうか、」

弟子としてついていった時期にも彼女がレベリング中の場面に出くわした記憶がない。

「なら大丈夫かなあ。ゴブリンたちが出てくるのはだいたい半分いったところ辺りかな？」

「じゃ、フォワードよろしくねーキリヤ。」

「任せろ！流石にゴーレムとかじゃなければ二人ともダメージを出せるところ思うし、

頼りにしてるよ！…行こう！」

ダンジョン内は、この前攻略したダンジョンにいたものときさほど変わらないMOBがたむろしていた。スケルトンはもちろん、動く鎧リビングアーマーもいる。

《二人が邂逅した教会》はどっちかというときスケルトンが多かったが、ここは動く鎧が多い。

このがらんだうの金属塊たちは以前の所有者が納めていたであろう剣技を巧みに操る強敵だ。

上級ソードスキルを使ってくるのもいる。弱点は搦め手にめつぽう弱いくらいか。

「マ、このくらいならカモだな？さて、先に進もうぜ」

アルゴは鎧を鉄くずに変えると、前へ進み始める。

「ああ、そう…っ!？」

いきなり体が重くなり、転んでしまった。…一体何がおきた!？」

足元を確認しても、僕の周りには躓くようなものは存在しない。…存在しないが、異常はあった。

…僕の影に、妙な影がまとわりついていたので。

「な、なんだこれー！ー!!くそ、離れろっ！」

剣を突き立てると、それは逃げるように離れていった。

フィリアは呆然と逃げて行ったその方向を見てつぶやく。

「…何、あれ。」

「フィリアも知らないのか?…いつ来てもパニックにならないようにしないといけないか?」

「嫌なデバフだな、全ク。戦闘中に来たら厄介極まりないゾ。」

…まったくだ、こんなのがいきなりまとわりついたら邪魔すぎる…。

《供物の神殿》は、先ほどより暗くなった気がする。

なにか恐ろしいものが、この先にいるのかもしれない。

けれど、逃げるのは性に合わないと、僕たちはダンジョンの奥へ足を踏み入れた。

第二十二話 影二潜ムモノ

影に纏わりつかれた所からしばらく進むと、地面に何か刺さっているのを発見する。

…これは、矢じり？少し触ってみるが、アイテムとかではないらしい。

「……なるほど、ここから先に弓を持った敵が出てくるってヒントはあるのか。」

キリヤ、覚悟はできてるか？」

「まあ、緊張しないで戦えば大丈夫だと思うけど、油断はしないようにしましょう」

大部屋の中を観察すると、弓を担いだゴブリンが部屋を巡回していた。

その中に一匹、悪賢そうなツラゴブリンがゲツヒツヒと笑いながら何かを作っている。

そいつに注目すると、《ジーニアス・ゴブリン》という固有名詞が表示される。

「…ネームドボスだね。ここ通りたいけど、絶対じやましてくるよ。」

あの酷い顔は性根腐つてないとできないって、多分」

フィリアの言うことは確かに酷いが、僕も同意見だ。

…もし人語を解するとしても、それは知能が発達しているだけであって、仲良くなれる優しさや思いやりの心を持っているとは限らない。

むしろ、『だまして悪いが死ねええ!!』される危険性もある。

フォールンエルフとかその典型的な例で、知能は高いが性格がクソだった。

アルゴが石ころを拾うと適当な場所に放り投げる。…もちろん、小さな音を聞きつけたゴブリンは怪しんでその方向に進む。

視線を石ころに向けたゴブリンは、アルゴのクローを首にもろにくらって倒された。

『ギョギョッ!』

いきなり爆散した味方に動揺したゴブリンに、鉄塊の如き愛剣を叩きつける！

不意打ちは成功した。《ジーニアス・ゴブリン》はいきなり部下が斬り捨てられ、動揺している。

その時点で決着はついたも同然だった。

「…まあ。対策してたらこんなもんだよね。不意打ちってこんなキレイに決まるんだなあ…。」

「オイラは正面戦闘は苦手だけど、こういうのは結構慣れてるんだヨ。何でも使えば、生き残る確率は上がる。昔やったゲームで嫌というほど学んだゾ」

…一体何のゲームを遊んだらそんな考え方を育めるんだろう。

知りたいような知りたくないような…。

ダンジョンの最深部へ到達すると、フィリアがじつくりと部屋の中を調べ始めた。

…十分後、何かを発見したらしくこっちに近づくと、彼女は壁のへこみを指さす。

「アレ、ペンダントとおんなじ形じゃない？ちよつとキリヤ入れてみてくれない？」

「オッケー！」

ペンダントを取り出してへこみにはめ込むと、ズズ…と鈍い音を立て通路が出現した。

先に進むと、先ほどのダンジョン内よりも周りが綺麗になっている。…《重く》なっているのだ。

つまりこの先にはエリアボスがいる、間違いなく。

「サテ、いるナ。さっきの見かけ倒しボスゴブリンとは比べ物にならない強敵ガ。

回復アイテムはちゃんと残ってるナ？」

「だ、大丈夫。弓ゴブたち用に準備してきたけど、消費は少なかったから。」

「…よし、行くぜ二人とも！」

扉の先には、奇妙な祭壇が存在していた。その上にはなにか壊れた岩のようなものがある。

「……猛烈に嫌あな予感がするんだけど。なんか封印されてたのが逃げてない……?」

アルゴはにっこりと笑う。

「オイラたちがぶつ殺されたら間違いないこの樹海の主として君臨するぜ。……いや、既にもう手遅れカモ。」

後ろに、先ほどの影がうごめいている。……誘いこまれていたのか……!?

影から飛び出してきたのは、かなりのでかさの怪物だ。

巨大な光の杭のようなもので拘束されているものの、その影の怪物を止めるにはどう見ても役に立ってない。

その名は《シャドウ・ファンタズム》。獣は哀れな旅人三人（つまり僕ら）を見て舌なめずりをしている。

「さすがにエリアボスはでかいな!この巨体なら攻撃力も高めのはずだ、

できるだけ避けてくれ、ファイリア!」

「わかったー!それ、隙ありっ!」

怪物の左前脚の振り下ろしを軽々とかわし、ファイリアは《アーマーピアース》を繰り出す。

獣の皮膚を貫いてダメージを与えるが、まだまだ攻撃は終わらない。

「ファイリア、スイッチチダ!」

「おー、よろしくアルゴ、スイッチチ!」

ファイリアがバックステップして、アルゴの連撃が硬直中のボスに叩き込まれる。

ギロリと獣はアルゴを睨む。ヘイトを稼いってしまった軽装戦士を守るのは、壁役タンクの役目だ。

なーに、コイツの攻撃なんかクオーターのフロアボスに比べれば……!

「おら、こっちだ犬っころ!!『オレ』の方を向けええ!!」

《咆哮ハウル》を使用し、両手剣用スキルでもかなり強力なものをぶち込む!

両手剣のソードスキルは一撃必殺の傾向がある。

片手剣や細剣のように連撃数でダメージを稼ぐのは重さの関係で難しい。

上位ソードスキルでも六連撃程度だが、一発の威力は片手剣のソードスキルを超える。

今回使用したのは、《アストラル・ヘル》。

奥義技を除けば両手剣用ソードスキルの中で最も威力の高い技だ。

ダメージのでかいソードスキルとヘイトを稼ぐことができる《咆哮^{ハウル}》を組み合わせることで、

無理矢理こちらに注目させる。

ボスがこちらを殴っているうちにフィリアたちが攻撃範囲の外から攻撃し、HPが減ったらポジションで回復。

途中でバーサク状態になったものの、追加された特殊攻撃は充分対処できた。

戦闘開始から四十五分後、《シャドウ・ファンタズム》は討伐された。

…でかいだけの犬だったのでは？と思わなくもないが、かなりいいものをドロップしたのでどっちにしろぶっ飛ばして正解だと思う。

「おつかれー、キリヤ！なんかいいものでた？」

「おー、むっちゃレアそうな槍がドロップしたぜ。早速出してみよう」
ストレージから槍を取り出すと、槍の穂先が暗めのボス部屋を明るく照らす。

…フィリアは困った顔をしながら考え込む。コメントに困っているな、やっぱり…。

「…べ、便利！立てかけておけば光源になるね。」

「…槍スキルは上げてないから誰かに売りつけるか。ランタンでいいじゃん、ランタンで」

「……。うん、なんかレアなのはわかるけど、効果が微妙…。」

わちやわちやフィリアと騒いでいるとアルゴに

「ナアキリヤ、エリアボスを倒したんだから、次のエリアへの道が開くんじゃないか？」

「そんな使い道に困るモンで遊ぶ前にダンジョンから出るゾ！」
と怒られた。

「……ハイ、わかりましたー!」

ダンジョンの外に出ると、フィリアが笑いだした。

「ふふっ、キリヤとのコンビネーションも慣れてきたよ。わりと相性が良いのかもね、わたしたち」

「そうだな、それじゃ一旦管理区に戻ろう、新エリアはまた明日な」

アルゴは眠そうにあくびをする。…無理もないか、ボス戦なんて久しぶりだろうし。

「ん、オイラ結構疲れたから宿屋でゆつくり…。…。?」

突然アルゴの口が止まる。キョロキョロと何かを探しているようだ。

「……どうした、アルゴ。」

「今、なんか悲鳴が聞こえた気がする。気のせいならいいが、ちよつとこのあたりを見てみようぜ」

耳を澄まして、異音がないか確認する。…ズブリと何かを貫く音がした。

それと「あああ…」という潰れたカエルのような声もセットで。

「…き、聞こえた!!すぐに声の方向に向かおう!」

全力で悲鳴の方向へ走る。…さすがに離れていないはずだが…!

「…ま、待ってよ二人とも!」

フィリアも一瞬遅れて僕らについてくる。

僕とアルゴが遭遇したのは、複数のプレイヤーだった。

数人のフードを被った連中が一人を滅多打ちにしている。

「てめえら、なにしてやがる!!」

「…ん?…おや、スピード上げた方がいいかんじですかア?」

片手斧を持った男が哀れな被害者の頭に武器をぶち込んだ。

ガラスのような結晶になり飛散するそれを忌々しく見つめる。…助けられなかったか…!

「ハイみなさん撤収しましよ、ここにいたらこわーい鬼に喰われるかもしれないし?」

うちに帰るまでがPKですからー!」

連中の一人がけむり玉を投げ、こちらの視界が遮られているうちに

逃げられてしまった。

「くそ、逃げられたか！」

「まさか、こんなところでPKに出くわすとハ…。」

ゼーは一息をしながら合流したフィリアと情報を共有すると、彼女は僕を慰めてきた。

「…キリヤたちのせいじゃないよ。悪いのはPKなんだから。」

「まったく、なんなんだアイツら。こんなところにどうやって来たんだ？」

「…。さあ、わかんないや。」

「…あの被害者のHPバー見たか…？麻痺で動きを止めて出血ダメージで恐怖を煽って。」

複数人で一人を痛めつけていた。…見覚えがあるなあ、こういうことする連中を、

先月ぶちのめした覚えがある。」

アルゴは目を見開いた。

「…《ラフィン・コライン笑う棺桶》…!?!いや、でもアイツらハ…。」

…そう、ボスのPOHを除き捕縛されたか死んだはずなのだ。

しかし、今は情報が少なすぎて予想の域を超えない。

「…今考えても埒が明かないな。一度管理区へ戻って、今日は解散しよう」

「わかった。じゃ、戻ろう。」

このとき、フィリアが怯えた顔をしていたことをずっと後に本人から聞いた。

しかし、僕は気づけなかったのだ。

ボスを倒したはずなのに、未だ闇の中に何かがうごめいていたことに気を取られてしまったから。

第二十三話 理不尽と女子会

樹海エリア攻略が完了した翌日、僕は転移門の前で一人悩んでいた。

今日もホロウ・エリアに行こうと思っていたが、みんな予定があつてパーティーを組めなかったのだ。

シノンはアスナたちと女子会、アルゴは《ウィークリー・アルゴ》の編集集中、

キリトはそもそもダンジョンにでもいるのかメッセージすら届かない。

…一応他にも友人はいるけど、ホロウ・エリアのことを広めたら攻略ギルドのスカウト合戦が起きるんじゃないかという不安が残る。

謎のPK集団の存在、現在は犯罪のオレンツフィリアと仲良くできるかとか、他の人間を巻き込むには考えることが多すぎる。

「さて、行くか。…転移、《ホロウ・エリ…》」

「やつほーキリヤ！元気？アタシは絶好調!!」

「アあああ!!」

至近距離から聞こえた声に僕は悲鳴を上げてしまった。

思わず声の主の方向を向くと、そこにいたのはストレアだった。

「…いい、何時からいたんだストレア…。」

まったく気付かなかつた。隠蔽でハイディング観察されていたのか…。

「ねえねえ、どこに行こうと思つてたの？《ホロウ・エリア》つてなに？。」

……。あ、ギルドに属してなくて、フィリアが犯罪でもオレンツ気にしないだろうヤツいるじゃん。

実力も申し分ないし、巻き込んでもいいかも。

「…ねえストレア。ちよつと冒険するからパーティー組んでほしいんだけど」

「ん、いいよー。今日は予定ないから暇だったんだよねー。

よろしく、キリヤ」

「……。暇な時にすることが人間観察なのは少し考えた方がよくない

…?」

「最近はキリヤの観察が一番多いかな。この前はシノンと本を探してたよね」

…ちよつと後で話をした方がいいかもしれない…。

〈SIDE：シノン〉

さて、今日はアスナに誘われて女子会に参加することになった私は、どうしたものかとケーキをつついていた。

今日集まったのは、私、アスナ、ミト、リズベットにシリカだ。

…ほとんどアスナの友達じゃない？シリカは猫ににらまれたネズミのように震えている。

「あの、あたし場違いじゃないですか…？なんでこんなことに…。」

『きゅるう…。』

彼女に抱っこされているのは羽毛で包まれた小さなドラゴン。

彼女の大切な友達でパートナーでもあるそのドラゴンの名前はピナ。

そう、かつてプネウマの花によって蘇生された彼女の使い魔は、今も元気に暮らしているらしい。

昨日の夜アスナに女子会へ誘われた私は、道連れとしてシリカを誘った。

ピユアな彼女は何の疑いもせずに来てくれたけど、メンバーのせいで萎縮している。

「…ご、ゴメンねシリカ。私、女友達ってあんまりなくて…。」

「まさかKOBの副団長主催なんて想像できないですってえ!？」

あ、でもキリトさんの話聞けるかな。」

「あれ、キリトの知り合いなの、この子?」

リズベットはシリカに興味を沸かしたようだ。

「…フェザーリドラってレアモンスターじゃなかったっけ。

発見どころかタイムまでできたなんて、すごいラッキーガールと友達なのね、シノン」

ミトは感心したようにピナを観察している。

「すつごくかわいいなあ。ねえシリカちゃん、ちよつとなでてもいい

？」

アスナはピナにメロメロである。…わかるよ、可愛いよねフェザーリドラ…。

「へっ!? あ、大丈夫ですよ。」

『きゆるー!』

アスナがアニマルセラピーで癒されること十分、ようやく落ち着いた彼女は本題に入る。

「えっと今日集まってもらったのは、女の子同士で仲良くなるきっかけができたらなって思ったからなの。」

スイーツを食べたり、色々話をして親交を深めようって企画なんだ。

…その、えっと…パワハラしたいわけじゃなくて…。」

「うん、とりあえず落ち着いてアスナ。あたしは楽しみにしてたからね!」

リズベットのフォローは逆にアスナを落ち込ませる。

「考えれば考えるほどシリカちゃんへの嫌がらせになってる気がする…。」

うわ、なんかマイナス思考になり始めた。どうしようかと考えてると、シリカはアスナに顔を近づける。

「…いやじゃないです! その、なんか親近感がわきました。」

攻略組最強ギルドの副団長も、あたしと同じ女の子なんだなっていろいろお話聞いてみたいです。」

シリカは笑顔でアスナに話をねだっている。

使い魔と同じく人懐っこい彼女に、アスナも心を開き始めたらしく、少しづつ話し始めた。

「えっと…なんの話しようかな。…そうね、どうして攻略組として戦い始めたか…とかどう?」

ミトの顔が引きつった。

「えっと、あの、その…アスナさん?」

「初めは、私も怖かったんだ。でも、そこにいるミトと一緒に生き延びようって、

戦おうって誘ってくれたの。そのあとはしばらくパーティーを組んで、ちよつとすれ違いがあつて…。」

そういうえばアスナのそういつた話を聞くのは初めてだ。

「……あのときは、ゴメン。」

「……ミト、私は今でも友達だつて思つてるからね。で、一層のボス戦で目標を見つけたの。」

…今でも追いつけてる気は、ちよつとしないんだけどね。」

「アスナさんにも、追いつけない人がいるんですか…?」

シリカは意外そうだった。たしかに、プレイヤーの中の上澄みと呼べるアスナでも、

追いつけていない目標があるというのは中層プレイヤーには想像しづらいかもしれない。

「ええ。この世界で一二を争う剣士だと思つているわ。」

そう語るアスナの顔は、恋する乙女そのものだ。

あの黒づくめの剣士との出会いは、彼女の人生を大きく変えたに違いない。

「…キリトも罪なヤツね。」

リズベットは小さな声で呟く。

「……まったくね。…で、そこでうつぶせになつてるのどうする?…ほつとくっ。」

ミトはなんかいじけ始めるし、シリカはトッププレイヤーの話に夢中になつている。

「…うーん、ねえミト、あんたもなんか話してあげなよ。」

いや、キリトが好きなのはわかつたから」

「…ちがうよ。アスナがこんな心を開いた相手に嫉妬する自分が嫌になつてるだけ。」

うーん、攻略組総出でもぐらたたき大会した話とかでいいかな。」

「あ、次はミトの番?どうぞー」

アスナはちよつと話しかれたらしくジュースを飲み始めた。

「あの、次はあたしもピナとの思い出を話してもいいですか?」

「いいんじゃないかしら。とりあえず一人ずつ思い出話を言っていき

ましよう。」

その後は、みんなの思い出話を聞いて、ひとまず解散することになった。

キリヤ、今日もホロウ・エリアへ行つたみたいだけど、大丈夫かな…。

〈SIDE：キリヤ〉

「…あああああ!!? ストレア、あとで覚えてろバカヤロー!!!」

「ごめーん!!!」

「謝つてる暇があるんなら走れー!?!」

僕とストレア、フィリアの三人パーティーは、巨大なグリフォン三体に追いかけられていた。

一匹一匹がかなりの高レベルで、一体ずつ相手にするならまだしも全部いっぺんにはキツイ!

なんでこんなことになったかというところ、ストレアがうっかり範囲攻撃を撃つてしまい、

二匹目のグリフォンが突っ込んできたのだ。その騒ぎのせいで三匹目もこつちを襲つてきててんやわんやしている。

なんとか樹海に逃げると、グリフォンどもは満足したのかどこかへ飛び去って行った。

「くそつたれ…」

「ううん、橋を渡って新エリア解放したいのにあいつらいたんじゃ先に進めないよ…。」

どうやらグリフォンたちは新エリアに生息しているらしいが、近くに居座っているせいで通行止め状態だ。しばらく沈黙がつづき、ストレアが言った。

「…誘い出して一匹ずつ倒していくしかない?」…と。

長時間の死闘の末に、三体のグリフォンを倒した僕たちは昼食をとり、

新エリア《バステアゲートの浮遊遺跡》へたどり着いた。

ええい、あのグリフォンどもに時間を取られたのが腹立つな!

ストレアはちよつと申し訳なさそうに

「あはは……。今度ご飯おごるよ。」

と食事に誘ってきた……。舌がひりついてきたような錯覚をうける。

「この前おごられた激辛料理店以外で頼む……。」

この辛党め、舌がおかしくなりそうなもん食べさせるのは罰ゲームだろ！

「……一体何を食わせたんだろう……。」

「……知りたいか？本当に知りたいのかファイリア？とんでもなく辛いスープ……みたいなものだ。」

ぐつぐつと煮込まれ形がなくなったであろう具材、NPCコックが死んだ目で馬鹿みたいに入れる香辛料たち、周りでは興味本位で入った連中がスープのせいで気絶してた。

……ほんとうに怖いのが、元になつた料理がわからないってところだな……。」

「えー、美味しいのに……」

「……ヒエツ。」

ストレアのヤバイ発言にファイリアはドン引きしている。

「まあ、それはさておき。新エリアってワクワクするよね！」

……話をそらしたな。たしかにこれ以上話すと今にも辛さが蘇ってきてそうだ……。」

「わかる。フロアボスを倒して新しい階層に行くとドキドキする！」

……とりあえず激辛のことは忘れて、新しい冒険の気配にワクワクする僕たちだった。

空中に浮かぶ大地に、そびえ立つ塔。

僕らを待っているのは、どんな冒険なのだろうか。

第二十四話 追憶

《バステアゲートの浮遊遺跡》エリアは、無数の浮島で構成された奇妙な場所だ。

「……………これ、足を踏み外したらどうなるとおもう?？」

興味がわいたので、今飲み干したポーションの空き瓶を一度ストレージに入れてアイテム化、

空き瓶をもう一度出してから浮島の外に放り込む。……………空き瓶はすぐに見えなくなった。

二人の方を向く。曖昧な顔で首を横に振られ、一言。

「……………死ぬんじゃないかなあ?？」

「……………はー、だよなあ……。どう見てもアインクラッドの外側と同じ判定で落下死するよな……。」

二人の無慈悲なツツコミにため息をつく。

つまり、転移結晶で何時でも転移できるようにしとかなければいけないわけで。転移結晶はかなり高く、経済的にも心理的にも買いためににくい（回廊結晶よりはましだが）。

……………出費が痛いなー、マイホームが遠ざかる……。

「転移結晶はちゃんと持つてるよね?？」

フィリアとストレアはブンブンと縦に首を振った。

「……………見たところ下の浮島には宝箱が設置されてるのがあるみたい。

……………降りるのは……。」

フィリアは目をキラキラさせているが、珍しくストレアが制止する。

「ダメ。お宝に目が眩んで落下死なんてマヌケだし、ものすごく後悔するよ?？」

……………アタシ、フィリアに死んでほしくないよ。」

その曇りのない瞳で見つめられたフィリアは、ひとまず諦めたようだった。

「……………わかった、わかったからー！まだいける、が一番危険だからね。

とりあえずこの辺りを探索してみようよ」

少し移動すると、また封鎖された場所を見つけた。…ネックレスをかざしても反応はない。

「…うーん。まだなにか必要なのか…?」

その時、とんでもない轟音が響き渡る。上空には巨大なドラゴン。

『ココヲ通ルモノ、竜王ノ証ヲ掲ゲヨ』

「しや、しやべった!?!」

『我ハ空の王ナリ。我ガ領域ニ挑ムコトヲ望ムナラバ、白キ竜王ヲ討チ証ヲ奪イ取ルノダ』

ドラゴンはそう言つて封鎖された先の塔へ飛んで行つた。

「…あのドラゴン性格悪くない?ようするに白キ竜王ぶつ殺して証とかいふのを奪つてこいってことでしょ?」

どんな関係かは知らないけれど厄介払いさせて、誘い込んで襲う気だよな。」

「ん?いや、まだましじゃないかな多分。ヤバいやつは言葉巧みにその気にさせるからさ。」

…ラフコフのリーダーはただのゲーマーを言葉だけで殺人鬼に仕立て上げた。」

フィリアは身震いすると、

「…絶対会いたくないね。」とつぶやいた。

封印近くを探索しているとダンジョンを発見した。

中に入るとワイバーンが多く生息していたが苦戦することなく突破する。

…が、今度はあかない扉である。扉には文字が刻まれており、竜の秘宝なるもので開くことがわかった。

「……………またかよもー!!防犯しつかりしやがって!」

「でも、多分ここにいると思うなー。一番守りが厚いところに大切なものって隠すよね」

とストレアは言う。

どうしようもないのでダンジョンから出た僕たちは、少し移動した場所で妙な連中を発見した。

フードを被り没個性なそいつらを観察していると、ふと思ひ出す。

「…ん？　そういえばこいつら、この前のPKに格好が似てるな…。
ちよつと尾行してみようぜ」

フィリアは呆れた顔でこちらを見ていたが、最終的にはついてきた。

…なんだかんだいって気にはなるんだろうな。日常的に殺人^{PK}をするやつらが新たな仲間をスカウトする時に必ず言う口説き文句がある。

「二人殺そうが二人殺そうが変わらない」…だ。

洞窟へ入っていったやつらを尾行すると、先日出くわした片手斧使いのPKがいた。…誰かと話しているようだ。

「ヘッドオ、ターゲット殺つときましたよー」

「なんだ、随分遅えから返り討ちにあつたかと思つたぜ。」

「いやア、割とマジで手ごわくて。もうちよい強い毒ないんすか？」

笑いながらおぞましい話をする連中に斬りかかりたいのを必死に抑える。

…我慢してやつらの話を聞くうちに、なにかが引つかかった。片手斧使いと話す《ヘッド》とやらに、見覚えがある気がしたのだ。

「次は上手く殺れ、《モルテ》！」

「……!!!」

その名前は、かつてキリト達とパーティーを組んでいたときに何度も何度もあの手この手で襲撃をかけてきた…あれ??

「モルテって死んだ、よな？」

ヤツの最期の襲撃はよく覚えている。あの時外壁から落ちていたのを見たし、《黒鉄宮》にも行ってモルテの名前に横線が引かれているのも見た。

それに、あいつの手口は後に現れたPK集団のラフコフと酷似していたため、

アルゴとの会話でやつが幹部クラスに収まってもおかしくないほどラフコフに近いプレイヤーだったのではないかという結論になったのだ。

そんなやつが《ヘッド》と呼ぶプレイヤーなんて、一人しか思い浮

かばなかった。

《ヘッド》の顔が少しだけ見える。……『オレ』は、そいつを知っていた。

あのクソ野郎の名前は、《POH》。あいつがいなければ、少なくとも殺人ギルドなんてものが出てくることはなかったはずだ…!!

キリトやアスナ、そしてシノンに苦しませる原因の一つ無駄に作りやがったクズを、

許すと思っ っ ているのか!!

『オレ』は剣を抜こうとして、そこではじめて空いた手を誰かが握っていることに気が付いた。

…フィリアだ。彼女は涙を流しながら、必死に『オレ』を引き留めている。

むかし、妹に似たことをされたことをおもいだした。

…こどものころ、妹を剣道で負けた腹いせにいじめていたクソガキをボコって、二度とこんな気を起こさないように歯を折ってやろうとした時だ。

後ろから自分の胴体にしがみつき、

「もういいよ、やめてよ」

と涙を流す妹を見て少しだけ冷静になって…ボコボコにしたいじめつ子に二度とするなとくぎを刺した記憶がある。

…そうだ、ここで暴れてもやつらは簡単に逃げてしまうだろう。

それよりもここでやつらの情報を抜き取った方がいいはずだ。

斬りかかりたいのを必死に抑え、やつらの言葉を聞き逃さないように集中する。

「それで、NEXT TARGETは…ん?…:…。」

(…気づかれたか…!?)

こちら側、というかモルテが来た方向を見ているが、こちらに気付いたというよりも、なんか気になった程度のようなだ。

「おい、場所を変えるぞ。つけられてるかもしれない」

「へー」

やつらはすぐにその場から去っていった。

あいつらが《ラフィン・コフィン》だったとしても、『オレ』にとってPKは倒すべき敵だ。

仲間を守るためならなんだってしてやると気分を新たにした。

「……さて、あいつらもいなくなっただ、先に進もう。」

洞窟の奥にはたくさんさんの宝箱が置かれた大部屋があった。

「ワイー、お宝つかみほうだい♪♪……なんて言うと思ったかア！！

知ってるぞ、どうせ半分以上の宝箱がミミックとかトラップだら、だまされんぞ!!」

「でも、全部調べてみようよ。ミミックや罠だったらほっとけばいいしや。」

「ちよつとまっててねー」

フィリアは時間をかけて、確実にトラップを解除していく。

部屋の入り口と仕掛けの解除をしているフィリアを視界にいれながらストレアと話していると、

「…おっ、これって…。おーい！見つけたよ、竜の秘宝！」

フィリアがそんなことを言いながら宝石を掲げていた。

竜の秘宝、正式名称は《飛竜の王玉》を手に入れた僕たちは、ダンジョンの封じられた扉を開け、

そこにいたドラゴンをボコつて竜王の証をゲットした。

なんかネームドボスっぽかったけど、苦戦せず倒せたのはよかった。

「これであそこも通れるようになるな。またお使いやらされることにならない限り…。」

「こ、怖いこと言わないでよー！そんなことになったらいったん帰るからねアタシ！」

割とガチトーンでストレアは言うが、そんなことになったらいったん管理区に戻ってあのクソドラゴンを射落とせるシンンンンンンンボとりなんだよなあ…。

羽根をズタズタにして叩き落としてからフルボッコにしてやるんだ。

…ラツキーなことには、竜王の証を封鎖された場所に持つていくと通れるようになったのはよかった。

ただ、その先は道らしきものは浮島くらいで、安全に渡るための橋とかは見当たらない。

「……落下したらどう「死ぬね。」…デスヨネー。これをジャンプで渡れってこと…なんだろうな」

鎧を比較的軽いものに変え、機動力を確保する。数値上の防御力は下がるが、ジャンプ力が足りなくなることはないだろう…多分。

「それじゃ、先に行ってみるねキリヤ。乗ったら碎けそうなのは無視して、一人ずつ渡ろう！」

「おー、わかった。一応転移結晶で管理区に戻れるようにしとくんぞー」

「…本当に大丈夫かな…。キリヤは心配じゃないの？」
ストレアは前に進む僕にそう聞いてきた。

「………。今日のフィリアが率先して危ないことをしていることか？
それとも《ラフィン・コフィン笑う棺桶》の奴らがここにいたことか？」

「…どつちも。」
…ストレアはフィリアのことをものすごく気に入ったらしい。

まあ、わからなくもない。僕もフィリアと友達でありたい、本人にはまだ言えてないけど。

「僕は、フィリアを信じたい。助けてほしい時はきつと言ってくれる、といいなあ。」

僕の希望的観測に苦笑しながらも、ストレアは優しい声で肯定してくれた。

「…そうだね。その時は全力で力になってあげてね、キリヤ。アタシも頑張ってみるからさ」

その言葉にうれしくなった僕は、鼻歌を歌いながらフィリアの後を追う。

「…ありがと。そんなときはよろしく！」

浮島エリアを超えてたどり着いたのは、巨大な塔だった。

「そういえば、この辺りに飛んでったよね、あのドラゴン。」

やっぱりあいつがエリアボスなのかな」

フィリアはあのドラゴンが気になったらしい。たしかにこの辺にいそいだなあのとカゲ。

「あんな自信満々に出てきたのに中ボスだったら爆笑なんだけどな。」

「さすがに固有グラフィックもらつといて中ボスは………ないと思うけど。」

中にいるモンスターを倒しながら塔をマッピングしていく。

…なんとなく武器を持ったのが多い気がするな。

「てつきりドラゴン系が住んでるのかなと思つてただけどさ、割と武器で武装してるね、ここの敵」

ストレアの言葉にうなづく。…一体どういうことだろうか。

ドラゴンが統治しているのなら、サイズが小さい同種がうろついてもおかしくないんだけどな。

「………。同種がない、とか？」

フィリアの予想は、なんとなく当たっているような気がする。

そうしてたどり着いたボス部屋の入り口と転移石がある部屋は、

美しい剣が何本も壁に飾られておりいかにも凝っている。

「ところで、今何時くらいかな。十九時には戻ってきて夕食って言われてただけど」

フィリアはアイテム整理をしている手をいったん止め、時間を確認する。

「…もう六時過ぎてるよ。」

「………。帰ろうか！」

一度解散することになった僕たちは、ホロウ・エリアを後にした。

ストレアと別れ、赤羽亭に戻った僕はシノンと夕食を食べると、速攻で寝てしまった。

…POH達とニアミスしたことで、精神的に疲れていたのかもしれない。

明日は、誰を誘おう、かな……。

第二十五話 王の剣ゾーディアス

翌日、朝食を食べた僕はストレアと待ち合わせ場所で落ち合おうと宿を出ようとする。

すると、シノンに呼び止められた。

「…………。ねえ、昨日うなされてたけど。」

「…マジ？ 僕なんか言ってた？」

「ラフコフがどうしたの…？ あいつらはもう、いないんじゃない？！」
言うべきじゃない。間違いなくシノンにだけは伝えるべきではない……！

ラフィン・コフィンがホロウ・エリアにいたなんて……。

「い、いやー、ラフコフ殲滅の時の夢でも見てたんだよ、きつと。」

シノンが気にする必要はないよ。」

シノンは無言でうつむいている。……表情が見えないのってこわいな。

「………………。」

「……なんか言つてよ。」

「…ばか!! こっちの気も知らないで!!」

いつもいつも私を部外者にしようとして!!! 守られるだけなんていやだって、前に言ったわよね!?

あんたね、いつまでもこっちが大人しく聞いてると思ったら大間違いよー!

ホロウ・エリアでお金稼ぎしてるのも、自分のためなんでしょう!？」

「え、あの…」

「キリヤのばか！ 今日もう帰ってくるな！」

シノンは僕がフリーズしている間に部屋に戻って行ってしまった。
「…………。どうすればよかったんだ…。」

考えても答えは出なかった。彼女のストレステストなんてしたくないが、最近は隠し事ばかりになってしまっていたのも事実だ。

「…キリヤ、だからってわたしに相談するのは駄目だよ…？」

だってそれごまかしたキリヤが悪いんじゃないかな」

「追いかけてシノンとじっくり話すべきだったと思う。ぶつちやけ今シノンをはったらかしてホロウ・エリアにいる時点で…ねー?」

フィリアとストレリアに話した結果、火の玉ストレートの正論が飛んできた。

「…グハツツ!! …わ、わかってはいるんだよ、自分が悪いのは…。でもPKとニアミスしたとかお金が欲しい理由とか言いたくないんだって!」

「…もうその段階になったらごまかすのは無理だよ。とりあえず待つとくから、シノンと話してきなよ。」

「…………。そうだな、フィリア。ちよつと戻って話してくるけど、もしかしたらボスは明日になるかも。」

「いいよー。じゃ、またね」

《赤羽亭》に戻った僕は、宿屋のドアの前に陣取る少女に驚いた。

…なぜなら、僕は彼女がここに来る理由なんてないし、そもそも僕らがここに宿泊していることも知らないと思っていたから。

「久しぶりね、キリヤ君。最近最前線で見なくなったから死んだんじゃないかって噂が流れてるくらいよ?」

血盟騎士団の副団長にしてこのアインクラッドで一番有名な女剣士、《閃光》のアスナは微笑んだ。

「…………。誰から買ったんです?…ここに宿泊してるのを知ってるのはアルゴとキリトくらいだと思ってただけだ」

「前にシノのんに普通に呼び出されたから知ってるだけよ。 …秘密主義もいいけれどほどほどにしておかないとね?」

…さっきまで泣いてたのよ、シノのん。今日は帰ってこないからって…!」

明らかに怒りをこらえた表情でこちらを見るアスナ。この口ぶりからするとさっきまで慰めていたのかもしれない。

「…………。そこ、通ってもいいですか?」

僕は、ちゃんと話し合うべきだったんだ。ラフコフがホロウ・エリアにいたとして、いずれ対策は打たなければいけなかった。

その時は自分だけでなんとかしようと思ってたけど、傲慢だよ

なあ。

「…私も同伴なら。」

部屋に入ると、ベッドでシノンが寝ていた。どう見てもふて寝だが、とにかく起こさないと。

「……シノン、おはよー。」

「………。…夢ね。だって今日は帰ってこないはずだし。」

シノンはふて寝を続行する。…なんかふきげんな子猫みたいだな。

その姿にちよつといたずらごころがわいてしまった僕は、シノンの頬をむにとつまんだ。

「むに、なにすんのよお…。 フィリアと遊ぶの楽しいんでしょ、私のことなんかほつといてよ。」

………はあ、嫉妬する自分が嫌になるわ…。」

「…。 まあ、フィリアと冒険するのは楽しいよ、うん。 否定はしないさ。」

でも、言いたいことがあるんだろ？ ……僕もだよ。」

「……。 先に言っていいいわよ。」

「じゃあ、遠慮なく。 ……ラフコフにでくわしちゃった、どうしよっか？」

しかもヒラ団員ならともかくPOHだったぜ、相変わらずのクソラック^{ラック}で笑えてくるね!!」

わっはっはとやけくそ気味に笑う。 ええい、良縁はまだいいが悪縁を引き寄せるのはなんとかならんのか！

「うわ、なんかヤバいことおきそう…:…:というかもう何かに巻き込まれてない?」

「そうだね、あいつら放置すんのはアカン。 …:…:というわけで、アスナさんにも協力してほしいんですが。」

急に話を振られたアスナは困った顔をする。

「…え、えー? …:ホロウ・エリアだっけ? シノのんからちよつと聞いたけど、そこってキリヤ君とあと一人しか入れないんだよね。」

協力ついても、ギルドを動かすのはムリだよ?」

「殺人対策金^{レット}、ラフコフ相手なら手を出せませんか?」

殺人対策金とは、殺人ギルドの暴挙に心を痛めた攻略ギルドやその協力者、中層プレイヤーが作った募金制度みたいなシステムだ。

回廊結晶は高い。個人で買ってたからわかるが、アレはギルド単位の集団でやっと手が届く代物だ。

殺人ギルド討伐の際にのみそういった高価なアイテムを購入し、殺人鬼の牢獄送りをスムーズにしようというわけだ。

「あ、たしかにラフコフなら殺人対策金使っていいかも。」

少し時間はかかるけど、鍵を持つてる団長とかリンドさんを説得してみる。」

「あ、よろしくお願いしまーす。」

「…またね、アスナ。 また一緒に料理しましょう?」

アスナはその美貌に柔らかな笑みを浮かべる。

「うん、またねシノのん、キリヤ君。 …私個人の力なら、できる限り貸すからね!」

そう言い残して彼女は部屋を後にした。

「…人たらしの才能あるよな、あの人。 …今日はゆつくりできるけど、どうする?」

フィリアには明日まで待つていいよとは言われたけど。」

「ん、行こうよホロウ・エリア。 ちよつと体動かしたいし。 …妄想世界だから少しおかしいかな?」

「…べつにいいんじゃない? 今はここが現実だし。」

午後三時を過ぎたころ、僕らはフィリアと合流してボス部屋前に向かってきた。

シノンたちは先頭の僕を横目になにやら後ろで話している。

「…」応聞くけど、ちゃんと話せたんだよね?」

フィリアは心配そうにシノンに聞いているが、

「大丈夫、とりあえずヤバそうなのがいるのは聞いた。 …すねてる暇はなさそうだしね。 今日のボス戦、がんばりましょう!」

…仲良いなあ。 これなら連携もうまくいきそうだと判断して、ボス部屋の扉を開ける。

「…いこう! あのクソドラゴンの翼を穴だらけにしてやろうぜ!」

「おー！」

「じゃあ、私は翼を狙ってみるわね。空を飛ぶ相手なら、弓が効くはずだし。」

階段をのぼり、塔の頂点に巣くうドラゴンと対峙する。

空から降りてきた《刃竜ゾーディアス》は、こちらを見て……、いや違う！

こいつは、僕の剣を観察している!!

『…良キ剣ダ。我ガ宝物ニ相応シイ魔剣デアル。』

人間二価値ハナイ。我以外ノ竜モマタ、無価値ダ。 …ダガ、貴

様ラ人間ノ剣ハイイ。

剣コソガ究極ノ機能美デアリ芸術、故ニ我ハ募集スルノダ!!』

…なるほど。つまりこいつは黄金の塊や美姫よりも、聖剣や魔剣に魅せられたのだ。

ある意味ではゲーマーの欲望とそう変わらないだろう。だが…

「…悪いが、《ウロヴオロス》はくれてやるわけにはいかないんだよ！

逆にてめーの尻尾の剣を切り取って売り払ってやる!!」

ゾーディアスは自身の尻尾を数秒間見つめた後、怒りの咆哮を挙げながらこちらに向かって突っ込んできた!!

『…………。ヤツテミロ下等生物ガアアアアアア!!』

ゾーディアスの尻尾の先に付いた宝剣が、青色に輝いた。

その光が何か、わからないわけではない。

「ド、ドラゴンがソードスキルだ?! ふぎけん、それ許したら何でもありじゃん!!」

ゾーディアスのスキルは突進系だったらしく、全員横に回避する。

…………。 まともに当たったら塔の外に叩き出されて落下死だな

これ！

「さて、まずは行動パターンを把握しなきゃ。二人とも、ソードスキルの範囲と威力が未知数な相手に無理は禁物だぞー！」

まずはボスの観察からだ。 …前提としてこいつはドラゴンのくせにソードスキルが使える。

突然変異なのかこいつ自身がそういう種類かはちよつとわからないが、ほかの竜に対し手札の数で有利なのは明らかだ。

しかし、それ以外はドラゴン系のモーシオンを流用しているようだ。

七分を回避にあてた僕たちは、ゾーディアスに反撃を始めた。

「じゃあ、狙ってみましょうか！ …そこっ！」

シノンが狙いを定めると、ゾーディアスの翼に三本の矢を撃ちこむ。

…思ったよりも減らなかった。

空を飛ぶ相手は翼を攻撃しまくると地上に落ちて隙だらけになる…が、ゾーディアスの肉体は硬い。

シノンが撃った矢が致命傷にならないと判断したゾーディアスはシノンを無視し僕に執拗な攻撃を仕掛けてくる。

「あ、コラー！ こっち向きなさいよ!!」

シノンは怒っているが、当の相手は彼女のことをまったく気にしない。

僕は『オレ』に切り替え、《ファイトブレイド》でボスの足を攻撃する。

『オレ』の放ったソードスキルは相手のHPバーをほんの少し削るが、どうもハズレの部位だったようで鱗を数枚斬れたものの弾かれた。

『グハハ!! 我ノ鱗ヲ碎クカ、良イ剣ダ!!』

ゾーディアスは嬉しそうに大笑いしてやがる。

……………。 なんかだんだん腹立ってきたな。

レアアイテムドロップする奴がプレイヤーに延々と追いかけてまわされる時ってこんな気分なのかもしれない。

「……………。 こいつ全身硬くない？ わたしの武器全然刺さんないんだけどー!？」

フィリアが悲鳴をあげているが、『オレ』もめんどくさくなってきたな…。

…無言で弓を撃ち続けていたシノンがイラツとした顔でこっちに

近づくと

「……………この前リズベツトに作ってもらったやつ試してもいいかしら。」

と手に持ったそれを見せてくる。

それは、一本の矢だ。その矢じりはかなり高ランクの金属でできているらしく、ドリル状に加工された先端が妖しく輝いている。

リズベツトはどういう気持ちでこのゲテモノ作ったんだろうか…。

「……………それで翼を撃つたらどうなる?」

「単発系で一番威力があるソードスキルなら、多分撃ち抜けると思うわ。」

キリヤ、思いつきり目立って私に意識を向けさせないで。」

その言葉に頷いて、剣を握りなおす。ゾーディアスの翼を破壊すれば戦況は一気に傾くはずだ。

この状況でダメージとヘイトを稼ぐなら奥義しかない。

「く、らえええええ!!」

『オレ』はゾーディアスのソードスキルを一撃目で相殺すると、そこから勢いよく五連撃を叩き込んだ。

武器スキルマスターで使用可能になる最上位ソードスキルの一つ、両手剣六連撃技《カラミティ・デザスター》だ。

スキル硬直したゾーディアスの肉体を抉り取り、女子たちの事を一瞬忘却したゾーディアスの死角に移動したシノンが切り札を構える。

…その日、僕は何年ぶりの流星を見た。

竜の左翼を撃ち抜き破壊しても、なお空へ飛翔する矢に思わず目をそちらに向けてしまった。

それほどまで速く、見惚れるほどに美しい。

ある意味、シノンを弟子にしたあの日から、夢見ていた光景に、思わず涙腺が緩む。

『グオオオオオオオオ!!??』

ボスの絶叫で現実を引き戻された僕は、ゾーディアスに向き直る。

ゾーディアスは欠損した左翼で飛べるはずもなく、地に叩きつけられた。

「さて。…やるか。」

『バ、馬鹿ナアアアアア!! ワ、我が敗北スルトハアアアアアア
!!!』

ゾーディアスがそう叫んだすぐ後に爆散し、世界は静かになった。

「……………今回はあんまり活躍できなかったなあ…。」

フィリアの悲しそうな声に僕はフォローを入れる。

「しようがないさ、そういう日もあるよ。シノンのアレがなかったら
一回退くことも考えたし」

「…ありがと。ところで、ペンダントは？」

ストレージからペンダントを取り出してみると、再び光が灯っている。

「よし、これで次のエリアに行けるな！」

「…ねえ、もしかしてこのまま新しいエリアに行くの？」

シノンの質問に肩をすくめながら答える。

「さすがに無理かな、あいつに体力奪われすぎた。疲れたから一回帰ろうぜー。」

〈SIDE：フィリア〉

「じゃ、またね。」

キリヤの言葉にうなずく。

「うん、また冒険しようね。」

キリヤ達はアインクラッドへ戻っていった。…今のわたしは、ホロウ・エリアに囚われた囚人なのだということを実感してしまう。

「…やっぱり…。わたしとキリヤたちは違う世界で生きてるんだ。」

わたしの独り言に、誰かが答えた。

「へえ、わかっているじゃねえか。」

「…っ!?…だ、誰?！」

現れたのは、フードを深く被った男。いや、そこはたいして重要なことじゃない。

…その男は犯罪カーソルオレンジだった。

しかも、この前PKをしていたやつらの仲間だ。

「なに気にすることはないぜ。あいつとオレたちは違う、だろ？」
オレンジ・ホロウ
《虚ろな罪人》のフィリアア？」

その奇妙な造語に、なぜか背がぞわつとする。

「…《虚ろな罪人》…？ いや、そもそもあんたどうやってここにきたの!？」

あの転移石が動くのは、キリヤの持っている紋様のおかげだとばかり思っていた。

もしこいつがここを自由に出入りできるんなら大問題だ。

「別にいいじゃねえか、どうでもいいことだぜそれは。」

「殺されてやるつもりはない、失せろ殺人鬼！」

「…おう、今日はいいさつに來ただけだからな。帰るぜ」

わたしの言葉にやつは、こちらを笑いながらもここを去ろうとする。

…なんだこいつ、気味が悪い…。

「ああ、最後にこれは言つとこうじゃねえか。 …あいつと組んでると死ぬぜ？」

「…………え…？」

「また来るぜ、フィリアちゃんよオ。」

あの男が管理区から消えた後も、わたしは動くことができなかつた。そんなことよりも、ヤツの言葉がグルグルと頭の中で回り続けている。

「キリヤといると、しぬ…？ …そんな、わ…け…。」

…蜘蛛の巣に絡めとられたような気分だ。ここまで酷い気分は久しぶりだった。

きつと…今日は悪夢を見るに違いない。

「……………だれか、たすけて」

第二十六話 予期せぬ出会い

ゾーディアスを討伐した翌日、僕はアスナさんから呼び出されていた。

『キリヤ君、明日お休みが取れたからホロウ・エリアに行くんだったら誘ってほしいな！』

とうかそのために休みとりました、護衛は適当に撒くから、そっちにむかうねー』

…朝からメッセージを送ってくるなど言いたいけど、文面がすごく楽しみにしてそうなので怒る気になれない…。

かといって文句くらいは許されていいと思う。

「……………あの、今六時半…。」

「そうね、今日はよろしくねキリヤ君！ さっそくだけどホロウ・エリアへ行ってみましょう！」

「なんか楽しそうですね？ いいことでもありましたか？」

その言葉にニッコニコのアスナさんは軽やかにステップしながら理由を語る。

「だって、護衛が近くにいないのって久しぶりなんだもん。

…活動日ならともかく、休みの日にまでついてこようとするなんてサイテーだと思わない?！」

「それはもはやストーカーなのでは? ……あ、いや同性の可能性もあるかあ…。」

「男よ、その護衛」

「追放するべきでは?！」

少なくともそいつは護衛を辞めさせるべきでは?。

「やっぱり? 団長に言ってみただけどどこ吹く風というか。

……………この話もうやめようか。わいてきたら困るし」

よほど問題のある護衛なのかため息をついたアスナさんに、かける言葉が見つからない。

…部外者が首を突っ込むのはリスクを伴う。

それでもいつかお人好しの誰かが彼女の助けになると、僕は信じる

ことにした。

」

フィリアはフリーズしている。

…無理もないか、今回の相棒《閃光》^{パトナー}のアスナだもんなあ。

ある意味ではアルゴ以上の有名人、その細剣使いの容姿を誰もが直接にせよウィークリー・アルゴの記事の写真越しにせよ見たことがあるんじゃないかと思う。

「……………。本当に《犯罪》^{オレンジ}なのね。」

アスナさんはなにかぼそりつぶやくが、良く聞こえなかった。

「……………え？」

「……………なんでもないわ。よろしくね、フィリアさん。」

「あ…はい。……………」

あのフィリアが緊張している。…これはちよつとよくないな。

《犯罪》^{オレンジ}嫌いのアスナさんと《犯罪》^{オレンジ}のフィリア。

二人とも仲良くなりたいとは思いいにくくないだろうか。

僕だつて嫌いではあるけどなんでかフィリアは身内認定なんだよなあ。

「……………知ってると思うけど、私はアスナ。血盟騎士団の副団長よ。」

「…フィリア。わたしはトレジャーハンターのフィリア。…今日はよろしく、副団長さん」

…ほんの少し不思議そうな顔のアスナさんにひそひそと説明する。

「けっこうやりてなんですよ、この子。宝箱のことは任せてあげてくださいね。」

「そうなの？ならいいんだけど。」

「…大丈夫ですよ、悪い奴ではないです。」

フィリアの顔を見る。 退屈そうに足をプラプラさせている様子は、どこことなく子どもらしい。

「…おはなしはもう終わった？ そろそろいこう、キリヤ」

不機嫌そうなフィリアに苦笑しながら、僕らは新しいエリアへと向かった。

ペンダントで新たなエリアを開放すると、潮の匂いが鼻に届く。

そのまま歩いて行った僕らを待っていたのは、砂浜だった。

「…おお？ …う、海かこれ!？」

「アインクラッドにも、一応海水で満ちた階層はあるけれど…海そのものは初めて見たわね。」

せっかくだし後で釣りをしてもいいかもしれない。

カニの甲殻にヒビを入れると、二人がそこに正確な一撃を叩き込んでカニを仕留めた。

「…よし、いいかんじ！ ………。 ねえ、フィリアさん。」

「……なに？」

「最前線でもやっていけるわよ、あなた。 個人的にギルドにスカウトしたいくらいにはね」

アスナさんの笑みに変な顔をしながらも、フィリアは質問する。

「わたし犯罪^{オレンジ}だけど。 …そういう脛に傷がある人間を攻略ギルドに入れていいの？」

「なんとなくだけど、あなた殺しを進んでやるタイプじゃないでしょ？

罪をちゃんと償ってからということになるけど、血盟騎士団はあなたを歓迎するわ。」

「人を、殺したのにな？」

「殺したいから殺したの？」

ふるふると首を振るフィリアに、アスナさんはこう言った。

「考え続けることが大切なんじゃないかしら。 殺した相手のことで悪夢を見るかもしれない。」

殺したことで、自分の命の価値が大暴落して死にたくなるかもしれない。

…それでもお腹は減るのよね。 おいしいものを食べて、それから考えるのがいいと思うよ」

「…………… おぼえとく。」

しばらく海辺を進んでいくと、一人の剣士がコボルド相手に戦っているところに出くわした。

…ホロウ・エリアでも珍しくない光景だが、その髪色に僕は呆然と

する。

鮮やかな青色のそれは、同じ色を聖竜連合のリンドもやっていた……。

……待て。あいつは元々あの髪色じゃなかった。

あいつが染めた原因は、ディアベルが死んで代わりになろうと……。

「……………は？」

ぼくは、彼を知っていた。

もう、一年以上前第一層のボス攻略においてリーダーを担当し、唯一の死者になってしまった彼の名前は、《ディアベル》。

コボルドを《バーチカル・スクエア》で倒したディアベルは、呆然とする僕とアスナさんに気付く。

「おや、こんにちは！ 今日はいいい狩り日和だね、順調かい？」

「あ、えーと……まあボチボチ、かな」

当たり前障りのない返事に苦笑する。

「オレはディアベル、よろしくー！」

知ってるよ。なんであんだここにいるんだよ！

いやモルテもいるからあんだがいてもおかしくないんだが……！

「こんにちわ、ディアベルさん。私はアスナ、こっちは情報屋のキリヤ君で、この子はフィリアよ」

「アスナに、キリヤにフィリアか。君たち、このあたりには海賊が出るって話だから気をつけてね」

……海賊？

「えつと、具体的には？」

ディアベルは先ほどまで戦っていた場所をちらりと横目で見る。

「さっき戦っていたのは海賊の一味さ。……オレはここを牛耳っている海賊のカシラを倒したいと思ってる。

もし戦うつもりなら、オレも連れて行ってほしいんだ。………勿論、できる限りで礼はしたい。」

「……ちよつと作戦タイムいいですか？」

「ああ、もちろん。強制というわけじゃないからね」

ディアベルから少し離れた場所で僕たちは話し合いをすることに

したが…。

「ディアベルとコボルドってまんま死亡フラグじゃない?」

「それよりも死んだはずの彼がどうしてこんなところにいるの?」

アスナさんの疑問に答えたのはフィリア。

「たぶんだけど、ホロウ・エリアでうろついているプレイヤーは…本物じゃないんだ。」

プレイヤーのキャラクターデータとAIで何かしらの実験をしてるんじゃないかな?」

「…何かしら、とは…?」

「そこまではちよつとわかんない」

まあ、あのディアベルがコピーだろうとそこまで問題ではない…かな。問題ではないといいなあ。

くたばったはずのモルテが元気にPKしてるし誤差だよ。

「でもさ、海賊ってたぶんコボルドだよな?…ディアベルの死因じゃん!!」

「…ほつといたらまた真つ二つになるわね。もう二度とあんな酷い突然死は見たくないわ。」

ポカンとしていたフィリアは疑問に思ったらしい。

「えつと、知り合い?」

僕が簡単に説明すると、フィリアは困った顔をする。

「…第一層で一人だけ死んだっていうのは、聞いたことがあるけれど…。」

あの人、わりといい人みたい…。」

「死んだのが惜しいくらいだよ、あの男。…死んでなかったら巨大ギルドを作ってたかもな。」

…もちろん本心だ。でも、ラフコフの事を考えるとどこかで大惨事になってそうでもあるんだよな…。」

「…僕としては一緒にこのエリアを攻略するのはアリ、だと思う」

「ディアベルは片手剣と盾の壁役だからキリヤ君とローテーションできるし。」

コピーだとしたら死因と同じ状況になったらやらかすかも。」

「そうなら目覚めが悪くなるよ。目に見えるところで監視しとくのがいいんじゃないかな？」

フィリアの言葉に僕は頷いた。

壁役が一人増えるだけでパーティーの安定性は格段に増す。そういった意味でも手放すには惜しい人材がこちらから入ってくるのを止める理由はなかったからだ。

ディアベルのところに戻り、彼を歓迎することを伝えると、ディアベルは礼をする。

「ありがとう、三人とも！オレが生きてるうちは、誰も死なせないつもりで戦わせてもらうよ！」

「やめいそんな不吉なこと言うの！！　せつかく出会えたんだ。…全員で勝って、笑顔で帰ろう！！」

守りが厚くなった僕らのパーティーは、破竹の勢いで入り江エリアを攻略していった。

灯台の宝箱から出てきたハンマー《岩砕きのマトック》で坑道を防ぐクソ硬い岩を粉碎しながら、僕は考え続けていた。

…フィリアとの冒険をいつまで続けることができるだろう、と。いずれ僕は最前線に戻らなければならなくなる時期がくる。

…始めは攻略の助けになればいいなと思っただけだった。でも、フィリアとの冒険もすごく楽しかった。

ラフコフ討伐戦で疲労して壊れかけていた心は、シノンとフィリアとの交流で少しずつ癒されていったのだ。

この恩返しをしたいと常に考えているが、どうすればいいのかわからない。

ボス部屋の扉に手を掛けながら、僕は仲間たちの方を見た。

みんなのやる気に満ちた表情にこちらの気持ちも引き締まる。

…難しいことは後でいいか！　気持ちを切り替えたばくは目の前の扉を開けて、ボスに挑む。

第二十七話 リベンジマッチ

扉を開けた僕たちの前に、見覚えのある怪物が現れる。

コボルド族の王であり、この入り江エリアを略奪している海賊王。その名は《デトネイター・ザ・コボルドロード》!!

そのプレッシャーは一年以上前に戦った時よりも重く感じるが…。

「…いくわよ、キリヤ君、フィリア、ディアベルさん！」

何度だつて、倒してみせる！」

今回は戦^{アスナさん}乙女のやる気バリバリだぞ、負けるわけにはいかないっての!!

『グルラアアアアア!!』

コボルドロードが咆哮を挙げると、どこからか鎧で守りを固めたコボルドたちが現れた。

「行くぞフィリア、合わせろ!!」

「ええ、任せてキリヤ！」

僕は《サイクロン》で一体のコボルドをかちあげると、フィリアが僕を足場代わりにしながらジャンプし、追撃のソードスキルを撃つ。

「く、らえええ!!」

フィリアの放った《ラピッド・バイト》が隙をさらしたコボルドの首を刈り取った。

とにかくコボルドロードにはできるだけ離れて、取り巻きの数を減らす。

数が同じなら能力の高いボスがいる方が圧倒的に有利なのは小学生でも分かることだ。

ボスに気を取られて後ろから殴られるのはごめんだ。

アスナさんの《スター・スプラッシュ》が最後に残った取り巻きを串刺しにする。

「次っ！」

ディアベルと交代しながらコボルドロードの足止めをしていた僕は、わざと奴の攻撃で後ろに下がる。

「スイッチ！」

アスナさんが入れ替わり《カドラブル・ペイン》が海賊に叩き込まれる。

『ガッ!?!』

コボルドロードは急所を突かれ怯むが、数拍遅れながらもアスナさんに斧を振り下ろそうとする。

ガキンッ!!

その一撃をディアベルのバックラーが阻んだ。

「ぐ、くうッ! 大丈夫かい、アスナさん!」

「ええ、ありがとう! でもあまり無理はしないで!」

「もちろん、さ!!」

パリングで斧を弾き、ディアベルの放った《シャープネイル》がボスにクリティカルヒットする。

『グルルド…!!』

忌々しそうに唸るコボルドロードに笑みを浮かべる。

「…どんな気分だ、エリアボス。こっちはまだ余裕があるぞ。」

その言葉を理解している…のかは定かではないが、ボスは斧を放り投げると腰に着けた副武装サブウェポンに手を伸ばす。

ファイリアがそれを見て叫んだ。

「副武装サブウェポンに切り替わるわ!」

コボルドロードが構えた武器は…七支刀!?

現実世界では実践的な武器ではないが、このSAOではボスなどの強敵がドロップすることもある強力な武器だ。

基本的には刀の上位武器と考えていいだろう。

どうするべきか思考を巡らせる…まさにその時。

「おおおおお!!」

騎士がボスの前に躍り出た。

「デイ、ディアベル!!」

……最悪に近い展開だ。

このままでは第一層ボス戦の再現が起こってしまう。

あの時は、たしかディアベルがボスにとどめを刺そうとして…刀スキルの《幻月》がスキルモーションを起こした直後のディアベルを両

断したのだ。

ディアベルはHPがわりと残っていたはずなので、運悪く真クリティカルが発生し事故死した…というのが僕の考察。

でもアレはまともに喰らうと三連撃技の《緋扇》が飛んでくるからどの道殺されてしまう。

技後硬直が比較的短い刀系のスキルコンボは、全身鎧を纏った僕では間に合わない!!

「アスナさん!!!」

……そう、僕ではね。

アスナさんの速さなら一撃目でスタンしたディアベルを二撃目のスキルから守れる。

「ちよつとごめんなさい!」

アスナさんはディアベルをお姫様抱っこで抱え上げると、安全圏まで走り抜けた。

「!?!」

ディアベルは数秒ほど目を白黒させると、泣きそうな顔で文句ありげにこちらを見る。

「……なぜ、助けたんだ。…オレは、君たちを利用したんだぞ。最後の一撃をかすめ取ろうとしたんだ」

「ラストアタックボーナスなんか別にいらん。」

僕は彼の言葉を切り捨てた。そんなもんより全員生き延びて勝つ方が何倍も価値がある。

「……それでも、オレは君たちの信頼を裏切った。」

「ここでボス部屋から逃げなく逃げるよりマシだよ。」

フィリアの言葉にディアベルは目を見開き、少しだけ笑った。

「……………ああ、そうだな。ここで逃げるほうが余程格好悪いじゃないか。

…すまない。こんなオレでもいいんなら、一緒に戦ってくれ!」

その言葉に反対する者はいなかった。

「これで、どつ!?!」

「いくわよ!」

フィリアの《ファッド・エッジ》とアスナさんの《アクセル・スタブ》にコボルドロードが怯む。

「キリヤ!!」 「ディアベルさん!!」

その呼びかけに僕とディアベルは走り出した。ボスのHPバーはもはや残り少なくてここを逃せばボスの硬直が解けてしまう。

このチャンス、無駄にはしない!

「!!! ス イ ッ チ !」 「!!!」

「おおおおお!!」

「はあッ!!」

《ファイトブレイド》と《ホリゾンタル・スクエア》が、海賊王の体を切り裂いた!!

『グラアアアアアアアアアア!!!』

断末魔の叫びを挙げたコボルドロードが爆散する。

ディアベルの方を見ると、どこか少年らしい笑みを浮かべながら拳を突き出していた。

ポカンと口を開けるが、ふと僕はその拳に第一層ボス戦後のことを思い出した。

キリトとグータッチをやろうとしたらキバオウに糾弾されて、結局できなかったのは少しだけ心残りではあった。

あの時のやり直し、というわけでもないけれどグータッチに応じる。

それを見ていたフィリアがふくれっ面でこっちを見ていた。

「むう…いいなあ。」

いじける少女に苦笑いしながら手を高く上げる。

「フィリアもおつかれさま、ほら!」

「!! いえーい!」

パンツ!という音でハイタッチする。 : フィリアともだいぶ仲良くなったよな、初めは呉越同舟みたいなもんだったけど、今はもうフィリアとの冒険が楽しい。

「…ところで、ラストアタックボーナスどっちが取ったの?」

アスナさんの一言でハッと我に返る。そーいや僕のところには出て

ねーな！

「おめでとう、ディアベル！」

ディアベルは何かを考えると、ストレージを操作し始めた。僕目の前にトレード用のウィンドウが現れる。

「…あげるよ」

トレード場面に出てきたのは装備品らしきアイテム。ディアベルが手に入れたラストアタックボーナスだということはすぐにわかった。

「……せつかく手に入れたのにいいのか？」

「いいんだよ。…もし、オレの目論見がバレずにこれを手に入れたとして…きつとこいつを装備するたびに仲間をだましたことを思い出すんだろ？」

…騎士がそれじゃあカツコ悪いだろ？」

少し照れながら笑みを浮かべるディアベルにそこまで言われたら、こちらとしても断る理由はない。

装備してみると赤みの強いオレンジ色のマントが僕の背に現れた。

名前は《黄昏の外套》マント・オブ・トワイライトというらしい。

「なるほど、夕焼けの色だな。…どうかな？にあってる？」

「カツコイイよ！いいじゃん、なんか騎士っぽい！」

「太陽の模様はベタすぎな気もするけど。それ白い鎧のほうが似合うんじゃない？」

フィリアは褒めてくれたがアスナさんの評価は微妙。…まあ、紫色の鎧じゃ無理もないか。

「さて、キリヤたちはこれからどうするんだ？」

ディアベルが尋ねる。

「うーん。…とりあえず今日は帰ろうかな。ディアベルは？」

「……先に帰っていい、オレはまだやることがあるからな。……また会おう、キリヤ。」

「……………?? ああ、またな。」

〈SIDE：ディアベル〉

キリヤ達と別れ、オレは一人ダンジョンを歩いていた。鼻歌を歌いながら歩くオレの気分は逆に落ち込んでいく。

……どろりとした殺意が死角からまとわりついてくることを喜ぶやつはいない。

「……………気づいてるよ。どうせバレてるんなら出てきてもいいだろう？」

ジジツという音とともに、四人の人間が虚空から現れる。

《ハイディング隠蔽》を解除して現れた彼らのカーソルは予想通り犯罪に染まっていた。

「よオ、今日は良い夜だな騎士サマよオ…死ぬにはなア!!!」

オレは剣を抜いた。死ぬためではなく生きる為に。

「悪いが、ここで死ぬわけにはいかないな！」

ニヤリと笑う。生き残る可能性が1%でもあるのなら、抗ってみせる！

「おおおおお!!!」

「イツツ ショウタイム」

〈SIDE：フィリア〉

深夜になつてもわたしは眠ることができなかった。

この管理区は圈内だが犯罪オレンジプレイヤーも入ることができる。

……今までは、それでもよかった。犯罪オレンジのわたしでもモンスターに襲われることなく休むことができたからだ。

今はちがう。ここは安全地帯ではなく人殺しを日常的に楽しむ連中が入ってこれる。

「よオ、いつまであのイカれた狂犬とつるんでるつもりだ？」

「犯罪ギルドのアンタに教えるとも思ってるの!?!」

そいつは肩をすくめながらわたしを嘲笑ってきた。

「いや、マジで心配してんだぜ？言っただろ、このままじゃ死ぬって。殺されるんだよ、おまえは。」

「……………えっ？」

意味が、わからない。わかりたく、ない。

「あいつの正体を知ってたらそんなのんきにできるわけがねエ、知
てエか?……知りてエよなア!」

「しよう、たい?」

「あいつの二つ名さ。…聞いたことねエか? 犯罪ギルドをたった一人
で壊滅させるバケモンのことをよオ!!」

「あいつの名は、〈暗黒騎士〉だ!!!」

「え、え……?」

それは、^{オレンジ}犯罪ギルドを壊滅させる事のみ^{オレンジ}に力を使う正体不明の剣
士。

それは正義の味方というより、悪の敵というのが正しい。

…キリヤの優しい笑顔と、まったく結びつかない。

『あいつがそんなことをするはずない』…とでも思ってたのか?

そう思わせてから後ろからザクツとやるのがあの野郎だ。それに、
暗黒騎士のやつを止めなきや全員死ぬんだぜエ?」

「アンタに何がわかるっていうの!!!」

「あの狂犬はおまえの事なんざなくとも思ってたねエよ! あいつは強
くなりてエだけだ!!」

この男の言うことは、絶対でたらめだ! ……でたらめで、あつて
ほしい。

「…それより全員死ぬとはどうゆうこと、キリヤがなにかしたらホロ
ウ・エリアが爆散でもするの!」

「…勘がいいじゃねエか。あいつをほっとけばまず間違いなくこの世
界はクリアされちまうだろうな。

そうなればどうなると思う?」

「…現実世界に帰れる。」

「違うねエ!! なアファイリア、薄々わかってんだろ? 自分が何者なのか
!!

…《ホロウ》だよ、おまえは。」

「……………ほ、ろう?」

男は囁う。

「《ホロウ》ってのはプレイヤーのコピーだ。このホロウ・エリアでし

か存在できねエ、NPCの亜種さ。

おまえは、人間じゃねエんだよ、わかるか？」

「……………うそ、だ。そんな、わけ…」

「全部知ってたんだよ。取り繕う必要はないぜエ？」

「このままじゃこいつの思うつぼだ、なにか、なにか情報を…」

「アンタ、何が言いたいのかさつきから!!どうせ本題はまだ言ってないでしょう!？」

「ああ、ちよつとあいつを裏切れ。あいつがこのゲームをクリアしちまえば、おれらは消されるからなア。

なに、ちよーつとだけ誘導するだけさ、死ぬわけじゃアない。それどころかおまえは手を汚さねエんだ、断る理由はねエだろう?」

「……………」

「…次会うときに返事を頼むぜエ。なに、悪い話でもねエさ。おれの計画が全部うまくいけば、あいつはこのホロウ・エリアに永遠に留まることがになる。」

それはおまえの望みのはずだ」

…やつは管理区から出ていったが、仮想の心臓は早鐘を打ち続ける。

「……………きり、や。」

第二十八話 裏切り

〈SIDE：キリト〉

迷宮区でたまたまキリヤと出くわした俺は、弟の背に見覚えのない装備がついていることに気づいた。

オレンジ色のレアそうなマントだ。おそらくホロウ・エリアで入手したものだろう。

「よお、キリヤ。……あー、いいマントだな。例のところでゲットしたのか？」

俺の質問にキリヤはため息をつく。

「…すなおに連れて行ってくれと言ったらいいのに。はつきり言わないと誤解されるよ、キリト」

「…そーだな、すまん。この前アルゴのヤツがクツソ楽しそうに煽ってきてな…。」

ええい、なんでおまえ以外はノーパスで入れないんだ！ ずるくね!?!」

「うーん。たまたまじゃないか？ ぶっちゃけ僕がホロウ・エリアに迷い込んだ原因もよくわかんないし。」

もしかしたらキリトがホロウ・エリアに飛ばされてた可能性もあるかも。」

なんとなくだが言いたいことはわかった。これ以上気にするのはやめよう。

「まあいいか。もうそろそろこの階層のフロアボスが見つかってもいい頃だし、油断するなよ。」

俺の軽口にキリヤは笑って頷いた。

「あはは、そっちょそー！」

その後は和やかに話をして、後日ホロウ・エリアへ行く約束を取り付けることができた。

キリヤもいきなりは困るだろうし少し準備をしてから頼んでみるか。

〈SIDE：キリヤ〉

「…ちえつ。今日はみーんな予定が入ってるのか…。…まあいいか、今日は一人でも。」

ホロウ・エリアでフィリアと新エリアに行ってみようかな」

アスナさんはKOBの会議、アルゴは連絡がつかない。シノンは前からやりたかったらしいクエストたちの消化中。

キリトとストレアは…。…なんか二人で激辛チャレンジしてたから無視。声掛けたら絶対巻き込まれるやつじゃん。

…それはそれとしてあの二人いつの間にか仲良くなったな、良いことではあるけど…。

ホロウ・エリアに着いた僕は、すぐフィリアに話しかけられた。

「…ん、こんにちは、キリヤ。今日は新エリアの攻略だよね！わたし、楽しみにしてたんだ！」

その言葉はどことなく元気がないように見えた。声は大きいものの覇気がない。

「なんか調子悪そうだけど大丈夫…。？今日は無理せずに休む？」

二へつとフィリアは笑う。

「だいじょーぶ、今日はよく寝れたしこう見えて絶対調だよ？心配しないで？」

…いや、ごまかせないレベルで顔青いんだけど。

「…やばいと思つたらすぐ言いなよ。フィリアがオークの斧で頭をかち割られるところなんて見たくない。」

「……………うん、ありがと」

入り江エリアの封印を抜け、深い森の中を進む。

巨大きのこの紫色の粉（つまり毒）をサイドステップで回避し剣を縦に振り下ろす。

どう考えても斬撃に弱そうなきのこは剣と同じ方向に裂けていき真つ二つになったところで消滅した。

ストレージのきのこのフレーバーテキストに引きつった笑みが出る。

書いてあることがどう見ても猛毒で、食ったやつは激痛とともにきのこのが身体中に生え絶命するというシヤレにならないものだったか

らだ。

「……うつわあ……。毒きのこだから食べないよなこれ。…ファイリア？」

…管理区にいた時よりもしんどそうに肩で息をしている。

「…ファイリア、さつきより顔がひどいことになってるぞ?!ほら、ちよつとそこで休もう!」

ダンジョンの中だとしても見張りをすれば少しはマシだろう。

「……ごめん、キリヤ。わたしが誘ったのにこんな感じで…。」

木に縁りかかったファイリアが謝罪してくるが、気に病むことはないと思う。

「いいよ、謝んなくても。誰でも調子が悪い時はあるし、仲間だろ?」

「…うん。」

二人とも、しばらく無言がつづく。ファイリアの様子を見ると、気づけたことがあった。

なにか大きな悩みが彼女の心に重くのしかかっている。

しかも昨日今日のそれじゃないのかもしれない。読心術なんてないからほぼ勘だけど。

「…なんか悩んでる?」

「……やさしいね、キリヤは。」

「当然のことだろ。仲間を見捨てるほど堕ちてないぞ僕は。」

…やっぱり相当まいってるな?このままじゃ次のエリアまで持たないかもしれない、一度帰ってからゆつくり休んだほうがいいかも。

そのことを伝えてみると彼女も絶不調なのは分かっているのか素直に言うことを聞いてくれた。

ファイリアに負担がかからないように敵をガン無視で転移石に向かう。

問題なく管理区に戻った僕の手を、ファイリアが掴む。

「……ファイリア…?」

ガタガタと震えている少女の姿は、まるで迷子になってしまった子どものようだ。

「わたし、死にたくない。…消えたく、ないよ。」

その言葉になにを言うべきか迷ってしまう。死にたくないという気持ちはわかる…がこれは……。

悩んでいる間にするりと手を離れたフィリアは、明らかに無理して笑顔をつくった。

「じゃあ、またね！……つぎ、会うときはいつも通りに戻るから、さ……。」

……こまったな、僕じゃダメかもしれない。『オレ』に変えてみ…いやアカン、なんか突拍子もないことを言いかねんし。

「……ちゃんと寝なよ、美味しいもの食べてリラックスして、それからまた冒険しよう。」

「……うん。」

それから数日後、約束通りキリトと一緒にホロウ・エリアに向かう。キリトはウキウキしてるがこつちとしてはフィリアのことが心配だ。

「…………。なあ、キリト。聞いてもいいか？」

「~~~~♪ ん？なにか困ってることがあるのか？」

ご機嫌な兄に質問を投げかける。

「……キリトなら、死にたくない、消えたくないって泣いている女の子になんて声をかけてあげる？」

ニコニコしていたキリトの顔が一瞬で真顔に変わる。

うーんと腕組みをしながら難しい顔で悩みながらも、ため息をつきながら兄は答えてくれた。

「……前に、きみは死なせないと言った女の子を目の前で殺されたよ。残念だが力にはなれそうにないな……。」

うわ、地雷踏んだか!?

「……ごめん。」

「いいよ、俺も悪かった。……後悔だけはしないようにな。」

…キリトにとっても大きな古傷だろうに、こちらの悩みにちゃんと考えてくれたことで少しだけ気が楽になった。

「うん、わかった。…それはそれとして今度メシ奢る。」

ホロウ・エリアの管理区でフィリアと合流して、キリトを紹介する。

「こいつの兄貴のキリトだ。よろしく」

「フィリアよ。…まさか双子だったなんて…。」

フィリアはさすがに驚いたようで、僕らの顔を見比べている。

「ちなみに額の傷で判別できるから間違われたことはほぼない！

服の交換で入れ替わるあるあるネタができないのは残念だよな、キリト！」

「いやいや、別にいいだろそんなこと！」

しばらくキリトと漫才したあと、フィリアの顔をチラツツと見る。

この前よりかマシ……か？

「…行こうか、フィリア。無理はしないでね。」

「…もちろん。たよりにしてるよ、キリヤ。」

森を抜け、僕たちを待っていたのは、とんでもなく巨大な穴。

落ちたらひとたまりもないだろうことは誰が見ても明らかだ。

「おー。スゲーところだな。どれ…。」

キリトは下を覗き込むと、「……………ははっ」と乾いた笑みを浮かべた。

「…落ちないようにね。」

ダンジョンの途中で出くわした敵にキリトが嬉しそうに斬りかかる。

「くらえええトカゲ人間!!」

『ぎゃばー!!?』

キリトの《ヴォーパル・ストライク》が敵を思いつきりぶちぬくの、僕は複雑な目で見つめていた。

…前にくらったからわかるけどあれ衝撃がすごいし頭が真っ白になるんだよな。

十二月に撃ちこまれたあたりをさすりながら、敵に少しだけ同情する。

…突然、フィリアが口を開いた。

「ねえ、キリヤ。あそこの壁を見て。」

「…お、隠し扉？やっぱすごいな、フィリアは！」

その扉を開けると、宝箱がデーンと待ち構えていた。中に敵がいる

気配もない。

「…キリヤ、お兄さんと一緒に入り口を見張っててくれる…？」

「うん。宝箱は任せるよ」

しばらくカチャカチャという音をBGMにキリトとしゃべっていると、後ろからフィリアが声をかけてきた。

キリトとの会話を一旦やめてフィリアの話聞く。

「…ねえ、キリヤ。わたしが、人を殺して、^{オレンジ}犯罪者になった理由を聞かなかったのは、どうして…？…？」

「…聞かれたくないだろ、そんなこと。…僕だつて一ヶ月前に人を殺した。」

自分が嫌なことを人に聞くのは失礼だ。情報屋として聞かなきゃいけない時以外は聞かない。それに、仲間だろう？」

「そつか。…やさしいね、キリヤは…。でも、そんな風に言ってもらえる…ひっ…、いや、性格じゃないからね」

「…それに、いつも助けてもらってるしな」

そういつた瞬間、嗚咽のような声が聞こえて。

「違うの!! …わたしは、わた、しは…わたしをころしたの。」

それは絶望の叫びだった。

「ふいり、あ…？」

「わたしも、キリヤと同じで気づいたらここにいたの。そうしたら、誰かが目の前にあらわれたの。…わたしだった。」

「…ちよ、ちよつと待てー…なんかのイベントじゃないのか？ドツペルゲンガーなんてゲームのイベントとしてはありふれてるだろ！」

思わず飛び出したキリトの疑問に、フィリアは叫んだ。

「NPCとプレイヤーを間違えるわけない!!…あれは、わたしだった。

しんじられる…？無我夢中で、必死だった。気づいたらわたしはきえてて、^{オレンジ}犯罪者になってたの。」

「フィリア、落ち着け!!」

「どんな贖罪も、意味がないの！わたしは、ずっとこの世界で生きなきゃいけないの!!」

フィリアはパニックを起こしている。最悪の場合フィリアが狂乱

のままに短剣で襲ってくるかもしれない。

「…わたし…あなたに出会わなければよかった…。こんなきもちに、なるくらいなら…。」

「…そんなわけあるか！『オレ』は、『オレ』は君にあえてよかった！この世界が嫌いなんだったら、出る方法を一緒に探そう、ファイリア！」

「……。ありがとう、キリヤ。…でも、すこしだけ我慢してて。」

ドンツ！

「……………え」

だけれかが、『オレ』の背を思いつきり押し出す。バランスを取ろうとして左足を前に出そうとして、見事にからぶった。

右を見ると同じように押されたであろう兄の姿が見える。その顔が、怒りに染まっていた。

「POH———!!!」

「あばよ、暗黒騎士、黒の剣士イ!!」

「……………ごめんね、キリヤ」

ファイリアのその謝罪の声だけが、やけによく聞こえた。

…幸いなことに、落下死させる類の罠ではなかったらしく二人とも難なく着地する。

「…生きてるか、キリヤ。麻痺はしてないな？」

「うん。……………さっきの声、聞こえた？」

キリトはうなづいた。

「…POHに待ち伏せされてたらしいな。おそらく、騙したファイリアを利用してこつちを殺すつもりだ。」

…どうせここは高レベルモンスターがうようよいる結晶無効化工リアだろう。」

POHのもっとも厄介なところは話術による思考の誘導だ。

…心がへたっている人間を操るのはお手のものだろう。

「…ここを出よう、キリト。あのクソがファイリアをそのまま生かすとは思えない。」

ひとまずここから出て、ここを知ってる連中に相談しなきゃ。」

キリトは《暗視》と《索敵》で近くの敵の質と量を確認すると、『オレ』に向かってニヤリと笑った。

「とりあえずレベル的には正面突破で何とかなる程度だな！」

「……………自分でいっててなんだがほんとに？……………まあ、後ろに気を付けていこうぜ。」

「…POHはどうやら、『オレ』とキリトをこのダンジョンのモンスターハウスでMPKを企んでいたらしいが、どこか違和感がある。

あいつなら落とした先に殺人鬼をダース単位で待ち伏せさせて隙をみせたら滅多打ちでもおかしくない。

「…どう思う？なんかPOHのやることにしては杜撰すぎね？」

「……………ここにやベーボスが出てこないならな。まあそれにしたって人任せというか、今までのヤツの策略とはタイプが違う。」

「…前にさ、ここでディアベルと出くわしたよ。…きつとここは、生死問わずプレイヤーのデータを再現してるんだ。

「…もしかしたら、……………にも会えるかもしれない。でも、きつと別人だ。」

二十五層で殺された友達の再現データが目の前に現れたのだとしても。それは生き返ったわけじゃないんだ。

個人としては認識するけどそれはそれ、これはこれ。

「……………そうか、すごいなおまえは。…てことはあいつはPOHの見た目をしていてもあの悪辣な智能犯じゃないかもしれないのか。

どこまで再現されてるのかは…ホロウ・エリアがどこまでPOHのことを理解しているか、だな。」

そうこうしているうちに出口にたどり着いた僕たちはほつと息をはいた。

「…無傷とまではいかなかったが二人とも生き残れたことに安心する。」

「すー、はー。いやあ、空気がうまい！あんな狭苦しいところで囲まれるのはしばらくいいや」

深呼吸をしているキリトに思わず笑みがこぼれる。SAOではそういう身体機能はオミットされてるけど、気持ちはよくわかるか

らだ。

「…じゃあいつたん帰ろうか。…フィリアも戻ってるといいんだけど。」

…多分、戻ってはいないだろうけれど。それでも僕は、そう言いたくなかった。

…結論から言って、フィリアは管理区に戻っていないなかった。不安だが今はみんなと話し合いをして、これからどうするか考えなければいけない。

アインクラッドに戻った僕たちの前に、仁王立ちしている女の子が二人。…アスナさんとシノンだ。

二人とも何かしら異常があったことを察しているのか、笑顔が怖いことになっている。

「…………た、ただいまー」

「もう深夜なんだけど。…とりあえず、宿に戻って話をしましょう。…みんな待ってるわよ。」

シノンの声は優しいものだったが、怒っているのは確かだろう。

「じゃ、そーいうことで、じゃあな」

《ハイディング隠蔽》で逃げようとするキリトの肩を強くつかむ。…逃がさんぞこのやろう!!?

「あっはっは、どこ行く気だきようだい！家にこいよ、夜更かししようぜ!!」

笑顔で道連れを増やそうとする僕に、キリトはあきらめることなく逃げようとする。

「い、いやだー！ソロプレイヤーの俺がどうにかできる範囲をとっくに超えてるじゃないかー！?!」

アスナさんはじたばた足掻く兄にあきれたような目線を向けているものの、説得を始めた。

「キリト君、あきらめましょうか。あちらの世界のラフコフが何を企んでいるかわからない以上、対策は必要だわ。…力を貸して。」

「…………う、わかったよ。どっちにしろPOHはなんとかしなきゃな…。」

《赤羽亭》に帰ってくると、アルゴとストレアが部屋で待っていた。今日の出来事を話すと、アルゴは悲しそうな顔をする。

「…まさか、フィリアがラフコフと繋がってたなんてナ…。ごめんつて言ってたんならPOHと事前に計画を立ててたつてことになルガ。」

「わざわざ殺す相手に言う言葉かなーソレ。フィリアは殺人鬼たちに騙されてるのかも。」

「ストレアさん、それでも加担したことには違いないんだからなにかしら取り返しのつく方法で償わせるのは確定でいいんじゃないかしら。」

「先にフィリアが何者なのかを調べた方がいいんじゃないかしら。彼女がコピーなら、すでに取り返しのつかないことになってるつてことだし…。」

「どちらも納得できる方法がわからない以上深入りはしない方がいいんじゃない。ラフコフを倒したらしばらくあちらに行くのは控える方がいいのかも。」

女性陣の意見交換を聞きながら、僕は心の中で思っていることを言うべきか迷っていた。

アスナさんは罪の清算、シノンは珍しく消極的になっている。今回確実に命を狙われたからしようがないかもしれない。

「…何かいいアイデアナ。…ソーだな、今この瞬間決定権を持っているのはオマエダ、キリヤ。」

ホロウ・エリアのことを忘れてもいいシ、ラフコフのついでにフィリアをとつちめてもいいだろう。」

「……フィリアを助けたいな、僕は。今まで助けてもらったし、それに…。」

「…それニ?」

「ほっとけないだろ、泣いてる女の子を。」

「………ツたく、しよーがねーナ。おーい女子組、キリヤが言いたいことがあるんだとサ!」

僕はみんなにフィリアのことを助けたいとつたえる。

「…」応聞くけど、フィリアに騙されてる可能性があることはわかってるよね…?」

そもそも初めからラフィン・コフィンの一員だったらどうするの?」

「アスナさん。そんな時はあいつらと縁を切らせることも助けるうちに入りますね。」

あのパニック状態が演技でできるとは思えないし、思いたくない。はあ、とため息をついたシノンは、それでも微笑んだ。

「……………もう、どうせ反対しても一人でいくんでしょ?でも、今は情報が欲しいところね。」

…なにか手がかりになるものないかしら?」

え、ええ…? ……いや、そういやホロウ・エリアが存在する理由をよく知らないまま冒険してたな。

プレイヤーのコピーがうろついているから、仮説はいくらでも立てられるけどこれだ!というのはいつかない。

「…そーいえばさ。管理区ってなんか変なコンソールあったよね。キリヤ、あれって調べたことある?」

「ないな。複雑でわからんからマップみるくらいにしか使ってない。」「ガラケーが使えないじいさんみたいなこと言うなよ。どうせめんどくさくなって後回しにしたら忘れてたんだろ。」

こいつはそういうことする。」

「ひ、酷い!でも相変わらず僕のことわかってるなキリト!」

「当然だろ!何年一緒にいると思ってるんだ!」

「ナルホド、明日の朝管理区へ行ってコンソールをいじる必要があるナ。」

つーわけだキリヤ、必ず誰かを連れていけヨ。」

「ハイ。じゃ、今日は解散! おつかれ〜」

かつて人々を恐怖させたラフィン・コフィンは既に倒され、過去のものとなった。…あんな連中の亡霊なんか負けてたまるか。

《暗黒騎士》は悪人には容赦なく剣を叩き込むけど、身内は大切に
するんだよ。

待ってるファイリア！また一緒に冒険するために、絶対何とかしてや
る！！

第二十九話 VS 笑う棺桶・前

「…………。あーもう、どうなってんだこれ!!よくわからんデータが多すぎて調べるのも一苦労だ!」

管理区のコンソールをいじって早二時間、調べものは難航していた。

おそらくSAO開始時点から収集されていたであろうデータでコンソール内は埋め尽くされていたからだ。

「…一旦休憩しようぜ。これ一日中やっても何日かかるか怪しいぞ!二人じゃ無理だつて!!」

キリトが座り込む。たしかに時間が貴重な時にこれにかかりきりはアカン。ただでさえ後手に回ってるのに!

「だからといって人数を増やせないのがなー。…一回飯休憩しよう。」
アインクラッドに戻った僕たちは待機していたみんなと軽食をとる。

もきゆもきゆと食事の中のストレアを横目で見て、思いついた。なに全部僕がやらなくてもキリト以外の誰かと一緒に調べればいいじゃない。

…手の空いてそうなのから試した方がいいかな。

「ストレア、コンソールの方やってみる?」

「やるー!なんかたのしそーだし!」

にぱーとおさなげな笑みは、相変わらず彼女の魅力を引き立てている。

ぼやつとした言動も相まって幼い子供を相手にしているみたいだ。

管理区にストレアを連れてコンソールの前に立つと、彼女はキーボードとスクリーンを交互に見てからニコツと笑うと。

キーボードを超スピードで叩き始めた!

カタカタカタカタカタカタツ!!

「……………え?」

僕とキリトが作業していたスピードをはるかに上回るそれに呆然とする。

その光景にフリーズした僕をよそに、彼女は鼻歌を口ずさみながらデータを整理していった。

…カタカタカタカタ、タンツッ!

「よしー調べ終わったよ、キリヤー。ほめてほめてー?」

三十分もたたないうちにコンソールを調べ終わったストレアは、こちらを抱きしめてきた。

大型犬がじゃれついてると思えばかわいいものだ。頭をなでるとえへへと嬉しそうに笑う彼女にこちらも笑みが浮かぶ。

「…それで、ホロウ・エリアのことだけど。」

「あ、うん!それなんだけど、これ見て。多分アイテムのデータだと思うんだけど」

彼女が見せてきたのは片手剣のプロパティ。…んん?

「装備要求値から察するに三十層くらいの武器だよ。でも連続攻撃数で攻撃力倍化はまずいだろう!」

「…バランス崩壊もいいところだよ。ホロウ・エリアでテストされてみたいけど、すぐ消去されちゃったみたい。」

「…テストプレイか。ホロウ・エリアはゲストが入れないバックヤードみたいな感じかな。」

…。ならどうして僕は入れるんだ?」

素朴な疑問にストレアは悲しそうな顔をした。

「…ここにいるプレイヤーたちはホロウ・エリアが再現したAIなんだけど、プレイヤーの深層心理を探って効率よくテストするため…。」

要するに替えの効くモルモットみたいなものなんだけど、キリヤは高位のテストプレイヤーとして招かれたみたい。」

「よくわかんないことをするからってか?…AIじゃ思い付きの行動はできそうにないし。それに…」

《暗黒剣》も使える。…言ったことはないけど、たぶんこいつ知ってるんだろうなあ…。前に尾行に気づけなくてふと後ろを向いたら見つけたこともあったし…。」

でも本人が言うまでは聞かないでいいか。知ってたとしてもばら

すようなやつじゃない。

「で、フィリアはキリヤと違ってテストプレイヤーじゃないみたい。でも、特殊なプレイヤーではある。」

自意識が強く芽生えた偽者ホロウかもしれないし、本人の言う通り迷い込んだかもしれない。」

「おつかれ、ストレア。…じゃあ、フィリアを探しに行ってくるよ。」

ストレアは疲れてるみたいだし、時間があるうちに行かないと。…その前にインクラッドに送り届けたほうがいいか。

「ん、わかった。つかーれーたー、キリヤせおつてー?」

「ダメに決まってるだろ!…もう、帰ったら激辛でもなんでもおごるから、自分で歩いて!」

につこりと笑うストレアにしてやられたことに薄々気づくが、もはや後の祭りだ。

吐いた唾は?めないということを知って、僕は少しだけ大人になった。

「はい、約束ね約束!」

ストレアを送り届けた後、大空洞エリアに向かった僕はキリトとともに先に進む。

…たどり着いたのは、どこか近未来的な雰囲気の漂う遺跡だった。出てくる敵も非生物型のゴーレムやスライムで、こいつらがかつてここで造られていたことは明らかだろう。

「SAOのゴーレムってほしい《大地切断》以前の遺物って設定だよな。」

ならこいつらも大昔の人間が造って、そのまま放置されたのかもな…。」

ゴーレムを倒したキリトの独り言に足を止める。キリトがそういう設定のことを気にするのは珍しい。

「こいつってそういう設定守ってんのかなあ?」

さつきストレアが言ってたけど、ホロウ・エリアってテストプレイ用のエリアらしいぞ?」

「へー。じゃあここのエリアのボスってどんなんだと思う?俺はでっ

けー多腕のゴーレムだと思っぜ！

阿修羅みたいな感じでロマンがあるやつ！」

それむっちゃ強いやつじゃん。やだよそんな隙がなさそうなやつ！

「僕としてはスライム系とか、研究者の成れの果てのゾンビとかじゃないかなと思うんだ。

それも複数人が混ざり合ったキモイの。腐りはたせいで境界がなくなってるやつ」

たわいもない話をしながら遺跡の仕掛けを作動させていく。

この大空洞は三つのエリアに分かれていて、僕たちが今いる上層でロックを解除していかねければいかならしい。

…わかりにくい場所にあるわけではないのが救いではあるか。

三つのスイッチを押すと、なにかしらが起動したようなSEが鳴る。

「…さて、一旦戻ってみよう。今ので多分中層が解放されたんだ、ここに長居することはない」

僕は上層に行ったときに使用したワープ結晶の方角へ歩き始める。

その後ろをキリトが続いた。

「そうだな。POHたちは上層にいなかったし、いるとしたら奥深くだろ」

ワープ結晶のところに戻った僕は中層にワープをしようとして、手が止まった。

なぜならば。

「…中層どころか下層まで一直線に行けるようになったんだけど。ガバくない？」

てつきり連中が最下層に陣取っていることも視野に入れていたが、これじゃ逆にどこにいてもおかしくないぞ。

「…どうするキリト、どっちから行く…？」

キリトはうーん、と悩みながら、ホログラムの下の方を指さした。
…つまり、下層だ。

「どつちにしろ行くんだつたらまずは遠いところに行ってみようぜ、キリヤ。」

中層と同時に解放されたっていつても、何かアイテムが必要になるかもしれないけど、それがわかるだけでも十分だ。」

「おー…ちゃんと考えてるんだな。まあ行くだけならタダだし、善は急げだ。」

そこで僕たちを待っていたのは、POHやフィリアたちではなかった。

…まさか、こんな場所で二つ目のコンソールを発見してしまうなんて…！

運が良いのか悪いのか微妙なラインだぞ!?正直言つて今見つけたくはなかったわ!!

「…………。ストレアつれてこよう。」

「俺たちじゃ時間がかかるしな…。負担をかけるのは申し訳ないとは思うが、適材適所つてことでもうひと頑張りしてもらわなきゃ。」

キリトとストレアを入れ替え、彼女がコンソールを調べ終わるのを待つ。

「…キリヤ、このログ…!」

彼女が見せたのは、とあるエラーの記録だった。

それは僕の知りたかったことで、その答えはフィリアを絶望の中から引つ張り出せる希望だ。

「!! よくやったストレア!!」

「エッヘン、どんなもんよキリヤ! これであれこれ悩む必要はなくなったよね。…さあ、フィリアを助けにいきましょうよ!!」

拳を突き上げたストレアは、少しだけふらついた。

コンソールの高速操作はさすがに疲労が溜まるらしい。あんなスピードを出すなら集中力はかなり必要だろう。

「…つとと、これ以上はちよつとムリかな…?…フィリアのこと、まかせていい?」

「任せろ！　ちゃんと帰ってくるし、助けるよ！」

笑顔でそう返すと、ストレアは安心したのかほとんど気絶したように眠ってしまった。

…あれ、これ僕が運ばないといけないやつだな…？　…戻ったらアスナさんにまかせた方がいいか。

女の子をおんぶで運び続けるのは勘弁してほしい。

アスナさんにストレアを預け（なお、彼女は熟睡中のストレアに呆れた顔をしていた）、キリトとともに中層の探索を始めると粘つくような殺気を感じた。

ため息をつきながら殺気の方を指さし叫んだ。

「出てこいよ、モルテ。そこにいるのはわかってるんだ!!」

…目の前に片手斧を持った男が立ちはだかる。

「アハア…。やっぱり《ハインディング隠蔽》じゃバレますかア。

ボスのお楽しみが終わるまで、ここでお二人には足止めされてもらいますよオ？」

キリトが剣を抜く。

「…キリヤ、先に行け!!　…こいつは、俺が倒す!!」

「……………すまん、任せた！」

僕はダツシユでモルテの横を通り抜けようとするが、ヤツの斧が僕に襲い掛かる。

「通すと、思っていないですよねエ!!!」

キンツ!!

キリトの剣が斧を受け止めると、無理矢理鏢迫り合いに持ち込んだ

!

「…早くいけ!!　こいつを片付けたら、すぐ助けに行く!!」

「おう、死ぬなよ!!」

キリトとモルテが戦っているうちに、POHを見つけて倒さなければきつとフィリアは殺されてしまう。

もう遠慮はしない、今の僕と『オレ』の全力でラフコフと決着をつ

けてやる!!

第三十話 VS 笑う棺桶・中

〈SIDE：キリト〉

「…ッ！ はあっ!!」

キリヤが先に進むのを横目で見て、俺はモルテを吹き飛ばす。

モルテがプレートアーマーでフル武装しているならともかく、相手は俺とそう変わらない軽装だ。

筋力パラメータ任せに力いっぱい押しこめばそれなりにふつとばせる。

「ーちッ！ あーあーあーあー！ よくもやってくれましたねーキリトさアん！

このままじゃボスのお楽しみが邪魔されてこつちが殺されかねないじゃないですか!!」

モルテがわめきたてているが、その言葉とは裏腹に、その目は刃物のように冷たくギラついている。

油断も隙もない、殺人鬼の目。油断できる相手じゃないし、全力で潰すか。

俺は、クイツクチェンジで二本目の剣を呼び出した。…その白銀の剣は、まだ鞘の中に納まっている。

おそらくモルテは、武器を落とした時の予備か何かだと思ったのだろう、ヘラヘラ笑っている。

「そーいう小技、自分は嫌いじゃないですねー！でーもー、そんなこけおどしがラフィン・コフィンに通用するって、マジに思ってます??」

努力は認めますケド、攻略組が日和ってるのはどーなんですかア？」

「そういう安い挑発には乗らないようにしてる。」

「ハッ：そうです、かッ!!」

やつが投げたのは、なにかが塗られた投げ針だ。まず間違いなく麻痺毒なので剣で弾きながら切り込む。

《ソニック・リープ》がモルテの突進系ソードスキルとかち合い、再び硬直状態に陥る。

……が、俺はすかさず次の手を打つ。体術系スキルの初歩、《閃打^{センダ}》がヤツの腹に突き刺さったッ！

「が、ア……ッ!?」

「隙あり!!!」

相手の武器を払い、《シャープネイル》の三連撃がモルテを襲う。

が、モルテはニヤリと笑う。その笑みに俺は気圧されてしまった。

(…ッ!!? なにかこの状況で逆転できる技があるのか? それともブラフか!?)

集中が乱れたせいで《シャープネイル》の最後の一撃が外れてしまい、俺は動揺する。

…そして、それを見逃すほどモルテは甘い男ではない。

(!!) しまっ、た…!!)

「……………キヒッ! 隙だらけですよオ、キイリトさああああん!!!」

再び飛んできた投げ針をギリギリで弾くが、手斧の三連撃スキルが俺の体を抉り、吹き飛ばす。

…HPが半分を切り、危険域のイエローに変わるのを見ながら後悔した。

(…ちくしょう。三層で同じ失敗をしただろう、何度も同じ失敗して学習能力がないのか。

ああ、油断していた。ダメだ、勝てる気がしない…)

マイナス思考で視界が黒く濁っていく。…もう、いいんじゃないか? ?

そんなことを考えながら壁に寄りかかろうとして、自分の背中にあるソレを思い出した。

……………なんで忘れてたんだろうか。…まだ俺には、できることがあるんじゃないか…!

まだ、立てる。まだ、剣を振れる。戦え、戦え、戦え!!!

「あーあ。なんであきらめないんですかねー。もう少しで楽に殺せたいんですけど?」

左手に持った《ダークリパルサー》をモルテに突きつける。右手には《エリユシデータ》を構え、ヤツを睨む。

「オマエなんか殺されるかよ。かかってこい、それにやけ顔すぐに消してやるよ！」

「そんなこと言って、剣二本持ちじゃソードスキルが使えませんよオ？」

そのぐらいビーターのキリトさんなら知ってるはずですよねエ!」
そう、その通りだ。…だが、例外は存在する。

………チャンスは、一瞬。ヤツがソードスキルを使う瞬間のカウントだ。

「——シャアツ!!!」

(……ひきつける、ソードスキルを早く発動すれば気づかれる。

遅ければ今度こそ俺は殺されるだろう。だが、こういう部の悪い賭けは…嫌いじゃない!)

「おおおお!!!」

両手に持った双剣が眩い光を放つ。

ユニークスキル《二刀流》突進系ソードスキル、《デュアル・サーキュラー》がヤツの斧とぶつかり合った。

一瞬の膠着の後、粉碎されたのは斧だった。白と黒の双剣は斧を破壊したその勢いのままモルテの身体を切り裂いた。

「ガアアアアアアアアアアツツ!!!」

モルテのHPがすごいスピードで減少していく。

「まだ、だぁー……!!!」

ヤツが投げ針を掴もうとするのを、回転斬りで両腕を斬り落とすことで阻止する。

「…俺の、勝ちだ。」

モルテのHPは赤ゲージになるギリギリだが、放っておけば欠損ダメージで死ぬだろう。

だが、俺は…この男と話がしたかった。たとえコピーだとしても、この男が俺がかつて戦った相手ではなくてもなぜPKになっしまったのかを知りたかった。

「…なあ。なんでPKなんかやってるんだ。」

モルテは目を丸くする。…その様子は、どこにでもいる普通の若者

だった。

「……あー、こつちの質問に答えてくれるんならいいですよ。」

「なんでもはムリだけど、答えられる範囲なら。」

「……そつちの自分ってどんな死に方したんです？」

「…落下死したよ。」

正直に言うと、モルテは満足そうに笑った。

「プツ、アハハ！…なら、自分は本物よりいい死に方ですねえ。」

そんなマヌケなぶりかたごめんですもん。」

「…俺は答えたぞ。今度はそつちだ」

「……そりゃあ……、まあ本物のコピーだからっていうのもあるんですが。」

こつちの世界のボスが、人を殺すのを見たとき…こう、ビビツときたんですよ。

『ああ、自分が求めていたのはこれだ！』って。あんなカッコイイPKを見ちまったら、土下座で教えてもらうしかないじゃないですか！』

…POHの殺しの業の完成度は異常だ。

SAO正式サービス以前から人を殺していたんじゃないか、という有り得ない想像をしたこともあるほどに。

「…同情の余地はないな。…俺は、好きで人を殺したことはない。」

おまえがどんなヤツでも、POHに憧れて殺戮したことはとてもじゃないが…許されることじゃない。」

「……キヒツ。理解はしなくていいですよオ…。自分は好きに生きただけですから…ねエ!!」

モルテが両腕を失った状態でこちらに飛び掛かってきた!!ヤツの狙いは…首筋だ。

プレイヤーの噛みつきがダメージ判定を出すのかなんて知らないが…その執念だけは認めなければいけないだろう。

「おおお!!」

右手に握った剣が、モルテの心臓を貫く。その瞬間、モルテのHPはゼロになった。

モルテが砕け散る瞬間、ヤツは耳元で囁いた。かなり小さい声量だったが、間違いないくこう言った。

「……いい決闘デュエルでした、ありがとう。」

「!!?」

モルテが消滅した後も、俺は呆然と立ち尽くしていた。

…たとえコピーだとしても俺はモルテを殺したのだ。恨み節や呪詛を言われることはあつても礼を言われる筋合いはない。

……首を振って思考を中止してから、ダンジョンの奥へ歩き出す。

「……先に進もう。キリヤが心配だ。」

だが、足取りは遅い。……大丈夫だ、まだキリヤは生きてるはずだ。

二人がかりでならPOHだつて倒す…ことはできなくても全員生き残ることはできるはずだ。

だが、キリヤとPOHは相性が最悪だ、早く合流しないと殺されてしまう…!!

「間に合つてくれよ……!!」

〈SIDE：ファイリア〉

—モルテとの決闘デュエルから少し時間を遡る。

「…さあ、今すぐキリヤのところに行かせて!あ、アンタなんかこわく、ない…!」

…わたしは今、殺人鬼と向かい合っている。

あの時、こいつがあの人を地下に叩き落としたのを見て、わたしは後悔した。

こいつの口車に乗ったのは間違いだったと気づけたのは、幸運だったかもしれない。

このままこいつを手伝っていたらきつと取り返しのつかない罪を犯していた。

「あ?あ………死んだよ。」

殺人鬼は、希望を嘲笑った。

「え……？ は、話が違う!!死ぬわけじゃないって……このうそつき!!」
「あそこには何人か落としてみたんだがなア、誰も戻ってこなかったのを忘れてたぜエ!!」

「そういう言っただけか、ククク……ヒャーハハハハッ!!」
「キリヤの顔を思い出す。記憶の中で楽しげに笑う彼に、もうあえない……？」

「……いやだよ、そんなの。」

「なア、そんなシヨックか？ アイツらを殺したのはおまえだぜエ!!」

「やめ、て……おねがい……」

「ガッ！」

腹を強く蹴られ、わたしはせき込んだ。

「よくねエなア！ そういうのはよくねエヨ……！」

「おまえが殺したんだぜ？ 責任を取らずに逃げんのはよくねーよなあああ!!」

「そのまま何度も踏みつけられる。……抵抗する気がおきない。」

「ごめんね、キリヤ。わたし、もう……無理かも……」

「はあああ……もういいや。抵抗しないどころか声もあげないカスを痛めつけても楽しくネー。」

「……殺すか。もう必要ないし、なア。」

胸倉を掴まれ、殺人鬼が私の首に包丁を突き付ける。

「……ころされる。いやちがう、データが消されるだけだ。このホロウ・エリアでは日常のおきてのことだ。」

「ここでホロウが惨たらしく殺されても誰も気に留めない。」

「……いや、キリヤは多分、ホロウが殺されかけてるのを見たら助けに行くに違いない。」

「偽者だとわかってるのにディアベルを助けようとした彼なら。」

「…………け、て」

「ア……？ なんか言ったか？」

「たすけて、キリヤ。」

「…………。来るわけねエだろバアアアアアアアアカ!!!」

斬り落とされた。

「…………ア?」

わたしを掴んでいた腕が、斬り落とされた!

「……………よお、クソ野郎。随分楽しんでたみたいだなあ、え?

『オレ』の仲間に手エ出したんだ…ぶっ飛ばされる覚悟はしてるよなアーー!!!」

絶望的状况を覆すために英雄ヒーローがきてくれた…最期に見る夢にしてはいいものだなあとぼんやりしていると、倒れていたわたしは持ち上げられた。

「…………ファイリア、遅れてごめん。ちよつとあのカス斬ってくるから少し休んで。」

「え、コレゆめじゃないの??」

お姫様抱つことか現実で起きるわけないじゃんと思つてたけど、それはまちがってみたい…。

彼のかおをじつと見てるとなんだか恥ずかしくなつたので殺人鬼の方を見ると、『なんで生きてんだこいつ』とでも言いたげな顔をしている。

「おいおいおい、どうやってあの場所から生き残つた!?最悪でサイコーだぜ暗黒騎士サマよオ!」

「おまえ、本物より悪だくみが杜撰だよ。なに考えてんだ」

「ククク…PARTYパーティだよ!!文字通り、ホロウとプレイヤーの全てを入れ替えるのサア!!」

…え?? 何言つてんのこいつ。

「…なにを見つけたんだテメーツ! ぶつちやけ嫌な予感しかしないんだが!」

…SAOがクリアされてからも、あの時の恐怖が薄れるのは時間がかかった。

まさか、SAOが永遠にクリアできなくなつてしまう寸前だったなんて、あの時のわたしは想像もしていなかったからだ。

第三十一話 VS 笑う棺桶・後

POHは右手を見せびらかしながら、自身の計画をしゃべりだした。

「テメーも持ってるんだろう、こいつをな。」

『オレ』の手に現れた紋様と同じ形が現れる。

「高位テストプレイヤーに与えられるアクセス権限、だろうか？」

「どうせろくでもない理由でもらったんだろうが。」

「ああ、ホロウどもを殺しまくってたらなんか貰ってなア。」

まあ、そこはどうでもいいんだ……楽しいのはここからキア!!

オレはこいつを使って管理区に潜り込んで……この世界が何なのかわを知っちゃったんだよ!!!」

……こいつ管理区に侵入してたの？ こつつつわ!!

ここ最近で一番恐怖を感じたんだけど!!?

ぽ、ポーカーフェイスだ、動揺を隠せ……っ!

「そ、そうかよ。それがどうしてホロウ・エリアとインクラッドの入れ替えなんて話になるんだ。」

「オレはずっと殺しがしてエだけなんだよ。クリアなんかされてみる、消されちまうじゃねーか。」

そこで考えてみたんだよ、どうしたらゲームが永遠に続くかを、簡単な話だ、

プレイヤーを進行不可能にしてしまえばいい」

「……………はっ。」

…バグらせるってこと、か?……いや、入れ替え…。

「……………まさか、そんなことできるわけ……………!」

「できちまうのキア、これが。」

この世界はあくまでインクラッドのために存在しているわけだが、ここで問題ないと判断された新しいシステムやアイテムはあちらにも実装される。

オレは見つけたのさ……管理区の奥深くに、ホロウ・エリアのシステムに干渉できるコンソールをなア!!」

最悪だ……つまり、こいつがやろうとしているのは！

「ゲームのアップデートか！プレイヤーとホロウの入れ替えはあくまでもアップデートのオマケなんだな！」

「正解だぜー！よくわかったな、報酬は《友切包丁》だ、頭をたたき割つてやるぜエ!!」

ふざけたことを叫びながら、POHの《友切包丁》が振り下ろされる。

…互いの武器がかち合い、鏢迫り合いが起きた。

(クソツ!! ヤツの武器は短剣カテゴリーだ、両手剣と鏢迫り合いできるなんてふざけてんのか!!)

ヤツの武器《友切包丁》は、《ウロヴオロス》と同じく成長する。

プレイヤーを殺せば殺すほどにその切れ味を増す、『オレ』の知る限り最悪の魔剣。

POHにとっては最高の得物だ。ヤツの武器は、やろうと思えばプレートアーマーごとこつちを断ち切れる…かもしれない。

「ハッハアアアツツ!!どうした、反撃しねエのか!」

POHとの戦いは、あちらの有利に進んでいた。

理由は単純に、ヤツに攻撃が当たらない…。

『オレ』の攻撃はパワー重視だ。《暗黒剣》のバフ込みでも攻撃の軌道が読まれてたら意味がない)

ぞわり。

「つぶね!!」

いきなりおぞけが走り、本能のままにヤツの攻撃を回避する。

(……………また、だ。認識するよりも速く不意打ちの攻撃が来るとわかった。

ここまで直感が鋭くなったのは『オレ』の理性よりも本能のほうが強いからだ。ただ、狙いがガバってるせいで軽装のPOHに攻撃が当たらない…。

……『僕』ならヤツに当てられるか…?いや、正直あの攻撃を避けられる自信はないぞ…)

「おいおいおい、さつきから見てねーで避けるんじやねエよ、暗黒騎士。」

「お互いさまだろうが、殺人鬼」

「……ちよつと試してみるか。思い付き、付け焼き刃だがやらないよリマシだ。」

ヤツの攻撃を『オレ』が避け、『僕』がPOHに攻撃を当てる。

人格の《スイッチ》とでも言うべきか。

「……来いよクソ野郎！その首落としてやる!!」

やけくそ気味に挑発し、ヤツの攻撃を誘う。

…本物のPOHならまず間違いなく無視するし…そもそもこんな正面からの殺し合いは絶対しない。

だがこいつは、ホロウ・POHからは、悪のカリスマを感じた。なめられたらぶつ殺すだけのプライドを感じた。

—きつと乗ってくる。似たような熱は、僕にもあるから。

「は、ハハハハハッ!!! イイねエ、サイコーだぜ!! イッツシヨウターアーイム!!!」

さあ、やろうぜ。

「おおおお、らアーアー!!!」

ヤツの攻撃を躲し、『オレ』は僕に切り替わる。

(頭部、警戒されてるな…ここは、足を止める!!)

後ろに跳躍しようとするPOHの足を踏みつけ文字通り足止めする。

…これならお互いに避けようがない。

「て、めエ…ッ!!」

POHの鬼のような形相に、思わずニヤリと笑う。

「その顔が見たかったぜ。これでえ、終わりだああアーアー!!!」

剣が漆黒のオーラを放ちながら、POHの身体に五つの致命傷を与える。

《暗黒剣》専用スキル、《ドレッド・ブレイズ》がPOHを打ち砕いた!!

…身体を文字通り粉碎されたPOHの顔は、先ほどキレていたとは

思えないほどに晴れやかだった。

「……………あ……………あ……………まあ、いいか……………」

POHが爆散するのを見届けてから、僕は座り込んだ。

「つ、つかれた……………」

疲れて倒れそうな僕を、フィリアが心配そうに見つめている。

「……………キリヤ。」

「……………ケガはないか？」

「……………だいじょうぶ。……………キリヤ、なんで助けにきたの？わたし、ホロウなんだよ……………」

「―フィリア。それは、違うよ。きみはホロウじゃない、僕と同じプレイヤーだ。」

「……………」

困ったような顔でフィリアはこちらを見つめている。

信じたいが話を聞くまで信じられないほど、彼女の心は弱まっているのだろう。

「そこ座んなよ。説明するからさ」

暗い顔の少女に、先ほど知った事実を伝える。

「このダンジョンの地下に、コンソールがあった。」

エリアごとのログでいっぱいだった。……………八月の樹海の手帳も残っていたよ。」

「八月の、樹海……………わたしを殺した時のこと？」

「……………前提として、ホロウと本物のプレイヤーは出会うことがないらしい。」

本物のプレイヤーが侵入したときに同じIDのホロウは消去されるんだって。

僕がホロウ・エリアの管理区に入った瞬間、どこかにいる僕のホロウは方が一遭遇してイレギュラーが起きないように一旦消されているらしい」

「なら、どうしてあんなことが起きたの？ホロウのわたしが本物を殺

「しちゃったからバグったってこと?」

「いや、そもそも殺してすらいらないんだ。フィリアは自分のホロウを攻撃して犯罪オレンジになってしまった。」

ホロウ・エリアはそれをみてホロウを急いで削除したけれど、本来起きるはずのない出来事が重なって、フィリアのデータがエラーを吐いていると判断した。

フィリアとホロウが出くわしてしまった原因は重要じゃない。問題なのは、ホロウ・エリアがどちらをオリジナルと判断したかだ。」

「……………それ、って……………」

「ああ。だから、フィリアは人殺しじゃないし、そもそも犯罪オレンジは偶然が重なった事故だ。」

フィリアの目に涙が浮かんだ。

「わたし……………この世界に来てから、自分が何者なのかわからなかった。」

アインクラッドから放り出されて、自分と同じ姿に出くわして、わけもわからないままさまよって。

……………そんな時に、キリヤに会ったの。……………あのときはごめんね?」

「……………いやー、いま思い出しても酷い出会い方だったよな……………」

デッドニング・リーパーが来なかったらたぶんあのまま戦ってたよ。」

「そうだね。……………キリヤとの冒険は、すつごく楽しかった。」

居心地がよくって、でも……………いつか別れが来るんだって思ったら、こわかったの。」

「……………『オレ』も楽しかった。」

あんなに心置きなく冒険したのは久しぶりだったし、ホロウ・エリアを冒険し終えた後フィリアをどうにか攻略組に引き込めないかと思っただぐらいにはさ。」

フィリアはにへつと笑顔になった。

「そっか、そっか……………えへへ、なんだかうれいな。……………で、これからどうするの?」

「……………とりあえず、もう一度コンソールを調べてヤツがいじったアツブレードを阻止する!!」

部屋の外で待っていたキリトと手分けして二つのコンソールを調べる。

……僕はダンジョン内部のコンソールを、キリトには管理区のコンソールを調べてもらったのだが…。

「キリト、そっちはどうだ？……エリアシステムコンソールの方は駄目だった。」

キリトのがっかりした顔で察したものの、とりあえず聞いてみる。

「こつちもダメだな…。POHのヤツはコンソールを使ってアップデートをいじったはずだ。」

あの遺跡以外の場所にあるのか…？」

三人で頭を悩ませながら、僕はPOHとの会話を脳内で再生する。

(…管理区でコンソールを調べたから、POHはホロウ・エリアの存在理由を知ることができた。

……あれ、なんか引つかかるな。んー?)

思考がまとまりそうになるその寸前、ファイリアが「あーッ!!」と大きな声をあげた。

「うおっ!! ……ど、どうしたファイリア!なんか思い出したのか!」

「…あいつ、管理区の奥深くって言ってた!!ここ以外にも部屋があるんじゃない!」

「………あー………!!」

僕とキリトの叫びが管理区内で響いた。たしかにそんなこと言うてたぞあいつ!!

「待て待て待て!!それならコンソールになんかあるはず……!!」

管理区そのもののメニュー内を調べ、それを発見した。

「み、見つけた……。《管理区秘匿領域》!!」

「早速突入するぞ!!」

「……ダメだ、ロックが掛かってやがる!!」

…五つのうち三つが既に解除されてるってことは解除条件はエリアボスか。」

…つまりPOHはエリアボスを全て殺した後管理区の奥深くへ乗

り込み、アップデートに手を加えた後再びロックを掛けた…ということだ。

あいつ生きてようが死んでようが迷惑をかけるな、愉快犯め!!

「よし、明日はエリアボス攻略に行こうぜ。今日はいったんあっちの仲間と情報共有しなきゃ。

じゃ、また明日、ファイリア!」

「うん、待ってるねキリヤ」

「あー、つかれた。…なんかソロが恋しいなあ、ボス倒したらしばらくあっちのダンジョンにこもるか。」

キリトの独り言に苦笑いしながら、僕たちはアインクラッドに戻っていった。

ラフィン・コフインは壊滅し、その影も払った。次は奴らがやらなかった跡の後始末だ。

S A Oを永遠の牢獄になんかささせない!!

第三十二話 死神

〈SIDE：キリト〉

キリヤたちが宿泊している宿で、俺たちは今日起こったことを報告していた。

アスナはギルドの方が忙しいらしく来れなかったが、アルゴが後で伝えるだろうし問題はない。

「二人ともごころーサン。ニセモンとはいえラフィン・コフィンと戦うのは疲労がかなり溜まるハズダ。

ゆっくり休んで英気を養っておいてくれヨー。」

アルゴの劳いの言葉に頷き、俺はモルテに思いを馳せる。

（…まさか、モルテと今頃になって決着をつけることになるなんて、な…。）

やつと出くわしたのは三層、あの時はまだアスナと行動してたっけ。）

何度も殺し合った仲ではあるが、あのモルテに勝ってやつと心残りがなくなった気がする。

因縁に決着をつけることは悪いことではない。

「なーキリト、今日は大変だったな…。」

キリヤが話しかけてくる。…こいつはこいつでPOHを倒したんだよな。

「まったくだ。…POHと戦ってどうだった？」

「……………なんか、本物とはまた違うタイプが悪党だったよ。」

某育成ゲームの自然保護団体のボスとカルト教団のクスオヤジくらい違う。」

「あー…。ようするに殺しが手段か目的か、ということか。」

「そうそう、毒使ってこなかったしホロウのPOHは再現度という意味じゃ低かったかも。」

「…ホロウ・エリアもあんなにかれたヤツそのまま再現すんのは嫌だろ。」

生き物がたくさんいる池の中にブラックバス放流するくらい危険

だつて！」

キリヤは同情と困惑が入り混じったかおをするが、ギリギリ納得したようだ。

ホロウはともかく本物に遠慮は要らないと判断したのかもしれない。

「……………なるほどなー。」

その後はしばらくバカな話を楽しみ、夕食をご馳走になってから自分の宿に戻った。

〈SIDE：フィリア〉

夜が、明けた。

ただそれだけのことが、今はとても嬉しい。

(昨日はあまりねむれなかったなあ…。もうあいつが侵入してくることはないって、頭ではわかってるんだけど。

キリヤ、今日もくるかなー…)。

あの男が言うにはアップデートを阻止しなければアインクラッドが本当に牢獄になってしまいうらしい。

つまり、今生存しているプレイヤー全員がわたしのような目に遭ってしまうということだ。

「ふあ…おはよう、フィリア！」

「ん、おはよっ！…昨日はたいへんだったね…。」

あくびをしながらあらわれた少年に、わたしはおもわず笑顔になった。

「…なーに、ともだちを助けるためだ、弱音なんか吐かないよ。」

「……………ありがと。なんか、そういつてもらえてうれしい……………んだけど、キリヤってわりと無茶するんじゃない？」

すみっこで居心地悪そうにしているキリトに話を振ると、彼はこっちに話ごとぶとは思ってなかったのかビクツとなった。

「おわっ!?……………あ、俺に聞いているのか…。…あのなフィリア、こいつはわりと自分勝手だぞ。」

自分の身内は大切にするけど身内傷つけるヤツに容赦ないんだこ

「いつ!!」

「ひ、酷い!」

「胸に手を当てて考えてみる、シノンにちよつかい出してるやつを見たらおまえどうする?」

「……………どーゆうちよつかいなのかにもよるんだけど。」

「そりや、ナンパとか変質者とかそういうの」

キリヤはにっこりと笑った。

「……………生きてることを後悔させてやる」

…その笑顔とは似ても似つかない物騒なことを言いながら。

具体的な内容こそ言わなかったけれど、聞かないほうがよさそうな雰囲気だった。

「……………そ、それはそれとして!遺跡のエリアボスに挑むんだよね?」

わたしは話題を切り替えた。今回まだボス部屋見つけてないんだよね…。

「なんも情報ないからな、今…。いや、前はエリアボスを事前に知れたのはディアベルのおかげだけど…。」

ふと、わたしはあの殺人鬼が、『このダンジョンの中には罪人を狩る処刑人がいる』とか言っていたのを思い出した。

そのことを二人に伝えると、キリヤは下を見ながら、キリトは上を見上げながら悩み始めた。

「うゝゝむ、処刑人ねー。ぱっと思いつくのは死神みたいなやつかな。」

「あー、大鎌振り回してくる敵か。あんまり戦う機会のないタイプだから面倒くさいよな…。」

俺は武器持って襲ってくるMOB嫌いなんだよ、数狩りたいから単純な攻撃しかしてこない獣系がいい。」

アインクラッドではレアな死神系の敵は、厄介なことにホロウ・エリアではそれなりにメジャーな相手だ。

両手武器は範囲攻撃ソードスキルの射程が大きく、被弾しやすいのでキリトが嫌うには十分すぎる。

ふと、わたしはキリヤと初めて会ったときに倒した大ムカデのボスを思い出す。

あれも腕がカマキリの鎌みたいになっていた。あの怪物も、ある意味では死神みたいだ。

「……………《デッドニング・リーパー》の強化版とかいたらどうする？」

わたしの疑問にキリヤは無表情になった。…たぶんわたしと同じことを考えている。

あのサイズならボス部屋に陣取っていても違和感がない。

「ありえ…なくないな。」

もし、エリアボス補正で鎌の攻撃がもつと強力になったりしたら、受けるのもまずいかもしれない。」

「だよな。《デッドニング・リーパー》は鎌をパリングで弾ければチャンスが生まれるけど…。」

わたしたちはその後も対策を話し合うものの、なんかグダってきたのでほどほどのところでやめてダンジョンへむかう。

探索はほどほどに、モンスターを蹴散らしながらボス部屋を発見し、疲労もほとんどなかったのですぐに突入する。

その中には、転移結晶と同じ色のクリスタルが光を放っていた。

クリスタルを睨みながらキリヤは呟く。

「……………なるほど、どっかに飛ばされるのか。…このタイプは強いぞ。」

…なんてたって専用のゾーンがあるボスはリソースが多く使われているからな!!」

…多くのボス戦を潜り抜けたはずのキリヤでも警戒しなければいけないほどの相手がいるということか。

思わず手に力がこもる。仮想の心臓が早鐘を打っていることに気づき、少し困ってしまった。

(ぎ、きんちようしてる…！ お、おちついて、深呼吸してっ……効果あるのかなあこれ??)

よくよく考えたらこっちで深呼吸しても現実の肉体にフィード

切らせば多分、死ぬ。

「ガアツツ!!……いつてえな、この野郎！」

「き、キリト!? ひ、左腕が…ツ！」

キリトの左腕が、なくなっていた。…部位欠損だ。

あの状態は斬撃属性の攻撃でたまに発生するデバフで、見た目の痛々しさもさることながら、バランス感覚が狂ったり武器を落とす可能性がある危険な状態だ。

さらに継続ダメージも入ってしまうためこの状況じゃかなりまずい……!

わたしはポーチから回復結晶を取り出し、叫んだ。

「《回復》!!」

バキンという音をたてながら結晶が砕け、キリトの腕を再生しながらその傷を癒す。

「おおっ!? ありがとうファイリア! この礼は…いつか必ず!!」

キリトはそう言いながらソードスキルで反撃を始めた。

死神の攻撃を弾き、躲し、隙をさらした敵の隙間を縫うようにソードスキルを撃ちこむ。

攻略組つてすごいなー…。

「そういえばキリヤは……?」

わたしはここで、まったく彼の声が聞こえてこないことに気づいた。

キリヤは、耐えるように歯を食いしばり、鬼のような形相で《ホロウ・リーパー》の攻撃をしのいでいたのだ。

「……………っ!!」

鎧を装着している分ダメージを軽減こそできているものの、明らかに疲労が大きい。

だけど、壁役^{タンク}がいるからこそわたしたちは思う存分戦えているというところでもあるため、悩ましい。

そう考えていた最中、キリヤの反撃が《ホロウ・リーパー》のHPを削りイエローゾーンに突入する。

「ちいっ!!…ここまで削つてやつと半分切ったのか…。硬い速い強いな

「これでえ、終わりだアアアアア!!」

キリヤのラストアタックが、死神を斬り裂いた。

『ア亜、吾……………』

《ホロウ・リーパー》が崩れ落ち、崩壊するまで右手の武器を握りしめていたわたしは、ふうつと息を吐く。

倒れそうになるからだをもうちよつとだけ気合で立て直して、キリヤのほうに歩いた。

「キリヤ、おつかれ!…うわ、HP真っ赤だよ!」

小ダメージでも死にかねないギリギリで止まっているのでびつくりした。

「……………ポーション残ってる?」

「二応あるけど。しよーがないなーもう、ありがとうキリヤ。」

ハイポーションをキリヤの方に放り投げる。彼はえがおでそれを受け取るとすぐに中身を飲み干した。

「…………いやあ、強かったなアレ。もう二度と出くわしたくないなあ……。でもなんかまた会いそうで嫌だなア!!」

「いやなこと言うなよ!あんなグロいバケモンがアインクラッドに何匹もいてたまるか!!」

キリトはこっちにやってくるとキリヤの嫌な予感をバツサリ切った。

「いや、うん…………わかるよ。あれがまた目の前に現れるのはきついなね。」

ホラーゲームにいても違和感ない悪趣味なデザインしてるしやけにつよいし…。」

なんだか雰囲気か沈んできた。これ以上この話題で話すのはよしな方がいいかもしれない…。」

「…………かえろーぜ。」

キリトの言葉にわたしたちは無言でうなずいた。

「そうね。これ以上進むのはむずかしいかも。」

…………あんな強力なボスがまだ一体のこってるのかあ…。」

管理区で二人と別れると、ぼーっときょうの事を思い出す。

(キリヤ、てを握ってくれるんだ。……ちよーし狂うなあ、もう。)

きつといまのわたしは顔がりんごみたいになっているだろう。

こんな気分は生まれてはじめてで、どうすればいいのかわからない。

だつてキリヤには恋人シレンがいるのに……!

「ど、どうしよう……。はじめて好きになったひとに恋人がいるのつてまずいよね……。」

……ひとりで悩む夜は、それでもいいものだ。少なくとも罪悪感で死にたくなるよりはずっといい。

〈SIDE：キリヤ〉

《赤羽亭》にもどった僕は、自分の部屋に入る。

すると腹ペコの僕の鼻が、いいにおいを察知した。

「おかえりなさい。……はん、できてるわよ。」

シノンがエプロンをつけて出迎えてくれた。

笑顔で帰りをまっつてくれる人がいる、ということはそれだけでうれしいんだよな。

「ただいま。それじゃ、いつしよに食べようか。」

……ボス、すごく強かったよ。ご飯食べながら話そうか。」

「うん、今日のメニューはシチューでしょ、プレイヤーメイドのパンでしょ、あと白身魚のフライ!

パン以外は私が作ってみたんだけど……どうかしら?」

テーブルの上にならぶ料理に思わずよだれが出そうになるが、がつつくのはよくない。

とにかく椅子にすわり手を合わせる。

「い、いただきますー!」

とりあえずスプーンで白いシチューをすくい、口に運ぶ。

ジャガイモやニンジン、ベーコンのコンボが味に深みを与えていて……ようするに。

「うまーい!!ちよ、これ本当にうまい!!」

「ふふん、自信作よ。あと、パンに付けるのもおいしいと思うわ。

「……………でえ、今日はどうだったの?」

シノンは楽しそうに笑いながら、今日のボス戦の話をせがむ。

「…ボス部屋の中に突入したんだけど、そこにボスが見当たらなくてさ……………」

今日の戦いを見たまま伝えるが、あれのおぞましきは直接見ないとわからないだろう。

「…………骨のムカデねー。特徴を聞いた限りそれどっちかというところじゃないかしら。」

「足うじやうじやあるからムカデだとおもうんだけどなー。…肉付きだったらもつとキモそうだな。」

「食事中に想像することじゃないわね。それにしても…」

「ん?」

「一撃が強力なボスって怖いわね。」

「まともに一撃を食らってHPがすごい勢いで減るの、ぞわってするもの。」

「……………わかるよ。僕も昔は軽い装備で戦ってたし」

シノンは意外そうに首をかしげる。

「え、てことはビルドを変えたってことよね?…大変じゃなかった?」

一度決めた目標から別の方向に軌道修正するのは、遅ければ遅いほど難しくなる。

「某シミュレーションRPGで使える武器が増えてもしばらく青銅武器を振り回さなければいけない感覚に近い。」

「つまり、めんどくせえのだ。少なくとも攻略組が暇つぶしにやることじゃない。」

「まあ、ね…。気が向いたらはなすよ。『オレ』が、壁役タンクになったわけを。」

魚のフライをつつこうとして、もうカラになっていたことに気付いた。

「…話に夢中になりすぎたか。」

「つと…。ごちそうさままでした。…さて、ご飯も食べたことだしお風呂にはいろいろかな。」

「……………キリヤ？なんで私の手をつかんでるの？…ちよつと?」「困惑する少女に間髪入れずに追撃する。

「いっしょに入ろうぜ。」

シノン は顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしている。

「~~~~っ!! ……………水着を着るんなら…………。」

…………アレ、断られるかと思ったのにけっこう好感触だな。

なら遠慮しないで甘えちやおつかな。

《赤羽亭》には個室ごとに割とでかい風呂が存在する、二人入ろうが余裕のヤツが。

お風呂好きのアスナさんがニコニコしているイメージが沸くが、別に(どうでも)いいかとそのイメージを消す。

それよりもシノンの水着だ。

(いつも装備しているグリーンの装備もかわいいけど、スカイブルーのリボンビキニも似合ってるなあ…)。

湯船の中で僕はシノンを後ろから抱きしめ、ぼーつとその熱を感じていた。

ここ数日は精神を昂らせすぎてしんどかったし、自分に正直になれば落ち着けるんじゃないかと思ったからだ。

「キリヤ、その…。今日はずいぶん甘えん坊ね?」

「ん〜。なんかさ、今日は疲れたな。キリトの腕が空中に吹っ飛んでいったりフィリアの足が斬り落とされたり…。」

誰が死んでもおかしくなかったんだ。…生きた心地がしなかったよ…………。」

「……………そっか。ならもう辞めちゃう?」

首を振ってその提案を拒否する。

「今やめたらアップデートでプレイヤーがインクラッドをクリアできなくなっって詰みだ。」

そんな結末はゴメンだね。モンスターに殺されるなら…まあまだ

運がなかったり、実力不足だったって思うんだ。

……でもこれは違う……！ 誰にも落ち度がないしデスゲームに巻き込まれるよりも理不尽だ!!

許すもんか、絶対に阻止してやる!!」

『オレ』は拳を握りしめた。…怒りで頭がおかしくなりそうになるその時、ポチャツと水が跳ねた。

体勢を変えたシノンと目が合い、彼女のブラウンの瞳にドギマギする。

「キリヤ、おちついて。あなたが怒るのはわかるわ。…でも、一人で全部はムリよ。

あつちにはフィリアもいるんだし、私たちも一緒に戦うわ。だから…」

「もちろん、頼りにしてるよ。多分、僕は一人だとダメだ。」

…アルゴと出会ってなかったら早死にしてたよ。情報なんて初めは重要視してなかったし、知らずに危険地帯に突っ込みかけたこともあったし。」

「…………ふふっ、なんだか今日は昔のことをよく話してくれるのね。」
シノンの笑顔に目が点になる。たしかにシノンに昔の話なんてしたことがないからだ。

「そういうえばルーキー時代の話はあまりしたことがなかったなあ。」

別に隠してたわけじゃないけど、言いふらすのも恥ずかしいし?」
彼女は僕のことをじいっと見つめながら、腕でこちらの首を固定する。

顔が近くてドキドキするなあ!

「いいじゃない、新鮮で。……あした、また話してくれると嬉しいな」
「あ、うん……もちろんいいよ……………」

シノンのかおが赤い。至近距離で目を合わせ続けていると、なんだか変な気分になってくる。

こう、少女のすべてを味わい尽くしたいというか、ちょっと人前じゃ言えない感じのやつ。

「き、キリヤ……?? 顔がゆでだこみたいになってるんだけど!!」

もうあがるわよ、ほら立って！」

あわててシノンの言うとおりに立とうとするとバランス感覚がうまくいかずフラフラだ。

壁に取り付けられた鏡に写っているのはよく茹でられた食べごろのタコみたいな顔の自分だった。

いつぶつ倒れてもおかしくないぞこれえ…!?

「あく、これは駄目なヤツ〜。」

「もお、しようがないわねー。先に着替えていいから、水分とってゆっくりすること、わかった？」

「はーい。」

その後は特にイベントもなく、二人ともすぐに寝入ってしまった。夢すら見ないのはひさしぶりだ。

まだ戦いは続くけれど、仲間と、愛する人と一緒なら…きつと僕は、

『オレ』は人間でいられる。

第三十三話 襲撃の女王蟲

先日死闘を演じたボス部屋から少し進み、封印を解除する。

次のエリアまでは、多分そう遠くはないはずだ。

「つぎはなんだろうーねキリヤ。：火山とかかな？」

紫の装備に身を包んだ美人が次のエリアを予想し始める。本当に能天気だなこいつ…。

今回の仲間はストレアだ。こいつ攻撃も守備も高水準にまとまってるからな。

レイドだと中途半端で持て余すけどパーティ単位だといると便利なタイプ、状況に応じて攻撃役アタッカーと壁役タンクを切り替えられるというわけだ。

前回の《ホロウ・リーパー》みたいなのがまた出てこないとも限らないし…。

「雪山だろここはー。ビックフットって名前でエイプ系が出てくると見たー！」

「いやいや、ここは禿山みたいな地形でかみなりがゴロゴロドツカンしてる危険地帯でしょー！」

かみなりブレスを撃つデカイ鳥とかいるのー！」

フィリアって危険な場所好きなの？かみなりブレスとか飛行する敵がしていい技じゃねーって。

「じゃあ折衷案でかみなりブレスを吐く鳥が住んでて火山と雪山がなんかごっちゃごちやになつてるところでいいじゃんー！」

「やだよそんなところお!!！」

せまつ苦しいダンジョンを抜けると、そこはサイケデリックな色の森だった。

……………また森かあ…。

「はあああ……………。悪い意味で期待を裏切られたな…。」

色はすごいけど最初の樹海とかぶってるんだよなあ…。」

「ま、まあまあ！こんなへんなばしよなら、面白い敵が出るかもしれないな

「いよーねー?」

「そーそー! 森って言ってもいろいろあるよ、おねーさんの前で好き嫌いはだめだぞー?」

やる気がそがれてしまった僕に、仲間たちがなんとかやる気を取り戻させようとしている。

…うん、やるよ? やるんだけどさあ…。

「もつとこう、なんかほし…。」

ずつどーーん!!!

「「……………ん??」」

大きな砂煙が上がり、視界が遮られてしまう。

…わかることはただ一つ。落ちてきたそれはどう考えてもこちらの味方だとは思えない、ということだ。

「げえっ…!? 二人とも、武器をとれえっ!!!」

「オツケー、まかせて!」

「…もちろん!」

砂煙が収まったところに現れたそのモンスターの姿は、巨大な虫だった。

異形と言うほかないその怪物の名は、《アメデイスター・ザ・クイーン》!

「……………エリアボスじゃねえかつ!! なんでエリア入り口でいきなり襲ってくるんだ!!!」

『ギシャアアアアアアア!!!』

勘弁してくれよう! フロアボスだって自分の持ち場は離れないのに!!

…さいわいなことに、この場所で全てのHPを削り切れという無茶を強要されているわけではなかった。

三本あるHPのうち一本を削ると、エリアボスは逃げていったのだ。

「……………に、逃げちゃった…。どうするの?」

ストレアを含め僕たちは全員困ってしまった。

あそこまでフットワークの軽いボスは誰も会ったことがないから。「わけもわからないまま戦ってたからどうしようか悩むな。」

とりあえずの方針にできそうな作戦は二つ、かな」

「あいつを追うか、無視して探索するか…だね！」

フィリアの言葉にうんうんと頷く。どちらを選んでもメリットとデメリットが存在する。

あのボスを追えばあいつのHPがある程度減った状況で戦えるかもしれないが、こちらアイテムの補充無しで挑むことになるだろう。

探索を優先するならばこのエリアに散らばっているはずのアイテムや経験値を稼ぐことができるが、エリアボスのHPは回復してしまう。

「よし多数決とるか。追撃するなら左手を、探索なら右手を上げてくれ！」

…せえーの!!」

僕とフィリアが追撃、ストレアが探索か。

ならアイテム消費をできるだけ抑えるために雑魚との戦いは避けて、女王が逃げた方向へ直行するべきだ。

途中で見かけた敵エリアボスの小型版だなあ、あれの子供なのかなあと思いつながら《ハイディング隠蔽》で見つからないように進む。

フィリアもソロ経験が長かったのかそれなりに《ハイディング隠蔽》の熟練度が高い。

「キリヤ。…あれ」

フィリアが指さしたそれに視点を合わせる。…《インセクト・エツグ》?

「あのエリアボスが産み落とした卵か?生まれる前に駆除しちゃおうぜ」

サクツと卵を破壊した僕たちは明らかに警戒している虫を不意打ちで駆除し、ヤツを見つけた。

…エイのようなモンスターを食っている。うええ、描写がえぐいなあ。

「じやくにくきよーしよくだあー…。ほつといたらまずいやつだよアレ。」

「今のうちにカチコミだー!」

フィリアはドン引きしているしストレアはなんか血に飢えた発言してる。

探索を提案してたけどあんまり引きずるタイプじゃなくてよかつた。

あきらめが悪いというのは長所にも短所にもなりうるから…。

周りにいる取り巻きをボスに気づかれないうように投石でおびき寄せ、確実に仕留める。

こういうのは取り巻きが全滅すると警戒状態になって奇襲しにくくなるから、あえて一匹残して…死角からぶん殴るのがいい。

「くたばれ虫野郎!!」

《アバランシユ》で《アメデイスター・ザ・クイーン》の腹部を斬りつける。

虫の腹部というのは基本的に柔らかい。甲虫は翅を硬化することでその弱点を守ったが、この女王は蜂とかカマキリに近い姿をしている。

馬鹿正直に正面から行くよりもダメージが大きくなるというわけだ!!

『ギギイツ!!?』

「わー、ひどいやつだねキリヤつてー。プレイヤーにやつちやダメだよ?」

アタシだったららご飯の邪魔するやつはボコつて圏外に放置するからー!」

「あはは…、わかったおぼえとくよ!」

ストレアの冗談(?)に笑いながら追撃のソードスキルを撃つ。

最後の一撃は跳躍で回避されるが、先制攻撃としては上々だ。

「よし、最後の取り巻きやつつけたよ!ふたりとも大丈夫?」

「フィリア、こいつ…《ホロウ・リーパー》よりかは弱いっぽいぞ。」

フィリアはあの規格外のボスを思い出したのか少しだけビクツと

二人が落ち着くのを待ってからこれからどうするか話し合おう。
「だいぶ奥まで逃げられたな。途中で転移石は見つけたけど、もうここまで来たら決着つけよう。」
「いえーい！害虫駆除だよ害虫駆除！叩き潰しちやお、キリヤー！」
「あと一本だもんね、一日ほつといたら全回復してまたエリアの巡回しそっだし…出直さなくてよかったね…。」
「…そっだね。」

森の奥にたくさんのお卵と生まれたての虫たちがうろつくエリア…、その奥で女王が怒りに震えながら傷を癒していた。

僕たちは真正面から《アメデイスター・ザ・クイーン》に向き合うと、武器を構えた。

…さあ、ファイナルラウンドだ！

第三十四話 最後の休息

《アメデイスター・ザ・クイーン》は度重なる襲撃で返り討ちにあつた影響か、モーション動きが鈍い。

このまま押し込むぞ、いきなりブレスを吐いたりしない限りは問題なく勝てるはずだ。

「キリヤ、スイツチ!!とおりやあああ!!」

「おう、任せたぞストレア!!」

ストレアの放った《アバランシュ》が硬直しているボスに直撃し少くないダメージを与える。

……やっぱりなんか変だよな、あいつの武器……?

雑魚と戦つてる時とボス戦の時で、DPSが違う気がする……。フロアボスのラストアタックボーナスとかでもおかしくないユニークな性能だ。

(……ストレア、きみは……誰なんだ……?)

ズタボロになったボスに、ストレアはとどめを刺そうと近づく。

ストレアは、笑っていた。我が子を祝福する聖母のように、もしくは哀れな命を狩り取ろうとする死神のように。

《アメデイスター・ザ・クイーン》は、怯えていた。自身の目の前に立つ得体の知れない存在に……。

「じゃ、おやすみ。」

女王の頭がかち割られた。ラストアタックを取った、というには一方的な処刑。

オレンジ犯罪者ギルドとの戦いでも久しく感じていなかった、得体の知れない何かへの恐れが僕の中にあつた。

彼女が記憶を取り戻したら、僕とストレアは……友達のままでいられるのだろうか。

「………………。かえろう、二人とも。」

ストレアはにぱーっと笑った。……さっきの人外じみた美しい笑みよりも、僕はこっちのほうが好きだな。

「えっへっへ、うん！これで全部のエリアボスをやっつけたんだよね？」

で、アップデートを阻止するには管理区内にある隠しエリアに行かないといけなくて…。」

フィリアは頷きながらそれでも希望に満ちた顔をしている。

うまくいけばアップデート阻止と同時に彼女をこの世界から縛り上げるものはなくなる。

「キリヤ。…そっかあ、あとちよつと、なんだね…。…仕方ないけど、もうすぐおわりなんだ…。」

その言葉の意味に気づいたのか、少女は少しだけ名残惜しそうな表情を見せる。

あたまをおもむろに撫でると、恥ずかしいのか数秒撫でられたあとすぐに手の届く範囲外に逃げてしまった。

「お、ツと…。フィリア、大丈夫。僕は君と一緒に帰るんだ、絶対に！！

アインクラッドに戻ったら忙しくなるぞお？」

「……………うん！ああ、そーいえばアスナからスカウトされてたっけ？」

今のうちに考えておいた方がいいよね？」

「ハハ、そうだな！アスナさんってそういうの覚えてるタイプだし断るにしても伝えに行かなくちゃ。」

ソロプレイヤーのままだとしても怒りはしないだろうけど。」

（その時が来るのが楽しみで仕方がないな。アインクラッドだって牢獄には違いないけれど…この世界ホロウ・エリアよりはマシだ）

ホロウ・エリアはセーフティエリアが極端に少ない、理由はきつと必要がないからだ。

だってここにいるプレイヤーはコピーされたものなので替えが効いてしまう。

…ホロウが知っていい情報ではないよね、これ。POHと同じ立場になったら、僕もきつと抵抗する。

「キリヤ、ちよつといっ？」

《赤羽亭》に帰ろうとする僕に、ストレアが声をかけてくる。

「ん？どうしたのストレア？」

「今日は楽しかったよ。実はね、ボス戦って初めてだったんだ。」

「…え？」

そんな馬鹿なと言おうとして、彼女が記憶喪失なのを思い出す。

記憶喪失になる前からあの剣を手に入れていたということか…？

いや、とりあえず聞いてみるか。

「その両手剣さ、ボス特攻とかついてないか？」

「うん、もしかして珍しいの？」

「フロアボスのラストアタックボーナス並みに…。」

「はえー、すっごい。」

とぼけたことを言いながらストレアは自身の剣をじろじろと見ている。

泣き出しそうなのを我慢している顔を見て、僕のこころはざわつく。

「…コレさ、気づいたときにはもう持ってたんだよね。デザインが凝ってるから店売りの市販品じゃないなどは思ってたんだけど…。」

そっか、ボスドロップかもしれないんだ…。……………やっぱり、

アタシ思い出したいよキリヤ!!

アタシはだれなの!!

涙を流しながらストレアは叫んだ。

「ストレア…。」

「……………ごめん、もう帰る…！」

そう言いながら彼女はかなりのスピードで走り去る。

僕は追いかけてやうとしたもののすぐに路地裏に入られてしまい、追うのを諦めた。

《ハイディング隠蔽》の熟練度が高いストレアをこの状況で見つけるのはムリだ。

「……………クソッ！あんなに思い詰めてたのか、あいつ…………。」

ダメだなあ、『オレ』…。」

気分が落ち込んでいるのに、ぽつぽつ雨が降り始めたのをみてため

息をつきそうになる。

「…帰るか…。さすがに雨降ってるんならあいつも雨宿りするよな？」

《赤羽亭》に戻った僕は、消費アイテムの類がかなり減ってしまったていることに気づいた。

明日一日で買い揃えなくちゃ…。

「…シノン、明日は一緒に買い物に行こうよ。」

僕はベッドの上でゴロゴロしている彼女に声をかける。

「前に買いたいのがあるって言ってたけど、いいの?」

「もう目標額まで貯まったし、いつ買いに行こうかなって段階だよ。」

彼女はすこし考えると、楽しそうに微笑んだ。

「先にそつちを買ってからでいいんじゃないかしら?次に消耗品とか食材を買って…。」

そのあとはどうしようかしら。…：…久しぶりにデートする?」

「…そういえば最近ホロウ・エリア攻略で忙しかったしいかもかもしれないなあ。

あー、でも何買ったか今は秘密にしときたいしなー。どーしよ…：…。」

「なら先に目当てのものを買ってきたら?私もいろいろ準備したいし」

頭を抱えて悩む僕にシノンが助け舟をだす。あ、ありがたい…!

「ほんとゴメン…、ホロウ・エリアのアップデートをなんとかしたらちゃんと見せるから…!」

「…約束よ?ちゃんと勝って戻ってきなさい。死んだら許さないからね!」

「もちろん!死なないように頑張ってくるよ。…それじゃ寝ようか」

ベッドの中に潜り込みシノンの瞳をじっと見つめる。

「おやすみ、キリヤ。朝ごはんどうする?」

「んー…食べる前に行くー。すぐに戻るか、ら…」

ダメだな、眠気が強くて…いしき、が…。

〈SIDE：シノン〉

「……寝ちやったみたいね……」

なんとも幼い寝顔を晒す恋人になんだか心が癒される。

最近ホロウ・エリアの探索をぶっ続けでやって疲労が溜まっているからか、最近の彼はベッドに入るとすぐに寝ている。

起きてるときは全くそんな素振りを見せないのに……

（自分と同じくらいの年なのにこうしてみると年下にも見えるなあ……）

アバターの年齢は十代前半くらい……？二年ここにいることを考えても二十歳は超えてないと思うけど……）

キリヤの頬をつつついて遊ぼうか悩んでいると私もなんだか眠くなってきた。

……もういいや、眠気に抗う理由もないし寝てしまおう。

彼のからだをぎゅっと抱きしめながら、幸せな気分で眠りに落ちていく。

「ふふ……明日はなに着ていこうかな……」

翌日、アラームで起きた私はキリヤの姿を五秒ほど探し、もう外出していることを確認する。

とにかく朝食なにかいいか、メッセージを送信して……

『おはよう、朝ご飯なにがいい？』

『サンドイッチ、ハムとレタスがいいな。あと三十分で戻るから！』

『オツケー、またあとで！』

……よし、とりあえず着替えよう。久しぶりのデート、楽しみだな。

第三十五話 水遊びのち決闘、その後釣り

〈SIDE：シノン〉

朝食のサンドイッチと牛乳（主街区近くの牧場で1000コルで買える）に舌鼓を打ちながら、私は新聞を見るキリヤを見ていた。

アルゴとの縁から《ウィークリー・アルゴ》を定期購読しているものの、エンタメ重視で良くも悪くも値段相応のため情報の精度としては低い。

…しかし、いつもはパラパラ流し読みする彼の手があるページで止まった。

「…なにか面白いニュースでもあった？」

「……………見る？」

困った顔をしたキリヤから新聞を受け取り、そのニュースを見る。

「……………なにに…。〈六十一層主街区《セルムブルグ》のNPCが新クエストの予告か？〉

……………六十一層…たしか、主街区と迷宮区以外海じやなかったっけ…？」

「そうだよ？今さつき買い物のために行ってきたんだけどさ、ガチだよコレ!!」

町の漁師が、殺人クジラがでたってわめいてたからな！嫌な予感しかしねえ!!」

「さ、殺人クジラあ？…え？いきなりそんな話が沸いてきたの…??」

「この前ガ●ラ擬きが出てくるクエストが発見されたらしいからな…。」

妙なクエストが増え始めてるんだ、この世界に…。茅場め、なに考えてやがる!？」

忌々しそうに牛乳を一気飲みしながら開発者に恨み言を吐き出すキリヤ。

なんだかすごく珍しいものを見た気がする。

……………まあ、キリヤが言うには自分の箱庭を創りたいが為に一人をデスクゲームに参加させたクレイジーGMらしいので擁護は不可能だ

けど…。

「ま、まあ茅場が何してようが今は手出しできないから放っておくとして…。」

今日はどこに行こう？七層のカジノ…は駄目だな、昔元締めのコルロイ家にケンカ売って出禁になったし…。」

「なんかさらつととんでもないこと言わなかった?？」

「~~~~~♪」

「口笛でぐまかさない！」

聞きたい、その話すぐ聞きたい。なにがどうなったらカジノの元締めにはケンカなんて売ることになるの？

「じゃあどこがいいかな…。……………。そうだ、散歩しよう。」

「さんぽ？おすすめの場所でもあるの?？」

につこりとキリヤは笑みを浮かべた。

「少なくとも、ゆっくりはできるよ。なんてったって、フィールドにM O Bすら出てこないからな！」

主街区で消費アイテムと食材を買い込んでから、転移門で私たちは二十二層へやってきた。

広大な面積を常緑樹の森林と無数の湖で構成された、のどかな階層だ。

…ようするに攻略組の面々が来るわけもないド田舎ということでもある。

「モンスターが出てこないっていいわね…。余分な装備で体が重くないのって久しぶりだし、人も少ないし…………。」

それに、貴方を独占できる。後ろ暗い歓喜を感じながらも、それができるだけ隠そうと冷静に振る舞う。

軽蔑されたくないなあと思いつながら、私は湖の中に素足を入れてみた。

水の中はひんやり冷たくて心地いい。けど、もうすぐ九月も終わるし十月になったらキンキンに冷えて足を入れるどころではなくなるよね。

そう考えるといい時期に来たんじゃないかな。

「ふふ、気持ちがいいわね♪ キリヤもどうかしら？」

「残暑もそろそろ薄れてきて今を逃したら水遊びじゃなくて寒中水泳になるから。」

「…おお、冷たっ！」

しばらくパシャパシャ音を立てながら涼んでいると、後ろから誰かの足音が聞こえてくる。

振り向くとそこには釣り竿とバケツを持った少女の姿があった。

俗にいう釣り人スタイルだ。たしかにここは釣りをするには静かで最適かもしれない。

「……………」

おしやれな麦わら帽子を被り薄紫の髪を一つにまとめた彼女を見て、私は挨拶をしようと声をかける。

「こんにちは！」

「あ、えーっと……………」

言葉に詰まった少女の顔を見たキリヤが突然大声を上げた。

「ああ!!み、ミトじゃないか!?!え、こんな田舎でなにしてるのおまえ!!?」

「え、ミト…!?!だいぶ雰囲気違って気づかなかった…。」

「……………なんでこんな場所で知り合いと会っちゃうのよお…。」

せっかくの休日なのに!」

帽子を外したミトは、観念したのかキリヤの隣に座る。

「運悪いわね。…ところで釣リスキルなんて、珍しいのを取ってるのね?」

「……………ここで魚釣ってご飯の一品を増やしたいのよ。」

「せ、切実う!!攻略ギルドの一軍なのに貧乏学生みてえなこと言ってる悲しくならないのか…?」

「このやろお!!最前線で見かけないなと思ってたら下層で遊んでたのか!?!」

ふざけんな、攻略しろ!!」

「こっちはこっちで忙しかったんだよおー!!」

てめえ、表出る!!女の子だからってニート扱いするのは許さねーぞ!!!」

キリヤが外出用の薄着からいつもの装備に戻し、トトンツと軽やかに比較的広い場所に移動する。

ミトの方を見ると、にやりと笑いながら釣り竿をデスサイズに持ち替え黒騎士を見つめていた。

「…イイね、《決闘》^{デュエル}なんていつ以来だろ？」

熱いバトルにしよう、キリヤ!」

白と赤を基調にした少女騎士が、紫色の鎧に身を包んだ少年騎士と向かい合う。

…これが煽り合いから始まったケンカじゃなければな…。

キリヤがメニューを操作すると、15m先にいるミトの前にシステムメツセージが現れる。

……じつは、《決闘》^{デュエル}を見るのはこれが初めてだ。

前にアルゴからシステム的なことは教えてもらったから基本知識はバツチりあるけど…。

「ふたりとも、やりすぎないでねー!」

《決闘》^{デュエル}のカウントダウンを見ながらふたりの構えを観察する。

ミトは下段、キリヤは中段に構えているように見えるけど…。

3

2

1

カウントダウンが残り一秒になった瞬間。

騎士たちは相手に向かって走り出した!!

「おおおおお!!!」

[D U E L !!]

キリヤは地面をこするような軌道で剣を切り上げ、ミトは大鎌をクルリと回しながら迎撃し、刃がぶつかり合ってライトエフェクトを生み出した。

つばぜり合いに持ち込むのかと思ったその時、ミトがキリヤの喉を柄で突いた。

「ガッツ!?!」

「よし、隙ありい!!」

喉元を抑え咳をするキリヤに追撃を加えようとミトは武器を振り下ろす。

大鎌が肩に当たる寸前、キリヤがニヤリと笑った…気がした。ガキン。

「……………ん??」

……………ガキン?なに今の音、ダメージの音じゃなくない?

「……………ひりひりへーふ(ギリギリセーフ)!!」

「はっ……………はぁー……………!!」

……………信じられないものを見た。

キリヤは、歯でデスサイズの刃を受け止めたのだ。

「ちよつと!?それあご大丈夫!」

思わずキリヤにツツコミをする。サラツと心臓に悪いことしないですよ、もう!!

「こつわ!!こいつこつわ!?一体なに考えてんのアンタア!!」

ミトは明らかに引いていた。

「ふあふあひやふはい(まだやるかい)? ほれはふあふあいふえふほー(『オレ』はまだいけるぞー)。」

「……………降参よ。なんかもう…アンタと戦うの怖いわ…。あとそろそろ口を離せ、きたない。」

「ぺっ! いやあ、できるもんだなあ…。」

反省した様子もなく笑うキリヤ。腹が立ってきたので少し灸を据えるために怒ろう、そのくらいは許されるはずだ。

「もう、二度とこんなことしないでよ!?失敗したら死んでもおかしくないんだから!!」

まちがっても命を賭ける場面じゃなかったよね?」

「……………ごめん。さすがにあれば自分でも頭おかしいとおもう。」

「反省してる?」

「してます。」

「……………ひとまず信じるからね?」

この人《オレレンジ犯罪者》との戦いでもこういうことしてたのかなと思うと頭が痛い。

離れ離れになるのはもう嫌だなあ、いつ死んでもおかしくないことを知ってしまったし。

その後キリヤとミトは《決闘^{デュエル}》の代わりに釣りスキルで勝負を続け、キリヤが五匹、ミトが六匹釣り上げた。

ミトはどや顔で釣果を自慢して、キリヤは悔しがっていた。

「…こんな日々がずっと続けばいいのに。現実世界は…しがらみが多すぎるから。」

「…シノン、『オレ』は後悔してることがあるんだ。妹と稽古の約束してたのにずっとすっぱかしちゃって。」

あつちでやり残したことからやりたいことないの?」

キリヤの言葉が私に突き刺さる。それもそうね、二年以上アインクラッドにいたら家族のこと気にするのは当然だと思う。

やりたいこと、やりたいことか……。

「ミトはSAOクリアしたらやりたいこと、ある?」

「格ゲー。格ゲーがしたい。」

「か、格ゲー?」

「最近レバガチャが恋しくなってきたのよ、困ったことに!

ゲームの中でゲームやりたいとかだいぶキテるわ!!」

ゲームセンターなんてほとんど行つたことがない。

だいたいガンシューティングが置いてあるため近づくのが怖いからだ。

「キリヤはそういうところ行つたりする?」

「いや、ゲームは家でじっくり派。やってもクレーンゲームくらいかな。」

「へえ、そーなんだ。………。やりたいこと、か……。」

帰ったら一度考えてみよう、自分のやりたいことを。

〈SIDE:キリヤ〉

そうして最後の休日は静かに過ぎていき、未来を掛けた一日が始まるうとしていた。

SAOが始まってから長きにわたり続いた因縁が、ひとまずの決着

を迎えようとしている。

僕らが負ければ大惨事、勝つてもほとんどの人にとって日常が続くだけだ。

横で眠るシノンの頭を撫でながら、僕はこれから始まるであろう死闘に思いを馳せる。

仲間たちを、好きな女の子を死地かもしれない場所に連れていきたくないと思った僕は、そっと出ていくことに決めた。

書き置きを残した後ホロウ・エリアに向かう。

「…行つてきます。」

さあ、決戦だ。《黒の剣士》や《閃光》と違ってこっちは目立たない影みたいなものだけど、僕だつてやるときはやるぞ!!

暗黒騎士なんて大層な二つ名ついてるのは伊達じゃないんだ!

第三十六話 アップデート最終テスト

あくびを噛みしめながら、まだ日の出ていない街を歩く。

誰もまだ起きていないであろう早朝（もちろん徹夜していたら話は別）に、ホロウ・エリアの管理区にいた僕は睡眠中のフィリアに近づいた。

フィリアの入っている寝袋を勢いよく揺ると、少女はすごい声で飛び起きる。

「にやあああー!!?!だ、誰え!?!てきしゅう!!?!」

「おはよう、フィリア。」

「あ、おはよう。……じゃなくて！何時だと思ってるの!!五時よ、五時!?!」

「起きなかつたら僕一人で行っちゃうぞ? いいのか?」

寝袋をストレージに突っ込みながらフィリアは半泣きになりながら怒る。

「良いわけないじゃんかあ! …あれ? …今日は仲間、連れてきてないの?」

「うん。…少数精鋭で行こうと思って。」

今日の朝、僕は起きた瞬間にとてつもなく嫌な予感がした。

経験上こういう時は被害覚悟で人数を用意するか、逆に少数で目立たないように行動するのがいい。

六人パーティなら一人が酷い目に遭ったとしてもリカバリーが効きやすい。

少数は…時と場合による。『オレ』一人では完全に守り切れると断言できるのは一人だけだ。

「まあ、ついてきてくれる方がありがたいけどさ。もしかして焦ってない?」

「あせってるよ、間違いなく…!ごめん、理由はないけど今を逃したらまずい気がするんだ!」

いきなりだけど準備はできてるか!?!」

「だいじょうぶ!! キリヤの直感をしんじるよ!」

「ありがと。じゃ、行こうぜ。」

ホロウ・エリア管理区、秘匿領域。

そこは、余計なテクスチャが一切存在しない殺風景な空間だった。あまりに飾り気がないせいで距離感がつかみにくい。

「…どうやってPOHはここを突破したんだ…。どこまでいっても同じ景色で気が狂いそうだ…!」

「でも少なくとも攻略はできるってことだよね。」

「だと思っけど。…邪魔だア!!」

『ブヒィィ!!?』

敵を《暗黒剣》の脳筋バフ込みソードスキルで粉碎しながら、次のフロアを目指す。

数こそ多いものの大したことないのが気かりではあるものの、気にしてばかりもられない。

代わり映えのしない景色は次のフロアに転移しても続く。

今どこにいるのかもわからなくなりそうだ。

「……………きつつ。」

「今地下三階だよね…? ちょっと、休憩しない…?」

「そう、だな…………。」

どこまで続くのかすらわからないのに、無理をして進んだら逆走しかねないな。

水筒を取り出し中身のあったかいスープと干し肉を二人分用意しながら、僕は座り込んだ。

「ほら、朝食代わりにどうぞ。」

「ありがとー。…………コンソメスープだ、けっこうおいしいねコレ。」

「その代わり干し肉の方は期待しないでほしいな。コンソメで柔らかくするといくらかマシになるよ。」

「ら、落差がひどい…!」

硬い干し肉とスープで英気を養った僕たちは、座ったまま話し始める。

「…長かったな、ここまでするまで。」

「……そうね。この世界に来たばかりのころは、野垂れ死ぬものばかり思ってた。でも……ね？」

すすつと音もなく彼女は僕の隣に移動してきた。そのままたれかかってくるフィリアに、ドキッと胸が高鳴る。

「いやいやいや、まずくね…？」

「キリヤが、絶望から救ってくれた。生きるための希望になった。

きみは、わたしのこころの虚ろを埋めてくれた。」

「フィリア…。」

「きみは、わたしのフラグメント。あーあ、こんなじやもうソロには戻れないわね。これからもよろしく！」

そういうと彼女は僕を強く抱きしめた。女の子特有の柔らかさと熱がこちらを包む。

ぎゅうつと抱きしめられてすこし困惑するものの、なんだかこころがあたたかい。

「……………そっかあ。僕はフィリアを助けられたんだなあ…。」

そのひとりごとを聞かれたのか少しだけ抱きしめる力が強くなった。…心配させてしまったかな？

その後三十秒ほど、ぎゅうつと抱きしめてきた彼女は元気いっぱいになったようだ。

「それ、スイッチ!!」

「お、おう!？」

ちよつと押せ押せの彼女に戸惑いながらもスイッチすると、フィリアの《ファッド・エッジ》が敵を切り捨てる。

敵はだんだん強くなっているけど、この一ヶ月弱で鍛えられたコンビネーションの前には案山子同然だ。

「へへん、順調順調!!さあ、先にすすもう!」

「うーん、元気だなフィリア。さて次の転移石は、と…。」

地下十階を突破した僕たちは、赤い障壁に阻まれた通路に出くわした。

僕の手には浮かぶ高位テストプレイヤー権限の紋様を近づけると、そ

れは派手なサウンドで消えていく。

「これさ、高位テストプレイヤー権限なかったらどうなってたんだろ…。」

「門前払いだと思う。ボスの全撃破がここに侵入する条件だから、ほんとならホロウが入ってくるのはあり得ないはずなんだよね。」

「そこら辺を歩いてるモンスターとはわけが違うんだし。」

「どっちもクリアできるのは相当の実力者でもあるってことだな。…つまりここからはそれ前提のヤバいのが出るってことだ。…こわいか?」

フィリアは首を振る。

「ううん、こわくないよ。…生き残ろうね、キリヤ!」

「おう、いくぜフィリア!!」

グータツチをしてから赤い転移装置でボス部屋に転移する。

床はガラスのように透明で、なんだか落ち着かない。

遠くからボスらしきものが回遊しながらこちらに向かってくる。…数十メートルは離れてるはずなのにはつきり見えるぞ、かなりでかい。

「…ドラゴン、か?」

「くるよ、キリヤ!!」

『グオオオオオオオオ!!』

咆哮を上げながら、純白のドラゴンは禍々しいオーラを放つ。

ホロウ・エリアのラスボスにふさわしいそのドラゴンの名前を確認する。

《オカルティオン・ジ・イクリップス》

…ちよつと辞書が欲しいなと思ったのは内緒だ。

ラスボスの腕の振り回し攻撃を回避しながら、突進系スキルで反撃する。

が、ダメージ量は微々たるもので長期戦という言葉が頭をよぎる。

《オカルティオン・ジ・イクリップス》はアインクラッドのボスらしくない立体的な攻撃でこちらを苦しめてきた。

透明な床の下に回り込んで一方的な攻撃を仕掛けてくるボスからは、

『オマエをぶつ殺す』

というホロウ・エリアの殺意を感じさせる。

「クソ、大丈夫かファイリア!？」

「いまので二割割れた! ポーション飲むからちよつとまつて!」

時間の遅延をしてくるとかひでえな、それでいて安全圏から一方的に殴ってくる相手は好きになる要素がないぞ…。

それでも頑張つてHPバーを一本削り切るが、なにやらボスがフィールドから離れていくのを見て嫌な予感がする。

「……………なんか背中のとこがピカピカしてんだけどあいつ。」

「あー、特殊攻撃かな? …ヤバいの撃つてきそう。」

純白の身体を漆黒に染めたドラゴンが、エネルギー弾を生み出しこちらに撃ってくる。

「ぐあっ!!?」

攻撃をくらうと視界が黒く染まり、まともに見えなくなった。

敵の視界を奪うデバフ、暗闇状態だ。ソレを直すためのアイテムである昭光結晶は暗闇状態自体あまりメジャーではないため、回復結晶や解毒結晶よりも優先度が低い。

「ち、くしょう…!! 昭光結晶なんてマイナー結晶持つてるわけないだろ…!」

「うわ、もしかしてまともにくらった!? いったん下がる?」

「いや、だいたい方向と距離を言ってくれたらなんとかなる!!」

暗闇状態はレベルにもよるがだいたい二十秒で視界が戻る。

敵の攻撃は腕に生えたブレードでの斬撃や直線のビームがメインのようだ。特殊攻撃以外ならどうとでもなる。

「特殊攻撃の時は尻尾の衝撃が飛ぶ方向に『オレ』がいたら声で知らせてくれ。」

「いいけど…なんかボス黒くなったんだけど。」

…今の特殊行動で強化されたのか。いや、ここは押すしかない…!
「無視しろ、無視!」

「えー…？気を付けてよ、キリヤ。」

ボスのHPが減るのと反比例するように、嫌な予感はどうも大きくなつていく。

(…なんだ、この言いようのない不安感は…？こいつは最後のボスのはずだ。)

…なら、この嫌な予感は…。

ドラゴンの攻撃パターンは全て見切った、このまま押し切れれば勝てる。

ボスの隙が大きい攻撃を回避し、二人で奥義を叩き込む!!

「いっしょにいくよ、キリヤ!」

「おう、墜ちろおおおおお!!!」

《暗黒剣》奥義 《ディープ・オブ・アビス》と、フィリアの《エターナル・サイクロン》が直撃し、ボスは奈落の底へと落ちていく。

『オオオオオオ……………』

砕けながら落ちていくボスを無視しながら、用心深く周りを見渡す。

…間違いない、これは前座だ。強力な力を持ち、派手な見た目のボスだが…まるで、時間稼ぎをしているような…。

ドサツと、なにかが倒れるおとがした。

「……………フィリ、ア…?」

彼女のHPバーの周りに、緑色の枠が点滅している。…麻痺状態だ。

いきなりで混乱する『オレ』に向けてシステムアナウンスが響く。

『ホロウ・エリアアップデート、最終テストを開始します。』

そこに現れた男は、僕と同じ姿をしていた。…テストの内容が一発でわかると同時に頭が痛くなった。

自分自身と戦えつてことだろうか？

「……………」

無言でたたずむ『オレ』のホロウの目は黒く淀んでいる。…ディアベルやPOHとは違って、意思のない戦闘人形か。それなら遠慮なく

コロセル
戦えるな。

〈SIDE：フィリア〉

二人のキリヤが互いをにらみ合う状況に、わたしは焦っていた。
早くキリヤを助けなくちゃいけないのに、身体がまったく動かないからだ。

(ゆ、指一本うごかないなんて……これじゃポーチの中のアイテムが取れない！)

いやそもそもこの麻痺、自然治癒で治る!?)

「き、りや……!」

「……大丈夫。『オレ』に任せろ、フィリア。」

につこりと笑いながらキリヤは、ホロウに剣を向けた。対するホロウ・キリヤは無表情。

「……さあ、ラストバトルだ!!」

「……………」

二人の剣士は、まったく同じ構えをとり、漆黒のオーラを纏った剣が激突した!!

第三十七話 VSホロウ・キリヤ

鏡写しのように《ヘイル・ストライク》が激突し、その衝撃が自身の体を思い切り震わせる。

『オレ』のホロウが《暗黒剣》を使ってくることは想定していた。

ホロウでテストを行うならスキル構成をまるごとコピーしなければ意味がないからだ。

ギリギリツ…と両手剣が擦れ合う。

(自分と全く同じ顔の相手との戦い…か。キリトと戦った時とはまた、違うな…！)

自分のことは自分自身がよく知っている。一つでもミスをすれば返しの一手で致命傷を与えてくるだろう。

《暗黒剣》のバフってHP管理気を付ければわりと無法な火力出さからな。

仕様を知ってるから敵に回すのが怖い、素手でも殺そうと思えば殺せるほどの倍率だ。

「…うおっ!？」

鏑迫り合いをして考える時間を稼いでいたが、ホロウはそれに気づいたのかわざと力を緩めてきた。

前のめりになってバランスを崩した『オレ』を、ホロウがサッカーボールのように蹴り飛ばす。

「ぐ、うう…!？」

透明な床に剣を突き立て、落ちないように踏ん張りながら『オレ』は危機感を覚えた。

こいつは、本当に強い…!？」

「キリヤ……だいじょうぶ…?？」

後ろを見ると、麻痺で動けない状態のフィリアがいた。…ホロウは二人まとめて叩き落とそうとしたらしい。

なにもしてなかったら混乱してるうちに死んでたやつだコレ…。

「…わりと手一杯。どーしようかな…。」

「……わたしたち、しんじやうの…?？」

「その弱弱しい、絶望の言葉は僕の頭をおもいきり殴りつけてきた。」

「……ここが、僕たちの終点なのか……？」

「こんな場所で死ぬのか……。……。シノンを残して？」

「……べつに僕が死ぬのは……まあ、許容できる。どうせクリスマスで一度死んだ身だ。現実世界に戻れなくてもそれはそれでしょうがない。けれど……。けれど、シノンを悲しませるのは嫌だな。」

「ちゃんと帰るって約束したのに、死んだらダメだわ。」

「ぼろりと自分の口からそんな言葉が出たことに苦笑する。」

「なんてこった死ぬない理由があるじゃないか……！」

「……なあ、ホロウの『オレ』。おまえ、大切なヤツはいるのか？」

「……。……。」。」

「相変わらずの無言。だが、こいつにはそういったものはないのだろう。戦うために生み出されたホロウに過去を設定するなんて無駄だからだ。」

「先ほどまで恐ろしさすら感じたホロウは、どこか小さく見える。」

「……なーんだ、こんな奴に殺されるなんて考えるのも馬鹿馬鹿しいな！」

「が、がんばればキリヤ!!……誰とのやくそくかは知らないけど、ホロウなんてやつつけちやえ!!」

「フィリアも恐怖を抑え込んで応援してくれている。」

「気づけてよかった……僕は一人で戦っているわけじゃないことに。」

「脳がフル回転しているせいか敵の動きがゆっくりに見える。……敵のソードスキルの軌道すら!!」

「なら、ホロウの攻撃を避けながら反撃もできるはずだ。」

「(ホロウは《アバランシュ》を繰り返そうとしている。一定距離が空いたから突進するつもりだな?)」

「剣を相手の進行方向に置く。勢いよく突っ込んできたホロウの身体が、その勢いのまま切り裂かれた。」

「敵のHPがゴリツと一割も減る。」

「……!!?!!」

「…はじめて、表情が変わったな…!!」

驚愕の表情を浮かべたホロウに、ニヤリと笑う。

「もう一発だ!!」

僕の放った《ヘイル・ストライク》がホロウのHPをさらに削る。
《暗黒剣》のスリップダメージ込みでホロウのHPは二割弱。

「……………」

敵の目が危険な光を放つ。追い込まれた獣などがする捨て身の特攻…シヤレにならねえ!!

「…やべつ。追い込みすぎてやけになったか!？」

「や、やぶれかぶれで大技を出す気!!」

あの構えは《暗黒剣》の奥義《タイプ・オブ・アビス》だ。

あれをまともにくらえばどんだけあってもHPが消し飛ぶだろう。

「……まあ、まともにくらうつもりなんてないけど!!」

漆黒のソードスキルがこちらに迫るのを見ながら、僕も同じ奥義を
発動する。

先ほどとほぼ同じ状況だが…このせめぎ合いに勝てば一気に形勢
はこつちに傾くだろう。

「おおおおお!!」

「!!!」

三連撃目の激突で、異変が起きた。

ピキッ

小さな破砕音が耳に届く。…敵の両手剣の刃、その一部に小さな亀
裂ができていた。

…今だ、この勝機を逃がせば後はない!!

「これでえ、どうだアーー!!」

バキイイインツ!!!

四連撃目をその亀裂に叩きつけ、剣を破壊した僕はもう一人の自分
の顔を見る。

奥義の直撃で砕け散るホロウに悔しさのようなものを感じたのは、
気のせいだったんだろうか…?

「…あはよ。」

自分と同じ顔の存在が消えていくのは…なんかぞつとするな。殺す覚悟はしてたけど…。

居心地の悪さをごまかすためにフィリアの方を見ると、麻痺が解けたのか彼女がこつちに突っ込んでくるのが見えた。

「キリヤアアー!!!」

そのままドーンと抱き着かれ目を白黒させる僕に、フィリアはうれしそうに笑う。

「えへへ、やったねキリヤ!!……あ、カーソルの色が…。」

「あー、オレンジになってんな。」

「わたしとおんなじ、だね。」

「まあ、すぐコンソールで元に戻すんだけどな二人とも。」

和やかな雰囲気をかき消すようにアナウンスが流れる。

『ホロウ・エリア実装アップデートは中断された』という内容が流れて僕たちはほっと安心する。この流れで止まってなかったらヤバいことになってたな…。

「さーて、邪魔するのは倒したしコンソールに向かおうぜ。」

「おー!」

カチャカチャとコンソールをいじること三十分。

バグっていたパラメータを元に戻した僕たちはフィリアとハイタッチする。

「いえーい! ^{オレンジ}犯罪者から ^{グリーン}堅気に戻った気分はどう!？」

「うん…? なんか…こう、コメントに困るかなあ…? 実感がうすいというか」

ホロウ・エリアに迷い込んでからの毎日は、アインクラッドでの生活よりはるかに過酷だったのだろう。安全圏なんかほぼないし。

つまりそれは記憶に強く残り続けるということでもある。…トラウマというやつだ。

「これからはアインクラッドの圏内でゆっくりできるぜ。おつかれさま」

僕はフィリアの頭を撫でる。小さいころ、妹にもよくやったっけ…

元気でやってるかねえ？

「もう、こどもじゃないんだからー。」

なんて言いながらもすごくいい笑顔でされるがままにされている自称トレジャーハンター。

撫でるのをやめたら名残惜しそうな顔でこちらを見てくる少女に苦笑いする。

「……話は変わるけど、帰ったらいつも泊まってる宿で仲間を紹介したいんだけどいいか？」

「といってもきみの仲間ってホロウ・エリアにも来てたよね。完全に初対面のひといる？いわゆるいつものメンバーとかじゃない？」

「あー……。まあメシくって考えようか。」

「お か え り」

《赤羽亭》に戻った僕とフィリアを、こわい笑顔で迎えたシノン。

いや当然だわ、書き置きだけ残してどっか行くのは10:0でこっちが悪い。

「すみませんでした。嫌な予感がしてみんな置いてラスダン突っ込みました。」

「書き置き読んだときあんまりにもあんまりな内容で気絶しそうになつたんだけど？」

なにこれ、遺書？結婚相手と死別したときのアイテム配分なんか知りたくもないんだけど!？」

「…だって、ねー？嫌な予感がしたんだよ、ホントに。POHがコンソール悪用してボスコピペしまくってダンジョンに放置したらどうすんのって話だよ？」

あいつなら間違いなくやるよ??いやがらせ大好きだぞあいつ。」

「……………」

シノンは無言でこちらをじっと見つめている。困った顔で何を言おうか迷っている彼女の顔はなんだか新鮮だな。

個人の努力でどうしようもないトラップが仕掛けられてたら逃げるしかねえもん、さすがに情状酌量の余地はあるはずだ。

「…おなか、すいてない?」

「ペコペコだよ。」

「なら何か食べたほうがいいわね。」

互いに手探りで言葉を交わす。たわいない話をするこの時間が楽しい。

自室にもどるとお茶を飲んでいたアルゴがヒラヒラと手を振っていた。

「オー、帰ったカ、キリヤ!…まずはよく戻ってきたナ、おねーさん嬉しいゾ♪」

「自分の家のようにくつろいでる…。とりあえずホロウ・エリアの最深部の話、聞く?」

「聞くに決まってるだ口、ホレホレ座れキリヤ。情報屋じゃなくてただのアルゴとして聞いてやるからサ!」

チャーハンを食べながらボス二連戦の詳細を話すと、シノンたちは青ざめた。時間稼ぎをしながらデバフまき散らす害悪ワニドラゴンに、自分の全能力をコピーしたホロウ。

ここまで『ゲームなんかしてやらねえ、死ね!!』と言わんばかりの殺意を向けられたのは記憶にないな。

…でも、システムコンソール目当てでダンジョンに攻め込んでくるヤツとか僕がGMだったらデストラップ嵌めするわ。絶対ろくなことしねーもん。

「よく戻ってこれたナ…?デバフを安全圏からばら撒くとかゆるされるねーヨ…。」

「ホロウって…あつちにいたっていうラフコフみたいな?自分のすがたをした相手と戦うのってこわくない?」

「うーん、あいつらと違って完全に人形だったしなあ。一言もしゃべんなかったし。ああ、でも…」

自分が壊れていく姿を僕自身が見るのは…正気が削れる。『オレ』が僕を壊したような錯覚に嫌悪感が沸いた。

ほかのことを考えようとして、新たなマイホームの事を思い出す。

ホロウ・エリア攻略が終わったら言うって約束してたよな。

「…買ったもの見せないとな。」

「ん？ほーひはほひりひゃ（どーしたのキリヤ）？」

「ごくん、なんのはなしー？」

無言でチャーハンをほおぼっていたファイリアが笑顔でこちらに視線をむける。

「ああ…なあシノン、前に買ったあれのことなんだけど…食べ終わったらセルムブルグに行こう。」

「……………土地買ったの?？」

シノンの呆れた顔が突き刺さる。あ、これ土地ころがしてると思われてる!?

「シノン、違うんだ!!セルムブルグはたしかに無茶苦茶高いけど転売なんかしたら街中あるけなくなっちゃう!!」

「オレっちがブラックリストにまとめた連中、黒鉄宮で元気にしてるかナー？」
フウマニングン

《風魔忍軍》とか懐かしいナー。…なあ?」

すげー怖い笑顔でアルゴがほえむ。ネズミというか獅子みたいなプレツシャーに冷や汗がでてきた。

「…容赦なくリストに書き込む気満々だあ…。」

「セルムブルグは高級住宅多いからナ。住みたい奴は星の数いるぜ、よく買えたナ??」

「ホロウ・エリアでゲットしたレア装備オークションで売り払ったからな、攻略組連中の戦力アップもできて一石二鳥ってやつだ。」

「リズベットが知ったらキレそうね。」

シノンのツツコミに苦笑しながら、お昼は静かに過ぎていく。

…危機は、ひとまず去った。少女の呪縛は解け、悪魔の悪意を退けた僕たちは…新たな戦いに巻き込まれてしまうんだけど、それは別の話。

第三十八話 《風林火山》

〈SIDE：シノン〉

：キリヤに連れられてやってきたセルムブルグは、相変わらずきれいな観光都市という印象だ。

プレイヤーもNPCも小綺麗な恰好をしていてどこことなく場違いではないかと思ってしまう。

「ほらこつちこつちー！」

キリヤの案内についていってるものの、なんか裏路地みたいな場所を通り始めた彼に思わずツツコミを入れる。

「…ちよつと!?そんなところ本当に通る必要があるの!？」

キリヤは物凄く困った顔で頷いた。

「まじでここしかルートがないんだよね…マップと一時間にらめっこして、気づいたとき笑えばいいのか泣けばいいのかわからなかった…」

「笑えばいいとおもうぜ。」

アルゴとキリヤがどこかで聞いたようなやり取りをしている。

その場所キリヤが自分で見つけたのかな…。アルゴも知らないみたいだし…。

「すつごい辺鄙へんびなところにあるんだねー。ね、楽しみだねシノン！」

「フィリア、へんてこ物件期待してない？」

「じつはキリヤのセンス気になってるんだよね、わたし。え、シノンは気にならない…？」

キリヤがへんな感性してたらこれから困るよ?」

ファッシュョンセンスに問題はなさそうだけど…。もしへんでも押し付けるような人ではないと思う。

そんな話をそれぞれしているうちに、裏路地を抜ける。

「こつこつて…海岸?」

「……ついたー!こつこつだよこつこつ!!」

キリヤは海岸近くにある民家を指さす。セルムブルグ式、つまり花崗岩でできているけど、装飾は少なめに見えた。

「……ナンだ、コレ……？ただの家じゃあないゾ……？」

「……しかも普通の家より一割くらいやすかつたぞ？こんな良い立地条件ならもう少し高くてもおかしくなさそうなんだけどな……？」

「やっぱあれのせいかな、クジラ。」

「………く、クジラ……？」

それってたしか、最近きいた《殺人クジラ》のことだろうか。

「………なんのはなし？」

フィリアはポカーンとした顔で私に視線を向ける。

最近キリヤから聞いた話をそのまま彼女に話す。

「ほえー、具体的にはどんなクエストなんだろ？」

「そりゃあ、おまえ……捕鯨だよ……!!」

キリヤがニヤリと笑う。……あ、もしかして。

「……受けたの？」

「レイドパーティ組まなきゃいけないやつだったよ。……ま、立ち話もなんだ、入って入って！」

……家の中には最低限の家具とかなり大きめの目立つ箱以外はない。引越したばかりの新居という印象だ。

「……ここ、二人暮らしのために買ったってことでいいの？」

「そのつもりで買ったけど。……追い出されると思った？」

「………うん。」

困った顔でキリヤが言う。

「そんなことしないよ。」

「………しってる。」

ソファに座っているキリヤの肩に寄りかかる。……なんか眠いなあ。

「すこし、このままでいいかしら。」

「いいよ。……不安にさせてゴメンね。」

彼の優しい声で安心した私は、睡魔に夢の世界へ案内されてしまう。

ちよつと恥ずかしいけど、まあいいか……。

〈SIDE：フィリア〉

キリヤの肩に寄り掛かったまま寝息をたてているシノン。
む、むぼうび…!!すごいむぼうび…!!

「ニヤツハツハ！イヨツ、色男！」

「おーまーえーなー…」

アルゴは楽しそうにキリヤをからかっていた。

シノンを起こさないように声のボリュームを控えめにしているが、
声の調子は二人とも明るい。

「……………いいなあ。」

「え、アルゴのダルがらみが?？」

ぽつりとこぼれた一言は、キリヤの耳に聞こえてしまったらしい。
ちがうそつちじゃない。

「イヤそうじゃなくて…シノンのことだよ。安心してるのかぐつすり
寝てる。」

キリヤがいるからかなあ。」

「……………この支えになつてゐるならまだいいんだけど…」

…キリヤにはなにか悩みがあるみたい。

「……………アー。シーちゃん依存ぎみだもんナー…。」

キリヤがいなくなつた後に精神状態が安定するとは思えない。…
まず間違いなく悪化するゾ。」

「んー…ねえキリヤ、アルゴ。そーいうのつて今考えても仕方な
いよ。」

わたしたちだつて精神的に余裕があるわけでもないし…」

「難しいなあ…………。あーあー！カウンセリングできるやつなんかSA
Oにいるわけねえよなあ…」

キリヤがため息をつく。そんなピンポイントな人材いたら間違い
なく酷い目に遭うよね…。」

「ところではなしは変わるけど、捕鯨の詳しい話きかせてー」

「オー、いいぜ。」

アルゴが言うには、異変が起き始めたのは一週間も前のことらし
い。

漁に出ていた漁船が行方不明になつたのだ。…まあ、それだけなら

よくあることだけでも。現実世界だと時化^{シケ}とかあるし…。

…けど、それだけでは終わらなかった。

六日前、漁船を探しにいった船がズタボロになって戻ってきた。

中にいた人たちは重傷の一人を残して全滅していて、その一人も船を破壊した犯人を伝えこと切れた。

…白銀の巨大なクジラ、三十メートル以上あったらしい。

「んで、何十年も前に似たようなことがあったらしくてな。デカいクジラがセルムブルグを破壊しようとして襲撃したらしい。」

死人けが人出しまくってなんとか退けたって町の老人…クエストNPCが言ってた。」

「倒した…じゃなくて退けたってことは、もしかして同じやつが襲ってきてるの?」

キリヤは頷く。…なんだか狩りっていうより戦争みたい。

「なんでも二本のかい角がメイン武器らしくてな。ほれ、町の本に置いてた挿絵。」

キリヤがストレージから一枚の絵を取り出した。

ゾウのように緩くカーブした角が全長の三分の一を占めている。

「これ角入れて三十メートルだよな!」

「そうだといいな。」

アルゴは死んだ目で笑っている。

これが船に突っ込んできたら船底は酷いことになるよね?

「とりあえず、まずは人を集めようぜ。攻略組をそのまま引つ張り出せば確実…なんだけどなあ……。」

「…無理、だな。トップギルドの連中がクエストに現を抜かして最前線をおろそかにするとは思えない。」

アーちゃんならホームを守るためにクエストに協力してくれるだろうケド」

「クエストの報酬は?NPCからなにかきいてない?」

わたしの質問にキリヤ達は頭を抱えた。

「クエスト内容とクジラへの恨み以外なんも言っていないんだよな…。ボケてるのかそれ以外がこころに残ってないのかはわからないけ

ど。」

「…じゃあ、報酬で人を集めるのはむりがあるよね…。キリヤ、だれか心当たりないの…?」

「……………中小ギルド、だな。」

キリヤはポツリとつぶやく。

「中小ギルド。」

オウム返ししたわたしに彼が説明する。

「…お人好しで実力もあつて、チームワーク抜群なのにバカな連中に心当たりがあるな。」

《風林火山》っていうんだけど」

「オー、……………あいつらカー。大手ギルドとどうしても比べちゃうからか、まあまあ頑張ってるって印象だな。」

…イヤ、よくやつてる方か。死の危険性が高い最前線で、欠員を一人も出してないのはスゲー。」

「いやすごくくない!?最前線で犠牲無しって、そうそうできないよ?」

「男所帯だから女子への耐性低いけどそれ以外は頼りになるよ。リーダーのクラインは普通に強いし。」

……………ほら、おきてシノン。出かけるよ」

キリヤは寝ているシノンの肩を優しく揺すり、彼女を起こそうとしている。

「……………ん、う…。…おはよう、みんな。…でかけるって、何処に?」

「捕鯨クエストの下準備、かな」

「おう、ひさしぶりだなキリヤ!ラフコフ討伐以来か!」

「「おーっすー!」」

キリヤたちと向かった場所で待っていた集団は、一見山賊みtainなかつこうをしていた。

…《KOB》とか《軍》のように統一された装備ではなく、各々好きな装備でいるからだろうか。……………いや、リーダーの顔がワイルドなのが原因かな、コレ。

どう言いつくろつても野武士顔、もしくは山賊顔だもの…。

「その節はどうも！ここに来てくれたってことは、メッセーじちゃん
と読んだみたいだな！」

「ま、オレたちもオマエら情報屋には世話になってるからな!!…とこ
ろで、だ。」

野武士面の男は笑顔を真顔にして、わたしを指さした。

「…この娘、どちらさん？今まで見たこともねえんだが、どこで会った
んだ？」

「…ともだちだけど。」

「……………ち、」

「…???

「チクシヨオオオオオオ!!」

野武士はとんでもない大声でシャウトする。む、むっちゃくちや悔
しがってる…。

「ただでさえ女性プレイヤーがすくねえから出会いがねえってのに
よオ!!オマエってやつはー!!」

男はキリヤの頭をガシガシと乱暴になでている。キリヤはちよつ
と楽しいのかされるがまだまだ。

「わははは、だいじょーぶだよクライン！きつといつかいい人に会え
るさー！

…でもがつつきすぎるとドン引かれるかも？」

「……………。そっかー。がつつきすぎかあ…。」

野武士の男改めクラインはがっくりと肩をおとす。

「あつちで合コンやったときオレ以外イイ感じだったの、けつこうき
ついもんがあつたなあ…。」

もう少し前に知りたかったぜ。」

「リーダー、今度こつちでセットしましょう、合コン。」

たそがれてるクラインに彼の仲間は慰め始めた。

「おーい戻ってこいクライン。詳しい話しよう。」

「あ、おう。す、すまんキリヤ。」

「それじゃ、場が和んだところで今回のクエストについて説明する
ゾ。」

アルゴの説明を聞きながら、クラインの目に決意の光が灯るのを感じる。

「……………気になったことがあるんだがよお。…………その捕鯨クエスト、失敗したらどうなるんだ？」

「……………」

アルゴは、黙り込んだ。代わりにキリヤが怖い顔で最悪の結末を語る。

「…あくまで、あくまで予想の域を出ないが…………セルムブルグが崩壊するかもしれない…。」

「…ありえるのか、そんなことが…………だって、たかがクエストだぞ…………？」

「最近のクエストは妙なのが増えてる、そんななか失敗したらクジラがセルムブルグを襲撃して破壊するって明言されたんだ…。」

安全圏の主街区破壊とかシャレにならない大事件だぞ」

「…圏内がクエストの結果次第で崩壊する…。」

…口の中がカラカラだ。そんなの、そんなの認めるわけにはいかない。

納得はしたけど、その結果だけは受け入れたくない!!

「…そんなこと、させない…。ぜったいやっつけようね、みんな!!」

「おー! 気合入ってんなあ!! …えー、と…そーいや自己紹介がまだだったな。

オレはクライン、ギルド《風林火山》のギルマスだ。そっちは？」

「わたしはフィリア、トレジャーハンターで、キリヤの仲間!」

クライン達の仲間も自己紹介して、わたしたちはこれからの目標をいくつか決めることにした。

キリヤがまず話を切り出す。

「…まずは仲間がもつとほしいな。激戦が予想されるから、三十人程度はいると思う。」

クライン、心当たりがあるなら誘ってもらえるか？」

「おう、任せろ!! セルムブルグに思い入れはねえが…。頼まれたと

あつちや、断つたら男が廢るぜ！」

《風林火山》とのファーストコンタクトは和やかなムードで終わった。

……まー、わたしは仲間にくころあたりないし消費アイテムでも買
い込んでおこうかな！

キリヤ達がいっくエストに行ってもいいように準備をしておかな
くちや！

第三十九話 絶望への航海

《風林火山》と合流して三日。

この三日間、僕は捕鯨クエストのためにアインクラッドを駆け回っていた。

実力者をできる限り勧誘するが、成果は振るわない。…結局誘えたのは三人だけだった。

しかもそのうちの一人は《セルムブルグ》在住のため、僕が誘わずとも参加した可能性は十分ある。

ここは、セルムブルグの港。捕鯨クエストに誘ったみんなが集まってくるのを、僕は早朝から見守っていた。

「…人が来ると信じて待つのは、つらいな。できる限りのことはした、後は…」

うん…クライン達がなんとかしてくれることを祈るしかないか」

「ほら、元気出してキリヤくん。わたしたちもギルドの予備戦力数人連れてきたし、人数としてはそこそこでしよう?」

アスナさんはそう言ってピクニックバスケットの中からバケツトサンドを取り出し僕に手渡す。

「あ、ありがとうございます! 食べてもいいです?」

「ええ、どうぞ。結構作ったからほかの人にも食べてもらおうかしら」
「そうしてください! みんなの士気も上がりそうだ。」

アスナさんが軽食を他の人たちに配りに行ったのを見届けた後、僕はバゲツトサンドにかぶりついた。

うまい。

チーズとハムの塩っ気やトマトとレタスのシャキシャキ感、それに…。

「……………マヨネーズ…?」

正確にはそれと似た味を感じた僕は首をかしげる。…いったいどんな理屈なんだろうか。

うむむとバゲツトサンドとにらめっこしていると、誘ったうちの一人であるストレアが声をかけてきた。

「やつほーキリヤ、元気ー?」

「ストレアか、アスナさんにこれもらった?」

「え、まだー。おいしそうだねソレ、貰ってこよーつとー!」

タタタツと軽やかに走り去るストレアに癒されながら、僕はバゲツトサンドを食べ終える。

「ごちそうさま。さて、どのくらい集まったかな…?」

ひーふーみーよーと数を数えてみると、ざっと三十人弱といったところか。

《KOB》の団員が集まりなにか話していたり、《風林火山》メンバーが串焼きをほおぼってたり、思い思いに過ごしている。

…人間観察をしていたのは、僕だけではなかった。

「……あれ?ミト、どうしたんだろう?…怖い顔してるな」

…見ているのは…味方の《KOB》?…なんで親の仇見つけたような顔してんだよあいつ。

その理由が気になった僕はミトに近づいてみる。

「よっ!何見てんの?」

「…キリヤ、あの三白眼の、細いガイコツみたいなヤツ、見える?」

…《KOB》のメンバーをよく見てみると、たしかにその特徴に一致する男を見つけた。

ミトがなんだかいらだっているのはあの男が原因らしい。

「……いるな。あいつがどうかしたか?」

「あいつクラディールっていうんだけど、アスナに心酔してるんだよね。」

しかも今回護衛だからって無理矢理アスナについてきたんだよ? サイテーなんだあいつ」

「あ。」

なんか、前にアスナさんから聞いた覚えがあるな…。

彼女がホロウ・エリアの攻略の時に愚痴っていたのを思い出す。

「あー……前に聞いたことがあるな。ってことは、あいつがストーリーカー野郎か。」

「……ちっ!やつぱり、あの男ストーリーカーしてたのか!!」

「…やっぱり？」

「…アスナの家には何度か遊びに行つたことがあるけど毎回出くわしたんだよね、なぜか。」

「…でもさ、おかしくない…？だって、あいつここに住んでないのに…。」

「……………回廊結晶、つかう？」

ヤベーよヤベーよ!!ガチのストーリーカーじゃねえかクラディール!!!
黒鉄宮ろくやに今すぐぶちこみてえんだけど!!

「あのさあ、クラディールのこと《KOB》の団長はどのくらい把握してるんだ？こんなやつとつと除名するべきだろ」

「……それがわからないんだ。まったく知らないかもしれないし…あるいは全部知つてて放置してるのかもしれない。」

どつちにしろ期待はしないほうがいいよ、だってヒースクリフ団長は放任主義だから。」

「…しつてるよ。有名だもんな、ヒースクリフはボス戦以外の仕事は他のメンバーに一任してるって。」

それでもギルドが機能不全にならないのは、やつのカリスマと実力か…。」

「たまにさ、団長に試されてるって感じるときがあるんだ。」

…もしかしたら、あいつを放置してるのも…？」

本人たちがどう対処するかを見てる…とでも言いたいのだろうか。そこまでいくともはや陰謀論に片足つつこんでるレベルだ。

「そういうわけだからさ、クラディールのヤツには十分注意してよ？…なにしでかすかわかんないし。」

それじゃまたあとで。」

ミトはそう言い残しアスナさんの方へ歩いて行つた。

「…ガチで苦勞してるんだな、アスナさん…。」

十時を少し過ぎたころ、件のNPCの老人が港に現れた。

クジラへの憎悪が老人の瞳から溢れるほどに感じられる。

「…きたか、小僧。」

「おう、人数集めてきたぞじいさん。」

「ここにおける連中はほぼ全滅するじやろうなあ、やつは不死身じや。全員あの怪物に食われ、死ぬ」

老人は僕らを嘲笑う。相変わらず諦めてるくせに口が悪いな。

心が折れているのに憎悪の火がくすぶり続けるのは、きつとひどい苦痛なのだろう…。

「生きてるなら倒せるだろう。」

「…………ふん。乗れ、ヤツの縄張りまで連れて行ってやろう」

…クエストが進んだな。一人で来た時は一人でなにができるかと怒鳴り散らされたが。

周りで会話を聞いていた連中は態度の悪い老人に困惑している。

「…なんだあのじいさん!!あれがクエストNPCの態度かよ!?!」

「落ち着けクライン。キレンのはわかるが、今回おれたちはあくまで助っ人だ。」

それに依頼人がどんな奴でも苦労すんのはキリヤだろ?」

クラインは老人の態度が気に食わなかったのか怒りをあらわにした。

隣にいたエギルが彼をなだめているが、あまり納得できていないようだ。

「でもよお、さすがに舐めすぎだぜあのじいさん。ここに集まってるやつらは最前線で揉まれた猛者もっさばかり。」

フロアボスよりヤバくねーと犠牲者なんてでねーよ、なあ?」

クラインは僕に視線を向けている。

「…犠牲はゼロにするって言ったヤツが一刀両断されたから断言したくねえんだけどなあ…」

「懐かしいな、ディアベルのことだろう。」

…あの時一層攻略に参加した連中は、今じや聖竜連合の幹部とかソロでちよこちよこやってるお前らとかアスナしか残っていない。」

エギルの目は、どこか遠いところを見ているように細められた。

「二層ボス戦で唯一死んじまつたんだろ?…オレらはまだ参加してなかったからどんなヤツだったかは想像するしかねーけど。」

「どうせクジラの出た海域に着くまで時間はあるからそんな時教えるよ。」

僕らに乗せた船が、六十一層の水上を往く。

船上でできることは少ないので、僕はパーテイメンバーのシノンとおしゃべりをしていた。

「…キリヤって船酔いとかしたことがある？」

「ナーヴギアってその辺の描写リアルだからどうしてもVR酔いしやすい人はいるっぽいよ。」

吐けないからきついんだってさ。幸い僕は三半規管強い方だからそんな経験ないけど」

「うわあ悲惨…。」

「あと二時間くらいで縄張りに着く。もし死にそうな目に遭ったら出し惜しみしないでね。」

シノンはピースサインをしながらにこりと微笑んだ。かわいいなもう！

「任せて頂戴、最悪《射撃》を使わせてもらうわ。」

…隠していたほうがいいのはわかるけれど、みんなの命には代えられないから。」

「ああ、頼むぞシノン。」

僕は決意を固めた。この船に乗っている人たちはもちろん守るけど…シノンはなんとしても守りたいな。

守られてばかりの子じゃないのはわかってるけどね。

第四十話 VS 傲慢の白鯨

クジラの縄張りに近づいてくるにつれて、視界が少し悪くなったような気がする。

クラインも同じように感じたのか首をかしげていた。

「…なんか霧がでてねーか？」

「クラインもそう思う？…なんだか不気味だよな」

「こういう時、ホラーだとなんか人数増えてたり逆にいなくなるよな。」

「…今のうちに人数を数えておこうぜ？」

「……用心に越したことはない、か…。みんな、集まってくれ!!これから点呼を行う!!」

その提案に食って掛かったのは、やせこけた男…《KOB》のクラディールだった。

「ふん、そんなことをする必要はない!!貴様のような子ネズミ風情がリーダーぶりよって!!」

子ネズミ、ときたか。アルゴの弟子だったことをこんな風に侮辱されるなんて…。

「テメエ!!いくら《KOB》だろうが言っていていいことじゃねーだろうが!!」

こいつら情報屋の情報で命を救われた経験がないとは言わせねーぞ!!」

「やめるクライン…:まあこういうのが出るのも想定はしてた。」

「…で?僕がリーダーとして不安なら、誰がふさわしいって言いたいんだ?」

「無論アスナ様ただ一人だ!!ドブネズミめ、この船から叩き出してくれる!!」

ヤツは『オレ』の首を掴み、船から落とそうとする。

こいつ正気か?クエストを受けた本人がこんな場所で溺死しようものならクエストが失敗するんだぞ…!?

「…なにをしているの!?!やめなさいクラディール!!」

「あ、アスナ様!なに、今からこの子ネズミを駆除するところですよ!!」

「彼をここで落とせば、わたしが喜ぶとでも!？」

「ここでやつとアスナさんがキレていることに気づいたクラディールは、舌打ちしながら僕から手を放す。

「…チイツ!!アスナ様の寛大な心に感謝するんだな!」

クラディールが離れて、アスナさんはため息を吐いた。

「はー…。…だいじょうぶ、キリヤ君?」

「…苦勞、してますね…。」

「もうヤダあの人…このままじゃ心勞で倒れるのも時間の問題かも…。」

アスナさん、ホントにかわいそうなことになってる…。責任感の強さと正義感が仇になってるな。

自分がギルドから抜けるとギルドの運営が成り立たなくなるのに気づいてるから、やめるにやめられないんだ…。

「えー…とりあえず《KOB》の点呼は任せていいですか?僕らはそれ以外を数えておきますから。」

「ええ、クラディールがこれ以上暴れないようにするにはそれが良いと思うわ。…じゃあ、十分後に」

爺さんを含むレイドメンバーに欠員がないのを確認して、僕はひとまず安心した。

後は《KOB》のメンバーだけだ。

「…さて、後はアスナさんに合流するだけ…。」

…霧がずいぶん濃くなったな…。海も荒れてきてるし、気を付けた方がいいか。

警戒を強めたその時、妙な音がした。…具体的に言うと、べしやべしやとプールから上がってそのまま歩いているような音だ。

レイドメンバーがこんな荒れてる海で泳ぐはずがない。

「敵襲ウー…!!船に敵が入ってきたぞ、武器を取れエ!!」

大声で敵がきたことを知らせながら、侵入者に斬りかかる。

それは青い鱗で身体を覆った魚の巫人、《サハギン・サーヴァント》だ。

『ギョオツ!?!』

「サハギンか、奇襲で海に引きずり込むつもりだったようだが、残念だったな!!」

一撃でサハギンを斬り伏せ、味方の救援に向かう。…が、その必要はなかった。

流星は攻略組といったところか、特に苦戦することなく殲滅できたらしい。

武器を納めたアスナさんにちよいちよいと手招きをする。…彼女は怪訝な顔をしていた。

「キリヤ君、あの半魚人六十一層このあたりで見たことある?」

「ないですね。似たようなのは前の階層で見たんですけど、六十一層のモンスターって亜人系じゃないんですよ。」

船の上が上がってくるのはまあいるんですけど、エビとかカニとか。

「じゃあアレ何?」

「…サーヴァントって召使って意味ですよね。」

魚が魚人に進化してクジラを信仰しはじめた…とか?」

「……………」

アスナさんの目が急激に冷え込んでいくのを見て、僕は慌てた。

このままだと怒られると思った僕は言い訳をする。

「あ、あくまで想像ですから!」

「…MMOゲームの設定って、どこまで細かくすると思う…?」

「……………」

彼女の疑問というのはつまり、SAOのゲームにおける敵の強さと設定上の強さの差のことだ。

例えばRPGなどで化け物を敵として出す場合、ストーリーで軍を壊滅させたという情報が出てきたりする。

しかしその設定を馬鹿正直に再現すると勝てないので手ごたえがある程度の強さで調節するのだ。

「SAOって、なんて触れ込みで売られてたか知ってます…?」

「…………ごめん知らない。わたしが今使ってるナーヴギア、家族のでSAOの前知識もほとんどないのよ」

「《もうひとつの現実》、ですよ。」

僕がそう言った瞬間、あたりを覆っていた霧がいきなり晴れた。その代わりに僕たちを大雨が襲い掛かる。

…その雨の音交じりに恐ろしい遠吠えが混ざっている。

「…ボスエリア、着いちゃった…。」

「…あれが、クジラ…?」

四十メートルはある超巨大な怪物クジラ、名は《スペルビア・ザ・ホワイトホエル》。

白鯨スペルビア、だろうか。スペルビアは船を視認したのかこちらに接近する。

その時、誰かの狂ったような笑いが船内を駆け巡った。…例のじじいである。

「ひやはひやははははああああ!!この日を、どれだけ待ちわびたことかああああ!!」

「うわっ!?なんだなんだ!イベントか!」

「殺せ、武器をあゝ畜生に叩きつけ死ねえい愚図ども!!ゴホツゴホツ!!」

いくら死のうが構わん、一人でも多くやつ肉を破壊するんじやああああ!!」

「な、なんだあのじじい!!いきなり興奮しだしたぞ!」

船に乗っていたほぼ全員が困惑した顔で斧を持った老人を見ていた。

クラインの言った、いきなり興奮しだしたが一番意味として正しい。

「お、おじいさん危ないですよ!?そんなところで暴れたら船から…!」
アスナさんは興奮する老人がクジラに近づこうとするのを止めよ

うとするが、彼は聞く耳を持たなかった。

「ひやははははは!!…ぐおああああ!!」

老人は雨に濡れた甲板に足を滑らせ…海に落ちていく。

…どこまでがクエストのシナリオなのか、僕にはわからなかった。

「ぐぼ、ぐぼ……」

「うわー！半魚人どもが群がってすごいことになってるう！！」

ミトは落ちた老人の様子を確認するが、すぐに目をそらした。…スプラッタも同然の惨劇になってたということとは想像に難くない…。

クラインの発破が動揺していたレイドメンバーを鼓舞する。

「…敵が来るぞおお！！野郎ども、開戦だああ！！」

「「おー！！」」

(やっぱこの人普通にカリスマあるんだよなあ……)

スペルビアの攻撃は大きく分けて三つ。角によるチャージ、巨体の身体を船にぶつける体当たり、謎の力で引き起こす大津波だ。

角によるチャージは…これ多分避けないと全滅するやつだな。全員船から落ちてしまつて老人と同じ目に遭うだろう…。

「エギル、角攻撃がきそうだったらなにがなんでも避ける！！アレ絶対まずい！」

「オウ！！舵取りは任せとけ！」

体当たりは船へのダメージももちろんあるが、クジラに攻撃中の味方のHPが大きく減ってしまう。

それだけならまだしも定期的にサハギンたちが乗り込んでくるのでこの攻撃も危険なものには変わりがない。

三つ目の津波は…雑魚の増援を甲板に送るための攻撃で、船も揺れまくるので気分は最悪だ。

一対一なら脅威度の低いサハギンだが、複数で来られると厄介極まらない。

(……スペルビアの角、なんとか破壊できないかな…。多分無茶苦茶硬いだろうけど…)

「おーい、キーリヤーー！ちよつと《スイッチ》できる？」

「…フィリアー！いいけどどうしたんだいきなり…？」

フィリアのHPはまだ安全域をキープしている。彼女の實力だったら取り巻きのサハギン一匹で苦戦はしないはずだ。

…つまり、なにかやりたいことがあるらしい。

「ちよつと船長室に行つてくる！あそこ鍵かかつてたし、開けようとしたらあのおじいさんに睨まれてはいれなかつたんだよね！」

「…いい、今じゃなきやダメか!？」

「ダメなんだなーそれが！おじいさんさ、なにか対策のこしてないかなあ!？」

最終的に狂気に呑まれたけど、なにも準備無しであれに挑もうとか考えないとおもう！」

…同じ失敗を繰り返すのは意味がない、と言いたいらしい。

たしかに船の持ち主は海の藻屑と化したので船長室に誰が入ろうが咎める人間はいない。

「よし、行つてこいファイリア！ヤバそうな魔剣とかクジラの弱点あったら持つてくるんだ！」

「はーい、まっかせてー！」

元気な声で返事をしたファイリアは、すごい速さで船内に入つていった。

…任せたぞ、トレジャーハンター…！

第四十一話 捕鯨船の帰還

〈SIDE：フィリア〉

船長室にかかっていた鍵を開け、わたしはその中のものを手あたり次第に調べた。

…時間はどれだけ残っているだろう、五分？十分？…もしかしたらもっと短いかもしれない。

「…急がなきゃ。単発クレストなんだからきつと打開策はあるはず…！」

壁にかかった槍は店売りのものだ、これじゃない。

チェスト内の片手剣、それなりのレア物だけど、クジラの特攻武器とかではない。

「…!!チェストの奥深くに日記!!お願い、なにか有益な情報がありますように…！」

ページをめくる。…正気と思えないほどの怒りを感じて、思わず閉じかけたものの我慢して読み進める。

…どうやら、この船には全財産を掛け拵えた、クジラ殺しの武装が積まれているらしい。

「…そんなの、この船に乗ったら普通気づくんじゃない…？」

……待てよ？船に乗ってたら気づかない場所に、付けてるとしたら…？」

……例えば、船首の真下にある衝角とか。

「……確かめなきゃ！」

甲板に戻ったわたしは日記を手にキリヤのもとへ走った。

「キリヤ!!この船クジラを殺すための武装があるらしいわ！」

「ホントか!!どこにあるんだそれ!？」

「それらしいものは船内になさそうだから、多分衝角！」

…こっちの損害は？」

キリヤは疲れた顔で笑った。

「…死人は出てないよ。でもそろそろキツイかも…。」

……おーい、聞こえるかエギル!!」

「なんだこの忙しいときに!!」

「この船衝角あるんだってよ!あのクジラにたたきこめ!」

「…正気かてめえええ!!」待て待て、早まるな!死のうとするんじゃないやねえ!!」

エギルという名の男性プレイヤーはキリヤが狂ったと思ったのか慌てて説得を始めた。

「落ち着け、『オレ』は正気だ!このままじゃ船がもたないぞ!!」

ヤツの腹にぶちこんでやれ!!」

「ああもうわかったよ!!…おい、みんな!これからクジラに突っ込む、落ちないように注意しろ!!」

白鯨スペルビアは、クールタイムが終わったのかチャージ攻撃の前の予兆である咆哮を始めた。

相変わらず威圧感がすごい…!

「…キリヤ、だいじょうぶなの…?」

「心配すんな。エギルならきつと大丈夫だよ」

スペルビアの突進を余裕をもって回避した船は、そのまま反撃のために旋回する。

白鯨は突進が終わると少しの間動きを停止する。この隙をエギルは見逃さなかった。

「おらああああ!!」

衝角による一撃が、クジラの腹部を直撃する。ほとんど残っていた二本目のHPゲージがあつという間に消し飛んだ。

しかも、防御デバフとスタン付き。

『オオオオオオオオオオオオ!!?』

スペルビアの絶叫が船に乗っていたわたしたちの耳に襲い掛かる。

「う、うるさい…。でも、チャンスだね!!」

「ああ、取り巻きも全滅させた。今のうちにタコ殴りだ!」

アスナの号令が船内に響き渡る。

「…今よ!総攻撃、開始イーーー!!」

「「「おおおおおお!!」」」

疲れていたレイドメンバー達は最大のチャンスに奮起した。

全員の後先構わない全力の一撃が、動きを封じられたスペルビアのHPを面白いように削った。

「とど、めええええ!!」

最後はアスナが放った《スター・スプラッシュ》の八連撃。

『オオオオオオ……』

…白鯨スペルビアは、断末魔とともに海に沈んでいき、ガラスが割れたような消滅エフェクトを放つ。

〈SIDE：キリヤ〉

スペルビアはレイドメンバーの怒りの猛反撃にあい、瞬く間に討伐された。

ふへーと潮のにおいがする甲板に座り込む。フロアボスと同じくらい疲れた…。

「…おつかれー。」

座り込んだ僕の目線に合わせたシノンが、労いの言葉をかけてくれた。

「おつかれ、シノン。そっちはどうだった？」

「出てくるサハギンに集中してたわ。ほぼ無限湧きだったからキツイのなんの…。」

「でも、スペルビアを倒せたのは取り巻き退治してたみんなのおかげだよ、ありがとう」

お礼を言ったら恥ずかしそうに顔を逸らすシノン。

「…そういうばドロップ品、白鯨の赤身肉とか出ただけけど。」

…食べそうじゃないか？」

ストレージ内の白鯨の肉を見て、シノンが驚いた声を上げた。

「……………え、A級食材!?すごい、高級食材じゃないこれ!今夜はご馳走ね、キリヤー!」

「おおお!!マジかおい、今夜の夕食楽しみにしてるよ!」

〈SIDE：クライン〉

オレは《風林火山》のメンバーが無事に生き残っていることを確認

して、ホッと一息ついた。

今回のボスは後半あつという間に削り切ったからよかったが、あのタイミング以外で船での特攻をしていたらと思うとぞつとする。

（最後のHPバーが残ってたらまず間違いない攻撃パターンが増えてただろうしな…。

短期決戦に持ち込めたのはラッキーだったぜ…。）

かっこよく考え事をしていたオレは、誰かに呼ばれた。いつもの仲間の声ではない、若い少女の声だ。

「クライン、なにかっこつけてんの。」

「お、おお!?ミト、久しぶりだなあ!」

「忘れたの?こないだボス戦で一緒だったわ。」

そこにいたのは友人のミトだった。こいつもこの船に乗っていたのか、気づかなかつたぜ。

オレとミトの付き合いは割と長いうちに入るだろう。いつも思いつめた顔で戦う娘は、どこかキリトのヤツに似ている気がした。

なんとなくほつとけなかつたので、ミトがギルドに入るまでそこそこの付き合いがあつたのだ。

最近忙しいのか会うことすらなかつたが…。

「にしても、元氣そうでよかつたぜー。KOBでバリバリ活躍中とは聞いてたが、無理してねえか心配だったんだ」

「まあ、副団長は苦勞してるんだけど…。友達だから不安なんだ。」

「《閃光》のアスナか…。やっぱり女性同士だから仲良くやってんのか?」

「現実でも友達だし。」

そうだったのか。

「…こっちはさ、だいじょーぶだよ。毎日大變で悩みもいっぱいあるけど…、楽しいんだ。」

「…ああ、安心した。やなことがあつたらよ、いつでも相談しに来いよ?」

オレたちやダチだ、ダチつてのは所属するところが違つても困つてたら助け合うもんだ。」

オレがニヤリと笑うと、ミトはポカンと呆けた顔になってから楽しそうに笑いだした。

「あはははー…うん、わかったよクライン！こっちも頑張るから、そっちも折れたらだめだよ！」

グツと握りこぶしを突き出したミトに、オレはこぶしを合わせた。

：オレたちはきつと大丈夫だ。仲間がいてくれるなら、きつとこのデスゲームだってクリアできると信じている。

〈SIDE：シノン〉

セルムブルグに戻ってきた捕鯨船は、港から帰った時点でボロボロになっていた。

：港で帰りを待っていた町の住民は気がでなかったに違いない。

船から降りた私たちは大歓声で迎えられた。プレイヤーもNPCも関係なく、大歓声が港に響き渡った。

男性プレイヤーが船から降りてきたアスナに問いかける。

「なあ、クジラは死んだのか!？」

「ええ、証拠を見せるわ。…これは白鯨のラストアタックボーナスよ!!」

そういつて彼女がストレージから引つ張り出したのは、白鯨の角を加工したと思わしき両手用突撃槍だった。

前線で見ることがない業物を軽々と操るKOBの副団長に、感動の声上がる。

「す、すげえ…!!さすがはKOBの副団長だぜ!!」

「…わたしはラストアタックを偶然取れたに過ぎないわ。MVPは、彼女よ。」

彼女が指さしたのは、フィリアだった。

「…え、えええ!？」

「だって、あの衝角ラムに気づいたのはフィリアなのよね。」

「そ、そうだけどさあ…!」

「逆転の一手を打ったのはあなたよ、謙遜しない!」

あたふたしているフィリアの周りに人だかりがで始め、質問攻め

が始まった。

「どこに所属してるんですか!?!」

「え、ええと…特定の団体には所属してないわ」

「普段はなにしてるん?」

「と、トレジャーハンターです!」

「彼氏とかは?」

「ま、まだいませーん!!」

…うーん、なんだか迷惑なマスコミが紛れ込んでない…?

個人情報抜き取ろうとしているのがチラホラいるみたい。

どうするかこまった私がキリヤの方を見ると、先ほどまでそこにいたはずなのに姿がない。

「ほら、逃げるぞー」

「あ、キリヤ!ごめんさい、わたしもう行きます!」

キリヤはフィリアの手を取ると、すぐにその場から離れ私と合流する。

「おかえり。それじゃあ今のうちに帰りましょうか、フィリアも夕ご飯どう?」

「やったー!ごはん、ごはん♪」

新しいマイホームのキッチンに立った私は、白鯨の赤身肉をストレージから出す。

さて、こうして現物を見るとどう料理しようか悩むわ。

「二人とも、これどうやって食べようかしら。リクエストある?」

「ステーキがいいな。シンプルにかぶりつきたい!」

キリヤは、素材の味を楽しみたいようだった。

「フィリアはどうする?」

「…昔テレビで見たんだけど、竜田揚げがおいしいらしいよー」

「揚げ物かあ…。よし、二つとも作ってみましょうか!」

S A Oの料理メニューというのは単純化されている部分が多い。

現実では時間のかかる工程もメニュー操作で済んでしまう。料理の師匠であるアスナが残念がるのも無理はない。

五分もしないうちにクジラステーキと揚げ物が完成し、食卓に並ぶと歓声が起こった。

「おおー、うまそう…」

「なあ早く食べようぜ、冷めたらもったいない！」

「ええ、いただきますー！」

クジラのステーキは焼き加減がレアでジューシーに仕上がっていた。脂身のない肉もおいしい…！

揚げ物の方は漬けダレに使ったシヨウガの風味が良い感じにアクセントになっている。

「この世界でおいしいご飯が食べられるのって、モチベーションに直結するよなあ…。」

全部レーションみてえなぱさぱさメシだったら死人もつと増えるよ」

「うん、地獄かなんかかな??」

「そういえば、この世界で食事するってどういうことなの？」

現実世界では食事できてるわけでもないのに」

私の疑問にキリヤはかつての記憶を思い出すように説明し始めた。

「…たしか、アーガスが提携してた別の会社を作った、《味覚再生エンジン》とかいうのを採用してたんじゃないか?」

脳に食事の情報を送り込んで…とかなんとか…。」

「でもおいしいから関係ないよね。」

フィリアがバツサリ言ったので思わずふふつと笑いがこぼれた。

「…そうだな!! うまいもの食えるんなら現実でも仮想世界でもたいして変わんねえや!!」

大切なのは誰と囲むか、だと思うぜ。」

「たしかにそうかもねえ。この世界に来たばかりのころは、こんなふうに誰かのご飯を囲むなんて思わなかったな。

わたしソロだったし。ホロウ・エリアに迷い込んで酷い目に遭ったけどさあ、人の出会いってわかんないよねー」

「……………運命って、複雑ね…」

多分キリヤがホロウ・エリアに迷い込まなかったら出会いすらしな

いと思うと、ものすごく奇妙な縁だ。

「そう考えるとゲームの隠しキャラみたいだなあファイリアって…。」

「えへへ、どうも通常プレイじゃ出会えないレアキャラです！」

今後ともよろしくー、なんてね？」

「…おう、よろしく頼むぜ。」

こうして、セルムブルグの危機が去った片隅で夜は更けていく。

この街を滅ぼそうとした白鯨が死に、街の住人たちは怯えることなく朝を迎えることができる。

…ああ、家が壊れなくてよかった。新しいマイホームが海の藻屑になるとか幸先悪いものね。

第四十二話 取引

五十層の主街区、アルゲード。始まりの街に次いで最大級のデカさを誇るこの都市にやってきた僕は、エギルと交渉していた。

スぺルビアのドロップ品の換金だ。

「もう一回言ってみろよエギル！スぺルビアの革、何コルだった??」

「だーかーらー、五枚で一万だって言ってるんだ!!これ以上は上げられねえ!!」

「高レベル素材だぞ、一枚二千コルは安すぎるだろ!!」

交渉は難航している。…うん、いくら親しくてもぼったくるのは論外だ!!

「おいおい、勘弁してくれ。これでも十分高いと思ってるぞ」

「一枚四千だ、それ以下だったら新しいレザーコートに加工してやる!!」

言い争いしていると一人の客がエギルの店にやってくる。

なんとも気の弱そうな槍使いだ。僕たちの剣幕にビビっているようだ。

「あー……お取込み中っすか。」

「……おい、キリヤ。少し落ち着いたらどうだ？」

興奮しすぎてみたいだからな、先にこの客を対応させてもらおうぞ。」

「あー……。…わかったよ。ちよつと椅子に座っていいか、頭冷やすから。」

エギルから借りた椅子を店の端っこにおいてから腰を下ろす。

僕はエギルと槍使いの商談を横から見ているが、エギルの強面な顔に押されて高性能防具の素材である《ダスクリザードの革》を二十枚で五百コルで取引されて顔が引きつる。

ホクホク顔のエギルにキリトが苦笑いしながら入店してきた。

「おつす、相変わらず遠慮ない商売だなエギル。あの槍使い涙目だったぜ」

「まあな！安く仕入れて安く売るのがオレのモットーでな、キリト！」

「おう、後半ウソだろおまえ。さっきの哀れな客を見て同じことが言え……そうだなあ……」

彼のモットーに思わずツツコミを入れた僕に気づいたのか、兄は手をヒラヒラと振った。

「こちらも手を振り返す。」

「よ、元氣そうだなキリヤ!……なんで店の中でくつろいでるのかは聞かないでおくよ。」

「ああ、気にするな。それよりなにかいいものが手に入ったのか?」

「そのことなんだが、エギル。これ買い取ってくれよ」

キリトがトレードウインドウをエギルに見せると、エギルが大きな声で驚いた。

「…な、なにイ!? 《ラグー・ラビットの肉》だと!? S級食材じゃねえか!!

現物を見るのは初めてだぜ……」

「ええええ!!ちよ、見せて見せて!」

僕はキリトのウインドウを覗き込む。…たしかに《ラグー・ラビットの肉》があった。

S級食材なんて食べたことがないのでむっちゃ羨ましい……。

「うわ、まじでラグラビだ!自分で食べようとは思わないのか!?!」

「ムリだろ…、俺料理スキル持ってないし。もったいないけど金にしたほうがいいって判断したんだ」

「だからといってオレのところに持ってくるなよ……」

ぐだぐだ話していると、僕は誰かが静かに店の中に入ってきたのを感じて後ろをチラ見した。

アスナさんは唇に人差し指を当てている。…気づいてないフリしとくか。

「キーリト君♪」

アスナさんはキリトの肩をつつつきながら楽しそうに名前を呼ぶ。

兄は声を聞いた瞬間彼女の手を掴むとそのまま向き合った。

「シエフ捕獲!」

「わっ!ど、どうしたのキリト君?」

意味不明なことを口走ったキリトに、KOBの副団長は目を白黒させている。

後ろにはストーカーのクソ野郎ことクラデイルといかにもモブっぽいKOBの団員がいる。…護衛か。

「珍しいな、アスナ。こんなところに顔を出すなんて」

「もー、連絡つかないんだから直接来てあげたのに！」

「フレンドリストからわざわざ追ってきたのか…？」

「…まったく、君にメッセージを送ったらだいたいダンジョンに潜ってるから届かないのよ…。」

…で、シエフ云々ってなに？」

キリトはその質問には直接答えずに、アスナさんに質問を返した。

「アスナ、たしか料理スキル上げてたよな、今いくつ？」

「ふふふ…先週《コンプ完全習得》したわ！」

「な、なんだと…。…いや、むしろ好都合だ！その腕を見込んで頼みがある」

キリトはアイテムストレージをアスナさんに見せる。

「わわっ！これってS級食材!？」

「料理してくれるんなら一口食わせてやっても…。」

キリトは話している途中で襟首を掴まれぶんぶん振り回される。

「はーんーぶーんー!!」

「わ、わかったわかった！それでいいよもう！」

……っーわけだエギル、取引は無しなー。」

「別にいいがよ、オレらダチだよなキリト??味見くらいいいだろ?」

キリトはすごくいい笑顔でエギルを地獄へ叩き落とす。

「おまえに向けて感想文を書いてきてやるよ、八百字以内でなあ!! はーはっは!!」

「鬼かてめええええ!!」

「うーむ人の心がない…。」

「……で、どこで料理すればいいのかしら。わたしの部屋でいい?」

アスナさんはとんでもないことを言いだした。

その発言にクラデイルストーカーは凄い顔をしている。

「それじゃあもう護衛は充分よ、ここから直接ホームまで転移しますから。」

「ア、アスナ様!!こんな薄汚いスラムなんぞに足をお運びになるだけに留まらず、ドブネズミを持ち帰るなど…!!」

「キリト君はドブネズミなんかじゃないわ!!!あなたよりもずっと強いんだから、クラデイル!!」

あんまりにもな彼の発言にアスナさんは怒りをあらわにする。

「こ、こんなヤツが…!?…いや、待てよ…?てめえビーターだな!!」

「……そうだ。」

「アスナ様、こいつら自分さえ良けりやいい連中ですよ!こんなクズに時間を浪費するのは……」

アスナさんの目は不愉快そうにクラデイルを貫くと、

「…副団長としての命令です。…ここで帰りなさい!!」

苛立ちを隠そうともせずにキリトを連れて店を出ていった。

エギルは客ではないKOB団員に笑顔を見せながら、こう言い捨てた。

「客じゃねえなら帰れ」

「クズが…こ、このことはギルド内で報告させてもらうからなアア!!」

「人の店で騒ぐんじゃねえ!」

クラデイルは舌打ちしながら店から出ていき、モブ顔はぺこりと会釈をする。

ちゃんと礼儀正しいやつは好きだよ僕、頑張って生きてほしいな。

〈SIDE：キリト〉

…こうして彼女と食事を共にするのはいつぶりだろうか。

ラグー・ラビットのシチューをつつきながら俺はアスナの方をじつと見つめていた。

「どうしたの、キリト君。あんまり見つめられたら困っちゃうよ?」

「……わるい、なんか懐かしいなって…」

「こうやって誰かと食べるのが?」

「いや、アスナとの食事が。」

アスナはにっこりと笑う。

「ふーん…？ねえキリト君、わたし覚えてるよ。クリーム乗せた黒パンの味。」

「…？ああ、初めて一緒に食べたものか！あの時の初心者がトップギルドの实质リーダーだからなあ。」

…嫌われ者の俺とはえらい違いだ…。」

「あのね、みんながみんな君のこと嫌いだななんて思わないで。君に助けられた人だって…」

…慰めてくれてるんだろうか…。いや、余計なお世話だ。俺に、彼女に優しくしてもらおう資格なんてない…。

「俺はビーターサマだぜ？極悪非道でニュービーを見殺しにしてLA取りまくって自分だけが生き残ればそれでいいクズ!!」

…そういうことにしておいたほうが俺も楽…：なんだ…」

視界が涙でにじむのを、彼女に気づかれないように拭う。

「まーたそうやって自分を悪くみせようとして…。そんな悪い人だったらわたしは今頃生きてないわ。」

「…………。俺が決めた生き方だからいいんだよ。」

ああ、せつかく美味しい食事なのになんだか湿っぽくなってしまった。

…もう帰ろう、これ以上彼女の気分を損ねてしまわないように。

「…ごめん、せつかく作ってもらったのに…。じゃあ、帰るよ。気分悪くさせて、ごめん…」

椅子から立ち上がり、帰ろうとする俺の手を彼女は強く掴んだ。

「待って!!」

「…あ、アスナ…？」

「キリト君、そんなのいやだよ…。そんな生き方を続けてたら、キリト君がひとりぼっちで死んじゃう!!」

お願い、わたしともう一回コンビを組んで!」

涙を流すアスナに俺は驚愕で言葉がうまくでない。一旦深呼吸をした俺は、彼女を説得しようとする。

泥沼に沈むのは俺だけでいいんだ、俺なんかとつるまない方が、彼

女にとつても幸せなんだ…！

「い、いやいや…もうアスナが俺とコンビを組むのは無茶だろ…。」

「だいたい、ギルドはどうするんだ！こんな根無し草（草）に構（構）ってる暇ないんじゃないか!？」

「じゃあギルドやめる!!もうあんな場所知らない!!」

「うわああああ!!わ、わかったわかった!!俺の負けだ…。」

頼むからギルドをやめないでくれ…。コンビくらいでいいならやるから…!」

「ほんと…?」

ぶんぶんと首を縦に振る。…なんて女だと思わなくもないが、なんだか怒るのも違う気がした。

彼女の言っていることは理解できたから。心配していることはめちやくちやで意味不明だが、俺を純粹に

「ああ、本当だ。…じゃあ、明日の朝九時、最前線のゲートで。」

「うん、また明日。…逃げたらゆるさないからね、キリト君?」

「…………ハイ、ワカリマシタ」

アスナの笑顔がまぶしいなあ…。

暗い夜道を一人で歩きながら、俺はどうしてこんなことになったのかぼんやり考えていた。

…もう、誰かを相棒にする気なんてなかったのにな。

「でも、こんなにいい気分は久しぶりだ。…………明日が楽しみだな」

第四十三話 DUEL!!

僕とシノン是最前線七十四層へ転移すると、なにやら騒がしい民衆を発見する。

「…なにがあつたのかしら…」

「聞いてみるか。なあ、なんでこんな人が集まつてるんだ？」

僕は集まっていたプレイヤーの一人に声をかけると、彼は楽しそうに言った。

「情報屋！ソロのキリトとKOBメンバーがデュエルやるってよ！あんたも見えていったらどうだ？」

「……。…な、何やってんだあいつ……。」

人だかりの中心には、確かにキリトがいた。…相手は、クラディール！

どういう経緯でこうなったかは知らないが、これは兄を応援するべきだろう。僕はクラディールが大っ嫌いだ。

「やれー！キリトー!!そんな奴ぼこぼこにへこませてやれええええ!!」

〈SIDE：キリト〉

俺はなにをしてるんだろう…。ふと、そんな考えが頭をよぎった。

デュエル開始まであと三十秒ほど、相手はあのアスナの護衛であるクラディール。

今から十分前、俺はゲーム内でゲームをやりたいという救いがたい思考になりかけながらもアスナの事を待っていた。

ハプニングこそあつたものの彼女はちゃんとここに来た。…が、アスナはあのクラディールという男に追われていたのだ。

…所詮、ストーリーカーというやつなのだろう。…彼の目は血走っており、正気とは思えない…。

「ア、アスナ様…！勝手なことをされては困ります…!!ささ、ギルドまで戻りましょう…」

「…今日は活動日じゃないはずよ！それに、どうしてわたしの家の前にいたの…!？」

「ええ、常にあなたの護衛をしているのですよ。一ヶ月はこの任務を続けているでしょうか…」

「…ひいつ…！それじゃ、たまに感じていたあの粘つく視線…アンタだったの…!?!」

ドン引きするアスナに、ストーカーは苛立った様子で彼女の腕を掴む。

「聞き分けのないことを…。さあ、本部に戻りましょう!」

「い、いや…！助けて、キリト君っ!」

…彼女の助けを求める声を聞いた瞬間、俺の思考は逃げるという選択肢を捨て去った。

クラディールの腕を犯罪防止コードが出るギリギリの力で握る。

「…な、てめえ…。その手はなんだ!？」

「…彼女は俺の相棒だ。嫌がる女の子を無理やり連れていくようなヤツが…アスナの仲間面するんじゃない!!」

「……んだと貴様ああああ!!貴様のような雑魚にアスナ様の護衛なんぞ務まるかアアア!!」

わ、私は誇り高き血盟騎士団の…」

「ストーカーしてるアンタよりはまともな護衛できるけどな!」

軽口で応戦したこちらを、クラディールは凄じ顔で睨んできた。…やべ、余計なこと言ったかも…。

「…このガキイ…！そこまで自信があるんなら、それを証明する覚悟はあるんだろうなあ!!」

キレたクラディールがデュエル申請をこちらに送り付けてくる。

アスナに小声でどうするか聞いてみようかな…。

「…どうしよう、アスナ…」

「…やってヨシ！団長にはわたしが報告するから!」

その言葉を聞いて、俺はデュエルを受諾する。初撃決着なら、誤って殺してしまうこともないだろう。

クラディールがなにやらわめきながら両手剣を抜いた。その内容

がどうしてもよくて聞き流していた俺も剣を抜く。

回想を終えた時、残り十秒ほどだった。相手の構えはどうも突進系のスキルのようなだが、ブラフの可能性もある。

…こればかりは勘でいくしかない、相手も俺と同じ人間なのだから。

【DUEL!!】

相手の放ったソードスキルは、キリヤもよく使う《アバランシュ》だ。

対モンスターならばそこそこ強い技だが、対人において一直線に突っ込む技はカウンターをくらいやすく、やみくもに撃てば勝てるわけではない。

対して、それを読んでいた俺が選択したのも、突進系の《ソニックリープ》。真正面からぶつかればあちらの方が有利だ…が。

俺の狙いは、敵そのものではなく…ヤツの振るう武器にあった。

クラディールの両手剣の横腹に剣を叩きつけると、それは真つ二つにへし折れた。…《武器破壊》だ。

「な、ア…!!?」

「…そんな過度な装飾をしてるんだ、耐久力はあまりないだろうと思ってたよ。」

…さあ、どうする?…続けるか?」

「…死ねえええ!!」

ヤツは隠し持っていた短剣でこちらの心臓を貫こうとするが、俺はクラディールの腕を斬り落とす。

「があああ!!…ちく、しょお…」

デュエルに勝った俺を、ヤツは凄惨な表情で睨みつけてくる。

大歓声をあげたギャラリーにクラディールはわめき散らした。

「見世物じゃねえぞ! 散れ、散れ!!…殺す、絶対に殺してやるウ…!!」呪詛をまき散らすクラディールに、アスナは冷たい目で言い放った。

「クラディール、血盟騎士団の副団長として命じます。」

…今この瞬間をもって護衛役を解任。別命が下るまでギルド内で待機、以上」

「……………んだと、この、アマア……………!!!」

ヤツがキレ散らかした顔でグランザムに転移するのを見て、アスナはほっと息を吐いた。

その後小さくガッツポーズしてたのは見なかったことにしておう。

「…ありがとう、キリト君。おかげでスツキリしたわ」

「アー…、気にするなつて。俺は好きにやっただけだからさ…」

「責任は、ゲーム攻略に躍起になって規律を押し付けた自分にあるのに…酷い女でしょ?」

本当は、あのデュエルはわたしがしなくちやいけなかったのに…」
「アスナみたいなしつかりしたのがいなかったら二十五層あたりでもっと被害が出てたはずだ。

…自分のことを下げないでもいいだろ、きみはよくやってるよ。俺を見てみる、だから攻略してるソロだぞ、ソロ!」

「もう、自分のことを棚に上げないの!」

顔がこわばっていたアスナに、笑顔が戻ってきた。…俺は、アスナの怖い顔よりも笑顔の方が好きだなと改めて実感する。

楽しく会話をしていると、俺は声をかけられた。

「キリト、ナイスバトル!」

「おお、キリヤ、シノン!」

「あ、シノのん!」

そこにいたのはキリヤとその恋人のシノンだ。

「今日はキリトと一緒にだね、アスナ。」

「ええ、コンビを組んだから。…キリヤ君、このことは…」

「貸し一つでどうです? 困った時に頼らせてもらいますよ、アスナさん」

「……………まあいいわ。あなたたちも攻略に出るんでしょ?」

キリヤは頷く。俺は別れ際にニヤリと笑ってキリヤを指さす。

「キリヤ、またなんかあったら情報頼むぜ。ボス攻略の情報なんかは

攻略に必須だからな！」

「任せろ！じゃあまたな」

「ああ、また！」

その後は、下層を牛耳る《軍》とニアミスしたりしながらも順調に攻略を進めた。

「…一段と速くなったな、アスナ。目で追うのがやつとだ。」

ガイコツを細剣で倒した彼女は、驚いた顔をする。

「み、見えてるの!?!けっこう速さには自信あるんだけどなあ…。」

「反応速度には自信があるぜ。…たまにないか、こう…全部が遅くなるようなそんな感覚。」

「……ない、かなあ…?」

「…そっか、変なこと言ってる悪い。…さて、もうちよい先に進もうぜ。そろそろボス部屋までいけそうだし」

〈SIDE：アスナ〉

先を促したキリト君の顔は、どこか寂しそうに見えた。…けれど、それを気にする余裕はわたしにはなかった。

…なぜなら。

『グオオオオオオオオオ!!』

「わあああああ!!!」

「きゃあああ!?!」

この七十四層のフロアボス、《ザ・グリーンアイズ》に追いかけられていたから…。

青い山羊の頭を持った悪魔という、いかにも恐怖を煽るデザインで迫ってくる怪物に、思わずわたし達はボス部屋から脱出した。

安全エリアに飛び込み、二人で息を整えながら…それでも笑顔がこぼれた。

「ぷっ…あはは！やー、逃げたねえ…!こんな全力で走ったのは久しぶりだよー」

「このレベルになると全力疾走しなくても別にいいしなあ…。…どう

思う?」

キリト君の声が、緊張を含んだものに変わる。

「強そうだったね。武装は剣一本だけど、他の攻撃もしてきそう…」
「盾持ちが十人は欲しいところだな…。まあ、二日くらい時間をかけるべきだろう」

そういう彼は、最前線ではほぼいない盾無しの片手剣使いだ。…キリト君は、このデスゲームが始まってからずっとこのスタイルで戦い続けている。

「…ねえ、キリト君。…隠してることない?」

「いや、特には…」

「キリト君って、盾使わないよね。…最初はそういうものだと思ってたけど、片手剣って盾を使った方が強いわ。」

わたしはスピード重視だから持ってないんだけど、キリト君はそういうわけでもなさそう…。」

そう言ったわたしの顔を、キリト君は困ったように見つめていた。

「それ、は……………」

「…やっぱりいいや。キリト君だって、言いたくないことだってあるだろうし、マナー違反だし」

そう言ったわたしを、キリト君は安心したような、それでいて残念そうな絶妙な表情で笑う。

「…だ、だよな…!」

「あ、もう三時だよキリト君!…そろそろご飯にしよう、ね?」

「え、いいのか?」

「うん!昨日はごめんね、嫌な思いさせちゃって…」

キリト君はぶんぶんと首を振って否定する。

「いやいや、悪いのはこっちだし……………て、手作りつすか」
「もちろん!はい、どーぞ!」

自信作のサンドイッチを、キリト君は一口ほおぼる。

「……………う、うまい。これ、ハンバーガーだ…!!」

涙を流しながらサンドイッチを完食したキリト君は、ほっと息を吐いた。

「これ、どうやって…！」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれました！アインクラッドの調味料百種が味覚エンジンに与えるパラメータをゼー…ゼー…んぶ解析すること一年！

その成果がこちら！ちよつと味見してみる？」

「い、いちねん…!!?…無茶苦茶気になるな！」

「まずは、グログワの種とシユブルの葉、カリム水を混ぜたヤツ！」

わたしは特製調味料その一をキリト君の口内に射出する。

キリト君は物凄く驚いた顔をした。

「ま、マヨネーズじゃん!!？」

「で、こっちはアビルパ豆とサグの葉とウーラフィツシユの骨！」

「最後の調味料じゃなくて解毒ポーシヨンの原料じゃ…むぐ」

彼の口にもう一発、と。

「な、ななな……。醤油うううう!？」

「さっきのサンドイツチのソースはこれを使ったのよ」

「……………これ、金とれるレベルだぞ…。…………いややっぱダメ、俺の分がなくなったらこまる」

「もー、食い意地張ってるんだからあ」

和やかな雰囲気か辺りを包む。ここが迷宮区であることを忘れそうなほどに、わたしは幸せだ。

キリト君の心が、少しでも癒えてくれたらいいなあ…。